第Ⅰ章　桂宮の試掘・ボーリング調査

第１節　城壁と宮門の調査

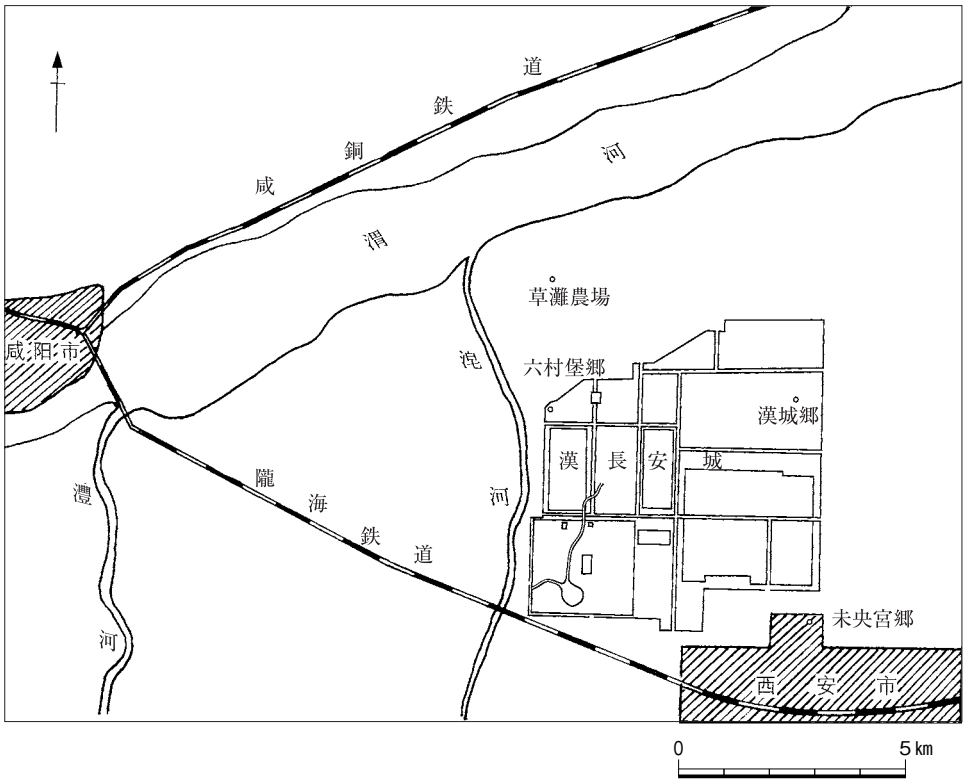
１　城壁の調査

Ａ　ボーリング調査

桂宮の位置

漢長安城は西安市の西北郊に位置し、城内には現在の西安市未央区未央宮郷、漢城郷、六村堡郷が含まれる（第１図）。桂宮は漢長安城の西北部にあり、西は漢長安城の西城壁、南は直城門大街を隔てて未央宮、東は横門大街と接しており、北は雍門大街を隔てて西市と向かい合う（第２図）。桂宮内には夾城堡、民娄村、黄家荘、鉄鎖村があり（第３図）、それらは六村堡郷に属する。桂宮一帯の地形は平坦で、地上に現存する遺構は、夾城堡東部の版築高台（１号建築）のみである。その他の遺構は、すべて畑や現在の民家の下に埋没している。

ボーリング調査によれば、桂宮の平面は南北方向に長い長方形を呈し、東と西の城壁の長さは1,840m、南と北の宮城壁の長さは900mである。周囲の全長は5,480m（第４図）で、漢代の13里



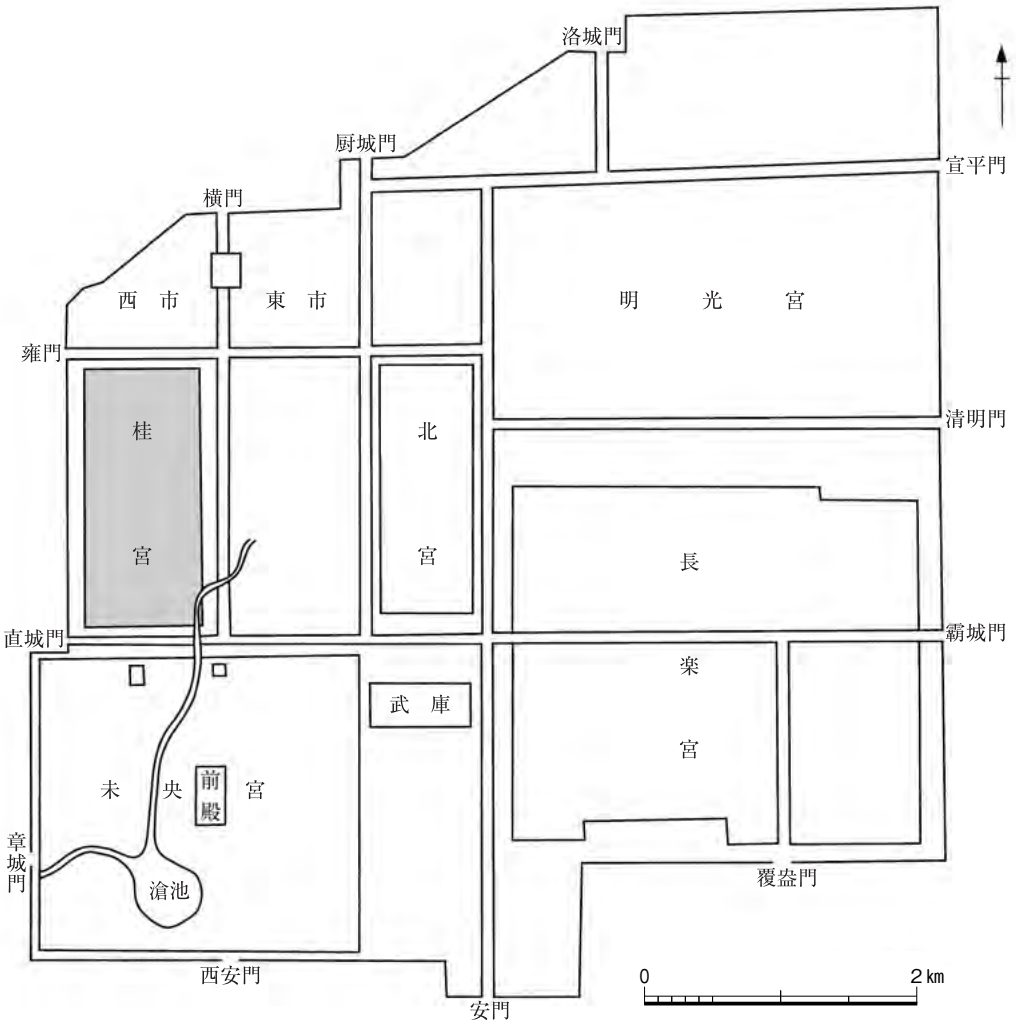
第１図　漢長安城の位置

に相当し、『三輔黄図』などの文献に記載された桂宮の「周囲十余里」に近い。

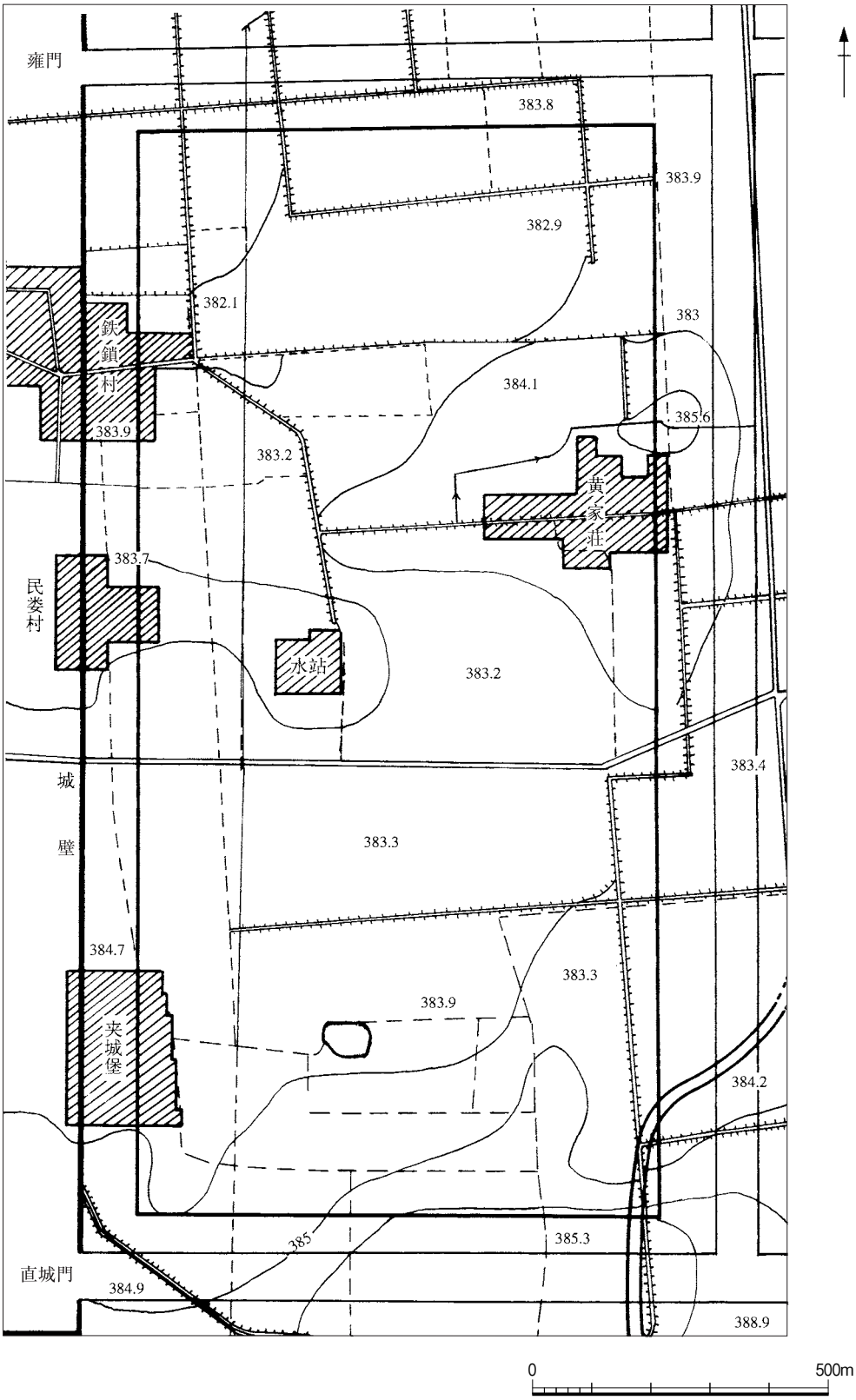
城壁の遺構は、現在、地上には残存しない。地下の遺構も多くが破壊されており、わずかに東・西・北の３面でそれぞれ１ヵ所、南で２ヵ所の宮城壁の遺構をボーリング調査で確認しただけである。城壁の基部は混成土を版築しており、現地表から0.5～0.8mの深さで検出され、地表下1.5～1.8mで地山に達する。版築土の厚さは0.7～1.3mである。城壁は地山の上に造成しており、地山は黄細砂質土あるいは黒色のアルカリ性土壌である。　版築の城壁

桂宮西城壁　ボーリング調査で確認した西城壁の遺構は民姿村の南にあり、長さ55m、幅５mである。版築土の厚さは1.0～1.3m、地表下0.5～0.8mで検出した。桂宮西城壁から長安城全体の西城壁までは約50mである。この桂宮西城壁を南北に延長すると、南端の夾城堡の南から北に向かって夾城堡を通り、竜西公路を越えて民姿村、鉄鎖村を経たのち、六村堡の南で桂宮北城壁と接続する。

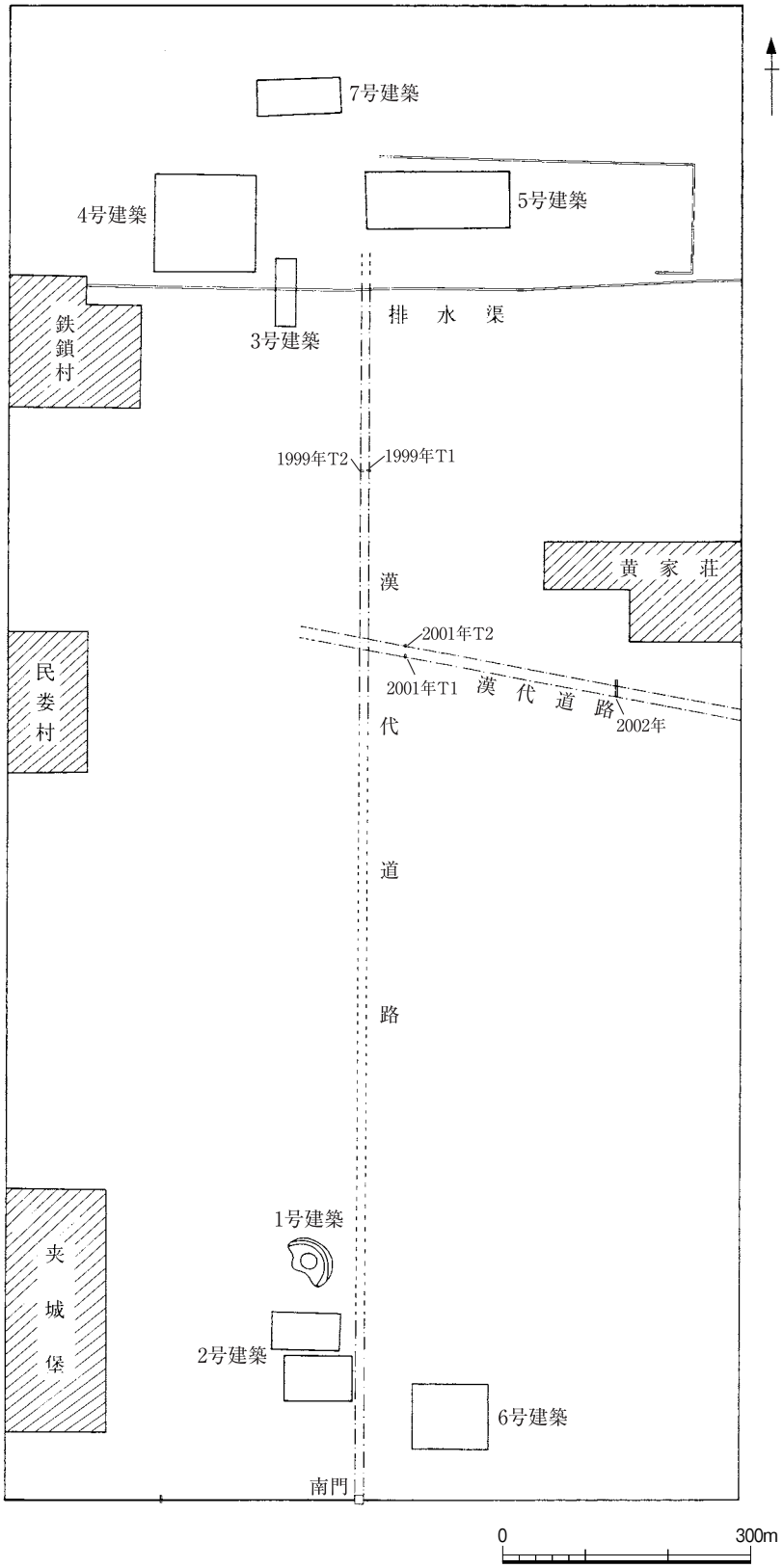
桂宮北城壁　確認した城壁の遺構は、長さ85m、幅５mである。版築土の厚さは1.3m、地表下0.7mで検出した。北の雍門街までは80mある。この北城壁を東西に延長すると、西端の六村堡



第２図　桂宮の位置


雍門
383.8
383.9
382.9
382.1
383
鉄鎖村
384.1
385.6
383.9
383.2
黄家荘
383.7
民娄村
水站
383.2
383.4
城
壁
383.3
384.7
383.3
383.9
夾城堡
384.2
385
385.3
直城門
384.9
388.9
0
500m

第３図　桂宮の地形



第４図　桂宮の建築遺構の位置

の南から東に向かい、相家巷の南を経て桂宮東城壁と接続する。

桂宮東城壁　確認した城壁の遺構は、長さ430m、幅５mである。版築土の厚さは約１mで、地表下0.5mにある。桂宮東城壁から東の横門大街までは138mである。東城壁は、北端の相家巷の南から南に向かって黄家荘を通り、徐寨の西、小劉寨の北を経て桂宮南城壁と接続する。

桂宮南城壁　確認した２ヵ所の城壁の遺構は夾城堡の南東にあり、東部分は長さ62.5m、西部分は長さ25mで、双方の城壁間の距離は112.5m、城壁の幅は約４～５mである。版築土の厚さは1.0～1.3mあり、地表下0.5～0.8mにある。この２ヵ所の城壁によって確定した桂宮南城壁は、東は小劉寨の北より始まり、西に向かって花炮廠を経て、夾城堡の南東で桂宮西城壁と接続する。桂宮南城壁から南の直城門大街までは80mである。

B　南城壁の試掘調査

1999年８月、ボーリング調査の成果に基づいて、夾城堡の東南にある桂宮南城壁の西部分の試掘調査を実施した。試掘坑は、長さ８m、幅1.5mのものを南北方向に１条設けた。方向は磁北から５度東偏する[(1)]（第５図）。試掘坑東壁における基本層序は以下のとおりである。

第１層：耕作土層。厚さ0.25m。

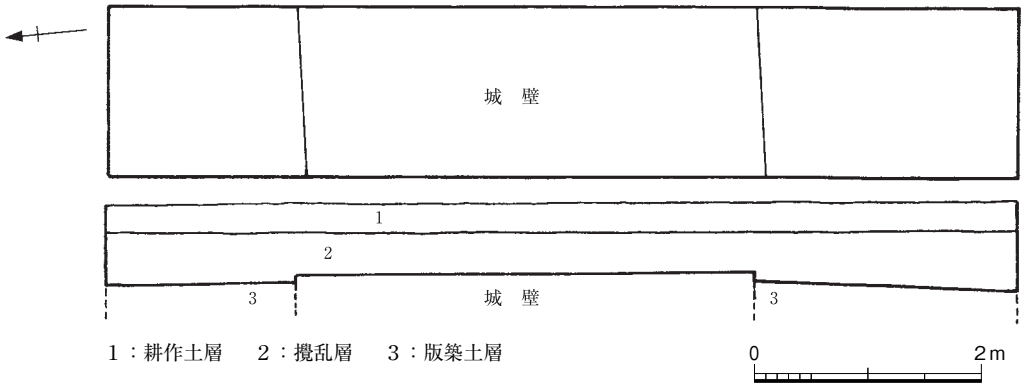
第２層：攪乱層。黄褐色で、土質はやや締まる。地表下0.25～0.75m、厚さ0.35～0.5m。漢代の瓦磚の破片を少量含む。

第３層：版築土層。混成土で褐色土の中に黄色の土粒が混じり、土質はやや締まる。版築土の深さと厚さには違いがあり、試掘坑の中間部分では幅4.0m、地表下0.6～1.5m、厚さ0.9mである。一方、試掘坑の南北両側部分（北側の幅1.7m、南側の幅2.3m）では、地表下0.7～1.1m、厚さ約0.4mである。中間部分の版築土層上面は、両側部分に比べて0.08m高い。

第３層の下は地山である。

城壁幅４m

城壁の版築土上部は削平されており、耕作土層と攪乱層の直下に版築土がある。試掘坑の中央部分の版築土は両側よりやや高くて厚く、幅4.0mに及ぶ。これが版築の城壁本体で、両側部分の版築土は城壁両側の地面（基底面）と考えられる。削平のため、旧地表は残存していない。おそらく、城壁の内外には、城壁に接して道路が設けられており、道路部分は比較的丁寧に版築されている。



第５図　南城壁試掘坑平面図・東壁土層図

２　宮門の調査

Ａ　ボーリング調査

桂宮でおこなった全面的なボーリング調査の中で、宮門の探索は重要事項の一つであり、とくに南城壁上の宮門については何度かのボーリング調査を実施し、南門の位置を確定できた。南門は桂宮の西南角から東へ430ｍに位置する。その他の宮門は未発見である。

南門の確定

Ｂ　南門の試掘調査

2001年11月に、南北11ｍ、東西10ｍの試掘区を設定して、桂宮南門の試掘調査を実施した（第６図）。遺構の残存状況はよくない。

ⅰ　遺　構

試掘区北壁の基本層序は以下のとおりである。

第１層：耕作土層。厚さ0.15ｍ。

第２層：攪乱層。地表からの深さ0.15～0.45ｍ、厚さ0.3ｍ。

第３層：漢代遺物包含層。地表からの深さ0.45～0.8ｍ、厚さ0.1～0.4ｍ。漢代の磚・瓦・瓦当などを含む。

第４層：路表土層。黒褐色で硬く薄い。地表下0.5～1.0ｍで検出し、最も厚い部分は0.5ｍある。土層内には、粗い砂粒や赤い焼土塊、漢代の瓦磚が混じっている。ボーリング調査によれば、路表土の下1.4ｍは黄色の地山となる。

試掘で確認した南門および東西両側の城壁は、前期・後期の２期に分けられる。

前期の南門東側の城壁は長さ3.3ｍ、西側の城壁は長さ0.55ｍで、門道の幅は5.65ｍである。一方、後期の南門東側の城壁は長さ3.8ｍ、西側の城壁は長さ0.9ｍで、門道の幅は4.8ｍである。前期と後期の城壁の南面はそろっているが、後期の城壁の北面は北へ増築され、城壁が拡幅されている。南門東側の城壁はほぼ完全に残存しており、後期の城壁の幅は5.1ｍ、前期の城壁の幅は4.55ｍであった。城壁の版築土の厚さは約1.0ｍである。南門西側の城壁の南寄りの部分は現代の攪乱坑によって破壊され、北側だけが残る。城壁残存部の幅は、前期が1.7ｍ、後期は2.4ｍである。城壁の厚さは約0.9ｍ。版築土は、深黄色土に黒褐色と白色の小土塊が混じった混成土で、土質は比較的よい。

城壁の拡幅

ⅱ　出土遺物

南門の試掘区から出土した漢代のおもな遺物には、空心磚、軸吊孔のある磚、平瓦、丸瓦、瓦当、土製燭台と土製小球がある。

空心磚　　１点（南門：T1③：1）。表面は幾何学文が施され、裏面は調整が雑で凹凸がある。残存長15.8㎝、残存幅9.3㎝、厚さ3.1㎝。（第７図１、図版１－１）

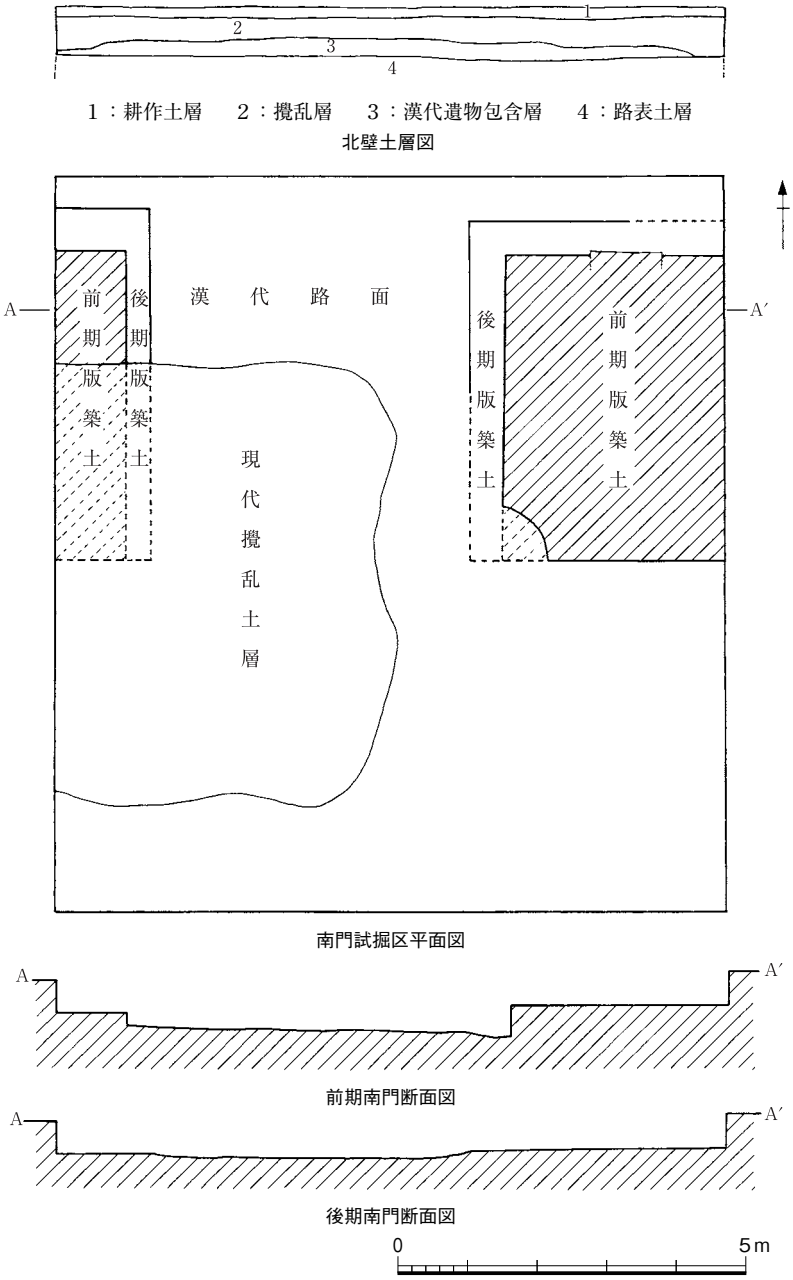
軸吊孔のある磚　　１点出土した（南門：T1③：21）。残存長14.3㎝、残存幅19.0㎝、厚さ9.6㎝。無文の長方磚の片方の面に、臼状の凹みを作り出している。凹みは、直径8.8㎝、深さ1.7㎝である（図版１－２）。

平　瓦　　３点。厚さは1.0～2.0㎝。平瓦の凸面に縦位の縄目があり、細・中・太の違いがある。縄目の幅は、それぞれ0.3㎝、0.4㎝、0.7㎝である。平瓦の凹面は、凹点文、縄目をなで消したもの、無文の３種類がみられる（図版１－３・４）。

丸　瓦　　２点。厚さ1.1～1.4㎝、玉縁の長さ3.5～3.6㎝、厚さ1.1～1.4㎝である。凸面には縦位の中太または細い縄目がみられるが、端部に近い部分はナデを施している。縄目の幅は0.3～0.5㎝、凹面には布目がある（第７図２・３、図版１－５・６）。

瓦　当　　９点。すべて雲文瓦当で、漢長安城Ⅲ型とⅣ型に属する。

Ⅲ型は６点ある。界線が中心文を貫かない。Ⅲ型２式、Ⅲ型11式、Ⅲ型17式に分類できる。



第６図　南門試掘区平面図・断面図・北壁土層図

２式は１点（南門:T1③:14）で、周縁の幅1.2㎝、周縁の高さ0.6㎝、瓦当中心の厚さ1.5㎝（第７図４、図版１－７）。

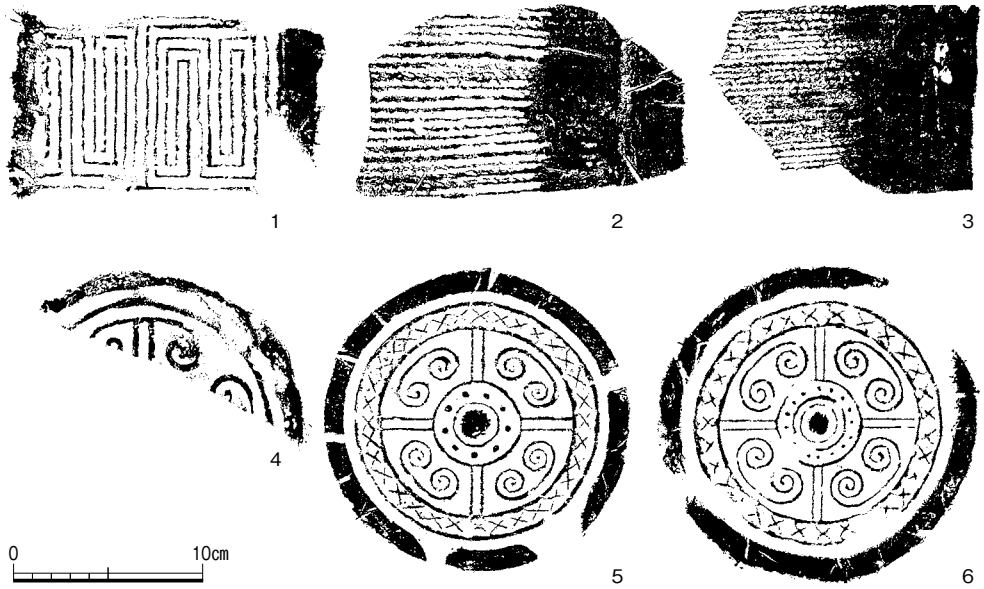
雲文瓦当Ⅲ型

11式は４点。瓦当面には四重あるいは五重に圏線がめぐり、第一の圏線内には半球形文、第一と第二の圏線の間には珠文、第二と第三の圏線の間には雲文、第三と第四の圏線の間には「X」字形文がある。瓦当裏面には丸瓦円筒の切り取り痕跡がみられない。格子文の粗密の程度によって、11A～11Cの３亜式に分類できる。

11A式は２点。第三と第四圏線間の「X」字形文が密でないもの。珠文数によって２種類に分ける。第１種は１点（南門:T1③:7）で、第一と第二の圏線間に９個の珠文がある。瓦当裏面は縄叩きがあり、なで消されている。裏面中央には楕円形の凹みがある。瓦当径15.6㎝、周縁の幅1.1㎝、周縁の高さ0.3㎝、厚さ2.6㎝（第７図５、図版１－８）。第２種も１点（南門:T1③:8）で、中心の半球形文の外周に五重に圏線がめぐり、第二・第三圏線間には16個の珠文、第四・第五圏線間には「X」字形文がある。瓦当裏面は、縄叩きをなで消している。瓦当径15.7㎝、周縁の幅1.1㎝、周縁の高さ0.4㎝、厚さ2.3㎝である。（第７図６、図版２－１）。

11B式は１点（南門:T1③:10）。第一・第二圏線間には12個の珠文があり、第三・第四圏線間の「X」字形文は密度が高い。瓦当裏面は縄叩きをなで消しており、中央には楕円形の凹みがある。瓦当径15.6㎝、周縁の幅1.5㎝、周縁の高さ0.7㎝、厚さ2.6㎝（第８図３、図版２－２）。

11C式は１点（南門:T1③:13）。中心に半球形文があり、その外周には五重に圏線がめぐる。第一・第二圏線間には12個の珠文、第四・第五圏線間にはとくに細密な「X」字形文がある。瓦当裏面は縄叩きをなで消しており、瓦当裏面下半には溝が半周めぐる。周縁の幅1.6㎝、周縁の高さ0.6㎝、厚さ2.0㎝である（第８図１、図版２－３）。



１：空心磚（南門:T1③:1）　２：丸瓦凸面（南門:T1③:5）　３：丸瓦凸面（南門:T1③:6）
４：Ⅲ型２式雲文瓦当（南門:T1③:14）　５：Ⅲ型11A式雲文瓦当（南門:T1③:7）
６：Ⅲ型11A式雲文瓦当（南門:T1③:8）

第７図　南門出土瓦磚・瓦当

17式は１点（南門:T1③:15）。中心には半球形文があり、その外周に三重に同心圏線がめぐる。第一円・第二円間には16個の珠文があり、瓦当面に飾られた雲文の両側には、三角文が一つずつある。瓦当裏面下半には溝が半周めぐる。周縁の幅0.8～1.2㎝、周縁の高さ0.5㎝、厚さ2.2㎝（図版２－４）。

雲文瓦当Ⅳ型

Ⅳ型は３点ある。界線が中心文を貫通し、四つの区画には一つずつの雲文がある。この型はⅣ型１A式とⅣ型５式に分類する。

１A式は２点。中心文の各区画に「L」字形文が一つある。南門:T1③:12は、瓦当裏面に糸切り痕がある。周縁の幅1.4㎝、周縁の高さ0.7㎝、厚さ2.4㎝である（第８図２、図版２－５）。

５式は１点（南門:T1③:9）。丸瓦部も残存する。瓦当面の文様は１A式と基本的に同じであるが、中心文の各区画の間には二重線の「L」字形文がある。瓦当裏面には丸瓦円筒の切り取り痕跡がある。瓦当径15.2㎝、周縁の幅0.8㎝、周縁の高さ0.7㎝、厚さ2.3㎝。丸瓦部は、残存長5.8㎝、内径13.0㎝、厚さ1.1㎝。凸面には斜位の縄叩きがあり、縄目の幅は0.4㎝。凹面には布目がある（第８図４、図版２－６）。

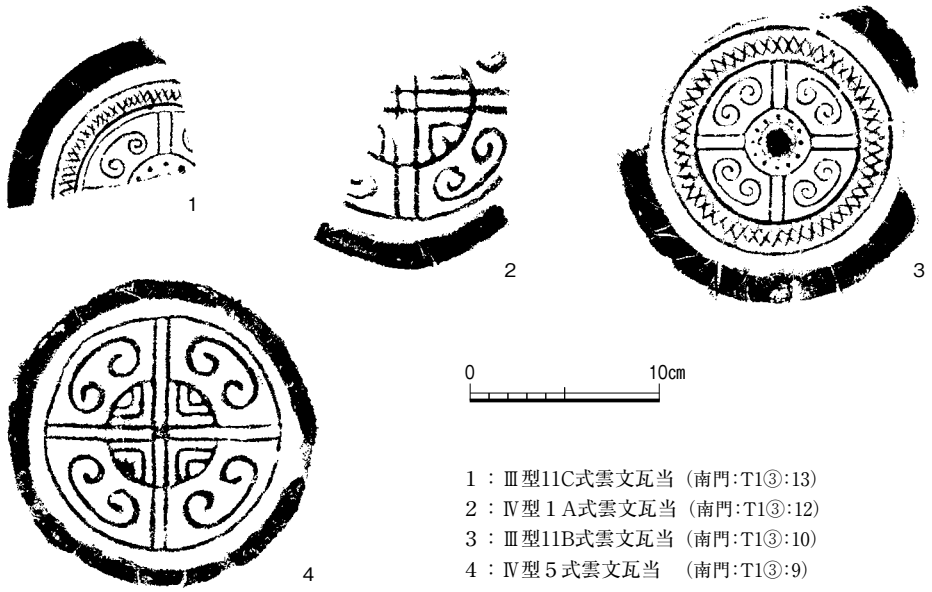
土製燭台　１点（南門:T1③:19）。二つの型で成形している。裾部の直径5.8～9.5㎝、高さ3.0㎝、脚部の直径4.5㎝、残存高3.1㎝である（図版２－７）。

土製小球　１点（南門:T1③:18）。泥質紅陶。無文で直径2.0㎝である（図版２－８）。

ⅲ　小　結

南門は全体的に保存状態がよくないが、前期と後期の遺構の関係は明確であり、南門の形状や規模が判明した。前期の門道の幅は5.65ｍであったが、一定期間使用した後に両側の版築土壁を増築し、門道の幅を4.8ｍに狭めている。後期の南門の版築土は、前期の路面の上にあることが明らかである。路表土には前期と後期の明確な区別がなく、宮門がたえず使用されていたことを示している。

南門から出土したおもな遺物は、磚、平瓦、丸瓦、瓦当などである。そのうち、斜位の太い縄



１：Ⅲ型11C式雲文瓦当（南門:T1③:13）
２：Ⅳ型１A式雲文瓦当（南門:T1③:12）
３：Ⅲ型11B式雲文瓦当（南門:T1③:10）
４：Ⅳ型５式雲文瓦当　（南門:T1③:9）

第８図　南門出土瓦当

目がある平瓦や、縦位の中太の縄目がある丸瓦およびⅢ型11式瓦当などは、前漢中・後期によくみられる遺物である。よって、南門の年代は前漢中・後期と推定される。

『漢書』成帝紀には、漢の成帝が太子のとき、「かつて桂宮にいたころ、あるとき皇帝から急に召されたので、太子は龍楼門を出たが、あえて御道を横切ろうとせず、わざわざ西の直城門まで行って渡り、引き返して作室門に入った」とある[(2)]。張晏は、注で「門楼上に銅龍があり、白鶴・飛廉と名づけたようだ」と記す[(3)]。『漢書』王莽伝・下には、「城中の若者朱弟・張魚らは掠奪を恐れ、趨いて歓んで共に和し、作室門を焼き、敬法殿の小門を斧で打ち割り、『反虜王莽よ、なぜ出て来て降参しないのか』と叫んだ。火は後宮の承明・黄皇の諸室に及んだ。そこは皇帝の住居である」とあり[(4)]、作室門と敬法殿・掖廷（後宮）・承明廬はそれほど遠くない距離にあったことがわかる。また、『漢書』厳助伝の張晏の注には、「承明廬は石渠閣外に在り」とある[(5)]。作室門は作室から名をとっている。『雍録』巻九には「作室は、未央宮西北の織室・暴室の類」とあり[(6)]、作室が未央宮にあれば、作室門は未央宮の西北部にあるはずである。それは未央宮の宮城北城壁の門で、この門から南には一本の南北道路が走り、北は直城門大街を隔てて、桂宮の南壁で発見された宮門遺跡と南北に向かい合っていた。以上のことから、この桂宮南門は、上記文献に記載されている、成帝が太子のときに桂宮から未央宮に向かった龍楼門にあたると考えられる。

龍　楼　門

作室門の北

訳　註

（１）以下、本報告における北は、桂宮４号建築が真北であるのを除き、すべて磁北である。西安における磁北は、真北から約2°30′西偏する。なお、方向は、方位角（磁北または真北から時計回りに測った角度）で表示することがある。

中国の測量ではUTM座標系が用いられているが、これは地球を経度６度ごとの60のゾーン（帯）に区分し、おのおのガウス・クリューゲル図法による投影をおこなうものである。各ゾーンの原点は、赤道と中央子午線の交点となるが、北半球における原点の座標は、横軸（東西方向）を500,000m、縦軸（南北方向）を０mとし、座標値が負の値とならないようにしている。地上の距離（球面距離）を地図上の距離（平面距離）に変換するための縮尺係数は、中央子午線上で0.9996、東西に約180㎞離れた位置で1.0000である。なお、通常、ゾーンの番号は東経・西経180度を始発線とするが、中国では、東経０度から６度を第１投影帯（中央子午線は東経３度）、東経６度から12度を第２投影帯として使用している。したがって、西安は第19投影帯（中央子午線は東経111度）に属し、その原点は赤道と東経111度の子午線の交点となる。ただし、Y座標は先頭の２桁に投影帯の数値を入れて表記するため、たとえばX＝3,802,245.85、Y＝19,302,199.62という表記は、赤道から北へ3,802,245.85m、第19投影帯の中央子午線（東経111度）から西へ197,800.38mの位置を示す。

桂宮の共同発掘調査では、各年度の調査区と遺構相互の位置関係を把握するため、漢長安城に設けられた三角点のうち、桂宮の南に位置する未央宮前殿と、未央宮の東に位置する李家上濠の２点を用いて、基準点測量を実施した。この２点間の直線距離は約3.2㎞、使用した機材はライカ社製のトータルステーションTC1500である。縮尺係数補正はおこなっていない。

（２）「初居桂宮、上嘗急詔、太子出龍楼門、不敢絶弛道、西至直城門、得絶乃度、還入作室門。」

（３）「門楼上有銅龍、若白鶴、飛廉之為名也。」

（４）「城中少年朱弟、張魚等恐見歯掠、趨并和、焼作室門、斧敬法闥、謔曰『反虜王莽、何不出降？』火及掖廷承明、是皇室所居也。」

（５）「承明廬在石渠閣外。」

（６）「作室者、未央宮西北織室・暴室之類。」

第２節　宮内道路の調査

１　ボーリング調査

桂宮からは２条の道路遺構が発見された。南北方向と東西方向、各１条である（第４図）。

南北道路は、南は南門から北は５号建築の西南部まで、桂宮の南北をほぼ縦貫している。検出した路面遺構は２ヵ所あり、一つは、２号建築の東側のボーリング調査で発見された南北方向の路面である。桂宮の宮城西城壁の東430mにあり、南門を通って直城門大街に通じる。現存する路面遺構は、長さ275m、幅7.5m、厚さ0.2m、地表からの深さ1.0mで、路面の下は黄色の地山である。もう一つは、３号建築の東80mをボーリング調査した際に発見された南北方向の路面であり、長さ567.5m、幅10mである。桂宮の西城壁東面から東へ433mのところにあり、北は５号建築に至る。南は先述した２号建築の東側を通る道路と連なる。

東西道路は、黄家荘南の調査で路面が確認された。長さ572m、幅13.0mである。路面の西は桂宮の南北方向の路面と交差し、交差点は桂宮の北城壁から777.5m南に位置する。

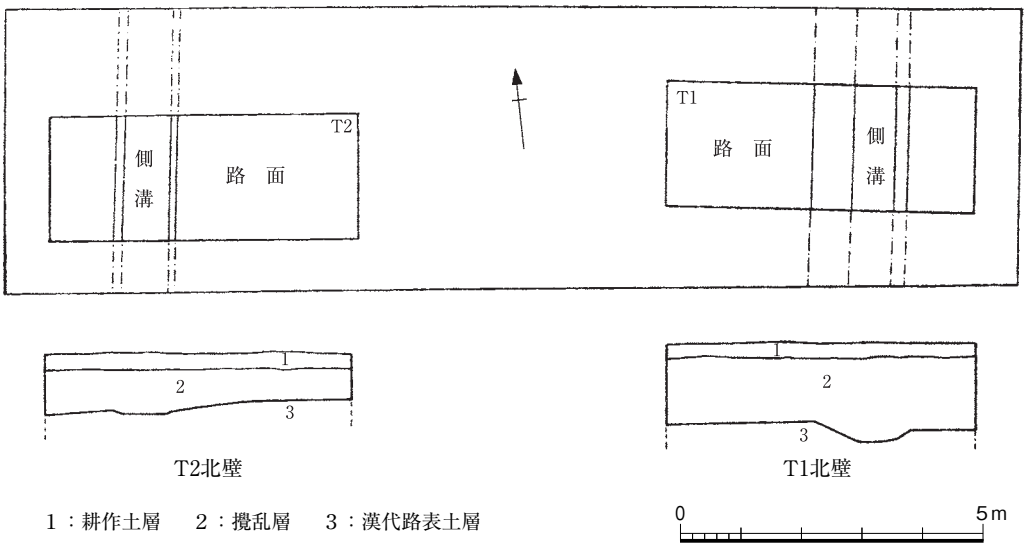
２　試掘調査

A　南北道路の調査

1999年７月、鉄鎖村東部にある南北道路の東西両辺に試掘坑を１ヵ所ずつ設定し、それぞれT1･T2とした（第９図）。いずれも、長さ5.0m、幅2.0m、方向は275度である。

T1は南北道路の東部にあり、試掘坑北壁の基本層序は次のとおりである。

第１層：耕作土層。厚さ0.25m。



第９図　1999年南北道路試掘坑T1・T2平面図・北壁土層図

第２層：攪乱層。地表からの深さ0.25～1.4m、厚さ1.0～1.15m。

第３層：漢代路表土層。地表からの深さ1.25m。試掘坑の西部で、幅2.3mの路面を検出した。路面の東には排水溝があり、断面は台形状を呈する。溝は上面の幅1.55m、底幅0.7m、深さ0.35m。溝の東・西壁の傾斜角度はそれぞれ30度と25度で、溝内には深褐色の土が堆積していた。

東　側　溝

T2は南北道路の西部にあり、基本層序はT1と同じである。試掘坑の東部から、幅2.5mの漢代の路面を検出した。道路の西側には排水溝があり、形状はT1の道路東側の排水溝と同様である。溝は、上面の幅1.0m、底幅0.75m、深さ0.2m。溝の東・西壁の傾斜角度はそれぞれ25度と17度である。試掘坑内には深褐色の土が堆積していた。

西　側　溝

ボーリング調査によれば、２本の試掘坑の間にある路面幅は5.5mで、道路全体の幅は10.3mとなる。路表土の厚さは0.3mで、その下は黄色の地山である。道路の東西両側に排水溝が設けられている。路表土の中には、中太の縄目がある丸瓦や、太い縄目の平瓦などの遺物がみられ、前漢中・後期に位置づけられる。

B　東西道路の調査

東西道路上で２ヵ所を試掘した。

i　2001年調査区の遺構

まず、2001年５月に、黄家荘西南にある東西道路の一部で、そこの南側と北側に試掘坑を１ヵ所ずつ設け、それぞれT1･T2とした。

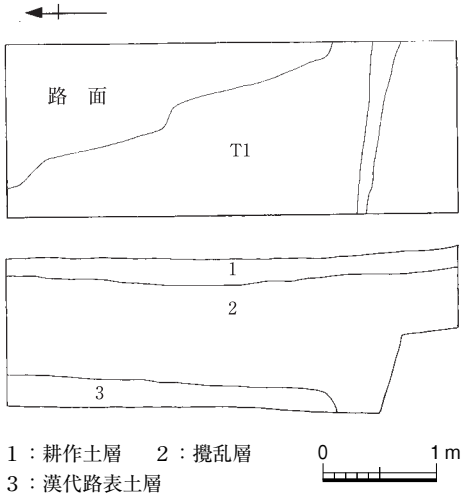
T1は東西道路の南部にあり、南北方向で、長さ4.0m、幅1.5m（第10図）。路表土の上部は攪乱されている。試掘坑東壁の土層堆積状況は次のとおりである。

第１層：耕作土層。厚さ0.16～0.24mである。

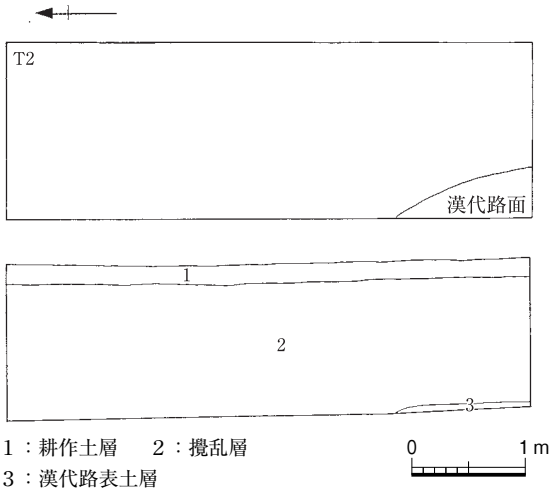
第２層：攪乱層。地表からの深さ0.16～1.4m、厚さ0.9～1.24m。

第３層：漢代の路表土層。地表からの深さ1.04～1.16m。試掘坑の北部で、幅2.9mの路面を検出した。路表土の南辺は不揃いである。路表土の厚さは0.12～0.36mで、その下は黄色の地山となる。路表土は硬い砂質土で、漢代の磚瓦片を含む。

T2はT1と8.9m離れている。南北方向で、長さ4.5m、幅1.5m（第11図）。



第10図　2001年東西道路試掘坑T１
平面図・東壁土層図



第11図　2001年東西道路試掘坑T２
平面図・西壁土層図

基本層序はT1と同様で、試掘坑の南部で検出した路面幅は1.17mである。路表土の厚さや土質もT1とほぼ同じで、路表土の北辺はやはり不揃いである。ボーリング調査によって、T1とT2の間にも路表土があり、地表からの深さと厚さは二つの試掘坑と変わらないことがわかった。２本の試掘坑で検出した路面幅に試掘坑間の距離を加えた13mが、東西道路の幅となる。

ⅱ　2001年調査区の出土遺物

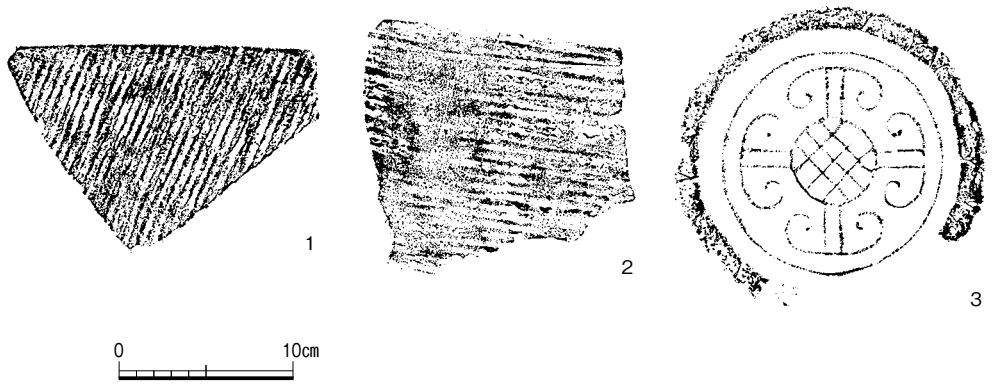
漢代の路表土層から出土したのは、いずれも平瓦・丸瓦や瓦当の破片である。

平　瓦　３点出土。2001東西道路:T1③:1（図版３－１）は狭端部の破片で、残存幅10.8㎝、残存長8.4㎝、狭端部の厚さ1.1㎝。凸面には斜位の太い縄目があり、縄目の幅は0.6㎝である。端部に近い部分の縄目はなで消されており、凹面には凹点文がみられる。2001東西道路:T1③:2（図版３－２）も狭端部の破片である。残存幅13.0㎝、残存長7.4㎝、狭端部の厚さ1.1㎝。凸面には斜位の太い縄目があり、縄目の幅は0.5㎝である。狭端に近い部分の縄叩きはなで消されおり、凹面には凹点文がみられる。2001東西道路:T1③:3（第12図１）は広端部の破片である。残存幅18.2㎝、残存長12.8㎝、広端部の厚さ1.4㎝。凸面には斜位の太い縄目があり、縄目の幅は0.5㎝である。凹面は無文である。

丸　瓦　３点出土。2001東西道路:T1③:4（第12図２）は筒部の破片である。残存長15.5㎝、残存内径10.5㎝、厚さ1.4㎝。凸面には縄目があり、部分的にナデ調整を施す。縄目の幅は0.4㎝。凹面には布目がみられる。円筒の分割は外側から切り込みを入れ、大部分は破面を残さない。2001東西道路:T1③:5（図版３－３）は玉縁の破片である。残存長5.8㎝、残存内径8.0㎝、玉縁の長さ3.3㎝、厚さ1.4㎝である。凸面は無文、凹面は布目がある。2001東西道路:T1③:6（図版３－４）は玉縁と筒部の一部の破片である。残存長11.9㎝、残存内径7.3㎝、厚さ1.2㎝、玉縁の長さ3.0㎝、厚さ1.1㎝である。凸面には斜位の太い縄目があり、縄目の幅は0.5㎝。玉縁の近くはなで消されている。凹面には布目がある。

瓦　当　１点（2001東西道路:T1③:7）。小片だが、丸瓦部をともなう。周縁の内側に圏線があり、圏線内には雲文がある。界線は二重線で雲文の中央につながる。中心文は不明。Ⅲ型１式の雲文瓦当と思われる。周縁の幅1.1㎝、周縁の高さ0.7㎝、瓦当部の厚さ1.1㎝。丸瓦部は残存長9.3㎝、残存内径9.2㎝、厚さ1.4㎝である。凸面には縦位の細い縄目があり、一部なで消されてい

雲文瓦当
Ⅲ　型



１：平瓦凸面（2001東西道路:T1③:3）　２：丸瓦凸面（2001東西道路:T1③:4）
３：Ⅲ型１式雲文瓦当（2002東西道路:T1②:2）

第12図　東西道路出土瓦・瓦当

る。縄目の幅は0.2㎝。凹面には凹点文がみられるが、なで消されている。

ⅲ　2002年調査区の遺構

2002年３月、黄家荘の南の東西道路に、南北方向の試掘坑を１ヵ所設定した。長さ22m、幅2.0mである（第13図）。試掘坑西壁の基本層序は以下のとおりである。

第１層：耕作土層。厚さ0.15～0.25m。

第２層：攪乱層。地表からの深さ0.15～0.95m、厚さ0.45～0.7m。

第３層：漢代路表土層。

試掘坑南部で路面を検出した。南北幅13m、地表からの深さ0.7～0.95mである。路面は西部が高くて東部が低く、南北両辺は直線的である。路表土は黒褐色を呈し、瓦片を含む。厚さは0.15～0.3m。路面の下は版築の基礎で、厚さ0.15m。その下は黄砂土の地山である。路面の中央では、２本の轍の遺構が発見された。轍の心々間距離は1.4m、轍の幅は８～10㎝、深さ2.5～３㎝である。

ⅳ　2002年調査区の出土遺物

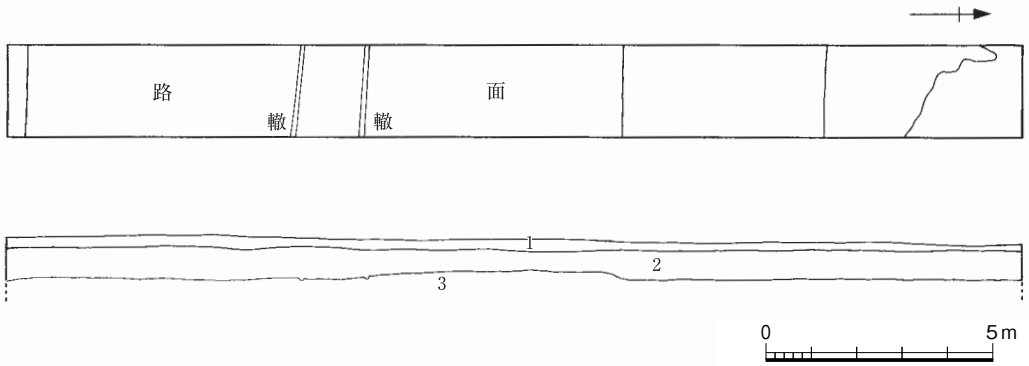
路表土の中には瓦片が混じり、斜位の太い縄目がある平瓦片や中太の縄目がある丸瓦片がみられる。この他、攪乱層から３点の瓦当が出土した。

瓦　当　　１点は渦文瓦当、２点は雲文瓦当である。渦文瓦当（2002東西道路：T1②:1）は小片で型式不明である。瓦当裏面下半の突帯（丸瓦円筒の半分を切り取った後に残る周堤状の痕跡）は、幅2.2㎝、高さ0.8㎝で、糸切り痕が残る。周縁幅1.2㎝、周縁の高さ0.6㎝、厚さ2.6㎝。２点の雲文瓦当はⅢ型１式に属する。2002東西道路：T1②:2（第12図３）は、二重の圏線がめぐり、中心文には圏線内に３本の線が交差する斜格子文が施される。雲文は二重線で中心文とつながり、雲文の末端は巻き込む。瓦当裏面下半の突帯は、幅3.8㎝、高さ0.6㎝で、糸切り痕が残る。瓦当径17.6㎝、周縁の幅1.5㎝、周縁の高さ1.1㎝、厚さ3.1㎝。丸瓦部をともなう。

雲文瓦当Ⅲ型

ⅴ　小　結

この東西道路は桂宮中部のやや北寄りに位置し、東南から西北方向に走る。方位は280度、路面幅は13mである。路表土から出土した太い縄目の平瓦、中太の縄目をもつ丸瓦などからみて、東西道路の年代は前漢中・後期と考えられる。



１：耕作土層　２：攪乱層　３：漢代路表土層

第13図　2002年東西道路試掘坑平面図・西壁土層図

第３節　建築遺構の調査

桂宮で地表に現存する漢代の遺構は、夾城堡の東の版築高台（１号建築）のみである。しかし、ボーリング調査で、耕地の下に多くの漢代の遺構が埋没していることが明らかになった（２～７号建築)。そのうち、２～４号建築は発掘調査、１・５～７号建築は試掘調査を実施した。

１　桂宮１号建築の調査

Ａ　ボーリング調査

1996年春、漢長安城の調査は桂宮へと移り、まず１号建築のボーリングと試掘調査を実施した。この遺構は桂宮の西南部に位置し、桂宮の西城壁から東に347m、南城壁から北に262m、２号建築の北35mのところにある。

版築高台

１号建築の主体は、現地表上にある版築高台である。版築高台の残存状況は、東部が比較的良好であるが、北部と東南部は悪く、西部と西南部は最も悪い。現存する版築高台の底部は不整形で、東西の最大幅45m、南北の最大幅56m、高さ12mある。２段築成の基壇である。上段はほぼ楕円形で、東西15.4m、南北10.0m。下段は、上段との高低差が8.5mあり、現存幅1.4～5.6mで、高台の東部・北部と南部の一部分に広がっている（図版４)。

２段築成

ボーリング調査の結果、１号建築の版築基壇は、東西長122.0m、南北幅76.7mであることが判明した。版築高台の周囲の地表下にある版築基壇は、北辺が最も整然としている。版築土は混成土で、厚さ1.0m。北辺における地表からの深さは1.0mで、版築土の質は比較的良好である。版築高台の西辺は、北から19.6mのところで西に折れ、そこから13.5mでさらに南に折れる。西辺では地表下0.4～0.5mで版築土を検出し、0.8～1.0mで地山に達する。版築土の質は比較的良好である。南辺は、西から41.4mのところで南に折れ、そこから16.7mでさらに東に折れる。南辺では地表下1.2～1.4mで版築土が検出され、2.0～2.2mで地山に達する。版築土は混成土で、質は普通である。東辺は、南から36.0mのところで東に折れ、そこから21.5mで北に折れ、さらに12.0mでまた西に戻り、19.6mで北に折れる。東辺では地表下1.0～1.8mで版築土が検出され、2.0～3.0mで地山に達する。版築土は黄土あるいは混成土であり、黄土の版築土は質が比較的良好だが、混成土の版築土はそれほどでもない。

このほか、版築高台の西約6.5mで、ボーリング調査により、南北長35m、東西幅2.5mの版築帯を１条確認した。地表下0.7～0.8mで版築土が検出され、1.2mで地山に達する。版築土は混成土からなり、質は比較的良好である。

Ｂ　試掘調査

１号建築のボーリング調査の成果に基づき、1996年の春と秋に計22ヵ所の試掘調査をおこなった。春季は11ヵ所を試掘し、それぞれの試掘坑をT1～T11とした。秋季も11ヵ所を試掘し、同

様にTG1～TG11とした。１号建築の東部と北部には近現代の墳墓が110基余りあり、これらを避けたため、試掘坑の形状は不規則なものとなっている。

ｉ　遺　構

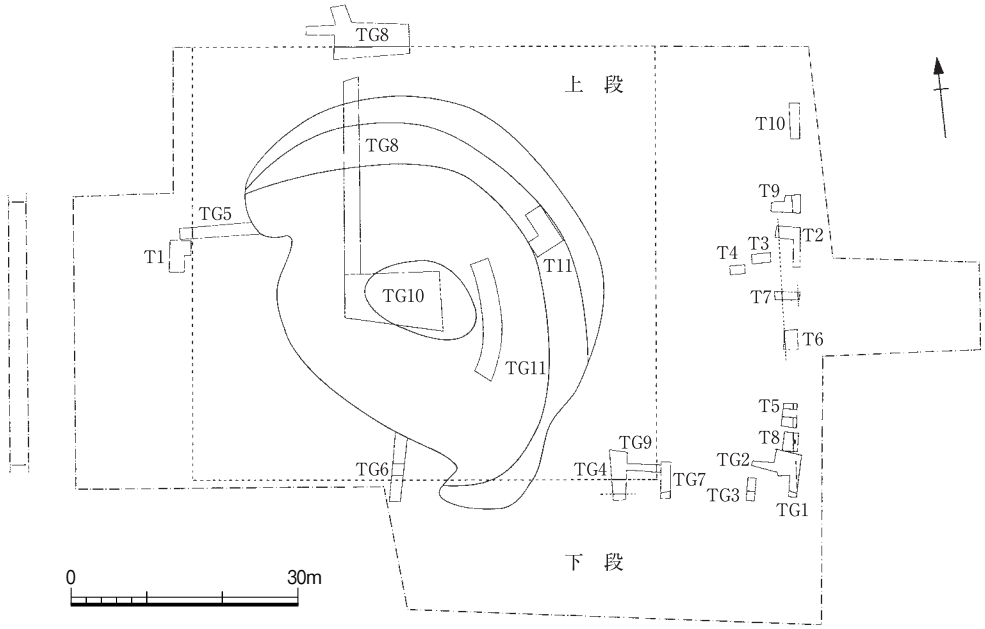
T1～T11は、地表上に現存する版築高台の西側・東側と版築高台の上段に設定した（第14図）。このうち、T1・T2・T5・T7で多くの発見があった。

T1は版築高台の西側に位置し、東西2.9m、南北4.2m、深さ0.5～1.4m。漢代中・後期の平瓦・丸瓦・幾何学文磚の破片が出土したほか、版築土の中に大量の河原石が混じっていた。河原石の大きさは、長さ20～25㎝、幅15～23㎝、厚さ18～24㎝ほどである。

T2は版築高台の東側に位置し、東西3.2m、南北5.2m、深さ1.3～1.4m。南北方向の廊道の遺構を検出した。廊道は磚敷で、磚が南北３列、東西２列残存する。磚は一辺が35～36㎝、厚さ４㎝。廊道の西沿いには、平瓦を立てて埋め込んだ遺構が0.75mにわたり残っていた。　廊　　道

Ｔ５は版築高台の東側やや南寄りに位置し、東西1.9～2.2m、南北3.2m、深さ1.25～1.5m。南北方向の廊道遺構が検出され、廊道の上には敷磚が４点残存していた。廊道の東沿いには瓦を立てて埋め込んだ南北方向の遺構を0.75m分検出した。これ以外に、１本の東西方向の磚敷通路が南北方向の廊道と交差して伸びる。磚敷通路の検出部分は長さ2.0m、幅1.15m。使用期間が長かったためか、敷磚は砕けている。磚敷通路の南北両辺には、長手を上にした見切りの磚がある。磚の幅は５㎝である（第15図、図版５－１）。　廊　　道　磚敷通路

T7は版築高台の東側に位置し、東西3.6m、南北1.0m、深さ0.9～1.5m。南北方向の廊道遺構を検出した。廊道の東西幅は2.0m。廊道上の磚敷は南北３列、東西２列残存している。磚の長さは38㎝、幅35㎝、厚さ４㎝。廊道の東西両辺に沿って、長手を上にした見切りの磚がある。見切り磚の幅は4.5㎝で、その外側に平瓦を立てて埋め込んだ部分もある。西辺沿いには見切り磚の痕跡がわずかに残る（第16図、図版５－２）。　廊　　道



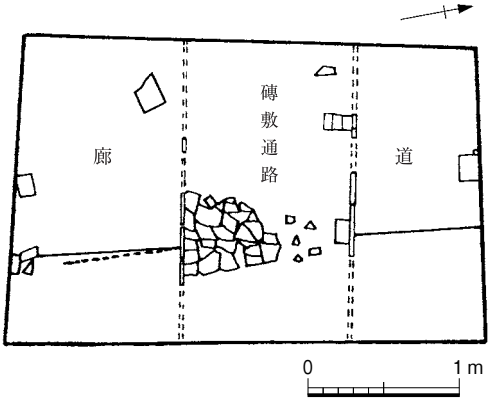
第14図　１号建築の版築土の範囲と試掘坑の位置

廊　　道　　このほか、試掘坑T6・T8・T9内でも、南北方向の廊道の遺構を検出した。

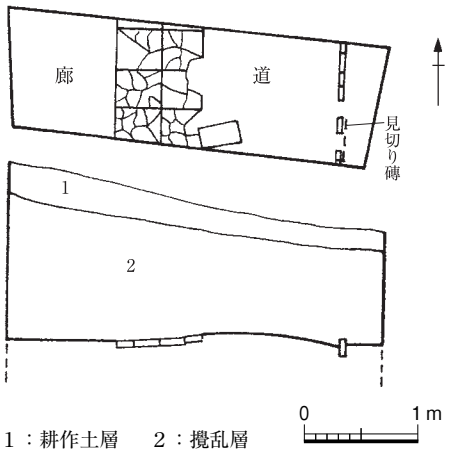
T11は版築高台の上段にあり、東西4.0m、南北2.5m、深さ1.3～1.4mである。版築土以外に遺構は見つかっていない。

TG1～TG11は、版築高台の東西南北４方向に位置する。TG4・TG5・TG8・TG9では、地下にある版築高台の四辺と高台に登る道を検出した。TG8の遺構の状況は複雑である。TG8は現存する版築高台の西北面に位置し、南北二つの部分に分かれる。南部は版築高台の西北斜面にあり、東西3.3m、南北29.1m、深さ0.1～0.4m。試掘坑内はすべて版築土で、ほかに遺構はないことを確認した。TG8の北部は、東西14.1m、南北7.3m、深さ0.2～0.9m。その基本層序を試掘坑の東壁で見ると、次のとおりである。

版築高台に登る道



第15図　１号建築試掘坑Ｔ５平面図



第16図　１号建築試掘坑Ｔ７平面図・北壁土層図

第１層：耕作土層。厚さ0.1～0.26m。

第２層：攪乱層。地表からの深さ0.1～0.68m、厚さ0.14～0.46m。

第３層：漢代遺物包含層。地表からの深さ0.24～0.88m、厚さ0.03～0.32m。

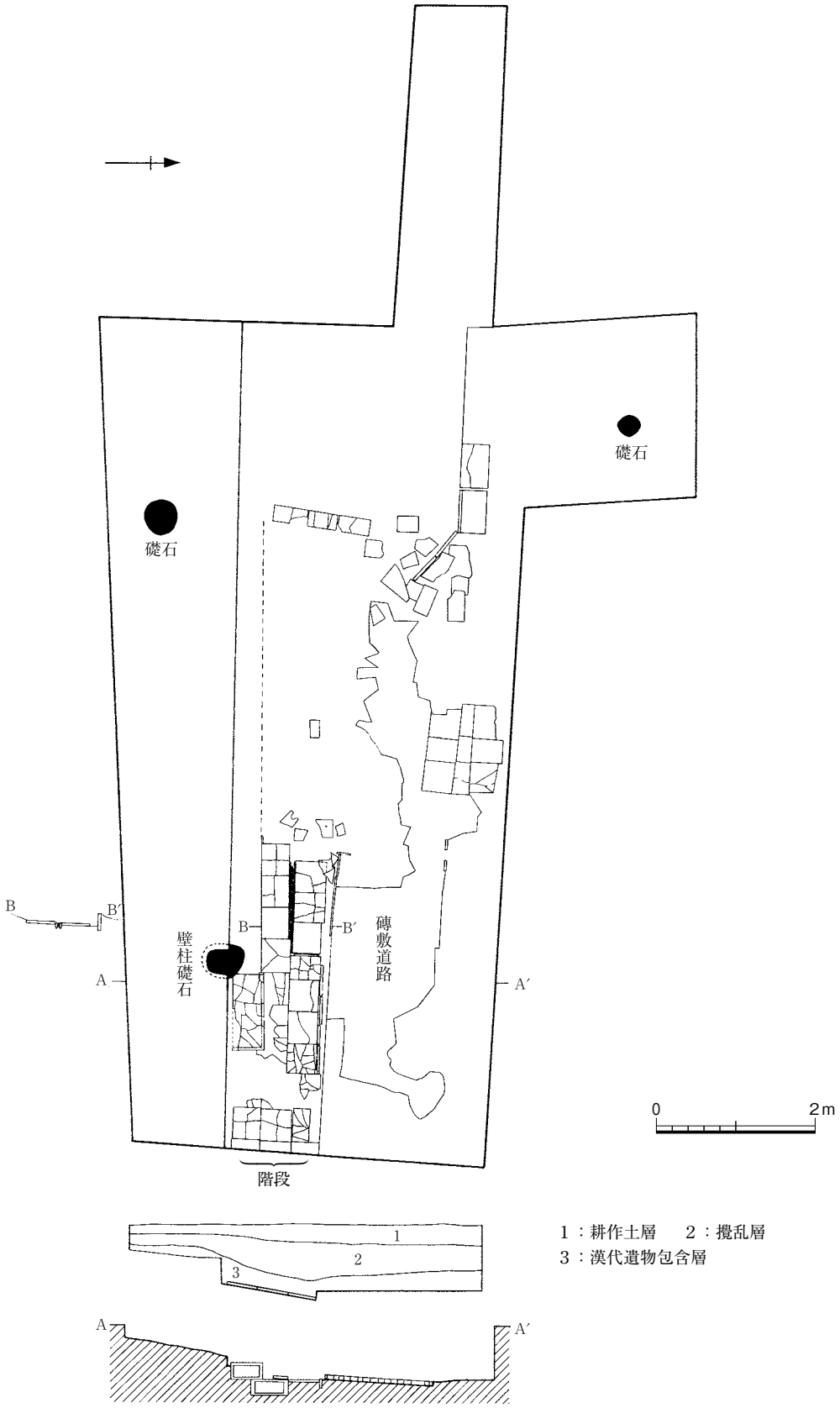
第３層以下は漢代の路面あるいは版築土で、遺構は前後２時期ある。（第17図、図版６）。

前期の遺構には、磚敷通路、空心磚の階段、礎石などがある。

磚敷通路　　試掘坑東部に位置し、版築高台北辺の北側にある。南北幅は0.8～1.06mで、磚敷は２列（西部）ないし３列（東部）が残る。磚敷の北側には見切り磚があり、東西残存長1.32㎝、磚の厚さ2.5㎝。磚敷通路の検出部分は東西3.76mで、東は試掘坑の東壁以東へつづく。敷磚上には幾何学文を飾り、東部の敷磚はやや砕けているが、西部の敷磚は完形に近い。磚敷通路は、南が高く北が低い斜面をなし、傾斜角度は6.5度である。磚敷通路の西部では、２列の磚敷の間に瓦の砕片を詰めている。

空心磚階段　　試掘坑の東側・磚敷通路の南にある（図版６－２）。空心磚は２点残存し、北側の１点は磚敷通路の下にあり、東部が残る。残存長1.11m、幅0.38m、高さ0.19m。南側の１点は北側の空心磚の上に重なり、両方の重なる部分の幅は0.08mである。空心磚の上面は破損し、長さ92㎝、幅38㎝、高さ19㎝、磚の壁厚４～５㎝。空心磚の一側面は開口し、他の五面には幾何学文を型押ししている。空心磚の上面は版築高台北辺上縁より0.08m低い。

礎　石　　空心磚階段の西南に、壁柱の礎石が１点ある。花崗岩製で平面は楕円形、東西40㎝、南北50㎝、厚さ14～16㎝。礎石上面は高台北辺上縁より12㎝、空心磚の上面より６㎝低い。



第17図　１号建築試掘坑TG８平面図・東壁土層図

後期の遺構には、磚敷通路、版築高台などがある。

磚敷通路　東西方向と南北方向のものが１条ずつある。東辺のものは東西方向で、南が高く北が低く、東が高く西が低い。南から北に６度の勾配をもつ。磚敷通路の南部には見切り磚が３点あり、磚の幅は2.5㎝。東西の全長は約1.0ｍで、その南にある前期の磚敷通路面よりも12㎝高い。磚敷通路の北部には平瓦片を立て並べるが、２点が残存するのみである。瓦片の東西長は0.38ｍで、見切り磚と平瓦片の間隔は1.3ｍあるが、磚敷はすべて北に広がり、平瓦片の範囲にまで及んでいる。東部の敷磚は破損しているものが多いが、西部の磚敷は残存状態が比較的良好である。敷磚はすべて幾何学文磚で、一部は文様を上に向けている。東西方向の磚敷通路の南にある３点の見切り磚の西端には、南北方向の見切り磚が一つあり、残存長0.17ｍである。この南北方向の見切り磚の西3.86ｍには、南北方向の比較的幅の広い見切り磚があり、磚の幅は0.18ｍ、現存南北長1.2ｍである。北部は磚が２段重ねられていて、磚の厚さは2.5㎝。南部は１段で、磚の厚さは3.0㎝。南北方向の見切り磚とその西の幅広い見切り磚との間には、１条の南北方向の磚敷通路がある。

幾何学文磚

版築高台　試掘坑の南部で、版築高台の地表下の北辺を検出した。前期磚敷通路の南辺から南0.07ｍの位置にあり、磚敷通路より0.1～0.15ｍ高い。

層位の状況を見ると、前期と後期の遺構はほぼ同じ時代に属する。後期の東西方向と南北方向の磚敷通路は、前期のそれを修復・増築したものである。

このほか、TG4南部で検出した東西方向の廊道は、幅２ｍ。TG10・TG11はそれぞれ版築高台の頂部と上部に位置し、試掘坑内では版築土以外には検出されなかった。

ⅱ　出土遺物

多くは瓦磚で、日常の土器片や銅製品、銭貨もある。瓦磚には磚・丸瓦・瓦当、土製品には器座・甑底部・土製小球などがある。

磚　４点。すべて幾何学文の敷磚である。1:TG8③:1（第18図１、図版３－５）はⅠ型に属する。残存長24㎝、残存幅14.5㎝、厚さ３㎝。1:T10③:2（第18図２、図版３－６）はⅡ型に属し、残存長15㎝、残存幅13㎝、厚さ２㎝。

丸　瓦　８点。すべて破片。1:TG8③:4（第18図３・４）は残存長26.5㎝、内径12.7㎝、厚さ1.2㎝、玉縁の長さ3.1㎝、厚さ0.9㎝。凸面には縦位の縄目があり、肩近くはナデ調整されている。縄目の幅は0.3㎝。凹面には凹点文がみられる。1:T3③:1（第18図５、図版３－７）は残存長27.3㎝、内径12.4㎝、厚さ1.1㎝、玉縁の長さ4.1㎝、厚さ1.6㎝。凸面には縦位の縄目があり、肩近くはナデ調整する。縄目の幅は0.3㎝。凹面は布目。1:T3③:2（第18図６、図版３－８）は残存長29㎝、内径14㎝、厚さ1.5㎝、玉縁の長さ5.4㎝、厚さ1.6㎝。凸面には縦位の縄目があり、肩近くをナデ調整する。縄目の幅は0.25㎝。凹面は布目。1:TG8③:3（第19図１・２）は残存長13.3㎝、残存内径11.5㎝、厚さ1.4㎝。凸面は縦位の縄目があり、縄目幅は0.6㎝。凹面は凹点文。

瓦　当　20点。雲文瓦当と文字瓦当の２種類ある。

雲文瓦当は17点あり、Ⅲ型とⅣ型に分類できる。

雲文瓦当Ⅲ型

Ⅲ型は４点あり、界線が中心文を貫かない。２式と11式に分類できる。

２式は１点。1:TG8③:24（第19図３、図版７－１）は約１／４が残存。瓦当面には二重の圏線がめぐり、中心文は16個の小格子からなる斜格子文が施される。圏線の内側は界線によって４分割

され、界線の先端は四つの雲文の中央部と連接する。雲文の末端は巻き込む。瓦当裏面は糸切り痕があり、瓦当裏面下半の突帯の幅約1.5㎝、突帯の高さ0.7㎝、厚さ約2.3㎝。

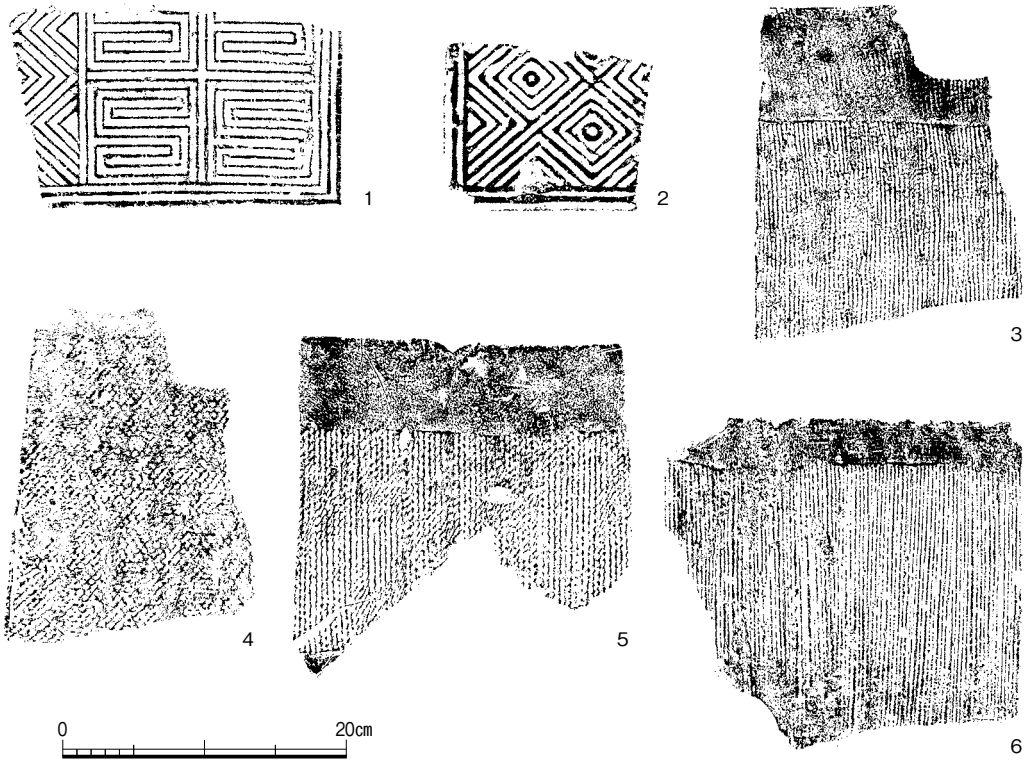
11B式は１点。1:T10③:1（第19図４、図版７－２）はほぼ完形で、中心文は半球形文と20個の珠文からなり、周縁の内側の圏線との間に「X」字形文がまばらに施されている。瓦当裏面には縄叩きがあり、瓦当径15.8㎝、周縁の幅1.5㎝、周縁の高さ0.3㎝、厚さ2.2㎝。

11C式は２点。1:TG8③:20（第19図５、図版７－３）は完形で、中心文に半球形文と12個の珠文、雲文の両側に各１個の珠文を配し、周縁の内側の圏線との間に「X」字形文が密に施される。瓦当径15.4㎝、周縁の幅1.1～1.5㎝、周縁の高さ0.7㎝、厚さ2.3㎝。

Ⅳ型は13点。界線が中心文を貫く。1・5・6・9式に分かれ、１式は２亜式に分類できる。

雲文瓦当Ⅳ型

１A式は８点で、うち２点は完形。瓦当面は二重に圏線がめぐり、中心文には四つの「L」字形文が施され、雲文の末端は一周半巻き込む。瓦当裏面には部分的に布目があり、瓦当裏面下半の突帯の幅は1.6～3.0㎝、高さ0.1～1.0㎝。瓦当径14.8～15.9㎝、周縁の幅0.9～1.3㎝、周縁の高さ0.5～1.0㎝、厚さ2.0～3.3㎝。1:TG8③:10（第19図６、図版７－４）は完形で、丸瓦部を一部ともなう。瓦当裏面には糸切り痕跡があり、瓦当径15.5㎝、周縁の幅1.1㎝、周縁の高さ0.7㎝、厚さ2.4㎝。丸瓦部の残存長8.7㎝、厚さ1.2㎝。瓦当近くの凸面には縄目があるが、なで消されている。凹面には布目があり、瓦当近くをナデ調整する。1:TG8③:12（第19図７、図版７－５）は瓦当



１：幾何学文磚（1:TG8③:1）　２：幾何学文磚（1:T10③:2）　３：丸瓦（凸面、1:TG8③:4）
４：丸瓦（凹面、1:TG8③:4）　５：丸瓦（凸面、1:T3③:1）　６：丸瓦（凸面、1:T3③:2）

第18図　１号建築出土瓦磚

裏面に糸切り痕跡があり、瓦当径15.0㎝、周縁の幅1.1㎝、周縁の高さ0.6㎝、厚さ2.0㎝。丸瓦部をともなう。1:TG8③:13（第19図８）は界線が中心文を貫通する。瓦当裏面には布目と糸切り痕跡がある。瓦当径14.8㎝、周縁の幅0.8㎝、周縁の高さ0.6㎝、厚さ2.4㎝。丸瓦部をともなう。

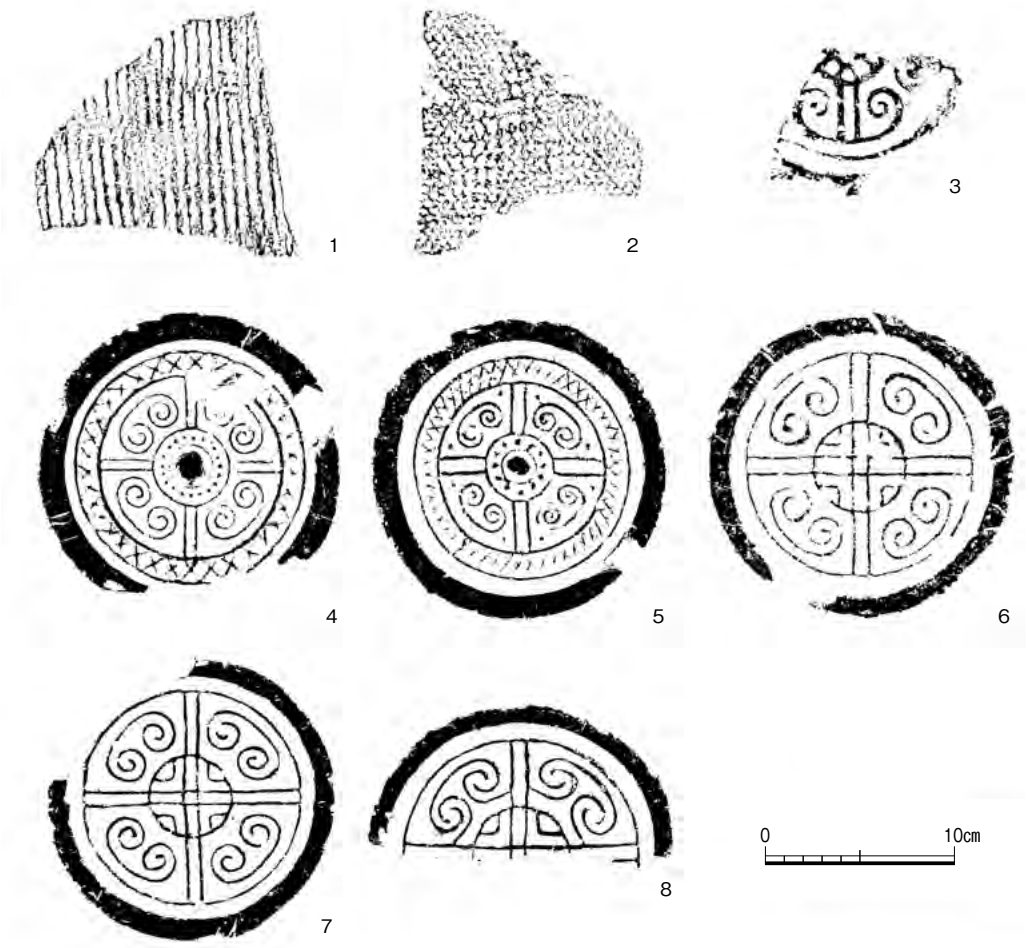
１B式は１点。1:TG8③:18（第20図１、図版７－７・８）は雲文の末端が逆方向に巻き込み、界線とつながる。瓦当裏面には幾何学文が型押しされ、糸切り痕跡がある。瓦当径15.8㎝、周縁の幅0.9㎝、周縁の高さ0.6㎝、厚さ2.2㎝。丸瓦部をともなう。

５式は２点。1:TG8③:16（第20図２、図版７－６）は、中心文内の「L」字形文が二重線で、雲文の末端が２回巻き込む。瓦当径15.2㎝、周縁の幅0.8㎝、周縁の高さ0.9㎝、厚さ1.6㎝。

６式は１点。1:TG8③:17（第20図３、図版８－１）は中心文に四つの三角文を飾る。瓦当径は不明、周縁の幅0.7㎝、周縁の高さ0.7㎝、厚さ2.5㎝。

９式は１点。1:TG8③:19（第20図４、図版８－２）は、界線が雲文の中央部につながる。瓦当裏面に糸切り痕跡がある。周縁の幅1.0㎝、周縁の高さ1.0㎝、厚さ2.8㎝。丸瓦部をともなう。

文字瓦当　文字瓦当は３点ある。「□□無極」瓦当が１点（1:TG8③:22)、「□□□極」瓦当が１点（1:TG



１：丸瓦（凸面、1:TG8③:3）　２：丸瓦（凹面、1:TG8③:3）　３：Ⅲ型２式雲文瓦当（1:TG8③:24）
４：Ⅲ型11B式雲文瓦当（1:TG10③:1）　５：Ⅲ型11C式雲文瓦当（1:TG8③:20）
６：Ⅳ型１A式雲文瓦当（1:TG8③:10）　７：Ⅳ型１A式雲文瓦当（1:TG8③:12）
８：Ⅳ型１A式雲文瓦当（1:TG8③:13）

第19図　１号建築出土丸瓦・瓦当

1③:1)。瓦当面は界線で４分割され、各区に１字を配する。1:TG8③:22（第20図５、図版８－３）は、陽文の「無極」の２字が残存する。周縁の幅1.6㎝、周縁の高さ0.7㎝、厚さ2.0㎝。

器　座　　１点（1:TG8③:9)。口が大きく開き、幅広く平らな口縁をもつ。内面と口縁部は沈線文と突線文が施され、口縁沿いに縄目がめぐる。底部は糸切り。残存内径22.4㎝、高さ7.5㎝、口縁部幅4.5㎝、厚さ2.0㎝、器壁の厚さ2.4㎝。

甑　　２点。１点は破片、もう１点はほぼ完形である。1:TG8③:31は底部径19.5㎝、厚さ1.1㎝。底部には14の簀子（すのこ）の孔が下から上に向かって開けられ、孔径2.0㎝。底部外面には部分的に縄目をとどめる。砂粒を含む。底部内面は中央が高く、周囲が低い。

土製小球　　１点（1:TG8③:30)。無文で表面は研磨されている。直径1.8㎝（図版８－４)。

銅　器　　鋪首・簪・鈴形器・鏡片などがある。

鋪首は１点（1:TG1③:2、図版８－５）。正面は獣面形で鍍金されている。下部の舌は内湾して、環をくわえる。背面中央からは舌が突出し、孔がある。高さ4.3㎝、最大幅4.5㎝、器壁の厚さ0.2㎝、舌の高さ0.7㎝。　　鋪　首

簪は１点（1:TG1③:3、図版８－６）。頭部は扁平で、身の断面は楕円形を呈し、頭部に近い部分に孔がある。残存長7.4㎝、身幅0.2㎝、身の厚さ0.4～0.8㎝。表面は鍍金されている。　　簪

鈴形器は１点（1:TG8③:27、図版８－７）。上部には鈕があり、中空で器壁は厚く、舌部はない。全高4.4㎝、幅1.5㎝、厚さ0.9㎝。

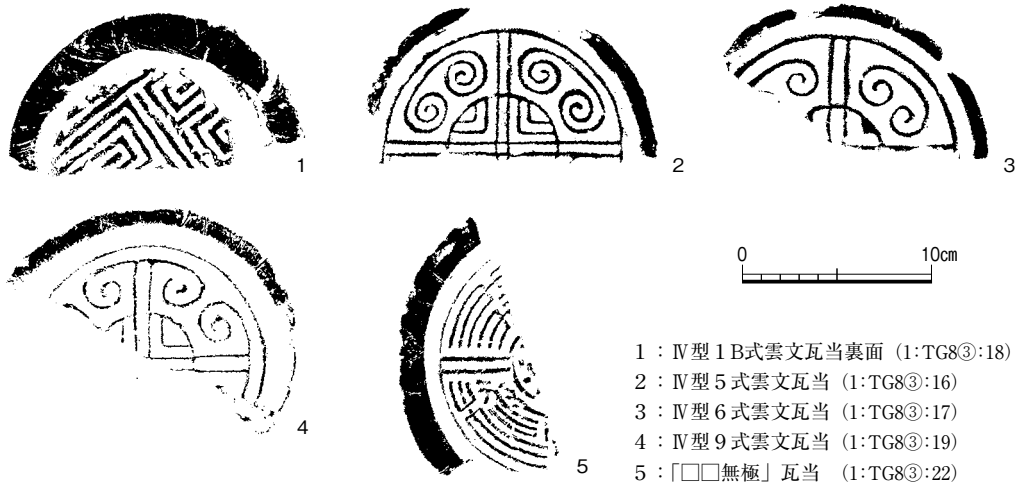
鏡は１点（1:TG7③:1)。残存長8.8㎝、残存幅2.8㎝、厚さ0.4㎝。文様は不明瞭である。

銭　貨　　３点。半両銭と五銖銭がある。

半両銭は１点（1:TG8③:29、図版８－８）。銹が進行している。直径2.6㎝、方孔の辺長0.6㎝、厚さ0.2㎝。

五銖銭は２点あり、Ⅰ型とⅡ型に分類できる。

Ⅰ型は１点（1:TG1③:4、図版９－１）。「五」字の交差する２本の線が比較的直線に近く、上下２本の横線も直線的である。「銖」字の「金」偏は頭部を三角形につくり、「朱」の頭部は直角に折れて下部は丸みをもつ。直径2.6㎝、方孔の辺長0.9㎝、厚さ0.2㎝。



第20図　１号建築出土瓦当

Ⅱ型は１点（1:TG8③:28、図版９－２）。「五」字の交差する２本の線がⅠ型よりも顕著に曲がり、左右が対称的になる。「銖」字の「金」偏頭部は三角形につくり、「朱」字頭部は直角に折れて下部は丸みをもつ。直径2.6㎝、方孔の辺長0.9㎝、厚さ0.2㎝。

ⅲ　小　結

1996年春・秋の試掘調査を通して、１号建築の建物配置と性格が明らかになった。１号建築の中心建築は版築の高台であり、その平面は方形に近く、東西58m、南北62mである。

高台基壇の東・南・北には廊道がめぐる。南の廊道は幅２mで、高台の南辺に平行するが、磚敷の痕跡だけが残る。北の廊道は幅1.06mで、高台の基壇北辺に平行する。部分的に磚敷が遺存している。東の廊道は高台基壇の東17mに位置し、幅２mで、高台基壇の東辺と概ね平行する。部分的に磚敷が遺存する。東の廊道と高台基壇の東辺との間には建物がある（現代の墓壁上に整然とした漢代の磚敷面が露出している）。このほか、高台基壇の西辺沿いの版築土には大量の河原石が混じり、高台基壇の縁辺部を強化したものと考えられる。

試掘調査では、高台に向かう２条の通路を発見した。１条は高台基壇東側にある東西方向の磚敷通路で、幅1.15m。西が高く東が低く、傾斜は14度である。もう１条は高台基壇北側の南北方向の通路で、幅3.86m。

１号建築の年代

出土した遺物からみて、１号建築の年代は前漢中・後期である。

版築高台の頂部と東部下段の試掘調査では、建築遺構や遺物は発見されなかった。残存状態が良好な高台北斜面の試掘調査によると、高台北面は大きく傾斜し、傾斜角度は29度ある。版築高台は築山の性格をもつと推定される。『三輔黄図』が引く『関輔記』逸文には「桂宮は未央の北にあり。中に明光殿の土山あり、複道は宮中の西より城に上り、建章の神明台、蓬莱山に至る」とある。いわゆる「明光殿土山」は１号建築の版築高台と関係するのだろう。

明光殿土山

2　桂宮５号建築の調査

A　ボーリング調査

５号建築は桂宮北部中央にあり、現在の鉄鎖村の東北にある。遺跡は鉄鎖村東部の南北道路から東に267m、北辺は桂宮の北城壁から南に185mに位置する。

ボーリング調査の結果、建物の版築基壇は東西方向の長方形で、南北両辺ではいくつかの入り組みがある。版築基壇の上部は破壊されており、大部分は耕作土層の直下で検出した。地表からの深さは0.2～0.4m、版築土の厚さは約1.8mである。

版築基壇の北16mで、ボーリングにより東西方向の版築塀を検出した。版築塀は版築基壇中部のやや西から東へ伸び、342.5mのところで南に折れて、132.5m南でまた西に折れ、42.5mつづく。版築土の厚さは0.9～1.1mあり、版築土の下は黄色の地山となる。

B　試掘調査

1999年７月、５号建築の西・北・東辺と中央に各１ヵ所、南辺に２ヵ所の試掘坑を設けた。このほか、北の版築塀上にも試掘坑を２ヵ所設け、以上をT1～T8とした（図21）。

ｉ　遺　構

遺構はごく浅いところにあり、耕作土層の直下が版築土となる。版築基壇以外の一部の耕作土層の下には攪乱層が１層あり、その下に漢代の遺物包含層が残存する場所もあるが、ひじょうに薄い。残存の状態が比較的良好なT4の西壁の層序は次のとおりである（第22図）。

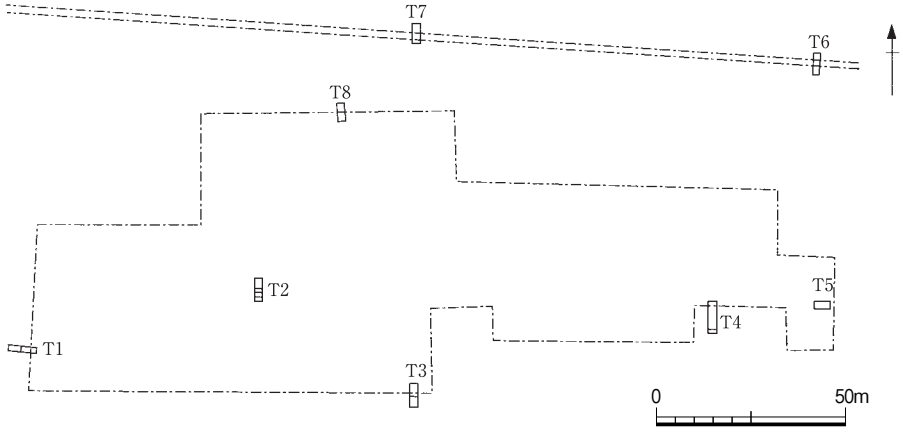
第１層：耕作土層。厚さ0.2m。

第２層：攪乱層。地表からの深さ0.2～0.37m、厚さ0.13～0.15m。

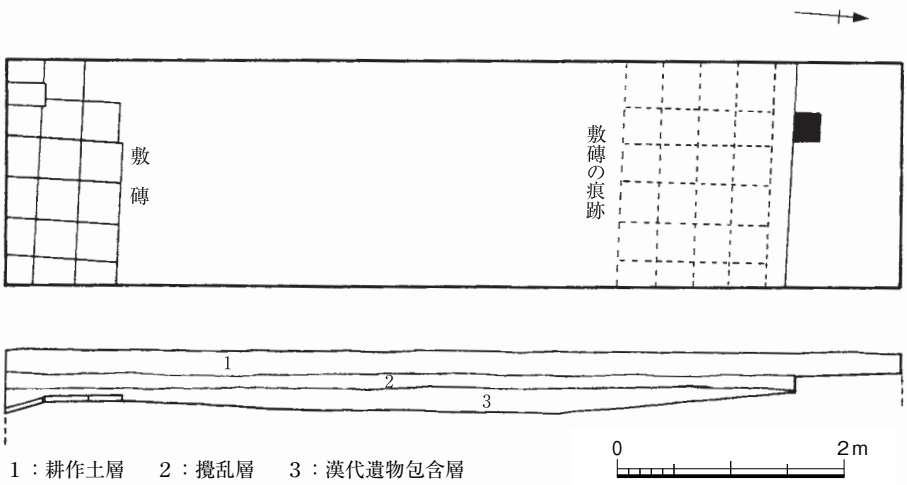
第３層：漢代遺物包含層。地表からの深さ0.37m～0.6m、厚さ0.05～0.17m。漢代の磚や瓦、瓦当などを含む。第３層の下は版築基壇の外（南）側の磚敷面である。

西辺のT1、南辺のT3・T4、北辺のT8で、版築基壇の西・南・北辺を検出した。　版築基壇

T1（長さ８m、幅1.5m、方向は273度）では、地表から0.35～0.4mの深さで、基壇西辺の版築土を検出した。基壇の残存状態はやや悪く、版築面はその外側の廊道と同一平面上にある。廊道の外側には見切り磚が残存し、廊道の幅は2.55mである。見切り磚には無文と幾何学文の２種類があり、幅は2.7㎝。廊道外には２点の無文の敷磚が残存しており、庭院の地表面に敷いた磚と考えられる。地表から磚敷までの深さは0.54mである。　廊　道



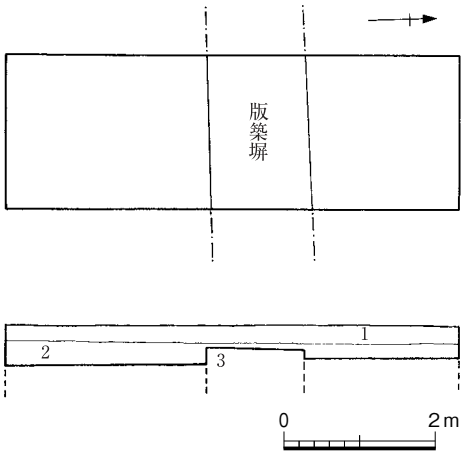
第21図　５号建築の版築土の範囲と試掘坑の位置



１：耕作土層　２：攪乱層　３：漢代遺物包含層

第22図　５号建築試掘坑Ｔ４平面図・西壁土層図

T3（長さ６ｍ、幅２ｍ、南北方向）では、基壇南辺の版築土を検出した。地表からの深さは0.22mである。基壇の外（南）側１ｍのところに、１条の東西方向の見切り磚がある。基壇端と見切り磚の間が廊道である。見切り磚以南では、部分的に敷かれた無文の敷磚が発見され、庭院の地表面の遺構と考えられる。



１：耕作土層　２：攪乱層
３：漢代遺物包含層

第23図　５号建築試掘坑Ｔ６平面図・西壁土層図

T4（長さ８ｍ、幅２ｍ、方向は357度）では、基壇南辺の版築土を検出した。地表からの深さは0.18m。基壇の南壁では壁柱遺構が１ヵ所みつかった。柱穴の東西幅0.25m、南北長0.22mで、底部には礎石がある。基壇の南では磚敷面を確認した。基壇近くでは南北４列、東西６列の敷磚の抜き取り痕跡が明瞭である。試掘坑南壁の北には、南北３列、東西６列の磚敷が残存する。敷磚は方形で、一辺35㎝、厚さ５㎝。地表から磚敷面までの深さは0.46～0.54m。磚敷は南に伸び、試掘坑の南壁を越えて続く。基壇南側の磚敷の幅は５ｍである。

T8（長さ６ｍ、幅２ｍ、方向は355度）の試掘では、地表から0.2mのところで、基壇北辺の版築土を検出した。

版築塀　T6（長さ６ｍ、幅２ｍ、方向は２度）とT7の試掘で検出した北側の版築塀は、地表下0.3～0.37mにあり、幅1.3～1.8m、残存高0.06～0.2mである。（第23図）。

ⅱ　出土遺物

磚、平瓦、丸瓦、瓦当、銅鏡片がある。

磚　２点が出土。5:T4③:6（図版９－３）は無文の長方磚で、型作りである。残存長27㎝、幅17.5㎝、厚さ7.5㎝。5:T4③:5（第24図１、図版９－４）はⅡ型の幾何学文磚である。裏面は表面よりも大きく、残存長25.3㎝、残存幅16.4㎝、厚さ4.3㎝。

平　瓦　１点（5:T6③:1、第24図２、図版９－５）。残存長44.2㎝、幅39㎝、狭端部の厚さ1.5㎝。凸面には斜位の太い縄目があり、広端沿いはなで消すが、縄目が残る。縄目の幅は0.9㎝。広端はやや外反する。凹面には幅0.2㎝の細い縄目があり、大部分はなで消されている。

丸　瓦　３点。5:T4③:3（図版９－６）は残存長14.9㎝、残存内径7.6㎝、厚さ1.6㎝、玉縁の長さ4.9㎝、厚さ1.9㎝。凸面には縄目があり、肩部はナデ調整。縄目の幅は0.5㎝である。凹面は布目。円筒の分割は内側からで、分割截線は浅い。5:T6③:4（第24図３、図版９－７）は残存長15.0㎝、内径11.6㎝、厚さ1.3㎝、玉縁の長さ4.0㎝、厚さ1.7㎝。凸面は縄目で、肩部はナデ調整。縄目の幅は0.4㎝。凹面は布目。5:T4③:4（図版９－８）は残存長14.2㎝、残存内径10.7㎝、厚さ1.3㎝、玉縁の長さ3.0㎝、厚さ1.0㎝。玉縁の肩部は内側に凹む。凸面には縄目があり、肩部はナデ調整で、２本の沈線が施されている。縄目の幅は0.3㎝。凹面は布目で、円筒の分割は外側から切り込み、分割截線はかなり深い。

分割截線

瓦　当　７点。雲文瓦当と文字瓦当の２種類がある。

雲文瓦当は５点あり、Ⅲ型とⅣ型に分類できる。

Ⅲ型は４点。界線が中心文を貫通しない。11C式と17式に分かれる。　雲文瓦当Ⅲ型

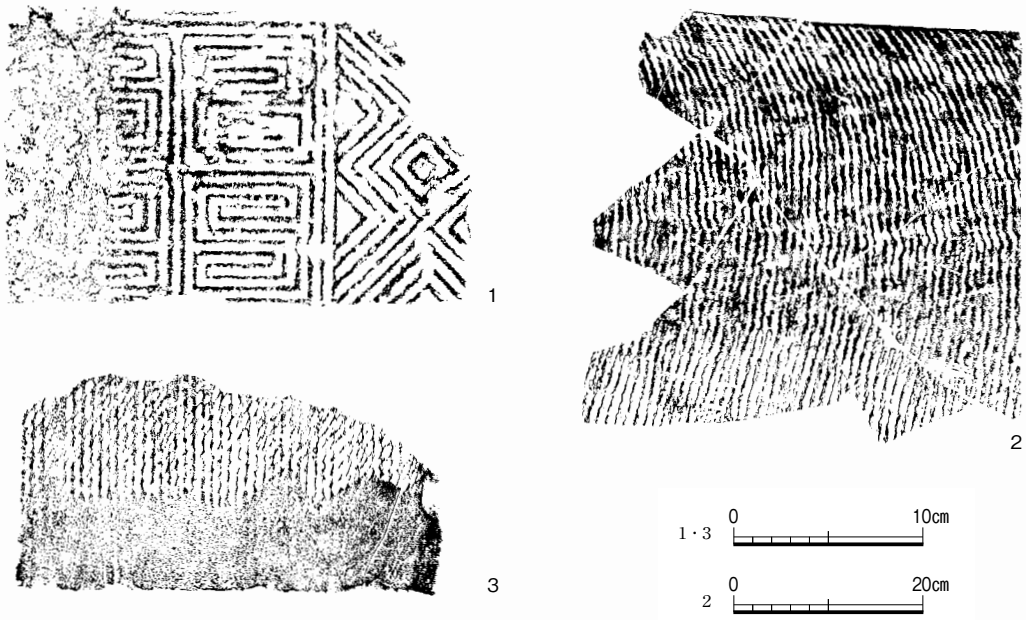
11C式は２点あるが、同笵ではない。5:T6③:2（第25図１、図版10－１）は完形品。中心に半球形文をおき、その外側に四重の圏線がめぐる。半球形文の周囲には12個の珠文をおく。圏線の間は界線によって４分割され、各区に雲文が一つずつ配される。雲文の末端は２回巻きこむ。圏線間には「X」字形文が密に施される。瓦当裏面の中央部には縄叩きが施され、楕円形の凹みがある。瓦当径16.0㎝、周縁の幅1.4㎝、周縁の高さ0.7㎝、厚さ2.3～2.9㎝。

17式は２点。同笵である。5:T7③:1（第25図２、図版10－２）は中心に半球形文を配し、その外側に三重の圏線がめぐる。半球形文の周囲には16個の珠文をおく。圏線の間は界線によって４分割され、各区に雲文が一つずつ配される。雲文の末端は２回巻きこみ、雲文の両側には一つずつ珠文が配される。瓦当裏面には楕円形の凹みがあり、そのまわりに溝が一周する。瓦当径19.3㎝、周縁の幅1.6㎝、周縁の高さ0.6㎝、厚さ3.3㎝。

Ⅳ型は１点（5:T3③:1、第25図３、図版10－３）。界線が中心文を貫く。１A式に分類される。瓦当面には二重に圏線がめぐり、中心文内は４分割され、各区に「L」字形文が一つずつ配される。その外側も同様に４分割され、各区に雲文を一つずつ配する。雲文の末端は１回半巻きこむ。瓦当裏面の中央部は縄叩きが施され、瓦当裏面下半の周縁部に溝がめぐる。瓦当径15.2㎝、周縁の幅1.5㎝、周縁の高さ0.6㎝、厚さ1.5㎝。　雲文瓦当Ⅳ型

文字瓦当は２点あり、２種類に分類できる。　文字瓦当

「長生□□」瓦当は１点（5:T4③:2、第25図４、図版10－４）。破片。中心には半球形文があったと考えられ、その外側に三重の圏線がめぐる。半球形文の周囲には12個の珠文をおく。瓦当は界線によって４分割され、各区に１字ずつを時計回りに配するが、陽文の「長生」２字だけが残



１：幾何学文磚（5:T4③:5）　２：平瓦（凸面、5:T6③:1）　３：丸瓦（凸面、5:T6③:4）

第24図　５号建築出土瓦磚

る。瓦当裏面の中央部には縄叩きが施される。丸瓦部に沿って溝が一周し、瓦当裏面下半にも溝がめぐる。瓦当径は不明。周縁の幅1.9㎝、周縁の高さ0.8㎝、厚さ1.5㎝。

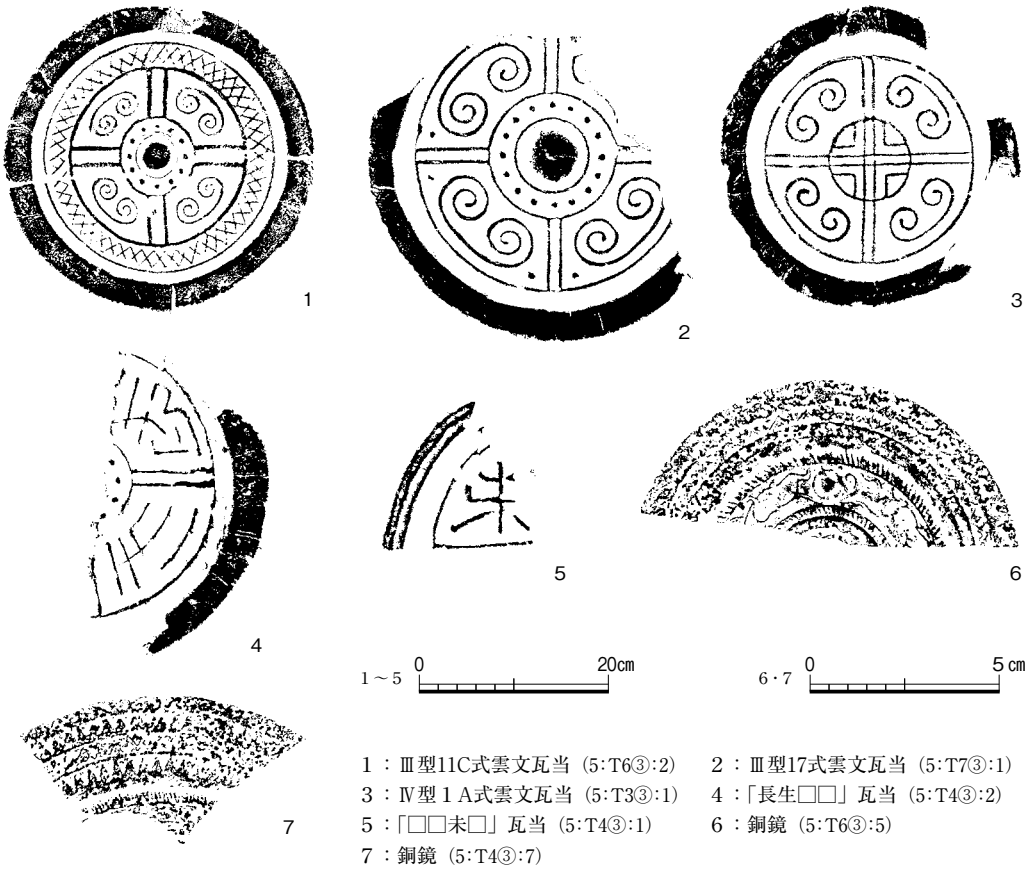
「□□未□」瓦当は１点（5:T4③:1、第25図５、図版10－５）。陽文の「未」１字のみが残る。瓦当径は不明。周縁に圏線がある。周縁の幅1.2㎝、周縁の高さ1.1㎝、厚さ1.6㎝。

四乳禽獣鏡　**銅　鏡**　　２点。どちらも破片。5:T6③:5（第25図６、図版10－６）は四乳禽獣鏡である。鈕座は欠損し、鈕座の周囲を圏線が一周する。その周りにある二重の短斜線文の間が主文帯で、主文は４個の乳釘文の間にある禽獣である。周縁には二重の線鋸歯文をめぐらす。残存長10.2㎝、残存幅4.4㎝、周縁の幅1.8㎝、周縁の厚さ0.55㎝、鈕座付近の厚さ0.3㎝。5:T4③:7（第25図７）の周縁の文様は、二重の鋸歯文に凸面鋸歯文をはさんだものである。残存長7.7㎝、残存幅3.9㎝、周縁の幅2.4㎝、周縁の厚さ0.55㎝。

ⅲ　小　結

試掘調査により、５号建築の範囲と規模、残存状態、時期が明らかになった。版築基壇は東西長215.8m、南北幅74.4mで、基壇の周囲には廊道がめぐる。東辺と南辺は、西辺や北辺に比べて残存状態がよい。この北には版築塀が残り、塀の幅は1.3～1.8m、方向は273度である。出土遺物のうち、太い縄目の平瓦や中太の縄目・太い縄目の丸瓦および周囲に「X」字形文を施した雲文瓦当などから、５号建築の年代は前漢中・後期と考えられる。

５号建築の年代



1：Ⅲ型11C式雲文瓦当（5:T6③:2）　2：Ⅲ型17式雲文瓦当（5:T7③:1）
3：Ⅳ型１A式雲文瓦当（5:T3③:1）　4：「長生□□」瓦当（5:T4③:2）
5：「□□未□」瓦当（5:T4③:1）　6：銅鏡（5:T6③:5）
7：銅鏡（5:T4③:7）

第25図　５号建築出土瓦当・銅鏡

３　桂宮６号建築の調査

Ａ　ボーリング調査

６号建築は桂宮の南部中央、現在の夾城堡の東にあり、２号建築の東97.5m、桂宮南城壁の62.5m北に位置する。南北が連結した二つの版築基壇があり、南基壇は平面が長方形を呈し、東西65m、南北幅31m。北基壇の南辺は何ヵ所も入り組んでおり、平面は刀把形で東西91.2m、南北最大幅39.5m、最小幅15.5mである。　版築基壇

Ｂ　試掘調査

2001年５月に、６号建築の試掘調査をおこなった。南北両端に試掘坑を１ヵ所ずつ設定し、T1･T2とした（第26図）。

ｉ　遺　構

T1は北端に設定した試掘坑である。長さ10.5m、幅1.5mで、方向は７度（第27図）。試掘坑北壁の層序は次のとおりである。

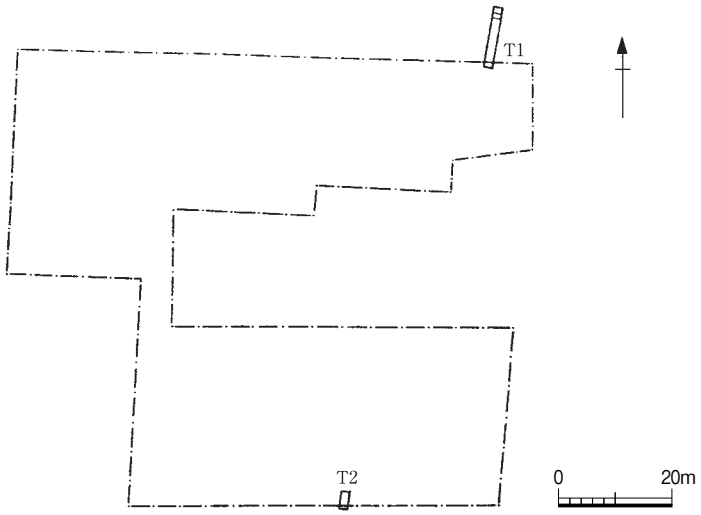
第１層：耕作土層。厚さ0.2m。

第２層：攪乱層。地表から0.2～0.6m、厚さ0.4m。

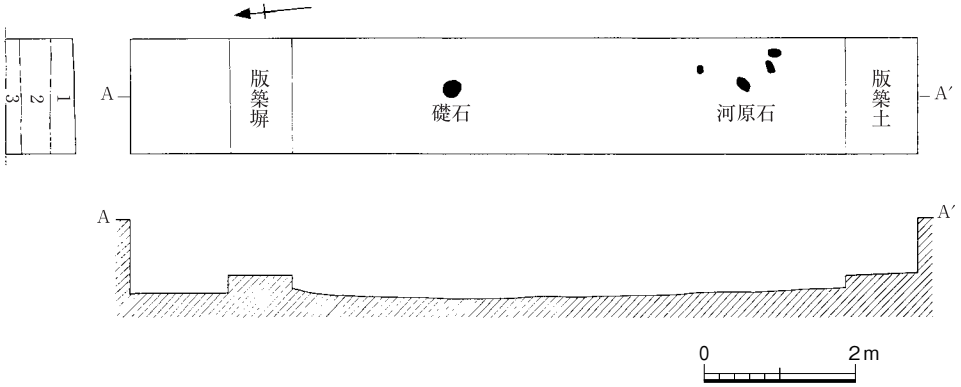
第３層：漢代遺物包含層。地表から0.6～0.94m、厚さ0.3～0.34m。大量の瓦磚などを含む。第３層以下は漢代の地表面である。

試掘坑南端から0.96mの位置で、東西方向の版築基壇の北辺を検出した。基壇の上面は南から北に傾斜し、周囲の地面より0.18m高い。版築土は混成土で、厚さ1.7mである。

また、試掘坑北端から1.32mの位置で、東西方向の版築塀を検出した。塀の南北両面には、幅16～17㎝の日干し煉瓦を積み上げている。版築塀は周囲の地面より0.18m（南）～0.24m（北）高い。版築土の厚さは1.7mである。　版築塀



第26図　６号建築の版築土の範囲と試掘坑の位置



1：耕作土層　2：攪乱層　3：漢代遺物包含層

第27図　６号建築試掘坑Ｔ１平面図・断面図・北壁土層図

版築塀と版築基壇の間には幅7.38ｍの地面があり、南北両端はやや高く、中央部は比較的平坦である。地面は比較的硬く、南寄りの部分には河原石が散乱している。中央部の北寄りには移動した礎石がある。長さ20㎝、幅25㎝、厚さ８㎝。

T1で検出した版築塀は６号建築を囲み、南の版築基壇との間は空閑地と考えられる。

T2は南端に設定した試掘坑である。長さ3.0ｍ、幅1.5ｍ、方向は４度である。試掘坑内は攪乱がひどく、版築基壇の南辺は破壊されていた。版築基壇の現存高は0.61ｍである。

ⅱ　出土遺物

磚・平瓦・丸瓦・瓦当、石磬の破片がある。

磚　１点（6:T1③:1、第28図１、図版10－７）。Ⅰ型の幾何学文方磚である。残存長18.7㎝、残存幅9.9㎝、厚さ2.5㎝。

平　瓦　３点。6:T1③:3（第28図２）は残存長28.8㎝、残存幅27.6㎝、厚さ1.1㎝。凸面には太い斜位の縄叩きを二度施している。左斜め方向、右斜め方向の順である。縄目の幅は0.8㎝。端部は外反し、端部沿いの縄目はなで消されている。凹面は無文である。6:T1③:2（第28図３）は残存長25.3㎝、残存幅29.5㎝、厚さ1.3㎝。凸面は縦位の太い縄目が施され、縄目の幅は0.7㎝。端部に近い部分の縄目はなで消される。凹面は無文である。6:T1③:4（図版10－８）はほぼ完形で、長さ60.0㎝、幅34.3㎝、厚さ0.9～1.0㎝。凸面は太い縄目で数回叩いている。先に左斜めあるいは縦方向、次に右斜め方向の順である。縄目の幅は0.5㎝。狭端部近くの縄目はなで消し、端部を外反させている。凹面は小楕円の珠文（当て具痕）をなで消して無文にしているが、珠文がまだ見えている部分もある。

丸　瓦　２点。6:T1③:6（第28図５、図版11－１）は全長50.6㎝、内径13.5㎝、厚さ0.9～1.5㎝、玉縁の長さ2.6㎝、厚さ0.8㎝（広端側）～1.1㎝（玉縁側）。凹面の広端縁を約2.5㎝幅で面取りし、広端の厚みを0.8㎝と薄くする。凸面は細い縦位の縄目が施される。縄目の幅は0.2㎝。肩部の幅約7.8㎝（玉縁を含まない）と広端沿いの幅約15㎝の部分は、ナデ調整を施して無文にする。凹面には布目が見られる。6:T1③:5（図版11－２）は全長50㎝、残存内径11㎝、厚さ1.1㎝、玉縁の長さ2.6㎝、厚さ1.2㎝。凹面広端縁を約３㎝幅で面取りし、広端の厚みを0.5㎝と薄くする。凸面には細い縦位の縄叩きを施す。縄目の幅は0.2㎝。肩部の幅約7.7㎝（玉縁は含まない）と広端沿いの幅15.8㎝の部分をナデ調整し、無文にする。凹面には布目がある。

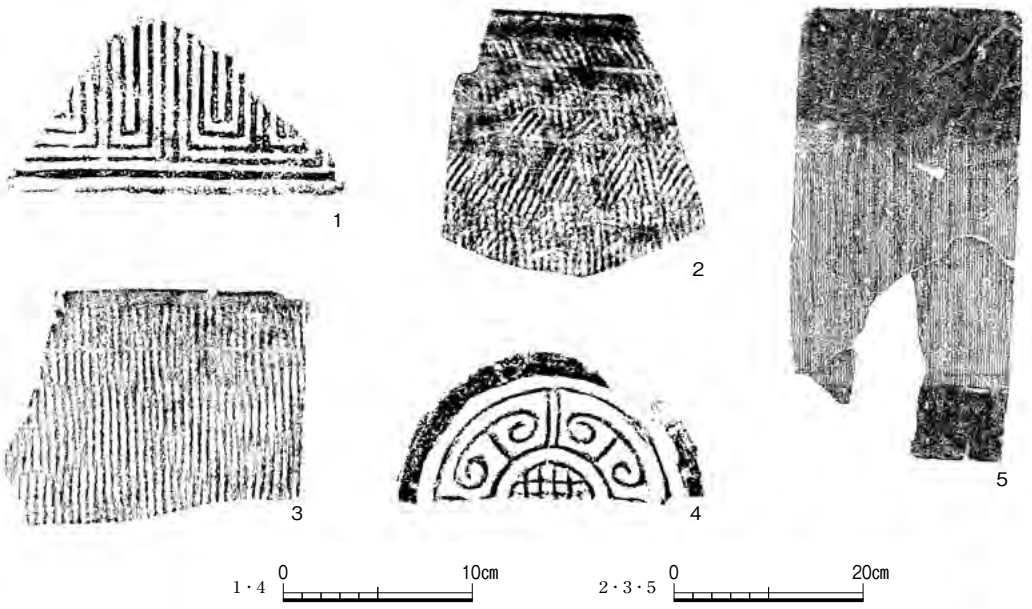
瓦　当　２点。ともにⅢ型28式の雲文瓦当で、丸瓦部をともなう。6:T1③:7（第28図４、図版11－３）の中心文は格子文で、周囲に圏線がめぐる。界線は中心文を貫通せず、文様部分を４分割する。内側の圏線から外に伸びる４本の界線は、それぞれ雲文の中央につながる。瓦当径16.7㎝、周縁の幅1.3㎝、周縁の高さ0.8㎝、厚さ1.0㎝。丸瓦部は残存長28.5㎝、内径13.1㎝。凸面には中太の縄目が数回施される。まず縦位の縄目、次に右斜めの縄目の順である。縄目の幅は0.2㎝。凸面の瓦当沿いはナデ調整のため、無文である。粘土紐積み上げ法で成形されている。凹面には凹点文がみられる。　雲文瓦当Ⅲ型

石　磬　１点（6:T1③:9、図版11－４）。青灰色を呈する石灰岩製の鼓部の破片である。正面と現存する三つの側面は丁寧に作り出されているが、裏面の作りは粗い。残存長17.6㎝、最大幅11.2㎝、厚さ2.6～3.1㎝。股端の幅9.1㎝、孔径2.0㎝。

ⅲ　小　結

６号建築は桂宮の南部中央に位置し、西は２号建築、南は桂宮の宮城南城壁に近接する。２号建築との間には１条の南北道路があり、南に向かえば桂宮南門―龍楼門となり、それを出ると直城門大街に通じるという、交通に便利な立地である。建築規模も大きく、構造は複雑であり、桂宮の中でも重要な建物の一つであったと推測される。

試掘調査で出土した斜位の太い縄目の平瓦や中太の縄目がある丸瓦から、６号建築の年代は前漢中・後期と考えられる。　６号建築の年代



１：幾何学文方磚（Ⅰ型、6:T1③:1）　２：平瓦（凸面、6:T1③:3）　３：平瓦（凸面、6:T1③:2）
４：Ⅲ型28式雲文瓦当（6:T1③:7）　５：丸瓦（凸面、6:T1③:6）

第28図　６号建築出土瓦磚・瓦当

4　桂宮７号建築の調査

A　ボーリング調査

７号建築は桂宮の西北部、現在の鉄鎖村の北東に位置する。４号建築はその南西、３号建築は真南、５号建築はその南東となる。桂宮西城壁の東302m、北城壁の南90mに位置し、南辺は何ヵ所も入り組んでいる。

B　試掘調査

2000年７月に、７号建築の試掘調査をおこなった。東西南北の各辺に、合計６ヵ所の試掘坑を設定し、T1～T6とした（第29図）。

ⅰ　遺　構

７号建築の層序は次のとおりである。耕作土層の下に、厚さが異なる攪乱層があり、その下が基壇の版築土となる。基壇の外側では、磚敷面などの遺構が発見された。建築遺構は破壊がひどく、残存状況は劣悪である。試掘調査の結果、版築基壇は東西に長いL字形を呈し、東西長111.5m、西部の幅37m、東部の幅24.3mであることが判明した。T3（長さ５m、幅２m、方向357度）内の版築基壇は漢代の地表面より0.38m高く、基壇の外側に移動した磚がある。

版築基壇

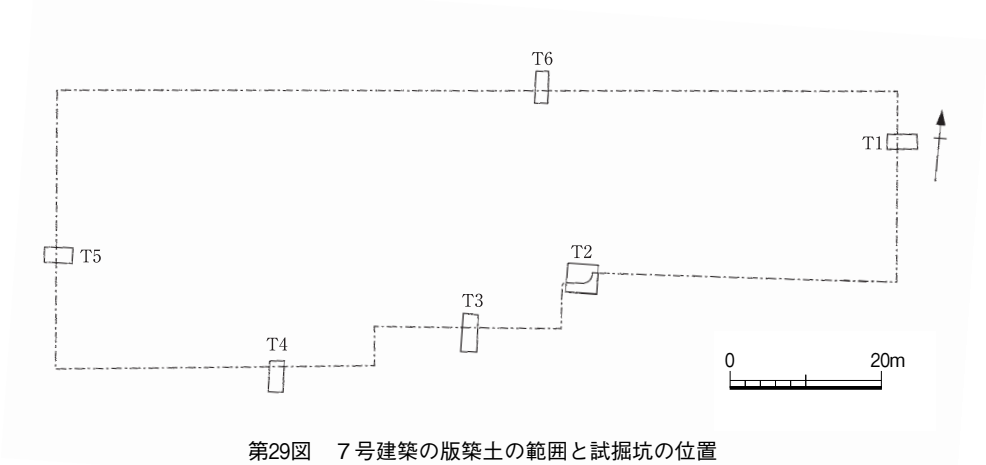
ⅱ　出土遺物

磚・平瓦・丸瓦・瓦当のほか、いくつかの土器片がある。

磚　２点。文様は縄目文と幾何学文である。7:T1②:1（第30図１、図版11－５）は縄目文が施された磚である。残存長18.0㎝、幅28.5㎝、厚さ3.0㎝。一面は無文で、もう一面は縄目文。縄目の幅は0.6㎝で、周縁部はナデ調整される。7:T6②:1（第30図６、図版11－６）は幾何学文磚で、残存長11.6㎝、残存幅9.6㎝、厚さ2.0㎝。

平　瓦　１点（7:T2②:3、第30図４・５、図版11－７）。残存長20.2㎝、残存幅19.5㎝、厚さ1.7㎝。凸面は斜位の縄目である。縄目の幅は0.7㎝。端部沿いの縄目はナデ調整され、端部は外反する。凹面は縄叩きののち、部分的にナデ調整を施す。

丸　瓦　４点出土。7:T5②:1（第30図２・３、図版11－８）は残存長10.2㎝、残存内径12.0㎝、厚



第29図　７号建築の版築土の範囲と試掘坑の位置

さ1.0㎝。凸面は作りがそれほど丁寧でなく、斜位の細い縄目がある。縄目の幅は0.3㎝で、広端近くはナデ調整する。凹面には凹点文がみられる。7:T2②:1（第31図３、図版12－１）は残存長20.6㎝、内径11.3㎝、厚さ1.4㎝、玉縁の長さ2.3㎝、厚さ0.7～1.2㎝。中心部が厚く、外側が薄い。凸面には縦位の縄目があり、肩部はナデ調整する。縄目の幅は0.3㎝。凹面には布目がある。7:T3②:1（第31図１・２、図版12－２）は、残存長15.2㎝、内径9.0㎝、厚さ1.3㎝、玉縁の長さ3.5㎝、厚さ1.7㎝。凸面には縦位の縄目が施され、玉縁の凸面にも縄目がある。肩部はナデ調整。縄目の幅0.4㎝。凹面には布目がある。円筒の分割は内側から切り込み、分割截線は深い。

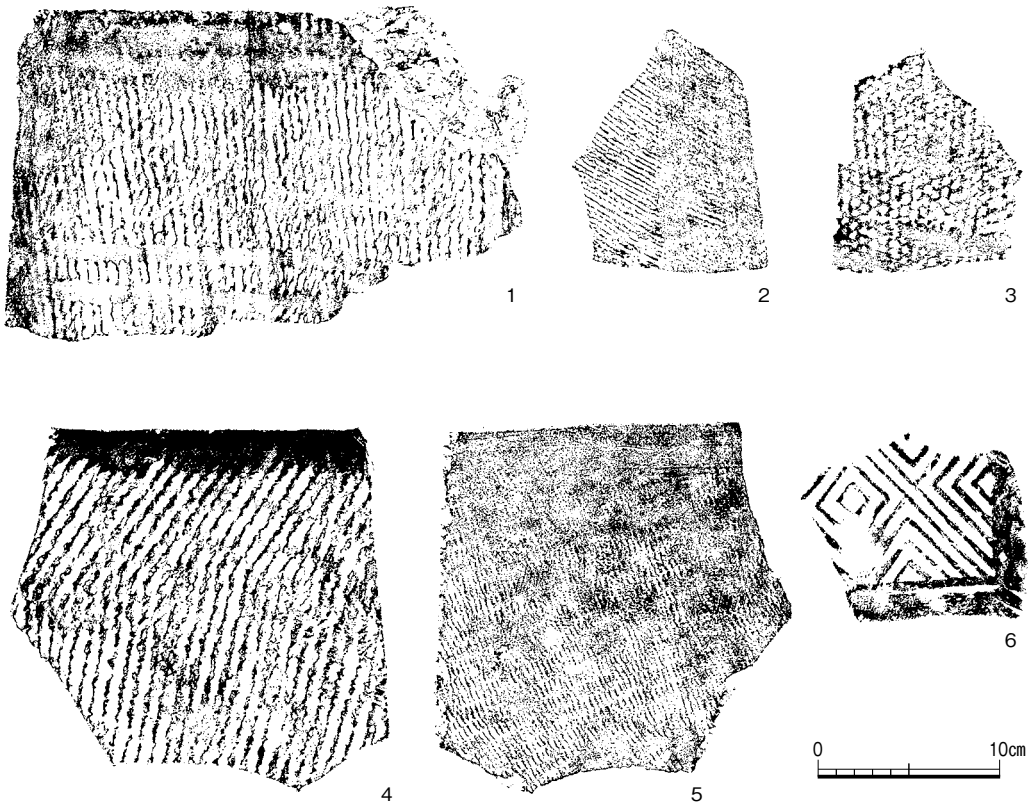
瓦　当　　４点出土。すべて雲文瓦当で、Ⅲ型とⅣ型に分かれる。

雲文瓦当Ⅲ型

Ⅲ型は２点。界線は中心文を貫かない。５式と11A式に分類できる。

５式は１点（7:T5②:2、第31図４、図版12－３）。丸瓦部をともなう。瓦当には二重に圏線がめぐる。中心文内には斜格子文と三角文が施される。瓦当面は界線によって４分割され、各区には雲文が一つずつ配される。雲文の両端はそれぞれ反対方向に１回半巻き、界線とつながる。瓦当裏面は糸切りされる。瓦当径は不明。周縁の幅0.7㎝、周縁の高さ0.5㎝、厚さ1.7㎝。丸瓦部の残存長7.6㎝、残存内径10.3㎝、厚さ1.7㎝。丸瓦凸面には縦位の縄目がある。縄目の幅は0.2㎝。瓦当に近い部分はナデ調整される。凹面には凹点文がある。

11A式は１点（7:T3②:3、第31図５、図版12－４）。瓦当面は雲文の両側にそれぞれ一つの珠文が



１：縄目文磚（7:T1②:1）　２：丸瓦（凸面、7:T5②:1）　３：丸瓦（凹面、7:T5②:1）
４：平瓦（凸面、7:T2②:3）　５：平瓦（凹面、7:T2②:3）　６：幾何学文磚（7:T6②:1）

第30図　７号建築出土瓦磚

配され、圏線の間にはまばらな「X」字形文が施される。瓦当裏面には縄目がある。瓦当径は不明。周縁の幅0.8㎝、周縁の高さ0.6㎝、厚さ2.2㎝。

雲文瓦当Ⅳ型

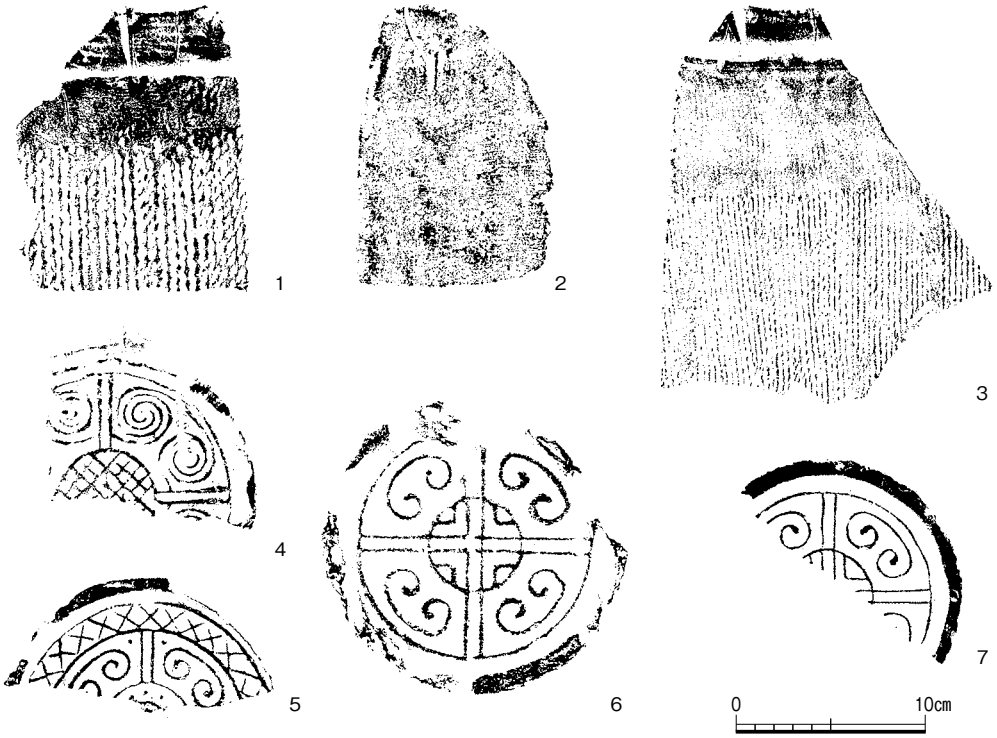
Ⅳ型は２点。いずれも１A式に属する。7:T3②:4（第31図６、図版12－５）は中心文の径5.1㎝、瓦当径15.5㎝、周縁の幅1.1㎝、周縁の高さ0.5㎝、厚さ2.9㎝。瓦当裏面には糸切り痕がある。7:T2②:2（第31図７、図版12－６）は破損した丸瓦部をともなう。瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当径は不明だが、周縁の幅0.9㎝、周縁の高さ0.6㎝、厚さ2.5㎝。丸瓦部の残存長5.6㎝、残存内径10.8㎝、厚さ1.3㎝。凹面には布目がある。

土　器　　罐、甕などがある。7:T4②:1（図版12－７）は罐の破片。小さい平底で胴部は肩に向かって広がる。残存高9.2㎝、残存幅10.0㎝、器壁の厚さ1.2㎝、底部の厚さ0.8㎝。7:T1②:3（図版12－８）は甕の破片。残存高8.8㎝、残存幅14.3㎝、器壁の厚さ1.1㎝。口縁部が内にすぼまり、端部は丸い。肩部はケズリ調整する。

ⅲ　小　結

７号建築の年代

試掘調査で出土した遺物は前漢中・後期の瓦磚が主体であり、７号建築の年代は前漢中・後期と考えられる。ただ、粘土紐巻き上げあるいは積み上げ法によって成形した丸瓦が含まれており、凸面には細い縄目、凹面には凹点文がある。この年代は前漢前期まで遡る可能性があり、前漢中・後期より前にこの地に建物が存在したことがうかがえる。



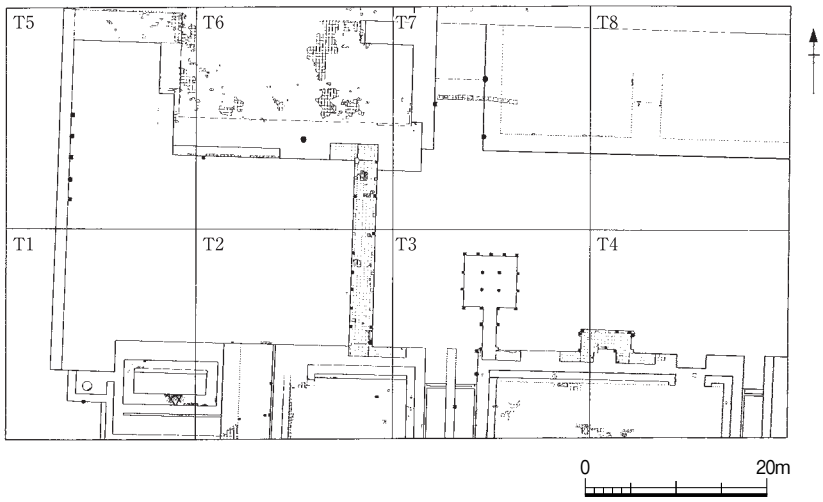
１：丸瓦（凸面、7:T3②:1）　２：丸瓦（凹面、7:T3②:1）
３：丸瓦（凸面、7:T2②:1）　４：Ⅲ型５式雲文瓦当（7:T5②:2）　５：Ⅲ型11A式雲文瓦当（7:T3②:3）
６：Ⅳ型１A式雲文瓦当（7:T3②:４）　７：Ⅳ型１A式雲文瓦当（7:T2②:2）

第31図　７号建築出土丸瓦・瓦当

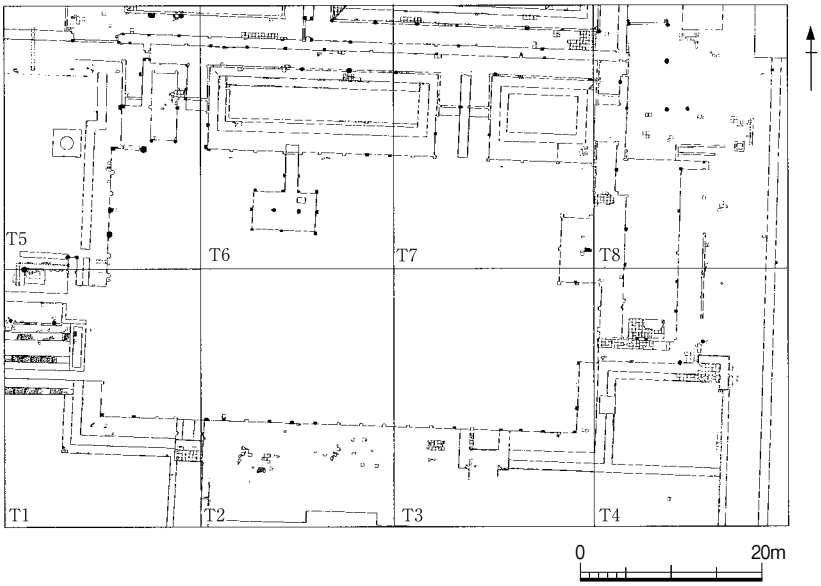
第Ⅱ章　桂宮２号建築の発掘調査

桂宮２号建築は、現在の西安市未央区六村堡郷夾城堡村の東約200mにあり、桂宮南部のやや西寄り、１号建築の33m南に位置する。1997年10月～1998年５月と1998年10月～1999年５月に発掘調査をおこなった。発掘面積は8,568㎡で、16の小地区（グリッド）を設定した（第32・33図、原色図版15・31）。２号建築は、桂宮で発掘したなかでは全体像がわかる建築群の一つであり、南院と北院の二つの建築に分かれる（第34図）。

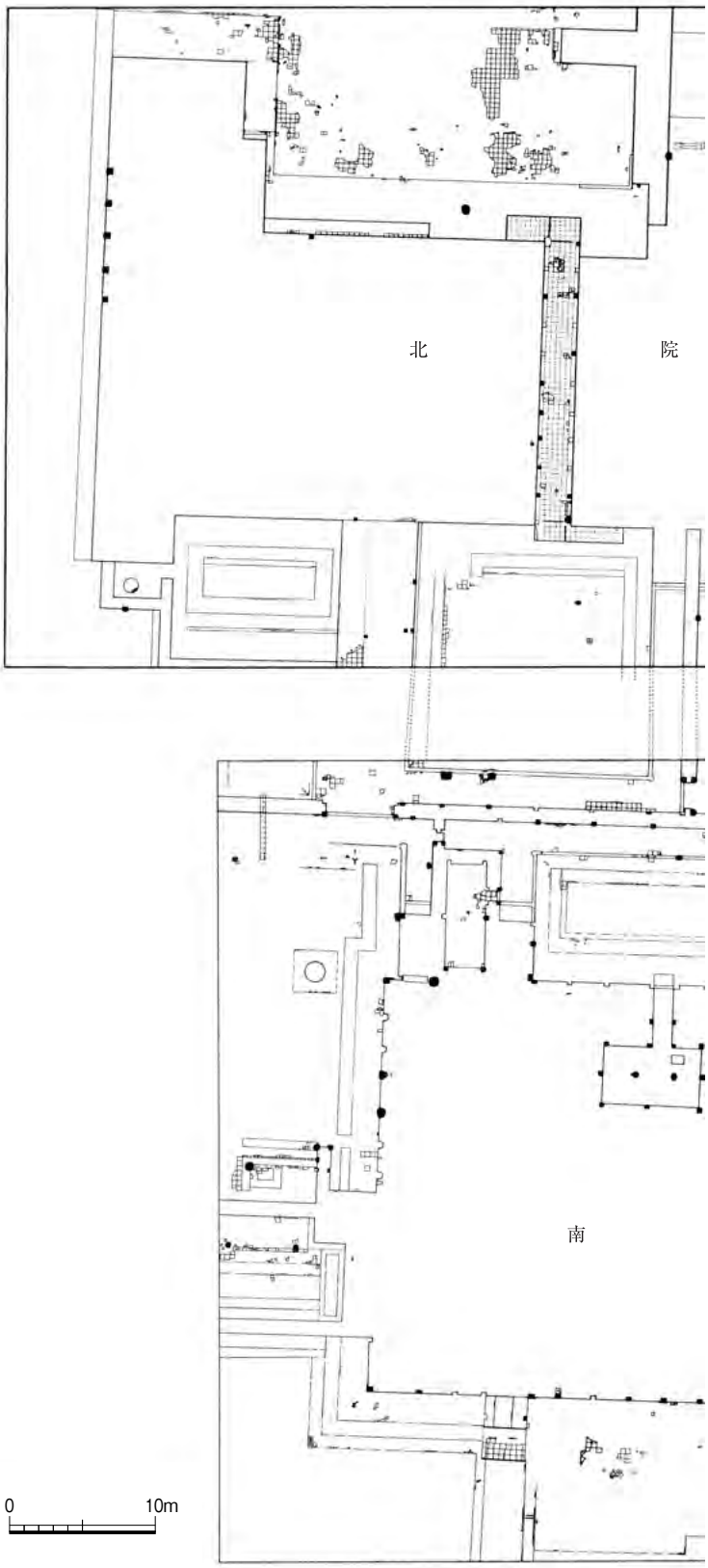
南院と北院



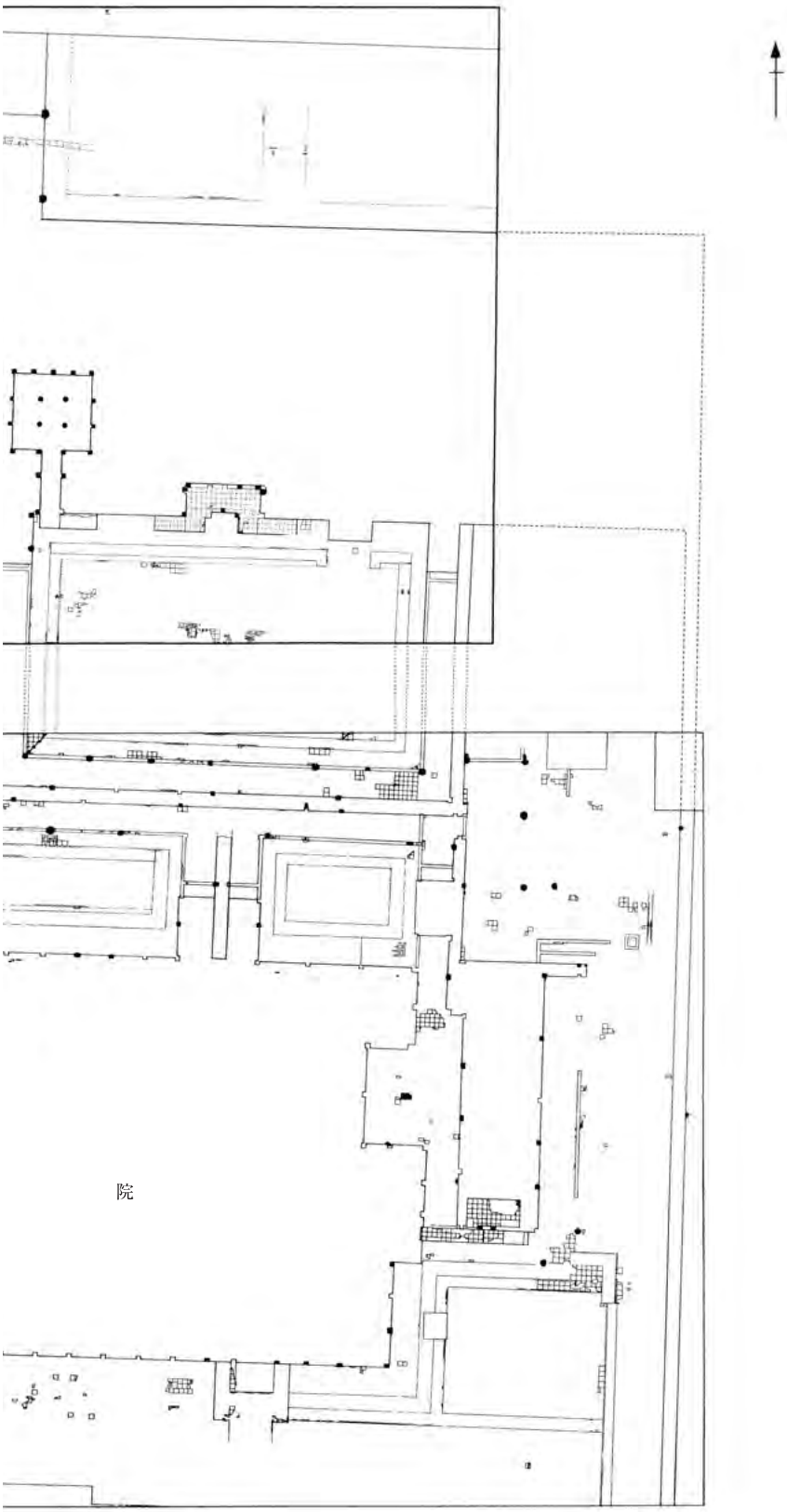
第32図　２号建築北院の地区割り



第33図　２号建築南院の地区割り



第34図　２号建築遺構平面図


院

第１節　南院の遺構

桂宮２号建築南院は東西84m、南北56mで、面積は4,704㎡である。遺構はよく残っており、版築塀・正殿・通路・付属建築・庭院・給水施設・排水施設からなる（第36図、原色図版１・２、図版13・14・16－２・17・18）。

１　土　　層

基本層序は、Ｔ２北壁を例にとると、次のとおりである（第35図）。

第１層：耕作土層。灰色で土質は軟らかい。厚さ0.15～0.25m。

第２層：攪乱層。淡黄色で土質は比較的硬い。地表から0.17～0.45m、厚さ０.15～0.29m。この層からは、漢代の瓦磚と現代の陶磁片が出土した。

第３層：漢代遺物包含層。漢代の建築物が倒壊してできた堆積層である。淡灰色土で土質は軟らかい。地表から0.45～0.8m、厚さ0.25～0.4m。大量の漢代の瓦磚や鉄釘、鋤先、土器などの遺物を含む。

第３層以下は漢代の地表面および建築遺構である。

２　版 築 塀

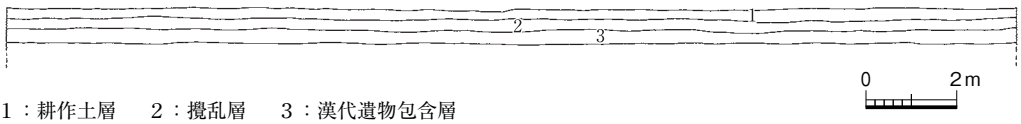
南院を囲む版築塀は、東塀と北塀が現存する。壁体はいずれも版築による。

東　塀　東塀の残存長は50.1m、幅1.0m、残存高0.05～0.25mである。２基の壁柱が残存し、

壁　　柱　北を１号、南を２号壁柱とした。１号壁柱は、塀の西面、北端から南1.15mに位置する。柱穴は一辺0.2m、深さ0.15m。柱穴底部の礎石は青砂石製である。礎石は東西33㎝、南北32㎝、厚さ13㎝。２号壁柱は、塀の東面、北端から南21.8mに位置する。花崗岩製の礎石だけが残存している。不整形で、東西42㎝、南北35㎝、厚さ12㎝。東塀の西面には、凸面を外向きにした平瓦片を貼りつけ、外側にスサ入りの粘土を3.5㎝の厚さで塗りこめる。

北　塀　南院と北院間の隔壁である。残存長67.2m、幅1.05m、残存高0.2～0.35m。塀の南面と北面には、壁柱がそれぞれ11基と12基ある。塀の西端には門が一つ設けられ、南院と北院をつなぐ通路となっている（図版15－２）。

南面の壁柱　北塀の南面にある壁柱は、西から東へ順に１～11号壁柱とした。壁柱間の距離は2.5～9.0m、壁柱の下の礎石はいずれも花崗岩製である。



１：耕作土層　２：攪乱層　３：漢代遺物包含層

第35図　２号建築南院Ｔ２北壁土層図

１号壁柱は、北塀の西にある門道の東側壁柱から東1.2mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.15m、深さ0.13m。柱穴底部の礎石は長さ31cm、幅30cm、厚さ８cmである。２号壁柱は、１号壁柱の東6.1mに位置する。柱穴は長さ0.2m、深さ0.3mで、礎石は残っていない。３号壁柱は、２号壁柱の東2.65mに位置する。柱穴は一辺0.2m、深さ0.34m。底部の礎石は長さ32cm、幅38cm、厚さ13cm。４号壁柱は、３号壁柱の東3.85mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.2m、深さ0.36m。底部礎石の長さ41cm、幅38cm、厚さ10cm。５号壁柱は、４号壁柱の東4.15mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.2m、深さ0.32m。底部の礎石は長さ41cm、幅36cm、厚さ10cm。６号壁柱は、５号壁柱の東4.15mに位置する。柱穴は長さ0.27m、幅0.2m、深さ0.34m。底部の礎石は長さ40cm、幅38cm、厚さ11cm（図版15－１）。７号壁柱は、６号壁柱の東5.05mに位置する。柱穴は長さ0.28m、幅0.2m、深さ0.32m。底部の礎石は残っていない。８号壁柱は、７号壁柱の東7.1mに位置する。柱穴は一辺0.25m、深さ0.21m。底部の礎石は長さ30cm、幅33cm、厚さ８cm。９号壁柱は、８号壁柱の東9.0mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.15m、深さ0.36m。底部の礎石はすでに移動しているが、長さ45cm、幅30cm、厚さ10cm。10号壁柱は、９号壁柱の東2.5mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.2m、深さ0.32m。底部の礎石は長さ42cm、幅35cm、厚さ10cm。11号壁柱は、10号壁柱の東8.2mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.15m、深さ0.19m。礎石は残っていない。

北面の壁柱

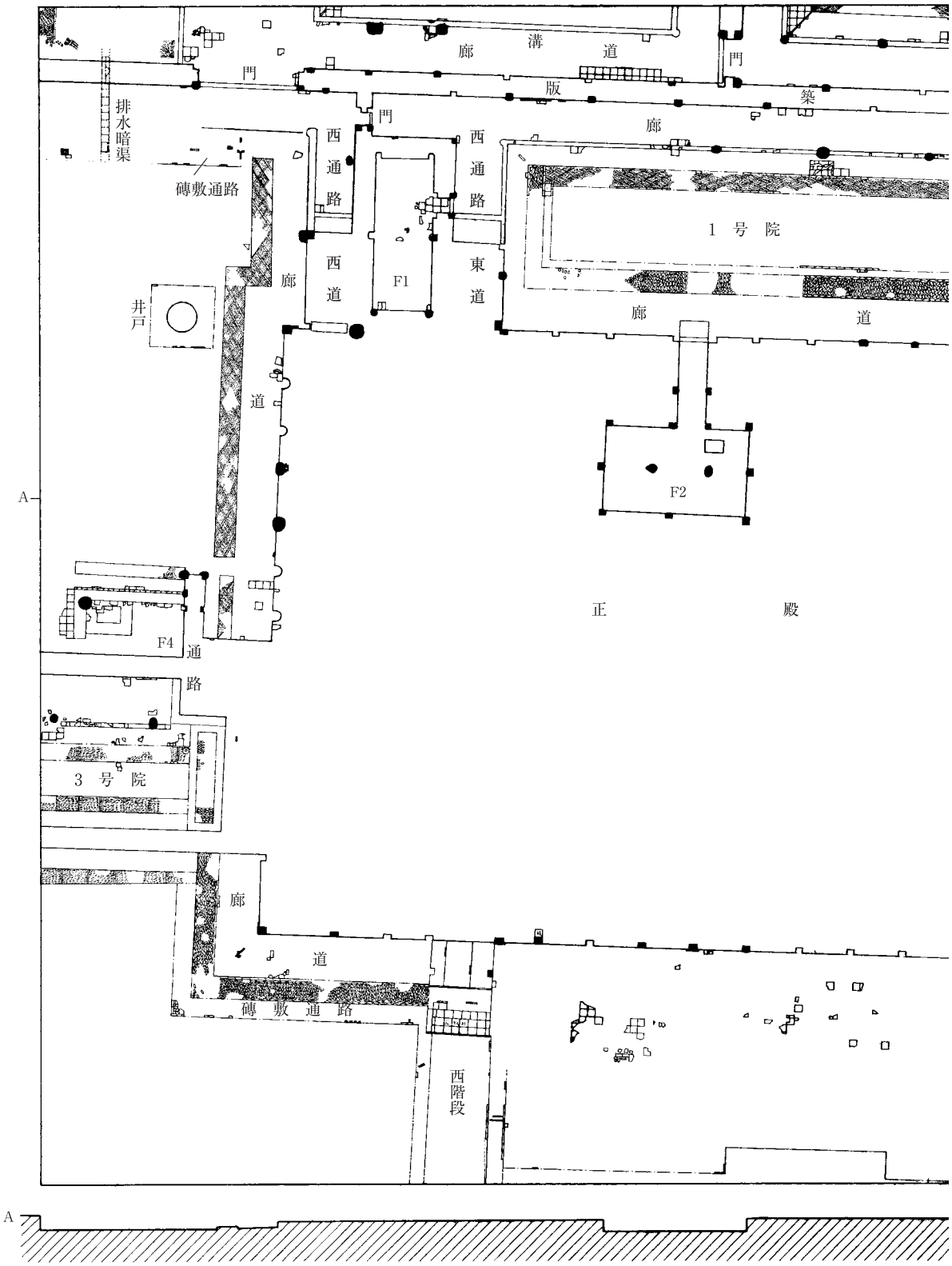
北塀の北面にある壁柱は、西から東へ順に１～12号壁柱とした。壁柱間の距離は2.8～9.1m。礎石はすべて花崗岩製である。

１号壁柱は、北塀の西にある門道の東側北壁柱の東0.5mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.2m、深さ0.2m。底部礎石の長さは32cm、幅23cm、厚さ９cm。２号壁柱は、１号壁柱の東2.8mに位置する。柱穴は一辺0.3m、幅0.4m、深さ0.22m。底部の礎石は長さ33cm、幅28cm、厚さ11cm。３号壁柱は、２号壁柱の東3.3mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.15m、深さ0.23m。底部の礎石は長さ35cm、幅31cm、厚さ12cm。４号壁柱は、３号壁柱の東3.3mに位置する。柱穴は長さ0.27m、幅0.15m、深さ0.22m。礎石は残っていない。５号壁柱は、４号壁柱の東3.85mに位置する。柱穴は長さ0.27m、幅0.15m、深さ0.22m。礎石は残っていない。６号壁柱は、５号壁柱の東4.0mに位置する。柱穴は長さ0.28m、幅0.2m、深さ0.15m。底部の礎石は長さ25cm、幅18cm、厚さ６cm。７号壁柱は、６号壁柱の東7.3mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.15m、深さ0.22m。底部の礎石は長さ44cm、幅47cm、厚さ12cm。８号壁柱は、７号壁柱の東4.55mに位置する。柱穴は一辺0.25m、深さ0.27m。底部の礎石は残っていない。９号壁柱は、８号壁柱の東4.65mに位置する。柱穴は長さ0.29m、幅0.2m、深さ0.27m。礎石は残っていない。10号壁柱は、９号壁柱の東2.37mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.2m、深さ0.23m。底部の礎石は長32cm、幅33cm、厚さ18cm。11号壁柱は、10号壁柱の東9.08mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.15m、深さ0.34m、底部の礎石は長さ36cm、幅33cm、厚さ11cm。12号壁柱は、11号壁柱の東8.0mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.1m、深さ0.18m。礎石は残っていない。

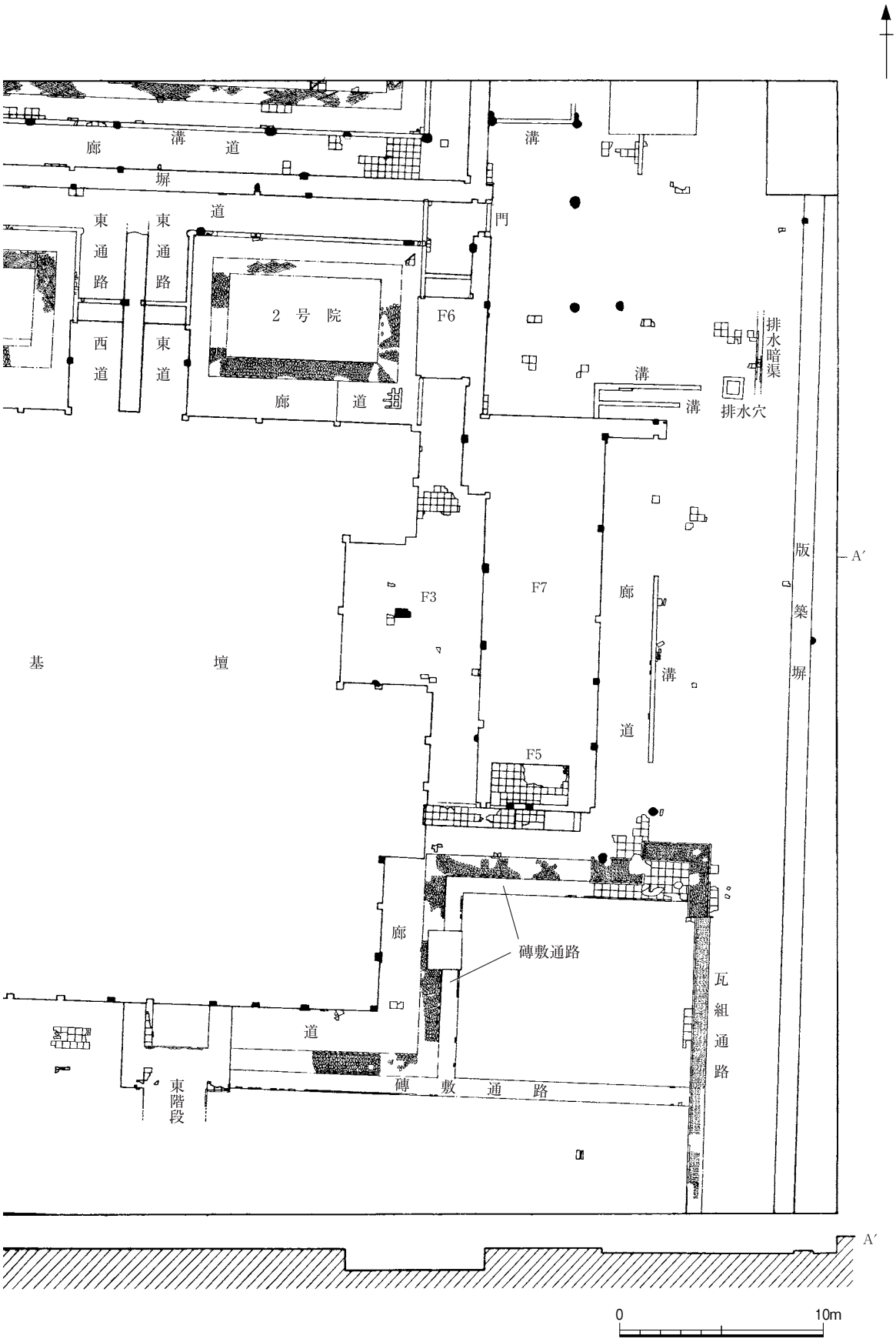
北塀の版築土の内外面には、凸面の縄目を外向きにした平瓦片を貼りつけ、その外側にスサ入り粘土を3.5cmの厚さで塗っている。

門　　道

北塀の西にある門道は、南院・北院間の主要通路である（図版16－１）。門道東側の塀の長さは54.9m、西側の塀の長さは7.5mである。門道の東西の壁面には、南北の壁の柱穴が対称に２基



第36図　２号建築南院平面図・断面図


廊
溝
道
塀
東通路
東通路
西道
東道
2号院
廊
道
門
F6
溝
溝
排水暗渠
排水穴
版築塀
A′
F3
F7
廊
基
壇
溝
道
F5
廊
磚敷通路
瓦組通路
道
東階段
磚敷通路
A′
0
10m

ずつあり、それぞれの壁柱間の距離は0.85mである。これらを１号～４号壁柱とした。１号壁柱は東側南面の柱で、柱穴の一辺0.2m、深さ0.2m。底部の礎石は花崗岩製で、長さ30cm、幅25cm、厚さ８cm。２号壁柱は東側北面の柱で、柱穴の一辺0.2m、深さ0.15m。礎石は残っていない。３号壁柱は西側南面の柱で、柱穴の長さ0.17m、幅0.21m、深さ0.15m。底部の礎石は花崗岩製で、長さ41cm、幅33cm、厚さ10cm。４号壁柱は西側北面の柱で、柱穴の長さ0.2m、幅0.23m、深さ0.2m。礎石は残っていない。

木製敷居　門道は、幅4.8m、奥行1.05mである。門道の東側の南面柱と西側の南面柱との間には、木製敷居の痕跡がわずかに残る。東西長4.5m、幅0.25m、深さ0.1m。門道の南側は、南北1.9m、東西4.8mの緩やかな斜面となり、北から南に８度の勾配をもつ。斜面の南縁には、立てて埋め込んだ平瓦片が東西方向に１列並ぶ。瓦片の長さは10～20cm、厚さ1.5～2.5cm。

廊　道　斜面の西側には、東西方向の廊道がある。幅2.0mで、長さ7.5m分を検出した。廊道の南側は東西方向の瓦片の雨落で、幅0.85m、長さ9.5m分を検出した。雨落には立てて埋め込んだ平瓦が３点だけ残る。いずれも凹面を北に向けて東西方向に立てられ、南北２列に分かれる。長さ５～７cm、幅17cm。雨落の東縁には東西方向の見切り磚が１点残り、残存長17cm、幅4.5cmである。雨落の南縁には南北方向の見切り磚が１点残る。残存長20cm、幅4.5cm。

磚敷通路　雨落の南側は、東西方向の磚敷通路となる。幅0.75m、検出した長さは9.5m。磚は１点の破片だけが残っている。長さ７cm、幅５cm、厚さ４cm。磚敷通路の東縁の見切り磚は１点のみ残り、長さ30cm、幅４cm。同じく南縁の見切り磚は３点残り、長さはそれぞれ30cm、20cm、15cm、幅はすべて4.5cmである。同じく北縁には見切り磚が１点残る。細長い磚で、長さ23cm、幅８cm、厚さ４cm。磚敷通路の西部には花崗岩製の礎石が１点ある。不整形で、東西24cm、南北30cm、厚さ12cm（図版16－１）。

3　正　殿

正殿は南院の中央部にあり、東西両側に付属建築をもつ。北面には庭院があり、南面には東階と西階がある。

A　建物基壇

基壇は東西長51.1m、南北幅29.0m、残存高0.2～0.36mである。基壇の四面には壁柱があり、その外側に廊道と雨落がめぐる。

日干煉瓦　基壇は版築で築き、外縁に日干煉瓦を積んでいる。基壇南面の版築土の外壁には、日干煉瓦を東西方向に１列、平積みする。日干煉瓦は長さ46～48cm、幅23～25cm、厚さ10～13cmである。日干煉瓦の外面には、細かい粘土を厚さ２cmほど塗る。その外側に瓦片を貼りつけ、瓦片の外側にはスサ入り粘土を3.5cmの厚さで塗る。基壇東面の版築土の外壁には、南北方向に日干煉瓦を１列、平積みする。日干煉瓦の外面にはスサ入り粘土を塗る。基壇西面の版築土の外壁には、南北方向に日干煉瓦を２列、平積みする。日干煉瓦は長さ46～48cm、幅25cm、厚さ11～13cm。版築土と日干煉瓦の間は、磚を立てて積むことによって隔てる。一部の日干煉瓦の外面に、細かい粘土を厚さ２cmほど塗る。その外側には瓦片を貼りつけ、瓦片の外面にはスサ入り粘土を3.5cmの厚

さで塗る。ほとんどの日干煉瓦の外面には、直接スサ入り粘土が塗られている。基壇北面の版築土の外壁には、東西方向に日干煉瓦を２列、平積みする。日干煉瓦の外面は、スサ入り粘土を厚さ3.5㎝ほど塗る。版築土と日干煉瓦の間は、東西方向に立てて積んだ磚により隔てられる。磚は長さ13～18㎝、幅2.5～2.8㎝。

基壇南壁の壁柱　正殿基壇の南壁には21基の壁柱があり、西から東へ順に１～21号壁柱とした。壁柱間の距離は1.8～3.4ｍで、壁柱の下にある礎石の大部分は花崗岩製である。　21基の壁柱

１号壁柱は、正殿基壇の西南角にある。柱穴は一辺0.3ｍ、深さ0.29ｍ。底部の礎石は大きく、不整形である。東西75㎝、南北115㎝、厚さ33㎝。この礎石は、本来の礎石の下に敷く敷石と考えられる（図版19－１）。２号壁柱は、１号壁柱の東3.4ｍに位置する。柱穴は長さ0.35ｍ、幅0.25ｍ、深さ0.4ｍ。底部の礎石は南と北の二つあり、不整形である。南の礎石は比較的大きく、東西100㎝、南北50㎝、厚さ24㎝。北の礎石は比較的小さく、東西42㎝、南北28㎝、厚さ10㎝。この二つの礎石も、礎石の下の敷石と考えられる。３号壁柱は、２号壁柱の東2.5ｍに位置する。柱穴は長さ0.35ｍ、幅0.25㎝、深さ0.38㎝。礎石は残っていない。４号壁柱は、３号壁柱の東1.95ｍに位置する（正殿基壇南面西階段の西北隅柱）。柱穴は長さ0.3ｍ、幅0.25ｍ、深さ0.29ｍ。礎石は残っていない。５号壁柱は、４号壁柱の東3.35ｍに位置する（正殿基壇南面西階段の東北隅柱）。柱穴は長さ0.35ｍ、幅0.2ｍ、深さ0.15ｍ。底部には加工された青砂石製の礎石がある。二つの礎石の各面にはすべて、斜めの小溝が密に刻まれている。溝は、長さ３～５㎝、幅0.5㎝、深さ0.3㎝。礎石は長方形で、東西37㎝、南北32㎝、厚さ28.5㎝（図版19－２・４）。６号壁柱は、５号壁柱の東1.85ｍに位置する。柱穴は長さ0.3ｍ、幅0.25ｍ、深さ0.4ｍ。底部の礎石は不整形で、東西75㎝、南北100㎝、厚さ31㎝。この礎石も敷石と考えられる。礎石の西北部には磚が４点積み重ねられているが、これはちょうど柱穴の北壁にあたり、壁柱を固定するために置かれたものと思われる。４点の磚は上から下に、長さ34.5～36㎝、幅31㎝、厚さ４～4.5㎝である。最上面の磚面は正殿基壇面より0.16ｍ低い位置にある。３番目の磚は２番目の磚より南に1.5㎝出る。４番目の磚は３番目の磚より南に２㎝出る。４番目の磚の下には厚さ２㎝の敷土がある。その下は花崗岩製の礎石である（図版19－３）。７号壁柱は、６号壁柱の東2.5ｍに位置する。柱穴は長さ0.3ｍ、幅0.25ｍ、深さ0.4ｍ。礎石は残っていない。８号壁柱は、７号壁柱の東2.5ｍに位置する。柱穴は長さ0.3ｍ、幅0.25ｍ、深さ0.4ｍ。底部の礎石は楕円形で、東西最大径96㎝、南北最大幅70㎝、厚さ25㎝。礎石の下の敷石と考えられる。礎石の上面西北部には、２点の磚が上下に積まれている。磚は長さ35㎝、幅36.5㎝、厚さ4.5㎝。磚と磚の間には、厚さ５㎝の敷土がある。９号壁柱は、８号壁柱の東2.4ｍに位置する。柱穴は長さ0.3ｍ、幅0.25ｍ、深さ0.19ｍ。底部には加工された青砂石製の礎石がある。礎石の各面には、鑿で斜めの細長い溝が密に刻まれている。個々の溝は長さ３～4.5㎝、幅２～４㎝、深さ0.2～0.3㎝。礎石は長方形で、東西39㎝、南北33㎝、厚さ23.5㎝。礎石の西側には磚が１点、縦に据えられている。磚は長さ14㎝、厚さ５㎝、高さ８㎝。礎石の下には不整形の敷石がある。東西40～60㎝、南北45㎝、厚さ11㎝。礎石と敷石の間には、厚さ５㎝の敷土がある（図版19－５）。10号壁柱は、９号壁柱の東2.5ｍに位置する。柱穴は長さ0.3ｍ、幅0.2ｍ、深さ0.29ｍ。底部の礎石は不整形で、東西59㎝、南北78㎝、厚さ17㎝。11～16号壁柱間の距離は2.5ｍで、柱穴の長さはすべて0.3ｍ。11～13号壁柱の柱穴は幅0.2ｍで、14～16号壁柱の柱穴は幅0.25ｍ、11～16号壁柱の柱穴の深さはそれぞれ、0.31ｍ、0.29ｍ、0.3ｍ、

礎石の下の敷石

礎石の加工

0.3m、0.27m、0.37m。11～15号壁柱には礎石が残っていない。16号壁柱底部の礎石は不整形で、東西78㎝、南北75m、厚さ16.5㎝。礎石の下の敷石と考えられる。17号壁柱は、16号壁柱の東1.85mに位置する（正殿基壇南面東階段の西北隅柱）。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、深さ0.34m。底部の礎石は残っていない。18号壁柱は、17号壁柱の東3.15mに位置する（正殿基壇南面東階段の東北隅柱）。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、深さ0.33m。底部の礎石は不整形で、東西73㎝、南北67㎝、厚さ20㎝。礎石の下の敷石と考えられる。19号壁柱は、18号壁柱の東2.15mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、深さ0.3m。礎石は残っていない。20号壁柱は、19号壁柱の東2.4mに位置する。柱穴は長さ0.35m、幅0.2m、深さ0.09m。底部には加工された青砂石製の礎石があり、上面に炭化した木柱痕跡が残る。高さ26㎝、幅７～16㎝、厚さ６㎝。礎石の上面は比較的平らであるが、底面は凹凸をもつ自然面である。その他の４側面には、いずれも鑿で細長い溝が刻まれている。礎石は長方形で、東西39㎝、南北33㎝、厚さ15㎝。礎石の下には不整形の敷石があり、東西50㎝、南北50㎝、厚さ15㎝。礎石と敷石の間には、厚さ５㎝の敷土がある（図版19－６）。21号壁柱は、20号壁柱の東3.4mに位置する（正殿基壇の東南角の柱）。柱穴は長さ0.26m、幅0.3m、深さ0.07m。底部には青砂石製の不整形の礎石がある。礎石の底面は凸凹をもつ自然面である。礎石の上面と４側面には、鑿で刻まれた細長い溝がある。礎石は長方形で、東西34㎝、南北40㎝、厚さ15.5㎝。礎石の下には不整形の敷石があり、東西98㎝、南北73㎝、厚さ32㎝。礎石と敷石の間には、厚さ５㎝の敷土がある（図版19－７）。

３基の壁柱　**基壇東壁の壁柱**　正殿基壇東壁の壁柱は、南から北へ順に１～３号壁柱とした。

１号壁柱は、基壇の東南角の柱の北2.5mに位置する。柱穴は長さ0.28m、幅0.26m、深さ0.1m。底部には、加工された青砂石製の礎石がある。礎石の上面は比較的平らで、４側面と底部には鑿で溝が刻まれている。溝は整然と並んでおり、長さ４～５㎝、幅0.4～0.5㎝、深さ0.3㎝。礎石は長方形で、東西30㎝、南北44㎝、厚さ30㎝。礎石の南側面には破損した無文磚が縦置きされており、磚の東西長23㎝、幅５㎝、高さ13㎝。２号壁柱は、１号壁柱の北2.5mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、深さ0.33m。礎石は残っていない（図版19－８）。３号壁柱は、２号壁柱の北2.35mに位置する。柱穴は長さ0.28m、幅0.22m、深さ0.36m。底部の礎石は不整形の花崗岩製である。東西35㎝、南北45㎝、厚さ10㎝。礎石の西側には、南北方向に立てた文様磚があり、長さ19.5㎝、幅2.5㎝、高さ９㎝。

８基の壁柱　**基壇西壁の壁柱**　正殿基壇西壁の壁柱は、北から南へ順に１～８号壁柱とした。壁柱間の距離は1.75～2.7m。底部の礎石はすべて花崗岩製である。

１号壁柱は、正殿基壇の西北角の柱である。底部の礎石は楕円形で、東西83㎝、南北50㎝、厚さ20㎝（図版20－１）。２号壁柱は、１号壁柱の南2.6mに位置し、円形の柱穴だけが残る。直径0.5m、深さ0.07m。３号壁柱は、２号壁柱の南2.25mに位置する。円形の柱穴だけが残る。直径0.45m、深さ0.06m。４号壁柱は、３号壁柱の南1.75mに位置する。底部の礎石は楕円形で、東西35㎝、南北55㎝、厚さ９㎝（図版20－３）。５号壁柱は、４号壁柱の南2.7mに位置する。底部の礎石は楕円形で、東西65㎝、南北50㎝、厚さ15㎝（図版20－２）。６号壁柱は、５号壁柱の南2.25mに位置する。柱穴だけが残り、直径0.5m、深さ0.07m。７号壁柱は、６号壁柱の北2.2mに位置する。柱穴だけが残り、直径0.45m、深さ0.05m。８号壁柱は、正殿基壇南壁の西南隅の柱から北3.4mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、深さ0.28m。礎石は残っていない。

基壇北壁西部の壁柱　　正殿基壇の北壁は東・西両部分に分かれ、西部の壁柱は１号院南壁の壁柱で、東から西へ順に１～12号壁柱とした。壁柱間の距離は1.55～3.25mである。　12基の壁柱

１号壁柱は、１号院の東南隅の柱である。柱穴は長さ0.33m、幅0.37m、深さ0.33m。底部の礎石は残っていない。２号壁柱は、１号壁柱の西2.33mに位置する。柱穴は長さ0.26m、幅0.17m、深さ0.31m。礎石は残っていない。３号壁柱は、２号壁柱の西2.46mに位置する。柱穴は長さ0.27m、幅0.18m、深さ0.35m。底部の礎石は不整形の花崗岩製である。東西45㎝、南北33㎝、厚さ10㎝。４号壁柱は、３号壁柱の西2.55mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.2m、深さ0.41m。底部の礎石は不整形の花崗岩製である。東西48㎝、南北50㎝、厚さ14㎝。５号壁柱は、４号壁柱の西2.45mに位置する。柱穴は長さ0.27m、幅0.17m、深さ0.44m。底部の礎石は残っていない。６号壁柱は、５号壁柱の西2.55mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.2m、深さ0.46m。礎石は残っていない。７号壁柱は、６号壁柱の西2.15mに位置する（Ｆ２門道の東側隅柱）。柱穴は一辺0.22m、深さ0.6m。礎石は残っていない。８号壁柱は、７号壁柱の西1.55mに位置する（Ｆ２門道の西側隅柱）。柱穴は長さ0.25m、幅0.24m、深さ0.53m。礎石は残っていない。９号壁柱は、８号壁柱の西3.25mに位置する。柱穴は長さ0.27m、幅0.16m、深さ0.4m。礎石は残っていない。10号壁柱は、９号壁柱の西2.5mに位置する。柱穴は長さ0.28m、幅0.2m、深さ0.37m。11・12号壁柱は、10号壁柱の西2.5mに位置し、１号院の西南隅柱でもある。11号壁柱は隅柱の東南側の柱穴で、長さ0.29m、幅0.15m、深さ0.3m。底部の礎石は不整形の花崗岩製である。東西39㎝、南北41㎝、厚さ15㎝。12号壁柱は隅柱の西北側の柱穴で、長さ0.35m、幅0.33m、深さ0.34m。底部の礎石は不整形の花崗岩製である。東西33㎝、南北40㎝、厚さ11㎝。

基壇北壁東部の壁柱　　正殿基壇の北壁東部の壁柱は、すなわち２号院の南壁の壁柱である。西から東へ、順に１～３号壁柱とする。　３基の壁柱

１号壁柱は、２号院の西南隅柱である。柱穴は一辺0.3m、深さ0.35m。底部の礎石は残っていない。２号壁柱は、１号壁柱の東3.5mに位置する。柱穴は一辺0.27m、深さ0.43m。礎石は残っていない。３号壁柱は、２号壁柱の東3.8mに位置する。柱穴は一辺0.3m、深さ0.47m。礎石は残っていない。

B　廊道と雨落

正殿基壇の周囲には廊道がめぐっている。廊道は磚敷で、外側に雨落を設けており、その外側は磚敷通路となる。西面の廊道の北部が瓦組雨落となっているのを除き、残りはすべて河原石の雨落である。　河原石雨落

正殿基壇南面の廊道　　南面の廊道と雨落は、正殿基壇南面の東階段以東と西階段以西にある。

東階段以東の廊道は、長さ9.2m。磚敷の痕跡があり、現在は廊道東部の北寄りに敷磚が３点のみ残存する。そのうち最大の磚は、一辺35㎝、厚さ５㎝である。廊道外側の雨落は、長さ10.25m、幅1.05mである。雨落の断面は中央が高く、両側が低い。雨落の北縁と南縁の内側には、それぞれ東西方向に２列の河原石が整然と並べられている。河原石は細長く扁平で、長さ５～13㎝、幅６～８㎝、厚さ1.5～３㎝。　東部の廊道

雨落南側の磚敷通路は長さ11.2m、幅0.95mで、磚敷の痕跡がある。磚敷通路の南縁には、東西方向の見切り磚が24点あり、磚の長さは７～35㎝、幅３㎝。断ち割り調査の結果、これらの見

切り磚はすべて無文磚で、長手を上にして立て並べていることがわかった（図版20－５）。

西部の廊道　西階段以西の廊道は、長さ10.2m、幅2.1mである。磚敷の痕跡があり、敷磚の破片が７点だけ残る。最大のものは、長さ35㎝、幅34㎝、厚さ4.5㎝。廊道南側の雨落は、長さ11.2m、幅1.05mである。断面は中間が高く、両側が低い。雨落の北縁と南縁の内側には、それぞれ東西方向に２列の河原石が整然と並べられている。河原石は細長く扁平で、長さ７～13㎝、幅２～３㎝、厚さ1.7㎝～３㎝。雨落の北縁は、東西方向の見切り磚によって廊道と隔てられている。見切り磚は10点だけ現存し、磚の長さは10～36㎝、幅4.5～５㎝。雨落内には２ヵ所、軒支柱の痕跡が残っている。うち一つは、雨落東端の西2.65mに位置し、円形で直径0.2m。もう一つは先の軒支柱の西5.9mにあり、円形で直径0.2mである（原色図版３－１・４・５－１）。

雨落南側の磚敷通路は、長さ12m、幅0.9mで、磚敷の痕跡がある。磚敷通路の南縁には、東西方向の見切り磚が６点残存する。長さ18～28㎝、幅２～2.5㎝で、すべて無文の方磚を立て並べている。

正殿基壇東面の廊道　正殿基壇東面の廊道は、長さ9.8m、幅2.1mで、磚敷の痕跡がある。廊道の南部には、東西に２点の無文の敷磚が遺存する。磚は長さ34.5㎝、残存幅33～35㎝、厚さ4.5㎝である。

廊道東側の雨落は、長さ11m、幅1.05mである。雨落の断面は中央が高く、両端は低い。雨落の西縁と東縁の内側には、それぞれ南北方向に２列の河原石が整然と並べられている。河原石は細長い扁平形で、長さ５～12㎝、幅５～７㎝、厚さ２～３㎝。雨落西縁の外側には、南北方向に１列、立てて埋め込まれた瓦片の痕跡がある。現在は１点だけ残り、長さ11.5㎝、幅1.5㎝。これらの瓦片は、見切り磚の代用と考えられる。雨落南部には２ヵ所、軒支柱の痕跡がある。一つは雨落北端の南6.3m、西縁から東0.2mに位置する。楕円形で、長径0.3m、短径0.2m。もう一つは、先の軒支柱の南1.5m、雨落東縁から西0.25mに位置する。円形で、直径0.23m。

雨落東側の磚敷通路は、長さ10m、幅0.9mである。その東縁には、南北方向の見切り磚が９点残存する。磚は長さ６～35㎝、幅３㎝。見切り磚は、すべて幾何学文磚を立て並べており、文様は東を向いている。

正殿基壇西面の廊道　正殿基壇西面の廊道は、南と北の両部分に分かれる。

南部の廊道　南部の廊道は、長さ5.8m、幅２mである。磚敷の痕跡があり、現在は２点のみ敷磚が残る。この廊道と正殿基壇南面の廊道の接続部には、北東から南西方向の対角線上に磚がある。現在は２点だけが残り、長さはそれぞれ15㎝と34㎝、厚さはともに4.5㎝。

廊道西側にある河原石の雨落は、長さ6.8m、幅1.05mである。雨落の断面は、中間が高く、両端は低い。雨落の東縁と西縁の内側には、それぞれ２列、長い扁平形の河原石を整然と並べている。河原石は長さ７～14㎝、幅６～８㎝、厚さ２～３㎝である。雨落の東縁は、南北方向の見切り磚で廊道と隔てられている。磚は５点だけ残り、長さ20～35㎝、厚さ４～５㎝である。雨落の中には３ヵ所、軒支柱の痕跡がある。一つめは、雨落の北端から南1.65mのところにあり、ほぼ円形で、直径0.35m。二つめは、一つめの軒支柱の南1.1mに位置する。不整な円形で、直径0.35m。三つめは、二つめの軒支柱の南東1.0mに位置する。円形で、直径0.35m（原色図版３－２・４・５－１）。

雨落西側の磚敷通路は、長さ6.2m、幅0.9mである。磚敷の痕跡があり、２点だけ敷磚が遺存

する。磚の長さは34㎝と34.5㎝、幅は20～29㎝、厚さ3.5㎝。

北部の廊道

北部の廊道は、長さ14.8m、幅２mである。正殿基壇の西北角で廊道は東に折れ、そこから1.2mでまた北へ折れて、6.1m伸びる。東に折れた部分の幅は1.9m、北に伸びた部分の幅は1.75mである。廊道は、東から西に4.5度の勾配をもつ。廊道には無文磚が敷かれ、９点が残存する。磚は長さ33.7～35㎝、幅17.4～34㎝、厚さ４～５㎝。

瓦組雨落

廊道の西側は、瓦片を立てて埋め込んだ雨落で、東から西に８度の勾配をもつ。雨落の長さは16.8mで、幅は南部の３mが0.65m、その他の部分は0.9mである。廊道に沿って東に折れ、1.2mでまた北へ折れて6.1m伸びる。雨落内に立てて埋め込まれた平瓦片は、長さ３～11㎝、厚さ１～2.3㎝。瓦組雨落は磚によって分割され、菱形模様を形成する。磚は、長さ33～35.5㎝、幅4.7㎝である（図版21）。

正殿基壇北面の廊道　正殿基壇北面の廊道と雨落は、東と西の両部分に分けられ、それぞれが２号院と１号院の南面の廊道およびその雨落となる（図版20－４）。西部の廊道は、長さ24.2m、幅2.1mで、南から北に3.5度の勾配をもつ。その外側の雨落は長さ22.5m、幅1.05mである。雨落の北側には１列の磚敷があり、幅0.45m。東部の廊道は、長さ11.2m、幅2.1m、その外側の雨落は長さ9.3m、幅1.0mである。

C　東西の階段

正殿基壇の南面には、東西二つの階段がある。

東階段　東階段は正殿基壇の東南角から西7.2mにあり、南道・中道・北道の三つの部分からなる（第37図、図版22－１）。

東階段南道

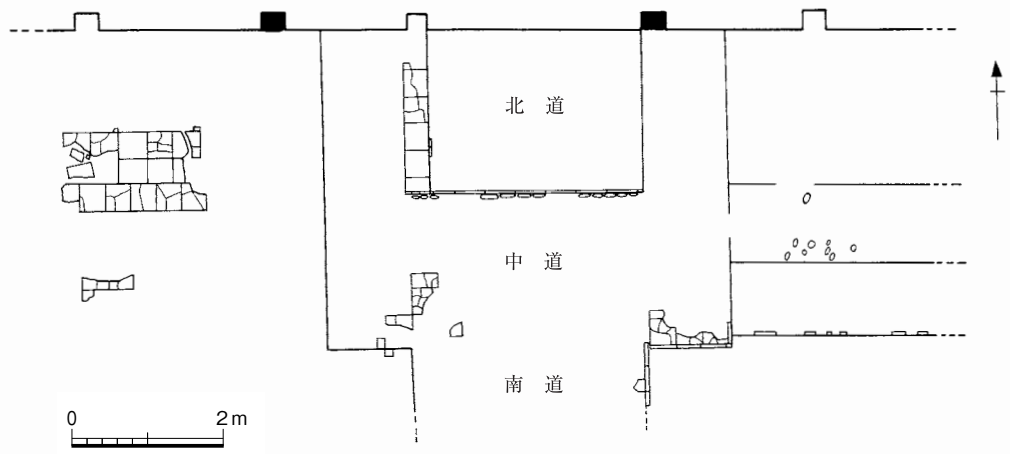
南道は東西幅3.1m、現存南北長0.8mで、その東縁には南北方向の見切り磚が３点残る。磚は長さ23～34.5㎝、幅4.5㎝。南道には磚敷の痕跡がある。

東階段中道

中道は南道の北側にあり、東西5.4m、南北4.2m。磚敷の痕跡と数点の敷磚が残る。そのうち最大の磚は、一辺34.5㎝、厚さ4.5㎝。また、中道の東部には東西方向の見切り磚が３点遺存する。長さ32.5～35㎝、幅４㎝で、いずれも無文磚を立て並べている。

東階段北道

北道は中道北部の中央にある。東西3.1m、南北2.1mで、北から南に2.7度の勾配をもつ。北側



第37図　２号建築南院正殿東階段平面図

は正殿の基壇面より0.32m低い。北道の西壁には瓦片が貼られ、２点の平瓦片が残存する。長さは11cmと14cm、厚さはともに1.5cm。北道の西部には南北方向に１列の無文磚が敷かれ、４点が残存する。長さ28～34.5cm、幅19～34.5cm、厚さ３cm。北道の南縁には、東西方向の幾何学文磚を立て並べた見切り磚があり、文様は南を向いている。長さ34cm、幅30cm。見切り磚の南面は、東西方向に整然と並べられた河原石が縦に据えられている。西部に楕円形の河原石（長径６cm、短径４cm、厚さ３cm）が３点あるのを除き、その他はすべて長い扁平形で、長さ12～14cm、幅３cm、高さ６～８cmである。

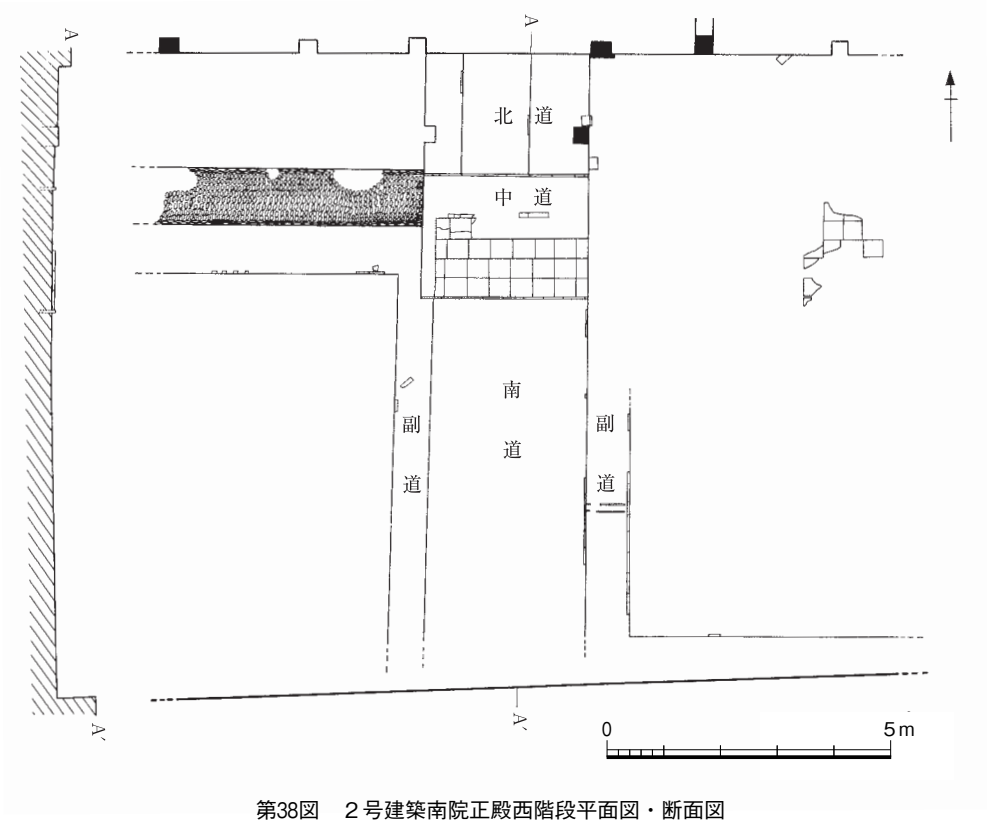
北道の東北隅と西北隅には、前述のように、それぞれ隅柱が一つずつある。

西階段　西階段は正殿基壇の西南角から東8.1mにあり、やはり南道・中道・北道に分けられる（第38図、原色図版５－２、図版22－２・23）。

西階段南道　南道は西階の南部にあり、主道と両側の副道からなる。主道は現存長6.2m、幅2.8mで、磚敷の痕跡がある。また、東縁には南北方向の見切り磚が８点残存する。長さ７～28cm、幅３cmで、すべて無文磚を立て並べている。

東副道は主道の東側にあり、残存長6.2m、幅0.7mである。その東縁には、南北方向の見切り磚が残る。長さ７～37cm、幅３cmで、すべて無文磚を立て並べている。副道には、磚敷の痕跡がある。また、南端の北2.2mとその北0.1mには、東西方向の見切り磚がある。これらは、長さ21～28cm、厚さ２～2.8cmである。いずれも幾何学文磚を立て並べたもので、文様は南を向く。

西副道は主道の西側にあり、残存長6.2m、幅0.6mである。その西縁には、南北方向の見切り磚があり、１点が現存する。長さ21cm、厚さ４cm。



第38図　２号建築南院正殿西階段平面図・断面図

中道は、南道の北面にあり、東西３ｍ、南北2.2ｍである。文様を上向きにした幾何学文磚が敷かれ、南北３列の磚敷が現存する。各列は６点の磚と東部・西部の半分の磚からなる。磚は長さ34～39.5㎝、幅35㎝、厚さ3.5㎝。中道の南縁には、東西方向の見切り磚がある。すべて幾何学文磚を立て並べたもので、文様は北を向く。長さ36㎝、幅2.5㎝。 西階段中道

北道は中道の北にあり、東西3.0ｍ、南北2.2ｍである。北から南に2.5度の勾配をもつ。北道の北側は正殿基壇面より0.3ｍ低い。北道の南縁には東西方向の見切り磚が８点あり、すべて幾何学文磚を立て並べたものである。文様は北を向く。長さ13～40㎝、厚さ2.5㎝。北道には、東西に２列、南北方向の見切り磚があり、相互の間隔は1.2ｍである。西列の見切り磚は、北道の西壁の東0.6ｍに、東列の見切り磚は、北道の東壁の西1.05ｍに位置する。西列の見切り磚はわずかに１点が残る。幾何学文磚で、文様は東を向く。長さ32㎝、厚さ2.5㎝。東列の見切り磚も１点だけ残る。やはり幾何学文磚で、文様は西を向く。長さ35㎝、厚さ2.5㎝である。 西階段北道

北道の東壁と西壁には、１対の壁柱が対称に位置する。東壁の壁柱は、斜面北端から南1.5ｍにあり、柱穴の長さ0.3ｍ、幅0.25ｍ、深さ0.07ｍ。底部の礎石は花崗岩製で、長さ35㎝、幅27㎝、厚さ10㎝である。西壁の壁柱は、柱穴の長さ0.3ｍ、幅0.2ｍ、深さ0.06ｍで、礎石は残っていない。前述のように、斜面の東北隅と西北隅には壁柱の柱穴が１基ずつある。

東階と西階との間には、平面が凹字形の空間がある。東西28.5ｍ、南北10.55ｍで、磚敷の痕跡が残り、部分的に無文の敷磚が残存する。磚は長さ34～36.5㎝、幅33.5㎝～34.5㎝、厚さ４～4.5㎝。中央南端の平面が凹んだ部分は、東西7.5ｍ、南北1.2ｍである。

D　通　　路

正殿基壇東・西面の通路　　正殿基壇の東西両面の南部には、東西方向の通路が各１条ある。

基壇東面の通路は、正殿基壇東壁沿いの廊道の北側にあり、長さ2.0ｍ、幅1.4ｍ。磚敷の痕跡がある。

基壇西面の通路は、３号院の中庭東面にある雨落の北側にあり、東西4.0ｍ、南北3.7ｍである。通路の西端北部の西側には、東西方向の版築塀と付属建物Ｆ４がある。そのため、西通路は南部（南北1.75ｍ）だけが使用できる。その西側には、東から西に21度の勾配をもつ斜道がある。斜面は南北2.2ｍ、東西0.45ｍである。通路南側にはまた、北から南に22度の勾配をもつ斜道があり、斜面は東西2.5ｍ、南北0.53ｍである（図版24－１）。

正殿基壇北面の東通路　　正殿基壇の北面には、東と西に二つの通路が並ぶ。

東通路は１号院と２号院の間にあり、正殿基壇の東北角の西11.5ｍの位置にある。長さは9.1ｍ、幅5.2ｍ～5.8ｍである。通路の東西中央には南北方向の版築塀があり、長さ9.1ｍ、幅1.0ｍが遺存する。通路は南北両部分に分かれる（図版24－２）。

通路南部は、長さ4.5ｍ、幅5.8ｍ、現存する高さ0.4～0.45ｍ。中央の版築塀によって東道と西道に分かれる。東道は長さ4.5ｍ、幅2.3ｍ、西道は長さ4.5ｍ、幅2.5ｍである。

通路北部は、長さ4.6ｍ、幅5.2ｍ。中央の版築塀によって東道と西道に分かれる。

東道は長さ4.6ｍ、幅2.0ｍで、北から南に、平坦道、木製敷居、斜道からなる。平坦道は東西2.0ｍ、南北3.5ｍで、磚敷の痕跡がある。木製敷居は平坦道と斜道の間にあり、痕跡が溝状に残る。溝の長さは2.0ｍ、幅0.2ｍ、深さ0.1ｍ。中には木灰が残存していた。溝の西端には壁柱の柱 東通路東道

穴が１基ある。柱穴は長さ0.25m、幅0.2m、深さ0.36mで、礎石は残っていない。斜道は長さ1.0m、幅2.0mで、南から北に24度の勾配をもつ。東道の東縁には１条の溝状の痕跡があり、長さ4.3m、幅0.35m、深さ0.1m。溝の中には木灰が残存していた。溝の南端には壁柱の柱穴が１基あり、柱穴は長さ0.35m、幅0.25m、深さ0.42mで、礎石は残っていない。溝の北端には、柱の礎石据付穴のみが残る。直径0.4m、深さ0.06m。

東通路西道　西道は長さ4.6m、幅2.25mである。西道は、北から南に、平坦道、木製敷居、斜道からなる。平坦道は東西2.25m、南北3.5mで、磚敷の痕跡がある。木製敷居は平坦道と斜道の間にあり、溝状の痕跡がわずかに残る。溝は長さは2.1m、幅0.2m、深さ0.08m。溝の底部は、湿気を防ぐために磚が敷かれている。溝の東端には壁柱の柱穴が１基あり、一辺0.25m、深さ0.23m。底部の礎石は不整形の花崗岩製で、東西40cm、南北45cm、厚さ９cm。斜道の東西幅は2.25m、長さは0.83mで、南から北に21度の勾配をもつ。西道の西縁にも木灰を含む溝が１条あり、長さ4.35m、幅0.24m、深さ0.07m。溝の底部には、やはり湿気を防ぐための磚が敷かれている。溝の南端は、通路南部西道の北縁から0.09mはみ出ている。南端から北0.5mまでは斜面をなし、17度の勾配をもつ。溝の北端には、柱礎石の据付穴のみが残る。直径0.3m、深さ0.05m。

正殿基壇北面の西通路　正殿基壇北面の西通路は、東通路の西24.4mに位置する。長さ8.9m、全幅9.5m、残存高0.36m。Ｆ１によって東・西両道に分けられている（原色図版６－１）。

西通路東道　東道はＦ１の東側にあり、南・北両部分に分かれる。南部の長さは4.0m、幅2.45m、北部の長さは4.9m、幅2.3m。北から南に、平坦道、木製敷居、斜道からなる。平坦道は長さ3.55m、幅2.3mで、磚敷の痕跡が残る。その西縁には南北方向の見切り磚があり、北端の１点が残存する。磚は長さ33.5cm、幅14cm、厚さ4.5cm。木製敷居は平坦道と斜道の間にあり、わずかに溝状の痕跡を残す。溝は長さ2.3m、幅0.25m、深さ0.15m。斜道は長さ1.0m、幅2.3mで、南から北に17度の勾配をもつ。

東道北部の東縁に溝が１条あり、長さ4.55m、幅0.24m、深さ0.07m。溝の中には木灰が遺存する。溝の南端には壁柱の柱穴が１基あり、柱穴は長さ0.32m、幅0.3m、深さ0.35m。礎石は残っていない。溝の北端には、礎石の据付穴だけが残る。直径0.35m、深さ0.09m。

西通路西道　西道はＦ１の西側にあり、南・北両部分に分かれる。南部の長さは4.2m、幅2.1m、北部の長さは4.7m、幅1.8m。北から南に、平坦道、木製敷居、斜道に分かれる。平坦道は長さ4.15m、幅1.8mで、磚敷の痕跡が残る。その東北部東寄りには、移動した花崗岩製礎石が一つある。不整形な円形で、直径35cm、厚さ18cm。木製敷居は平坦道と斜道の間にあり、わずかに溝状の痕跡を残す。溝は長さ1.8m、幅0.23m、深さ0.09mで、溝の中には木灰が残り、底部には平置きの無文磚の破片が敷かれている。斜道は長さ0.75m、東西幅1.8mで、南から北に24度の勾配をもつ。

西道北部の西縁には溝が１条あり、長さ4.5m、幅0.4m、深さ0.2m。溝の南端から北0.55mは、底部が南から北に27度の勾配をもつ。溝の東壁には無文磚が貼りつけられ、８点が残存する。溝の中には木灰が残る。溝の南端には壁柱の柱穴が１基あり、柱穴は長さ0.2m、幅0.3m、深さ0.16m。底部の礎石は不整形の花崗岩製で、東西63cm、南北60cm、厚さ18cm。溝の北端には、礎石の据付穴だけが残る。直径0.55m、深さ0.12m。

E　付属建物Ｆ１

付属建物Ｆ１は１号庭院の西側に位置する、東向きで、門道と主室からなる（第39図、原色図版６－２）。

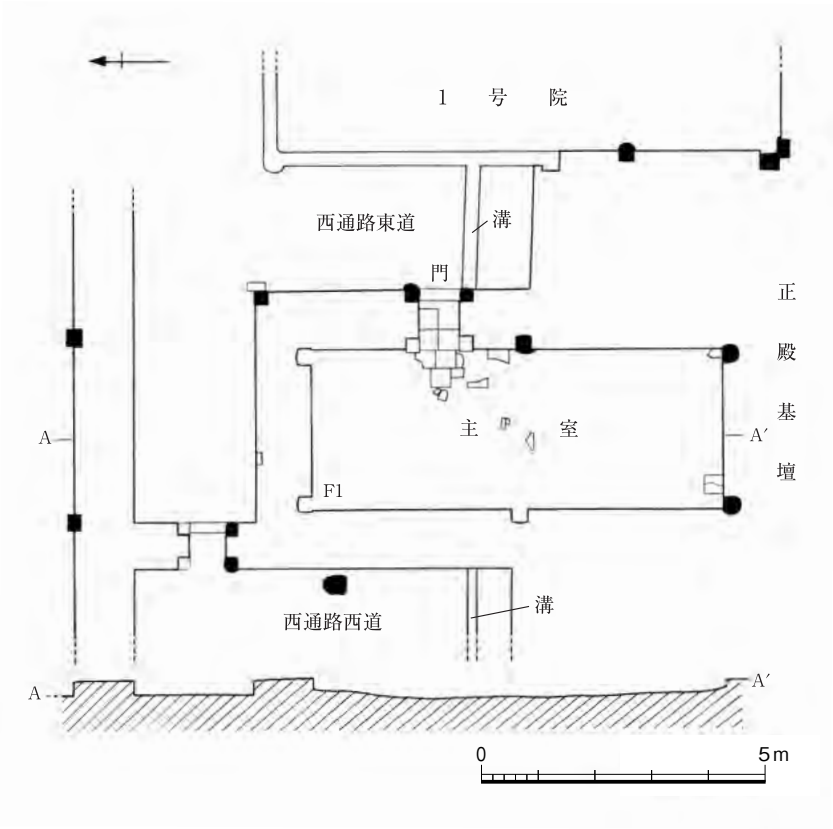
門　道　東壁のやや北寄り、Ｆ１北壁の南1.9mに位置する。門道は幅0.7m、奥行1.0m。門道の南壁・北壁の残存高0.3m。東西それぞれに２基ずつの壁柱の柱穴があり（１～４号壁柱）、南北に対称をなす。礎石の大部分は花崗岩製である。　門道の壁柱

１号壁柱は南壁の東柱で、柱穴は長さ0.2m、幅0.25m、深さ0.28m。底部の礎石は円形で、直径29cm、厚さ９cm。２号壁柱は南壁の西柱で、柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、深さ0.3m。底部の礎石は残っていない。３号壁柱は北壁の東柱で、柱穴は長さ0.2m、幅0.25m、深さ0.2m。底部の礎石は不整形で、東西38cm、南北32cm、厚さ12cm。４号壁柱は北壁の西柱で、柱穴は一辺0.25m、深さ0.3m。底部の礎石は長方形の青石製で、東西25cm、南北33cm、厚さ８cm。

門道内は無文磚が敷かれ、３点だけが遺存する。磚は一辺が33～34cm、厚さ４～4.5cm。門道の東縁には、木製敷居の痕跡が溝状に残る。溝は長さ0.7m、幅0.2m、深さ0.01m。　木製敷居

主　室　桁行7.3m、梁行2.8m。南壁・東壁南部と西壁南部は正殿基壇とつながり、一体となっている。Ｆ１の四方の壁は残存高0.15～0.3mで、東壁北部・北壁・西壁北部の幅はいずれも1.0mである。Ｆ１内の四隅には隅柱（５～８号隅柱）があり、東・西壁には壁柱（９・10号壁柱）がある。隅柱と壁柱の礎石はすべて花崗岩製である。

５号隅柱は東南隅のもので、柱穴は不整円形をなす。直径約0.3m、深さ0.15m。底部の礎石は　主室の隅柱



第39図　２号建築南院Ｆ１平面図・断面図

円形で、直径29㎝、厚さ９㎝。６号隅柱は西南隅のもので、柱穴はやはり不整円形である。直径0.27m、深さ0.15m。底部の礎石は不整形で、東西43㎝、南北37㎝、厚さ８㎝。７号隅柱は東北隅のもので、柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、深さ0.2m。礎石は残っていない。８号隅柱は西北隅のもので、柱穴は一辺0.25m、深さ0.2m。礎石は残っていない。

主室の壁柱　９号壁柱は東壁の中ほどにあり、Ｆ１東南隅柱（５号隅柱）の北3.65mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.2m、深さ0.20m。底部の礎石は円形で、直径0.39m、厚さ0.11m。10号壁柱は西壁の中ほど、９号壁柱と東西に対称の位置にある。柱穴は一辺0.25m、深さ0.28m。礎石は残っていない。

Ｆ１主室内の底面は無文磚が敷かれている。磚は一辺34㎝、厚さ４～５㎝。なお、Ｆ１東北隅の外側に隅柱があり、11号隅柱とした。柱穴は長さ0.23m、幅0.25m、深さ0.28m。底部の礎石は不整形の花崗岩製である。東西33㎝、南北46㎝、厚さ12㎝。

4　付属建物

正殿の北部と東部には、それぞれ地下室が１室ずつあり、Ｆ２・Ｆ３とした。このほか、Ｆ３の東面にも部屋が一つあり、Ｆ５とした。

A　付属建物Ｆ２

正殿基壇北部にある１号院の南側に位置する。北向きで、長さ6.75m、幅4.1m。通路と主室からなる（第40図、原色図版７、図版25）。

通　路　正殿基壇北面の廊道に通じる通路は、北から南に、斜道、木製敷居、平坦道の三つの部分に分けられる。

斜道は長さ0.85m、幅1.4mで、北から南に12度の勾配をもつ。

木製敷居　木製敷居は斜道と平坦道の間にあり、わずかに溝状の痕跡が残る。溝は長さ1.4m、幅0.25m、深さ0.07m。溝の中には木灰が残る。木製敷居の東西両端には、それぞれ１基の壁柱の柱穴があり、１～２号壁柱とした。１号壁柱は木製敷居東側のもので、柱穴は一辺0.2m、深さ0.57m。底部の礎石は残っていない。２号壁柱は木製敷居西側のもので、柱穴は長さ0.2m、幅0.25m、深さ0.55m。礎石は残っていない。

平坦道は木製敷居の南にあり、地下室とつながっている。長さ4.0m、幅1.4m、現存する壁の

平坦道隅柱　高さ0.4～0.6m。平坦道の東南隅と西南隅には、東西対称の位置に各１基の隅柱穴があり、３・４号隅柱とした。礎石はすべて花崗岩製である。３号は東南隅柱で、柱穴は一辺0.25m、深さ0.65m。底部の礎石は不整形で、東西38㎝、南北32㎝、厚さ13㎝。礎石上面と柱穴の壁には炭化した木柱が残っている。４号は西南隅柱で、柱穴は長さ0.25m、幅0.35m、深さ0.55m。底部の礎石は不整形で、東西30㎝、南北37㎝、厚さ12㎝。礎石と柱穴の壁には炭化した木柱が残る（図

平坦道壁柱　版26－１）。平坦道の東壁と西壁には東西対称の位置に各１基の壁柱の柱穴があり、５・６号とした。礎石はすべて花崗岩製である。５号壁柱は東壁のもので、３号壁柱の北1.4mに位置する。柱穴は長さ0.35m、幅0.25m、深さ0.55m。底部の礎石は不整形で、東西24㎝、南北28㎝、厚さ８㎝。礎石上面と柱穴の壁には炭化した木柱が残る。６号壁柱は西壁のもので、４号壁柱の北1.35

mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.2m、深さ0.55m。底部の礎石は不整形で、東西30cm、南北37cm、厚さ12cm。礎石上面と柱穴の壁に炭化した木柱が残る。

主　室　主室は、四方の壁が0.5～0.6mの高さで残存し、四隅には隅柱（７～10号隅柱）がある。また、東壁・西壁・南壁の中央近くに各１基の壁柱（11～13号壁柱）と、室内に二つの支柱（14・15号支柱）がある。隅柱と壁柱、室内の支柱の礎石はすべて花崗岩製である。

主室の隅柱

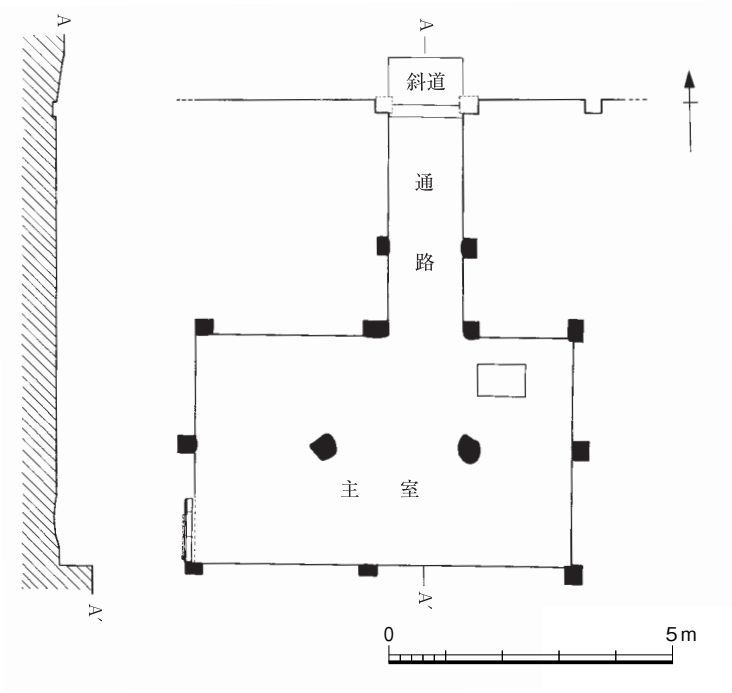
７号隅柱は東北隅のもので、柱穴は長さ0.4m、幅0.25m、深さ0.6m。底部の礎石は不整形で、東西37cm、南北55cm、厚さ11cm。８号隅柱は東南隅のもので、柱穴は長さ0.35m、幅0.33m、深さ0.6m。底部の礎石は不整形で、東西36cm、南北40cm、厚さ10cm。９号隅柱は西北隅のもので、柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、深さ0.54m。底部の礎石は不整形で、東西39cm、南北38cm、厚さ13cm。10号隅柱は西南隅のもので、柱穴は長さ0.3m、幅0.2m、深さ0.63m。底部の礎石は不整形で、東西40cm、南北42cm、厚さ10cm。礎石上面と柱穴の壁には炭化した木柱が残る。

主室の壁柱

11号壁柱は東壁のもので、柱穴は一辺0.35m、深さ0.6m。底部の礎石は不整形で、東西35cm、南北33cm、厚さ11cm。礎石上面と柱穴の壁に炭化した木柱が残る。12号壁柱は西壁のもので、東壁の11号壁柱と東西対称の位置にある。柱穴は長さ0.3m、幅0.35m、深さ0.65m。底部の礎石は不整形で、東西30cm、南北37cm、厚さ12cm。礎石上面と柱穴の壁に炭化した木柱が残る。13号壁柱は南壁のもので、柱穴は長さ0.2m、幅0.3m、深さ0.57m。底部の礎石は不整形で、東西35cm、南北32cm、厚さ13cm（図版26－２）。

主室の支柱

14・15号支柱は、11・12号壁柱と東西一直線上に並ぶ。14号支柱は東壁の壁柱の西1.8m、南壁の壁柱の北2.0mに位置する。底部の礎石は不整円形で、東西0.4m、南北0.52m、厚さ0.12m（図版26－３）。15号支柱は14号支柱の西2.8mにある。底部の礎石は不整形で、東西40cm、南北36cm、厚さ14cm（図版26－４）。



第40図　２号建築南院F２平面図・断面図

Ｆ２室内の東北部には、長方形の小さな土坑が１基ある。長さ0.85m、幅0.6m、深さ0.15～0.18m。底面の土は厚さ２㎝で上下２層に分かれ、下層は厚さ1.5㎝のスサ入り粘土、上層は厚さ0.5㎝の粒子の細かい粘土である。

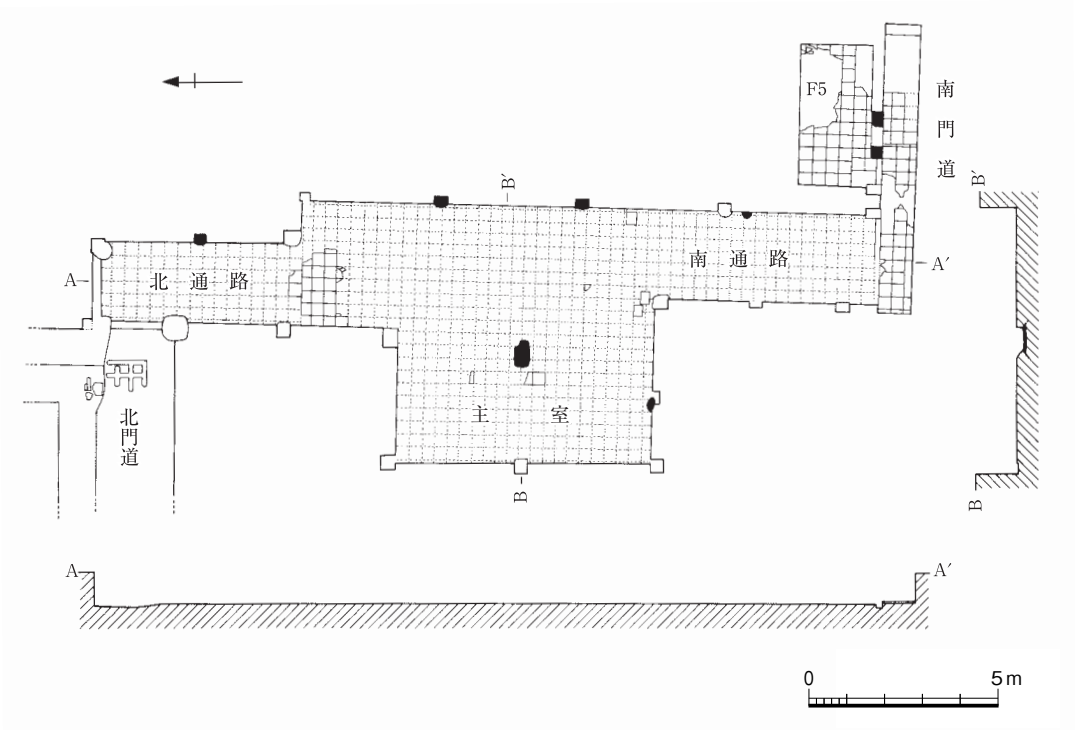
日干煉瓦　Ｆ２の四方の壁と通路の東・西両壁はすべて版築で築かれており、外面には日干煉瓦が側面を上にして積まれていた。日干煉瓦は長さ45～47㎝、幅20～25㎝、厚さ10～15㎝。この外側には、スサ入り粘土を３㎝の厚さで塗り、表面にはさらに麦ぬかを混ぜた粘土や細かい粘土を0.5㎝の厚さで塗っている。また、壁の一部では版築の外面に瓦片を貼り、その外面にさらに日干煉瓦を貼りつけて、麦ぬかやスサ入り粘土を塗る。

B　付属建物Ｆ３

正殿基壇の東部に位置する。南北長22m、東西幅12.2mで、門道、門房（Ｆ５）、通路、主室の四つの部分からなる（第41図、原色図版８、図版27）。

門　道　南門道と北門道の二つの部分に分かれる。

南門道　南門道は東西長7.7m、幅0.95m。東から西に、階段、平坦道、斜道、平坦道に分かれる。階段は門道の東部にあり、漢代の地面より0.2m低い。版築で築かれ、南北幅0.95m、東西長0.3m、高さ0.15m。平坦道は、門道南壁の上端より0.35m低く、東西長1.55m、幅0.95m。斜道は東西長1.4m、幅0.95m、東から西に16度の勾配をもつ。斜道には幾何学文磚が東西に４列、南北に３列敷かれている。北の１列の磚（すべて半分の磚）は文様を上に向けて敷かれ、東西長33㎝、南北幅20㎝、厚さ３㎝。中央の１列と南１列の磚は文様を下に向けて敷かれている。一辺40㎝、厚さ３㎝。斜道西側の平坦道は東西長4.5mで、門道南壁の上端より0.9m低い。平坦道には無文磚が東西に13列、南北に３列敷かれている。磚は一辺34㎝、厚さ4.5㎝。南の１列の磚敷の南半分は、



第41図　２号建築南院Ｆ３平面図・断面図

門道南壁の底部に入っている。平坦道と斜道の間は南北方向の見切り磚で隔てられ、見切り磚は３点が遺存する。磚の長さは22～34㎝、厚さ4.5㎝。南端の見切り磚の南半分は門道南壁の底部にもぐっている。見切り磚はすべて長方磚を平置きに敷いたものである。磚は南北長22㎝、幅12㎝、厚さ４㎝（図版28－１）。

北門道

北門道は全長4.0m、幅2.1m。西から東に、斜道、平坦道からなる。斜道は長さ3.3m、幅2.1m。西から東に15度の勾配をもち、磚敷の痕跡がある（原色図版９－２）。斜道の西は正殿基壇北面の廊道に接している。平坦道は斜面の東側にあり、東西長0.9m、南北幅2.1mで、北門道北壁の上端より0.75m低い。平坦道の東側は木製敷居によって北通路とつながり、溝状の痕跡がわずかに残る。溝の南北両端は破壊されており、現存する大きさは南北長1.4m、東西幅0.2m、深さ0.12m。北門道の南壁は、正殿基壇北壁の東部となる。北壁は２号院東廊とそれにともなう河原石の雨落の南端南縁である。壁の表面には丸瓦片と平瓦片を貼りつけ、凸面の縄目文を外側に向けている。

門房（Ｆ５）　南門道東部の北側にあり、南向きで、長さ3.8m、幅1.9m。南門道の北の版築基壇に掘られた地下室であり、その東壁・北壁・西塀はすべて版築基壇の一部分である。東壁は、基壇版築外面に、スサ入り粘土を3.5㎝の厚さで塗っている。北壁は基壇版築外面に日干煉瓦を積む。日干煉瓦は東西方向に平積みされており、７～８段が残存する。各段の厚さは10～13㎝である。日干煉瓦の外面には、スサ入り粘土を3.5㎝の厚さで塗る。西壁（Ｆ５西側の塀）は長さ2.2m、幅0.75m、残存高0.9m。この東西両壁は、版築土の外面に日干煉瓦を積んだものである。日干煉瓦は南北方向に平積みされ、７～８段が残存する。各段の厚さは10～13㎝で、日干煉瓦の外面には、スサ入り粘土が3.5㎝の厚さで塗られている。西壁の南端には、東西対称の２基の壁柱（1・2号壁柱）の柱穴があるが、底部の礎石は残っていない。柱穴はともに長さ0.4m、幅0.25m、深さ0.9m。

日干煉瓦塀

Ｆ５の南側は日干煉瓦の塀で、日干煉瓦を東西方向に平積みする。塀の長さは3.0m、幅0.3m、残存高0.1～0.85m。この南側はＦ３の南門道である。塀には東西２基の壁柱（3・4号壁柱）の柱穴がある。３号壁柱は、塀の東端から西1.8mに位置し、柱穴は長さ0.35m、幅0.3m、深さ0.23m。柱穴の東壁には日干煉瓦を積み重ねている。柱穴の西壁下部には立てた磚が１点あり、長さ25㎝、幅4.5㎝、高さ12㎝。柱穴底部の礎石は花崗岩製で、方形に近く、東西43㎝、南北40㎝、厚さ10㎝。礎石の上面には炭化した木柱が残る。４号壁柱は、３号壁柱の西0.9mに位置する。柱穴は一辺0.3m、深さ0.1m。底部の礎石は不整形の花崗岩製である。東西36㎝、南北33㎝、厚さ7.5㎝。礎石上面には炭化した木柱が残る。

門

Ｆ５の南側の塀の西には、南に開く門があり、門の幅は0.7m、奥行0.3m。門道の東壁と西壁にはそれぞれ１基の壁柱がある。東の壁柱は南側の塀の西壁柱、西壁柱は西側の塀の南端の東壁柱である。２基の壁柱間には木製敷居があり、わずかに溝状の痕跡が残っている。溝は長さ0.7m、幅0.15m、深さ0.12m。

Ｆ５の室内の底面と門道の底面には、いずれも無文磚を敷いている。室内には、磚が北から南に６列、東から西に11列敷かれている。そのうち北の５列は方磚で、一辺34㎝、厚さ4.5㎝。最も南の１列は長方磚で、長さ33㎝、幅15㎝、厚さ４㎝。門道の底面には方磚が敷かれていた（第42図、原色図版９－１）。

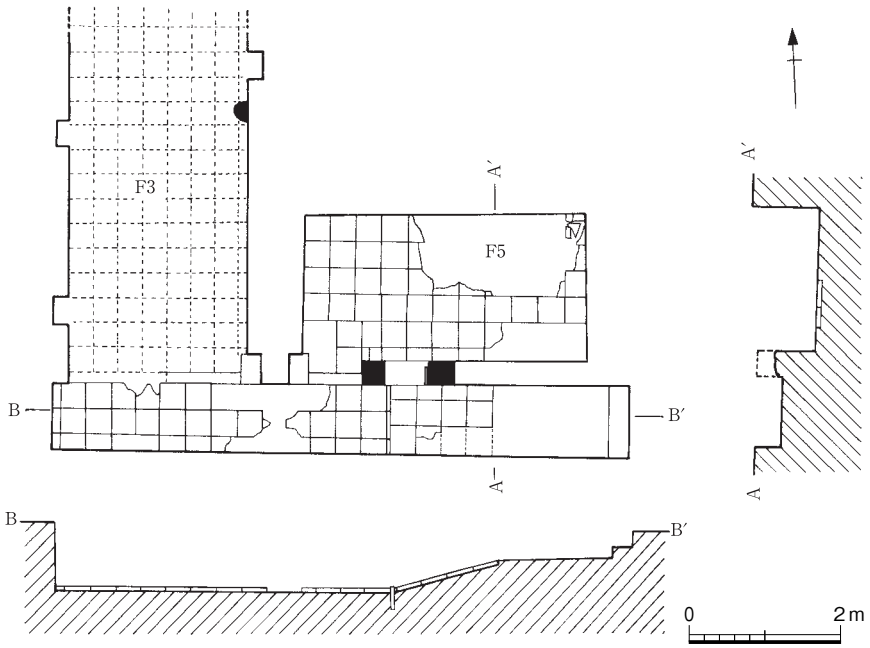
通　路　南通路と北通路に分かれる。

南　通　路　南通路は、南門道の西部北側、主室の南側にある。全長6.0m、幅2.4mで、東西の壁の残存高は0.8～1.1m。その南端には東西方向の木製敷居があり、溝状の痕跡だけが残る。溝は西部が破壊されており、溝は残存長1.2m、幅0.2m、深さ0.12m。溝の東は門房（F５）西側の塀の南端の西壁柱で、南側は南門道である。南通路の東壁には１基の壁柱（１号壁柱）の柱穴があり、通路南端の北4.2mに位置する。柱穴は長さ0.35m、幅0.24m、深さ0.95m。底部に礎石は残存せず、据付穴だけが残る。東西0.4m、南北0.35m、深さ0.1m。この壁柱の南0.3mに礎石（２号礎石）が一つあり、青砂石製で東西53cm、南北38cm、厚さ11cm。

西壁の壁柱　南通路の西壁には、３基の壁柱（南から順に３～５号壁柱）の柱穴がある。３号壁柱は、通路南端の北0.95mに位置し、柱穴は長さ0.4m、幅0.2m。深さ1.1m。底部の礎石は残存せず、据付穴だけが残っている。東西0.25m、南北0.4m、深さ0.1m。４号壁柱は、３号壁柱の北2.35mに位置し、柱穴は長さ0.35m、幅0.2m、深さ1.1m。やはり礎石は残存せず、据付穴だけが残る。東西0.3m、南北0.25m、深さ0.05m。５号壁柱は、４号壁柱の北2.6mに位置する。通路の西北隅柱すなわち主室南壁の東壁柱である。柱穴は長さ0.4m、幅0.35m、深さ1.15m。底部の礎石は残存せず、据付穴だけが残る。東西0.35m、南北0.4m、深さ0.1m。南通路の底面には磚敷の痕跡がある。

北　通　路　北通路は、北門道の東側、主室の北側にある。全長5.4m、幅2.2m。北壁と西壁、東壁の残存高は0.9～1.0m。通路北壁の版築土の外壁（南面）には東西方向に日干煉瓦を平積みしている。日干煉瓦は後世に破壊され、わずかに痕跡が残る。日干煉瓦は長さ47cm、幅25cm。

東壁の壁柱　通路東壁には３基の壁柱（北から順に６～８号壁柱）の柱穴がある。６号壁柱は、東壁と北壁の



第42図　２号建築南院F５平面図・断面図

接続部の隅柱で、柱穴は長さ0.35m、幅0.4m、深さ1.1m。底部の礎石は残存せず、据付穴だけが残る。不整円形で直径0.55m、深さ0.1m。７号壁柱は、６号壁柱の南2.75mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.2m、深さ0.85m。底部の礎石は不整形の花崗岩製で、東西32㎝、南北37㎝、厚さ９㎝（図版28－５）。８号壁柱は、７号壁柱の南2.5mに位置する。付属室の北壁と共用する隅柱である。柱穴は長さ0.45m、幅0.35m、深さ１m。礎石は残存せず、据付穴だけが残る。不整円形で、直径0.45m、深さ0.1m。

西壁の壁柱

通路の西壁にも３基の壁柱（北から順に９～11号壁柱）の柱穴がある。９号壁柱は、北門道北壁の東端と共用する隅柱である。柱穴は破壊され、残存長0.3m、幅0.2m、深さ1.05m。礎石は残っていない。10号壁柱は北門道南壁の東端と共用する隅柱である。柱穴は同様に破壊されており、現存長0.3m、幅0.45m、深さ1.1m。底部の礎石は残存せず、据付穴だけが残る。東西0.7m、南北0.65m、深さ0.2m。９号壁柱と10号壁柱の間には、北門道東側の木製敷居の遺構がある。11号壁柱は、10号壁柱の南2.9mに位置する。柱穴は一辺0.35m、深さ0.95m。礎石は残存せず、据付穴だけが残る。東西0.4m、南北0.35m、深さ0.5m。柱穴の壁と据付穴には炭化した木柱痕跡が残る。

主　室　主室は中央にあり、平面は正方形である。その北壁は北に一部拡張され、付属室としている。付属室の位置は主室の東北で、南北2.7m、東西3.3m。東壁・西壁の残存高は1.0～1.1mである。主室は一辺6.9m、四方の壁の残存高は1.0～1.1m。主室の西南隅と西北隅には各１基の隅柱穴（12・13号隅柱）がある。また、西壁と北壁には各１基、南壁と東壁には各２基の壁柱があるほか、室内の中央近くには支柱穴が１基ある（原色図版８－２・10－１、図版27－２）。

主室の隅柱

12号隅柱は西南隅のもので、柱穴は長さ0.4m、幅0.35m、深さ1.1m。底部の礎石は残存せず、据付穴だけが残る。東西0.4m、南北0.35m、深さ0.07m。13号隅柱は西北隅のもので、柱穴は長さ0.4m、幅0.35m、深さ1.1m。礎石は残存せず、据付穴だけが残る。東西0.35m、南北0.4m、深さ0.1m。

主室の壁柱

主室西壁の中ほどには壁柱が１基（14号壁柱）あり、柱穴は長さ0.35m、幅0.25m、深さ1.1m。礎石は残存せず、据付穴だけが残る。東西0.4m、南北0.35m、深さ0.08m。主室の南壁には、東と西に２基の壁柱がある。東の壁柱（15号壁柱）は西南隅の東1.8mに位置する。柱穴は長さ0.35m、幅0.15m、深さ1.07m。底部には、原位置を保っていない不整形の花崗岩製の礎石がある。長さ40㎝、幅35㎝、厚さ20㎝。主室北壁の壁柱（16号壁柱）は、西北隅柱の東3.4mに位置する。柱穴は長さ0.5m、幅0.4m、深さ１m。礎石は残存せず、据付穴だけが残る。東西0.5m、南北0.4m、深さ0.1m。主室の東壁（付属室の東壁北端から南通路まで）には３基の壁柱（17～19号壁柱）がある。17号壁柱は東北隅柱で、柱穴は長さ0.27m、幅0.2m、深さ1.1m。礎石は残存せず、据付穴だけが残る。東西0.27m、南北0.2m、深さ0.1m。18号壁柱は、17号壁柱の南3.7mに位置する。柱穴は長さ0.35m、幅0.25m、深さ1.05m。底部の礎石は円形の花崗岩製で、直径35㎝、厚さ10㎝（図版28－４）。19号壁柱は、18号壁柱の南3.85mに位置する。柱穴は長さ0.35m、幅0.2m、深さ1.05m。底部には青砂石製の礎石がある。不整形で、東西42㎝、南北32㎝、厚さ10㎝。

主室の支柱

また、主室内の西寄り、南北方向の中央近くに支柱穴が１基あり、主室西壁中央の壁柱と東西一直線上に位置する。柱穴は長さ0.7m、幅0.4m、深さ0.2m。底部の礎石は花崗岩製で、東西69㎝、南北70㎝、厚さ19㎝。

主室と付属室には、いずれも方磚が敷かれている。主室の西北部に文様を下に向けた幾何学文磚２点があるのを除き、すべて無文磚である。磚は一辺33～34㎝、厚さ4.5㎝。主室内には敷磚が21点遺存する以外は、磚敷の痕跡だけが残る。主室の西壁沿いに、南北方向の磚敷が１列あり、長さ0.34ｍ、幅0.09ｍ。これは主室底面の磚敷両辺の見切り磚となるが、磚敷の痕跡しか残っていない。また、付属室と北通路が交差する部分には東西方向に１列の長方磚が敷かれている。磚は長さ30㎝、幅20㎝で、これもまた見切り磚の役割を果たしていた。

日干煉瓦　Ｆ３は版築基壇上に掘られた地下室で、四方の壁はすべて版築土である。その外側に日干煉瓦を積み、日干煉瓦の外面にはスサ入り粘土を塗る。日干煉瓦は、一般に長さ45～47㎝、幅23～25㎝、厚さ９～15㎝。ほとんどの部分では、日干煉瓦の長手を上にして積み上げている。

主室の西壁南部と東壁北部、南通路西壁では、日干煉瓦の長手を上にして積み上げる。この方法で積まれた日干煉瓦の内側には、さらに平積みの日干煉瓦があり、その内側が基壇の版築土となる。主室の西壁北部では、２段の平積みした日干煉瓦の間に、薄い磚を１段はさむ。この磚の厚さは3.5㎝である。主室の南壁西部は、日干煉瓦の間を磚片と瓦片で充塡している。

壁土　日干煉瓦の外側の壁土は、約９㎝の厚さをもち、５層に分かれる。最も内側の層（日干煉瓦に塗られた層）はスサ入り粘土の層で、厚さ3.3㎝。スサ藁は比較的長く、長さ約2.5～３㎝。その外側もやはりスサ入り粘土の層で、厚さ4.4㎝。スサ藁は比較的短く、長さは１㎝前後。その外は細かい粘土の層で、厚さは約0.8㎝。さらにその外にも細かい粘土の層があり、厚さ約0.3㎝。最も外側の層は漆喰層で、厚さ約0.1㎝。

壁土の構造がより複雑な部分もあり、その壁土全体の厚さは11.4㎝で、やはり５層に分かれる。最も内側の層（日干煉瓦に塗られた層）は、赤煉瓦色を呈する混じりけのない粘土で、厚さ約2.3㎝。その外側も混じりけのない粘土の層で、比較的濃い赤煉瓦色を呈し、厚さ1.1㎝。その外側はスサ入り粘土の層で、厚さ約6.6㎝。この層は２層に細分され、内側の層は赤い焼土色、外側の層は黄褐色で、部分的に赤色を呈する。２層の間の面は滑らかであり、これは２度にわたって重ね塗りしたことによる。このスサ入り粘土の層は比較的粗い。これらの外側は細かい粘土層で、厚さ約1.2㎝。最も外側の層もまた細かく滑らかな粘土の層で、厚さは0.2㎝前後である（図版28－２・３）。

南門道東側の通路　Ｆ３南門道の東側は東西方向の通路で、長さ3.8ｍ、幅1.3ｍ（第36図）。底面には南北３列、４点だけ敷磚が遺存している。いずれも幾何学文磚で、文様が下向きとなるように敷かれている。磚は長さ37.5㎝～38㎝、幅34.5㎝～35㎝、厚さ2.5～３㎝。

Ｆ３南側の廊道　Ｆ３南門道の南側は東西方向の廊道で、長さ10.8ｍ、幅1.4ｍ。北から南に４度の勾配をもつ。敷磚には無文磚と幾何学文磚の２種ある。磚は長さ36.5㎝～41㎝、幅35㎝～37㎝、厚さ2.5㎝。廊道の南側は河原石の雨落で、長さ10.8ｍ、幅1.0～1.2ｍ（西部の8.2ｍは幅1.0ｍ、東部の2.6ｍは幅1.2ｍ）。北から南に19度の勾配をもつ。西部の雨落南縁には、東西方向に整然と並べられた扁平な細長い河原石が２列あるが、外側の見切り磚の痕跡は確認できない。河原石は長さ1.5～３㎝、幅６～８㎝、厚さ1.5～３㎝。雨落北縁には東西方向の見切り磚が１点あり、見切り磚は長さ34.5㎝、幅4.5㎝。東部の雨落は、北から南に６度の勾配をもつ。東縁と南縁、北縁にはすべて見切り磚があり、幾何学文磚を立て並べている。磚は長さ35.5～40㎝、厚さ2.5㎝。磚の内側には、扁平な細長い河原石が１列並べられている。河原石の長さは７～15㎝、幅1.5～

３㎝。雨落北縁には円形の花崗岩製礎石が一つあり、礎石の上面は廊道の上面より0.08ｍ高い。礎石の直径は45㎝、厚さ12㎝。

磚敷通路（北）　河原石の雨落の南側には磚敷通路がある。東西長12ｍ、幅は西部の9.7ｍが0.8ｍ、東部の2.3ｍは1.9ｍで、北から南に３度の勾配をもつ。西部の通路には磚敷が南北２列あり、東西方向は６列が遺存する。東部の通路の磚敷は南北５列、東西６列ある。すべて幾何学文磚で、文様を上に向けて敷く。磚は長さ36.5～41㎝、幅34.5～37㎝、厚さ2.5㎝。

磚敷通路東部の北側には、東西方向の河原石の雨落がある。長さ3.2ｍ、幅0.95ｍで、北から南に３度の勾配をもつ。雨落の南縁と北縁、西縁には、幾何学文磚を立て並べた見切り磚がある。磚は長さ35.5～41㎝、幅2.5㎝。磚の内側には扁平な細長い河原石が整然と並べられている。河原石は、長さ７～15㎝、幅７～８㎝、厚さ２～3.5㎝。

磚敷通路の東側には、南北方向の河原石の雨落（上述した河原石の雨落と直角に接続する）があり、長さ3.65ｍ、幅0.95ｍ。磚敷通路東部北側の東西方向の河原石の雨落と、磚敷通路東側の東南北方向の河原石の雨落の接続部には、北東から南西方向へ斜めに、扁平な細長い河原石が並べられている。河原石は、長さ10～15㎝、幅6.5～８㎝、厚さ２～3.5㎝。雨落の東縁と西縁には、幾何学文磚を立て並べた見切り磚があり、磚は長さ36.5～40㎝、幅2.5㎝。雨落の東縁と西縁、南縁の内側には、いずれも扁平な細長い河原石が整然と並べられ、河原石は長さは8.5～15㎝、幅６～7.5㎝、厚さ2.5～４㎝。雨落の東側には、文様を上に向けた幾何学文磚が南北方向に１列敷かれている。磚は長さ39.5～40㎝、幅36.5～37㎝、厚さ2.5㎝。

瓦組通路　上述の河原石の雨落は、その南側にある１条の南北方向の瓦組通路とつながっている。通路の幅は0.45ｍで、14.45ｍにわたり検出した。路面には平瓦片を立てて埋め込み、瓦はすべて凹面を北、凸面を南に向ける。瓦片の幅は３～21㎝、厚さは１～2.5㎝。通路西縁の見切り磚は完存し、幾何学文磚を立て並べている。磚は長さ35.5～41㎝、幅2.5～３㎝。瓦組通路の西側には、文様を上に向けて南北方向に敷いた幾何学文磚が１列あり、４点が遺存する。磚は長さ39.5～41㎝、幅35.5～37㎝、厚さ2.5㎝。

磚敷通路（南）　瓦組通路の北端から南へ8.4ｍの位置には、西へ伸びる磚敷通路が１条ある。長さ11.6ｍ、幅0.95ｍで、磚敷の痕跡がある。磚敷通路の北縁東端から西0.8ｍに東西方向の見切り磚が１点残り、残存長20㎝、幅4.5㎝。その向い側の磚敷通路南縁にも、東西方向の見切り磚が１点ある。長さ15㎝、幅4.5㎝。磚敷通路の西と正殿基壇南面の廊道、河原石の雨落の外側にある磚敷通路の東端はつながっている。

以上を総合すると、正殿基壇東壁の河原石の雨落の外側にある南北方向の磚敷通路と、Ｆ３南門道南側の河原石の雨落の外側にある東西方向の磚敷通路、その南9.2ｍに位置する東西方向の磚敷通路、南北方向の瓦組通路は、一つの院を囲み込むように配置されている。この院の規模は、東西11.6ｍ、南北9.2ｍである。　正殿基壇南東の院

C　付属建物Ｆ７

Ｆ７はＦ３の東側に位置し、東西5.8～7.0ｍ、南北19.4ｍの規模である。

東壁には６基の壁柱（南から順に１～６号壁柱）の柱穴があり、底部の礎石はすべて花崗岩製である。１号壁柱（Ｆ７東南隅柱）の柱穴は、長さ0.25ｍ、幅0.2ｍ、深さ0.13ｍで、礎石は残ってい　壁　柱

ない。２号壁柱は、１号壁柱の北3.15mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.2m、深さ0.15m。底部の礎石は不整形で、東西48cm、南北50cm、厚さ13cm。３号壁柱は、２号壁柱の北3.15mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.2m、深さ0.2m。底部の礎石は不整形で、東西50cm、南北36cm、厚さ14cm。４号壁柱は、３号壁柱の北3.1mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.2m、深さ0.2m。礎石は残っていない。５号壁柱は、４号壁柱の北4.4mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.2m、深さ0.35m。底部の礎石は不整形で、東西48cm、南北36cm、厚さ15cm。６号壁柱（Ｆ７東北隅柱）は、５号壁柱の北4.5mに位置する。柱穴は長さ0.4m、幅0.15m、深さ0.2m。底部には不整形の礎石が南北に二つ並ぶ。南側の礎石は東西42cm、南北43cm、厚さ17cm。北側の礎石は東西23cm、南北30cm、厚さ７cm。

西壁の壁柱は、Ｆ３主室と付属室、北通路東壁の壁柱である。

版築塀　Ｆ７の北端は東向きに伸びて、東西方向の版築塀となる。長さ3.0m、幅0.9m。塀の東部には南北対称に２基の壁柱（７・８号壁柱）の柱穴がある。７号壁柱は、塀の南壁東端の西0.4mに位置する。柱穴は一辺0.2m、深さ0.08mで、底部の礎石は残っていない。８号壁柱は、７号壁柱の北側にあり、柱穴は一辺0.2m、深さ0.11m。底部の礎石は不整形の花崗岩製で、東西45cm、南北35cm、厚さ13cm。

廊道　Ｆ７の東側には南北方向の廊道がある。長さ18.5m、幅2.6mで、磚敷の痕跡がある。廊道の東辺には、廊道と平行する木灰を含む溝が走り、復元長18.5m、現存長9.2m、幅0.2m、深さ0.06m。溝の西縁には南北方向の見切り磚が３点残る。磚は長さ10～20cm、厚さ4.5cm。すべて無文磚を立てている。溝の南端には、花崗岩製の不整形の小さい礎石が一つあり、東西50cm、南北35cm、厚さ15cm。廊道の出入り口は溝の北側にあり、幅2.85m。廊道の敷磚は１点だけが残存する。磚は一辺34cm、厚さ4.5cm。

5　３号院と付属建物Ｆ４

A　３号院

３号院は、正殿基壇の西南角から北4.85mに位置する。東西残存長8.6m、南北幅4.8m。院の南側には東西方向の版築塀があり、長さ10.4mにわたって検出した。幅1.0m、残存高0.1～0.15m。塀の南側には東西方向の廊道がある。検出した長さ7.47m、幅1.0m。北から南に３度の勾配をもち、磚敷の痕跡が残る。廊道の南側には平瓦片を立てて埋め込んだ東西方向の雨落があり、長さ7.4mにわたり検出した。幅0.7mで、北から南に１度の勾配をもつ。雨落内の瓦片は幅３～９cm、厚さ１～2.5cm。雨落は南北方向の磚によっていくつかに区切られており、それぞれの区画の長さは1.2mである。現存する磚は３点で、長さ10～30cm、幅３～4.5cm（第43図、原色図版13－１）。

版築塀と南の廊道

３号院の中央には中庭があり、長さ6.9mにわたり発掘した。南北幅は1.7m。中庭の南面と北面には、それぞれ雨落と廊道がある。南面の廊道は、発掘した部分の長さ6.9m、幅1.25m。磚敷の痕跡が残り、北から南に５度の勾配をもつ。廊道の北側は平瓦片を立てて埋め込んだ雨落となり、長さ6.9mにわたって検出した。幅は0.7mで、南から北に10度の勾配をもつ。瓦片の長さは３～10cm、厚さ１～２cm。雨落は南北方向の磚によっていくつかに区切られ、各区画の長さは

南面の廊道

1.0～1.2mである。現存する磚は５列で、長さ35～45cm、幅15～25cm。

北面の廊道

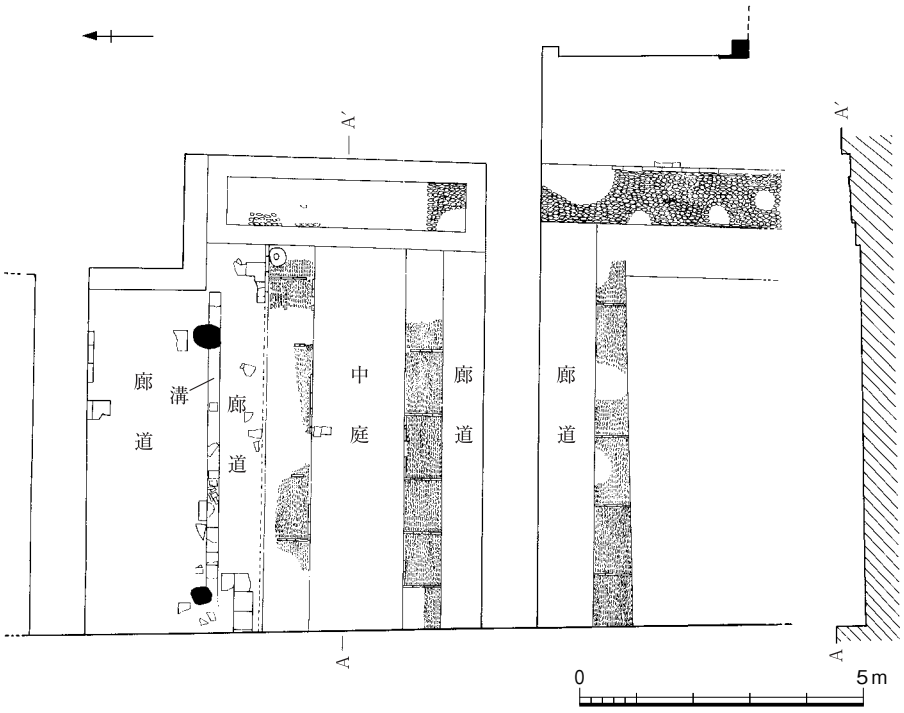
中庭北面の廊道は、長さ7.0mにわたって検出した。幅は1.3mで、廊道の敷磚は４点だけが残る。すべて無文の方磚である。磚は一辺34cm、厚さ4.5cm。

廊道は北から南に３度の勾配をもつ。廊道の南縁東部には東西方向の見切り磚が残り、磚は長さ20～34cm、厚さ4.5cm。廊道南側には平瓦片を立てて重ねた雨落があり、検出した長さは7.0m、幅は0.8m。北から南に２度の勾配をもつ。瓦片は長さ３～９cm、厚さ1.2～２cm。雨落は南北方向の磚でいくつかに区切られており、各区画の長さは1.2mである。磚は４列が遺存し、長さ15～25cm、幅3.5～4.5cm。雨落南縁には東西方向の見切り磚が７点残る。長さ10～34cm、幅3.5～4.5cm。

中庭の東面には、南北方向の河原石の雨落がある。長さ4.3m、幅0.9mで、東から西に２度の勾配をもつ。河原石は雨落の西北部と南部だけに残り、雨落の周囲には磚敷の痕跡がある。磚敷の幅は、東・西・北面が0.35m、南面は0.37m。

３号院の北の廊道

３号院の北側には東西方向の廊道があり、長さ6.3mにわたり検出した。幅は2.2mで、無文方磚が敷かれている。磚は２点が残存し、一辺34cm、厚さ4.5cm。廊道北縁の東部には東西方向の見切り磚があり、長さ25～34cm、厚さ５cm。この廊道と正殿基壇の西廊道はつながっている。廊道と３号院の間は木塀によって隔てられ、わずかに溝状の痕跡が残る。検出した長さは5.35m、幅0.2m、深さ0.08m。溝の中には東西に二つの礎石（1・2号礎石）があり、いずれも楕円形の花崗岩製である。１号礎石は溝の東端から西へ0.6mに位置し、東西40cm、南北55cm、厚さ12cm。２号礎石は１号礎石の西4.7mに位置し、東西30cm、南北35cm、厚さ10cm。溝内には防湿用の敷磚の破片がある（図版29）。



第43図　２号建築南院３号院平面図・断面図

B　付属建物Ｆ４

Ｆ４は３号院の北にあり、幅2.5m、長さ4.5m。Ｆ４の南塀は３号院北面の廊道の北にある版築塀であり、長さ6.7mにわたって検出した。幅は1.0m、残存高0.1mである。Ｆ４の東塀は、正殿基壇西面の通路から北に伸びる南北方向の版築塀で、長さ4.05m、幅1.0m、残存高0.1m。塀の北端には、東西対称に２基の壁柱（1・2号壁柱）の柱穴があり、礎石はすべて花崗岩製である。

版築塀

壁柱

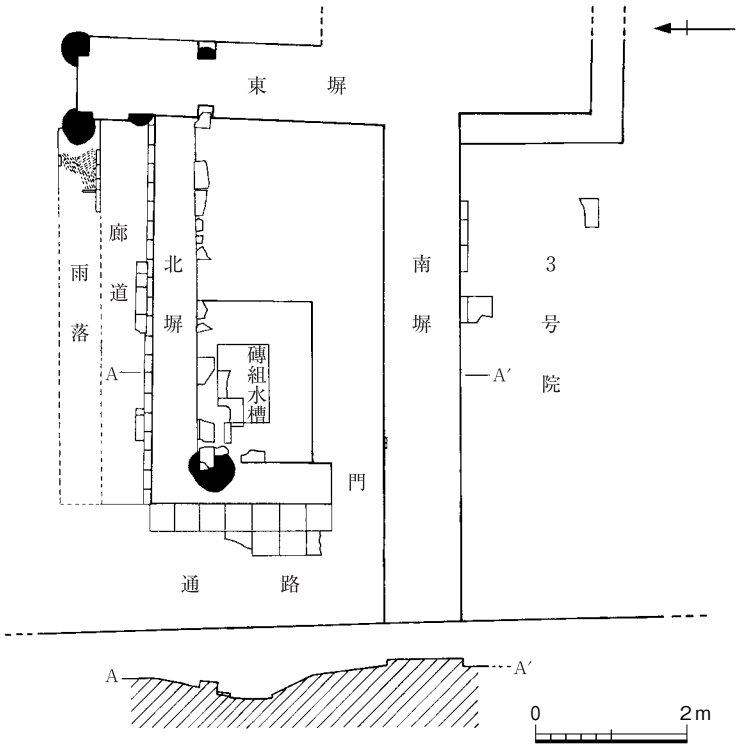
１号壁柱の柱穴は長さ0.25m、幅0.15m、深さ0.06m。底部の礎石は不整形で、東西40cm、南北35cm、厚さ10cm。２号壁柱の柱穴は長さ0.1m、幅0.25m、深さ0.07m。底部の礎石は不整形で、東西40cm、南北35cm、厚さ10cm。２号壁柱の南0.7mにも円形の礎石が一つあり（3号礎石）、直径30cm、厚さ11cm。また、１号壁柱の南1.7mに壁柱（4号壁柱）の柱穴が１基あり、柱穴は一辺0.25m、深さ0.15m。底部の礎石は不整形で、東西44cm、南北46cm、厚さ13cm。この壁柱と対称位置にある塀の西壁の壁柱（5号壁柱）の柱穴は、長さ0.2m、幅0.25m、深さ0.15mである。底部に礎石の断片があり、長さ25cm、幅20cm、厚さ4.5cm。Ｆ４の北塀は東西長5.05m、幅0.7m、残存高0.05m。塀の北部には日干煉瓦が立てて積まれている。Ｆ４の西塀は、長さ3.2m、幅0.55m、残存高0.1m。

門

Ｆ４西塀の南部には門があり、門道の幅0.7m、奥行0.55m。Ｆ４内の西北隅には隅柱（6号隅柱）の柱穴があり、不整円形の礎石が残る。花崗岩製で、直径60cm、厚さ10cm。この礎石の南側には、不整形な紫砂岩製の礎石（7号礎石）が一つあり、東西27cm、南北９cm、厚さ８cm。Ｆ４の室内には無文方磚が敷かれ、磚敷の破片だけが残る。

磚組水槽

Ｆ４の西北部には、磚組の水槽が一つある。上辺は東西2.1m、南北1.5m、底部は東西1.0m、



第44図　２号建築南院Ｆ４平面図・断面図

南北0.7mで、深さは0.3m。四方の壁は内側に傾斜している。東壁と西壁はともに24度の勾配で、斜面の長さは0.6m。南壁と北壁は20度の勾配で、斜面の長さ0.65m。水槽の四方の壁と底部には無文方磚が敷かれる。方磚は一辺34cm、厚さ4.5cm。磚敷が遺存しないところも、その痕跡が明瞭に認められる（第44図、原色図版13－２）。

Ｆ４の西側には南北方向の通路がある。南北4.3m、東西1.65mで、南から北に５度の勾配をもつ。通路には無文磚が敷かれ、東西２列が残存する。磚は一辺34cm、厚さ４～4.5cm。 通　路

Ｆ４の北塀の北面には、東西方向の廊道とそれにともなう雨落がある。廊道は長さ5.0m、幅0.6mで、南から北に２度の勾配をもつ。磚敷の痕跡があり、廊道の南縁は長方磚が敷かれている。磚は長さ32cm、幅13cm、厚さ４cm。廊道の北側には、平瓦片を立てて埋め込んだ雨落がある。長さ5.0m、幅0.55mで、南から北に２度の勾配をもつ。雨落南縁の東部には見切り磚が４点残る。磚は長さ32cm、幅４～4.5cm。雨落北縁の東端には平瓦片を立てて埋め込んでいる。長さ15cm、厚さ1.8cm。この瓦片の西0.15mには、東西方向の見切り磚があり、長さ20cm、幅2.5cm。雨落内には、北東から南西方向に埋め込んだ平瓦片と南東から北西方向に埋め込んだ平瓦片により、「人」字形の模様が表現されている（図版30）。 廊　道

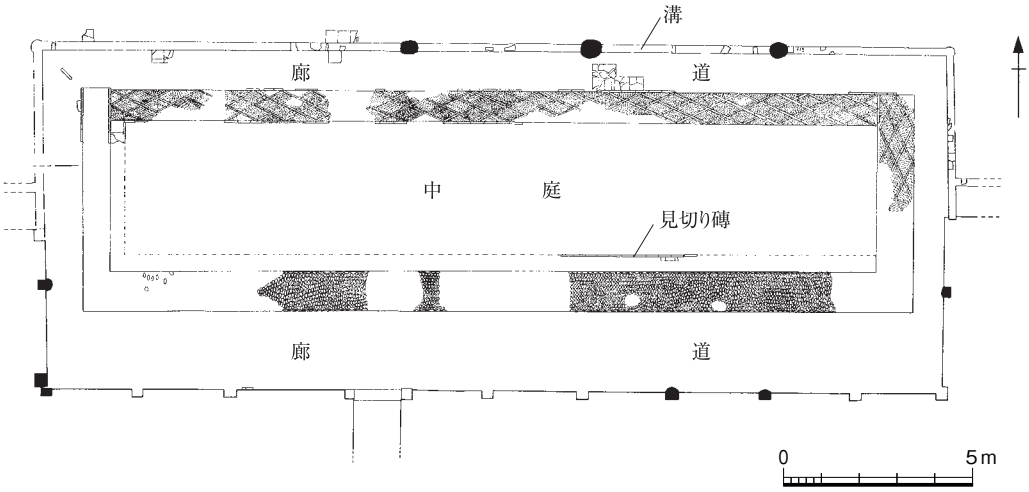
６　１号院と２号院

正殿基壇の北面には、東西に並ぶ二つの院があり、これらを１号院・２号院とした。二つの院は、いずれも中央の中庭の周囲に廊道がめぐり、廊道の外側は雨落となる。

Ａ　１号院

１号院は正殿基壇北面の西部にあり、東西24.5m、南北8.9m。中庭とその周囲の廊道、雨落からなる（第45図、原色図版11－１、図版31－１）。中庭は東西20.4m、南北3.4m、東面の廊道は長さ8.9m、幅0.9mで、磚敷の痕跡がある。東壁の南端から北2.55mに壁柱（１号壁柱）の柱穴がある。柱穴は長さ0.25m、幅0.15m、深さ0.33m。底部の礎石は不整形の花崗岩製で、東西40cm、南北44cm、厚さ13cm。西面の廊道は長さ8.9m、幅1.0mで、磚敷の痕跡がある。西壁の南端から北2.6mに壁柱（２号壁柱）の柱穴がある。柱穴は長さ0.25m、幅0.2m、深さ0.28m。底部の礎石はやはり不整形の花崗岩製で、東西45cm、南北42cm、厚さ11cm。南面の廊道は正殿基壇北面廊道の一部をなし、長さ24.2m、幅2.1m、南から北に3.5度の勾配をもつ。北面の廊道は長さ24.4m、幅1.0m、北から南に２度の勾配をもつ。この廊道には敷磚が８点残存する。磚は一辺32～34.5cm、厚さ４～4.5cm。廊道の南縁には23点の見切り磚があり、長さ15～34.5cm、幅4.5～５cm。北面の廊道と西面の廊道の接続部には、北西から南東方向の見切り磚がある。１点のみ残り、長さ35cm、厚さ５cm。 中庭と廊道　壁　柱

北面の廊道の南側は、平瓦片を立てて埋め込んだ瓦組雨落で、長さ20.7m、幅0.9m、北から南に７度の勾配をもつ。瓦片は長さ３～18cm、厚さ1.5～25cm。雨落内に埋め込まれた瓦片は、磚によって分割され、大きな菱形模様を形成する。それぞれの菱形模様の中では、瓦片が同じ方向を向いて立てられる。雨落の南縁には東西方向の見切り磚が19点あり、長さ15～35cm、厚さ４～５cm。東面の廊道の西側も瓦組雨落で、長さ5.8m、幅1.0m。東から西に８度の勾配をもつ。雨落 瓦組雨落



第45図　２号建築南院１号院平面図

内の平瓦片は同様に磚によって分割され、大きな菱形模様を形成する。それぞれの菱形模様の中では、瓦片は方向をそろえている。雨落西縁の北端には南北方向の見切り磚が２点残り、長さ34～35cm、厚さ4.5cm。南面の廊道の北側は河原石の雨落で、長さ22.5m、幅0.15m。南から北に12度の勾配をもつ。雨落の南縁と北縁の内側には、いずれも扁平な細長い河原石が１列、整然と並べられている。河原石の長さは５～8.5cm、幅４～6.5cm、厚さ2.5～3.5cm。雨落の北側には、雨落と平行する磚敷が１列あり、幅0.45m。磚の破片が３点だけ残り、最大のものは長さ25cm、幅10cm、厚さ4.5cm。磚敷の北縁には東西方向の見切り磚が11点あり、長さ30～35cm、厚さ4.5～５cm。西面の廊道の東側も河原石の雨落で、長さ5.95m、幅0.7m。西から東に５度の勾配をもつ。雨落の東縁には見切り磚が５点だけ残り、長さ15～35cm、幅４～５cm。雨落の東側には、雨落と平行する磚敷が１列あり、幅は0.4mである。磚は２点が残り、長さはそれぞれ25cmと30cm、厚さは４～５cm。磚敷の東縁には見切り磚が２点あり、長さは25cmと30cm、厚さはいずれも4.5cmである。

河原石雨落

B　２号院

２号院は正殿基壇北面の東部にあり、１号院との間は東通路で隔てられる。東西11.2m、南北8.9mで、中庭とその周囲の廊道・雨落からなる（第46図、原色図版11－２、図版31－２）。中庭は東西7.45m、南北4.1mで、磚敷の痕跡がある。北面の廊道は長さ11.2m、幅0.95mで、北から南に６度の勾配をもつ。廊道の敷磚は２点残存し、１点は長さ34cm、残存幅20cm、厚さ４cm。もう１点は残存長15cm、残存幅10cm、厚さ4.5cm。東面の廊道は長さ6.8m、幅1.0mで、東から西に４度の勾配をもつ。廊道には無文磚が敷かれ、磚は長さ27～33cm、幅17～31cm、厚さ４cm。東面の廊道と北面の廊道の接続部には、北東から南西方向の見切り磚がある。磚は長さ30～33cm、厚さ4.5cm。この場所に敷かれた磚は三角形である。西面の廊道は長さ8.9m、東西1.0m、西から東に２度の勾配をもつ。廊道には磚敷の痕跡がある。西壁南端から北2.65mに壁柱の柱穴が１基あり、柱穴は長さ0.25m、幅0.15m、深さ0.34m。柱穴底部の礎石は不整形の花崗岩製で、東西39cm、南北37cm、厚さ12cm。南面の廊道は正殿基壇北面の廊道の一部をなし、長さ11.2m、幅2.1m。南から北に3.5度の勾配をもつ。

中庭と廊道

中庭南面の廊道の北側には、河原石の雨落がある。長さ9.3m、幅1.0mで、南から北に11度の勾配をもつ。雨落南縁の内側には、扁平な細長い河原石が東西方向に２列、雨落北縁の内側には同様の河原石が１列、整然と並べられている。北面の廊道の南側には瓦組の雨落があり、長さ9.3m、幅1.0m。北から南に８度の勾配をもつ。雨落内に埋め込まれた瓦片は磚で分割され、大きな菱形模様を形成する。磚は長さ30～34cm、幅４～4.5cm。東面の廊道の西側は河原石の雨落で、長さ5.9m、幅1.0m、東から西に９度の勾配をもつ。この雨落と南面の廊道北側の雨落の接続部には、南東から北西方向の見切り磚が１点ある。長さ15cm、幅4.5cm。西面の廊道の東側は河原石の雨落で、長さ5.9m、幅0.8m。西から東に10度の勾配をもつ。この雨落と南面の廊道北側の雨落の接続部には、南西から北東方向の見切り磚が１点あり、長さ20cm、幅４cmである。

河原石雨落

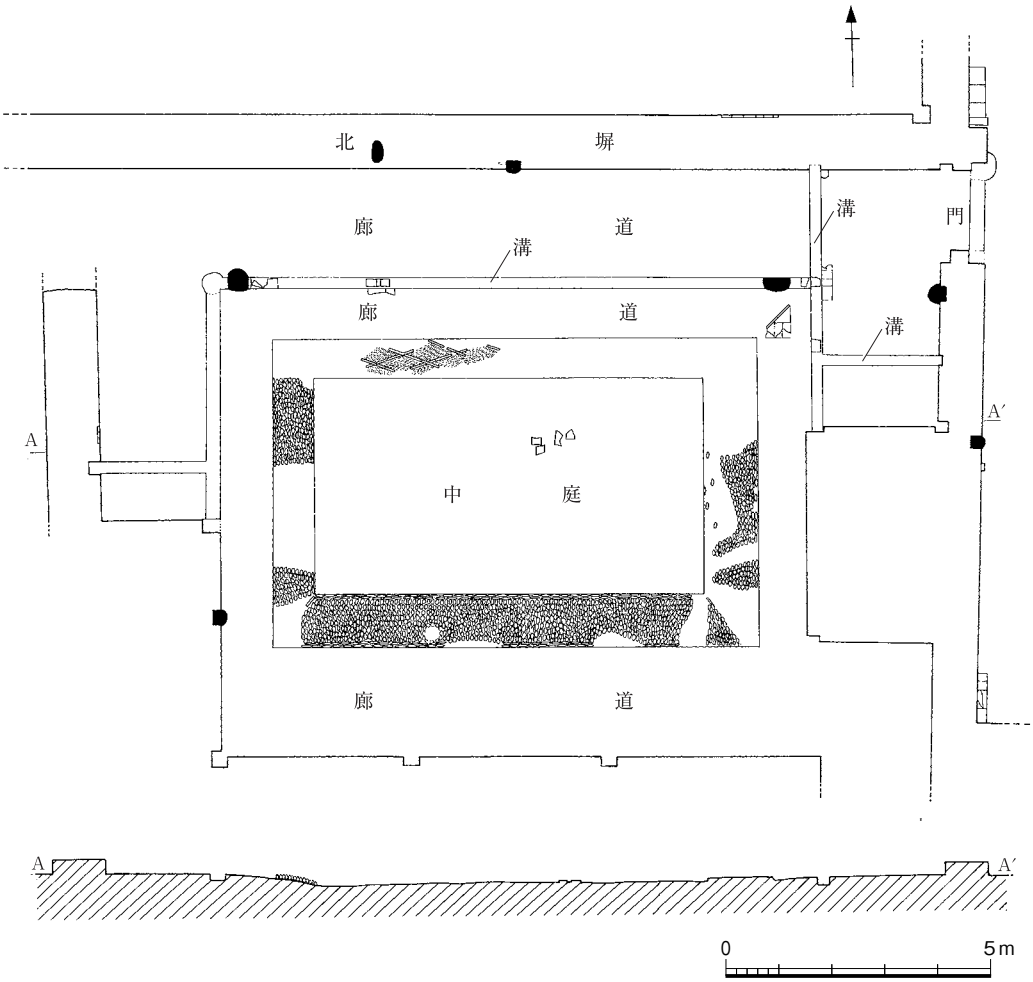
瓦組雨落

１・２号院の北側には東西方向の廊道が１条あり、長さ48m、幅2.0m。廊道の敷磚は廊道西部だけに残る。磚は一辺34～35cm、厚さ４～4.5cm。廊道の北縁には長方磚が敷かれ、廊道の中央近くに６点が遺存する。長さ28～35cm、幅９cm、厚さ４～4.5cm。

１・２号院北側の廊道

廊道の西端には東西方向の小門道があり、北塀西部の門道に通じている（第36図）。門道南側の塀は、長さ0.55m、幅0.8m、残存高0.3m。塀の南端はＦ１西塀の北端とつながる。門道北側の塀は、長さ1.0m、幅0.8m、残存高0.3m。塀の北端は南院北塀の南壁面とつながる。門道の南・

門



第46図　２号建築南院２号院平面図・断面図

北両壁には、南北対称の位置にそれぞれ２基の壁柱（１～４号壁柱）の柱穴があり、礎石はすべて花崗岩製である。門道南壁の東柱（１号壁柱）の柱穴は、一辺0.25m、深さ0.3m。底部の礎石は不整形で、東西35㎝、南北33㎝、厚さ18㎝。西柱（２号壁柱）の柱穴は、一辺0.2m、深さ0.3m。底部の礎石は不整形で、東西37㎝、南北41㎝、厚さ12㎝。門道北壁の東柱（３号壁柱）の柱穴は、一辺0.2m、深さ0.3mで、礎石は残っていない。西柱（４号壁柱）の柱穴は、一辺0.2m、深さ0.3mで、礎石は残っていない。

廊道東端の門は、Ｆ６北面通路の西門であり、廊道の北塀はそのまま南院の北塀となる。

廊道西端の門の西側は、南院西北部の門道の通路に通じており、東西2.7m、南北1.8m。磚敷の痕跡が残る。通路の北縁には、長方形の見切り磚があり、１点が残存する。長さ34㎝、幅９㎝、厚さ４㎝（原色図版12－２）。

木　　塀　１・２号院と北面の廊道の間は木塀によって隔てられ、木塀はわずかに溝状の痕跡を残す。溝は正殿基壇北面の東通路を境に東西に分かれ、相互の間隔は5.8mである。東部の木塀の溝は、長さ11.1m、幅0.2m、深さ0.1m。溝の底部には敷磚がある。磚は残存長15～33㎝、残存幅15～20㎝、厚さ4.5㎝。また、同じく溝の底部に、楕円形の二つの花崗岩製礎石（１・２号礎石）がある。１号礎石は溝東端の西0.4mにあり、東西50㎝、南北30㎝、厚さ12㎝。２号礎石は１号礎石の西10.3mに位置し、東西38㎝、南北40㎝、厚さ13㎝。西部の溝は、長さ24.5m、幅0.2m、深さ0.08m。溝の底部に無文磚を敷き、わずかにその破片が残る。最大のものは長さ20㎝、幅20㎝、厚さ4.5㎝。溝の底部には３点の花崗岩製礎石（３～５号礎石）が残存する。３号礎石は、溝東端から西へ4.3mに位置する。不整形の楕円形で、東西42㎝、南北28㎝、厚さ８㎝。４号礎石は、３号礎石の西5.1mにあり、楕円形で、東西43㎝、南北38㎝、厚さ17㎝。５号礎石は、４号礎石の西4.9mにあり、楕円形で、東西45㎝、南北33㎝、厚さ13㎝。

付属建物Ｆ６　２号院東面の南側に付属建物が１基あり、Ｆ６とした（図版32－１）。東西幅3.3m、南北長4.1m。基壇の残存高は0.26m。Ｆ６の南側はＦ３の北通路の北壁で、残存高0.9m。東南隅には版築塀があり、その南はＦ７の基壇とつながる。塀は南北1.5m、東西0.85m、残存高0.12～0.3m。

通　　路　Ｆ６の北側は南北方向に通路があり、南北4.9m、東西2.25m。通路には敷磚が数点残存する。磚は残存長10～27m、幅20㎝、厚さ４㎝。通路西壁の南部には南北方向に走る溝があり、長さ2.4m、幅0.24m、深さ0.17m。この南端はＦ６基壇の北壁に0.1m入る。溝の底部は磚敷で、わずかに破片が残っている。磚は長さ20㎝、幅24㎝、厚さ４㎝。この溝の北は木製敷居と接する。木製敷居は溝状の痕跡が残り、長さ2.1m、幅0.2m、深さ0.8m。その北端は南院北塀の南面に0.05m入り込む。

通路の南端には東西方向の木製敷居があり、わずかに溝状の痕跡を残している。その南はＦ６の基壇から1.2m離れ、長さ2.3m、幅0.22m、深さ0.14m。この東端は通路東壁に0.05m入り、西端は通路西壁の溝とつながる。溝の南縁には、東西方向に敷いた日干煉瓦が１列ある。日干煉瓦の長さは42～46㎝、幅20㎝、厚さ９㎝。

通路の東塀は南北長5.7m、幅0.85m、残存高0.24～0.26m。塀の東面の版築土の外側には平瓦片が貼りつけられている。瓦片は厚さ約1.5㎝で、凸面が東を向く。通路の東塀には、壁柱の柱穴が２基ある（１・２号壁柱）。１号壁柱は、通路東塀の南端から北へ2.4mに位置し、柱穴は長さ0.25m、幅0.1m、深さ0.25m。底部には不整形の花崗岩製礎石が残る。東西38㎝、南北45㎝、厚

さ12㎝。２号壁柱（東塀南端とＦ６基壇北壁の接続部の隅柱）の柱穴は、長さ0.27m、幅0.26m、深さ0.26m。底部の礎石は残っていない。

東塀の北部には門があり、門道南側の塀は長さ3.4m、門道北側の塀は長さ0.8m。門道は、幅1.4m、奥行0.85m。南壁と北壁の残存高は0.21m。南壁・北壁には、それぞれ東西に南北対称の２基の壁柱がある（３～６号壁柱）。３号壁柱は南壁の東側の柱で、柱穴は長さ0.26m、幅0.23m、深さ0.3m。礎石は残っていない。４号壁柱は南壁の西側の柱で、柱穴は長さ0.27m、幅0.21m、深さ0.24m。礎石は残っていない。５号壁柱は北壁の東側の柱で、柱穴は長さ0.27m、幅0.17m、深さ0.2m。底部の礎石は残存せず、円形の据付穴が残り、直径0.54m、深さ0.03m。６号壁柱は北壁の西側の柱で、柱穴は長さ0.25m、幅0.2m、深さ0.2m。礎石は残っていない。　門

門道南壁の東柱と北壁の東柱の間には木製敷居があり、溝状の痕跡だけが残る。溝は長さ1.35m、幅0.21m、深さ0.05m（図版32－１）。　木製敷居

7　南院東北部の遺構

Ｆ７の北側と、Ｆ６およびその北面の通路より東には磚敷の面があり、現在は６点だけ敷磚が残る。磚は一辺34.5㎝、厚さ4.5㎝。磚敷面の西縁に沿って長方形の見切り磚があり、南部に３点、北部に１点のみ残る。磚は長さ30～34㎝、幅20㎝、厚さ４㎝。　磚敷面

磚敷面の西南隅には隅柱（１号隅柱）があり、柱穴は長さ0.35m、幅0.07m、深さ0.08m。礎石は残っていない。この隅柱の北5.3mには壁柱（２号壁柱）があり、柱穴は長さ0.3m、幅0.2m、深さ0.2m。底部の礎石は花崗岩製で、東西35㎝、南北47㎝、厚さ12㎝。磚敷面の東縁には、南北に二つの花崗岩製礎石（３・４号礎石）がある。３号礎石は、Ｆ７基壇北端の北5.2m、磚敷面西縁の東4.1mに位置する。不整形で、東西45㎝、南北38㎝、厚さ11㎝。４号礎石は、３号礎石の北5.2mに位置し、東西43㎝、南北54㎝、厚さ12㎝。

磚敷面の北面には東西方向の木製敷居があり、溝状の痕跡だけが残る。溝は長さ3.7m、幅0.2m、深さ0.07m。溝の東西両端には、花崗岩製の礎石が一つずつある。東端の礎石（５号礎石）は東西35㎝、南北34㎝、厚さ12㎝。この北面に接して、小礎石（６号礎石）があり、東西16㎝、南北28㎝、厚さ11㎝。西端の礎石（７号礎石）は不整形で、東西32㎝、南北36㎝、厚さ12㎝。この北面に接して小礎石（８号礎石）があり、東西30㎝、南北27㎝、厚さ９㎝（図版32－２）。　木製敷居

Ｆ７北側の東部には、東西方向の溝が２条、南北に並んでいる。溝の中には赤い焼土がつまり、溝とその南にあるＦ７北の版築塀との間は、全体に磚敷の痕跡がある。南側の溝の西端は、版築塀の西端から西0.5m、版築塀から北0.65mにあり、長さ3.95m、幅0.2m、深さ0.06m。北側の溝は南側の溝から0.6m離れ、長さ4.9m、幅0.2m、深さ0.08m。北溝の西部には、南北方向の赤い焼土の入った溝があり、長さ1.65m、幅0.2m、深さ0.6m。北溝の北3.7mには、花崗岩製の礎石が一つある。不整形で、東西30㎝、南北40㎝、厚さ８㎝。

磚敷面と南院建築遺跡の東塀との距離は11.4mで、その間には無文の敷磚が散乱して残っている。磚は一辺34.5㎝、厚さ4.5㎝。

8　給排水施設

井　戸　Ｊ１とした。南院の西北部にあり、正殿基壇西面の雨落の西0.2m、南院北塀の南9.4mに位置する。井戸周りは方形で、一辺3.0m。磚敷の痕跡が残る。外縁に沿って見切り磚があり、残存長10～33.5cm、厚さ４～4.5cm。井戸の掘方は井戸周りの中央にあり、掘方から井戸周りの縁までは0.8m、深さは5.0mである。掘方の直径は1.4mで、深さ3.7mから井戸底までは直径0.72mにすぼまる。その深さまでは、井戸の壁面に扇形の磚が積まれていた。扇形磚は、外弧の長さ35.2～37cm、内弧の長さ28.5～30cm、幅13.3～13.6cm、厚さ6.2～6.5cm。深さ3.7m以下では、陶製の井戸枠を４段積んでいる。井戸枠は、全高0.73m、内径72cm、外径77cm、高さ17.5～19cm、器壁の厚さ2.5cm。井戸枠の外面には縄目文が施され、内面は方格文か無文である。井戸枠の外壁と井戸掘方の間には土が充塡されている。最下段の井戸枠の下端から井戸底までの0.57mは、地山の壁である。井戸内からは、大量の扇形磚のほか、井戸枠の破片や五銖銭などの遺物が出土している（第47図、原色図版14－１）。

陶製井戸枠

排水施設　排水施設としては、排水穴と排水暗渠がある。

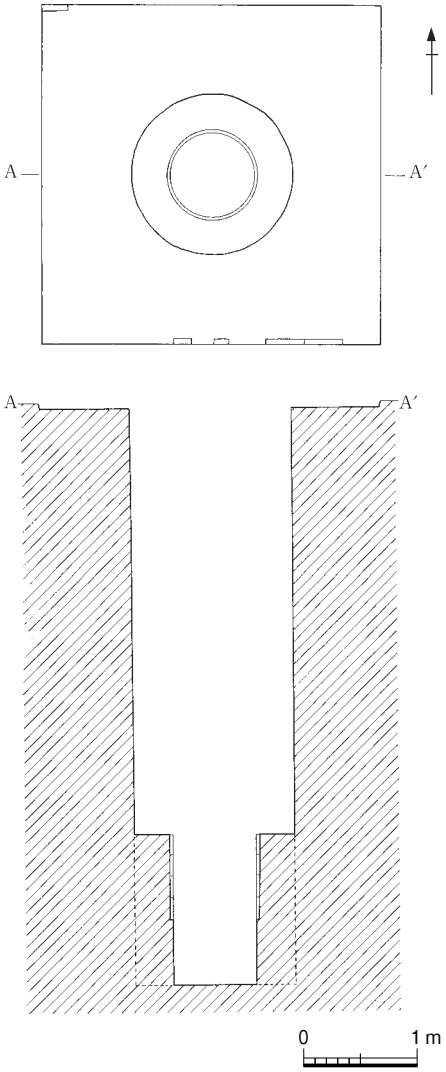
排　水　穴

排水穴は南院東壁の西３mにあり、西隣はF７となる。ほぼ方形で、外側の一辺0.94～0.97m、内側の一辺0.6m、底部の一辺0.65～0.67m、深さ0.94mである。

排水穴の四壁には長方磚が積まれている。磚は長さ38cm、幅18cm、厚さ９～10cm。四壁の磚はすべて、上下が互い違いに組み合うように平積みされる。東壁の磚積みは９段が残り、全高0.86m。西壁の磚積みは10段が残り、全高0.93m。南・北壁の磚積みは10段が残り、全高0.94m。排水穴の底部は磚敷である。中心には方磚が一つあり、一辺35cm、厚さ５cm。方磚の四面に沿って、長方磚を一つずつ敷いている。長さ35cm、幅15cm、厚さ９cm。方磚の四隅の外側に敷かれた磚は不整形である（第48図、図版33－１）。

排水暗渠

排水穴の東0.5mには、南北方向の排水暗渠が１条ある。残存長3.5m、全高0.39m、深さ0.35m、全幅0.25m、内幅0.18m。



第47図　２号建築南院井戸平面図・断面図

排水暗渠の上部には、南院の磚敷面と同じ高さに磚で蓋をしている。上部の磚は２点が残り、どちらも無文磚である。排水暗渠の底部は混成土で固め、東西両壁にはともに磚を立て並べる。西壁にはそうした磚が８点残り、南から２番目の磚が幾何学文磚である以外は、すべて無文磚である。磚は一辺34～35cm、厚さ3.7～４cm。東壁の磚は４点が残っており、一辺35cm、厚さ3.5～４cm（第49図、図版33－２）。

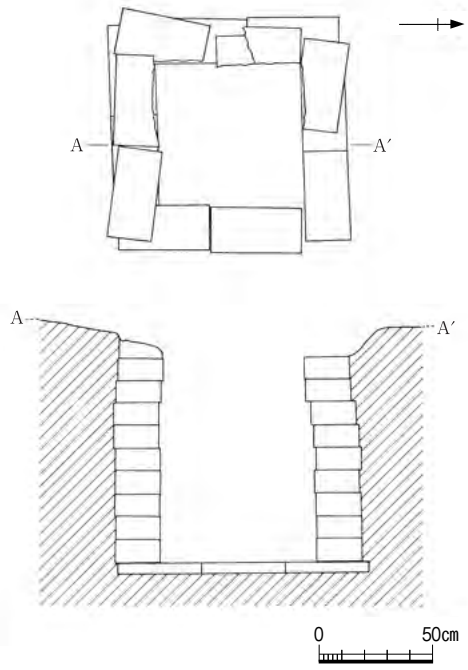
南院には、南院北塀西部の北門の門道から4.2m西にも排水暗渠が１条ある。やはり南北方向で、北塀南面の廊道の上面より0.07m下にある。残存長3.2m、全高0.15m、深さ0.1m、全幅0.33m、内側の幅0.24m。東西両壁に磚を並べ、上部は磚で蓋をする。底部は磚敷である。東壁には磚が９点残り、南から６番目の磚が小方格文磚である以外は、すべて無文磚である。長さ34～36.5cm、幅21～24cm、厚さ4.5cm。北端の磚は、南院北塀の内側に0.06m入り込む。西壁にも磚が９点残り、長さ31～36.5cm、幅20～22cm、厚さ4.5cm。すべて無文磚である。排水暗渠の上部に蓋をした磚もすべて無文磚で、８点が残る。長さ32.5～36cm、幅34.5～36cm、厚さ4.5～５cm。北端の磚は、南院北塀の内側に0.06m入り込む。この磚の上には、北塀の南面に貼りつけた磚が１点あり、塀を保護している。この磚の上縁は弧形で、磚の底縁の長さ30cm、中部の高さ14cm、厚さ4.5cm。排水暗渠の底部の敷磚もすべて無文磚で、９点が残る。長さ34cm、幅24cm、厚さ4.5cm（第50図、図版34）。

暗渠構築法

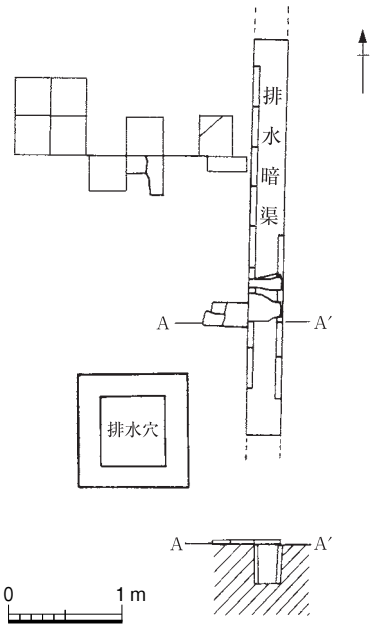
排水暗渠の構築にあたっては、最初に溝を掘り、底部に磚を敷く。ついで、底部磚の東西両側の面に磚を並べ、磚の上縁は底部の磚面より0.1m高く出す。残りの部分は土中に埋め込む。そして、東西両壁の磚の上に蓋となる磚をのせている。

五角形土管

断ち割り調査の結果、排水暗渠は南院北塀内で、南・北二つの五角形土管がつながっているこ

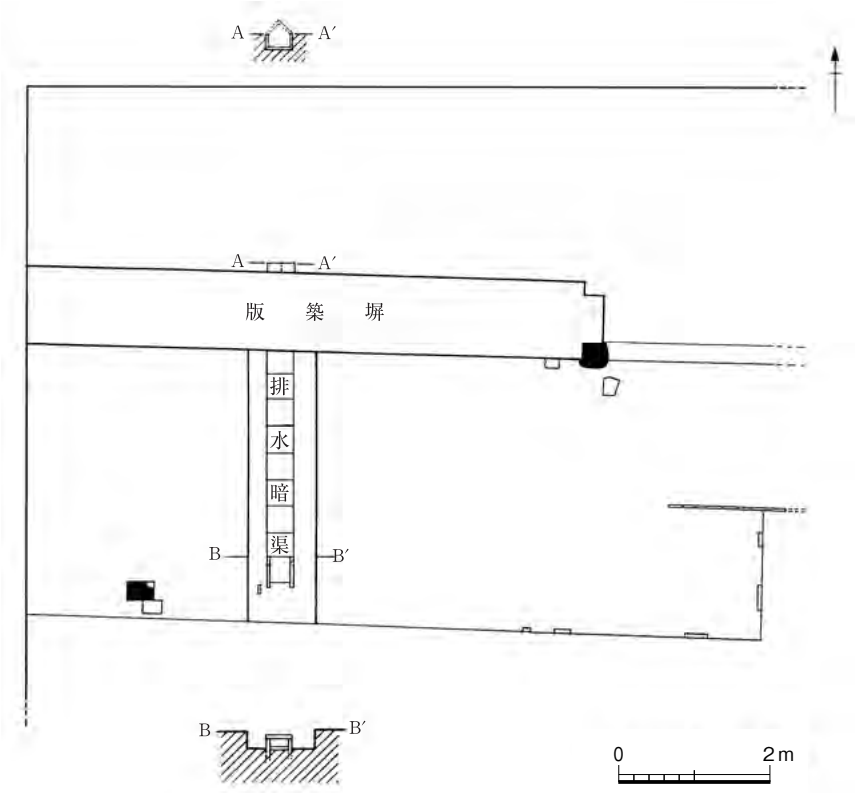


第48図　２号建築南院排水穴平面図・断面図



第49図　２号建築南院東部排水暗渠平面図・断面図

とが判明した。南の土管は上部が一部残存しているが、北の土管の上部は残っていない。両土管の東壁の外側には磚片や平瓦片が貼りつけられ、土管の外面全体には斜めの太い縄目が施される。内面は大部分が無文で、部分的に方格文が施されている。南の土管は、長さ55㎝、全高32.5ｍ、内側の高さ28㎝、全幅32㎝、内側の幅25.5㎝。東・西の壁はともに高さ24㎝で、東壁の厚さ2.5㎝、西壁の厚さ３㎝、底部の厚さ2.5㎝。北の土管は、長さ58.5㎝、残存高25㎝、内側の残存高23㎝、全幅32.5㎝、内側の幅27.5㎝。東西の壁はともに高さ20㎝、厚さ２㎝、底部の厚さ2.5㎝。五角形土管と排水暗渠の接続部の深さは11.5㎝である。



第50図　２号建築南院西部排水暗渠平面図・断面図

第２節　北院の遺構

２号建築北院は東西長84m、南北幅46mで、面積は3,864㎡である。この中心となるのは正殿基壇で、基壇の四周には壁柱遺構と、周囲をめぐる廊道・雨落がある。基壇の中央部と東部には、地下通路が２か所と地下室が一つある。また、正殿基壇の南と北には、それぞれ通路や中庭、庭院などの遺構がある（第52図、原色図版16～18・19－１、図版35～38）。

１　土　　層

遺跡の基本層序は、Ｔ７北壁を例にとると次のとおりである（第51図）。

第１層：耕作土層。灰色を呈し、土質は軟らかい。厚さ0.14～0.26m。

第２層：攪乱層。浅黄色で、土質は比較的硬い。地表下0.14～0.46m、厚さ0.12～0.27m。

第３層：漢代遺物包含層。建築物が倒壊して堆積した層である。淡灰色土で、土質は軟らかい。地表からの深さ0.29～0.47m、厚さ0.09～0.29m。大量の漢代瓦磚のほか、鉄釘や銭貨などを含む。

第４層：漢代の地表面および建築遺構面である。

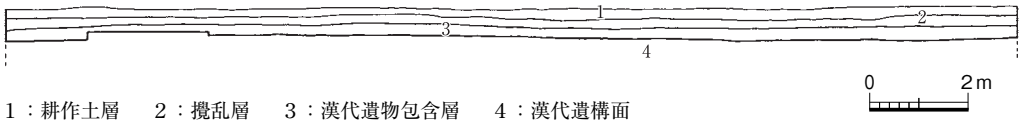
２　正　　殿

A　建物基壇

正殿は北院の中央部に位置する。基壇は東西長は77.5m、南北幅20～32m、残存高0.07～0.48m。基壇の四周には壁柱があり、周囲に廊道と雨落、犬走りがある。基壇は版築で築かれ、版築土の西壁は日干煉瓦が積まれている。日干煉瓦は長手を南北向きにし、東西に２列並べて平積みしている。日干煉瓦は長さ44～48㎝、幅23～26㎝、厚さ９～15㎝。日干煉瓦の外側には細かい粘土を塗る。粘土の厚さは平均２㎝。　版築基壇

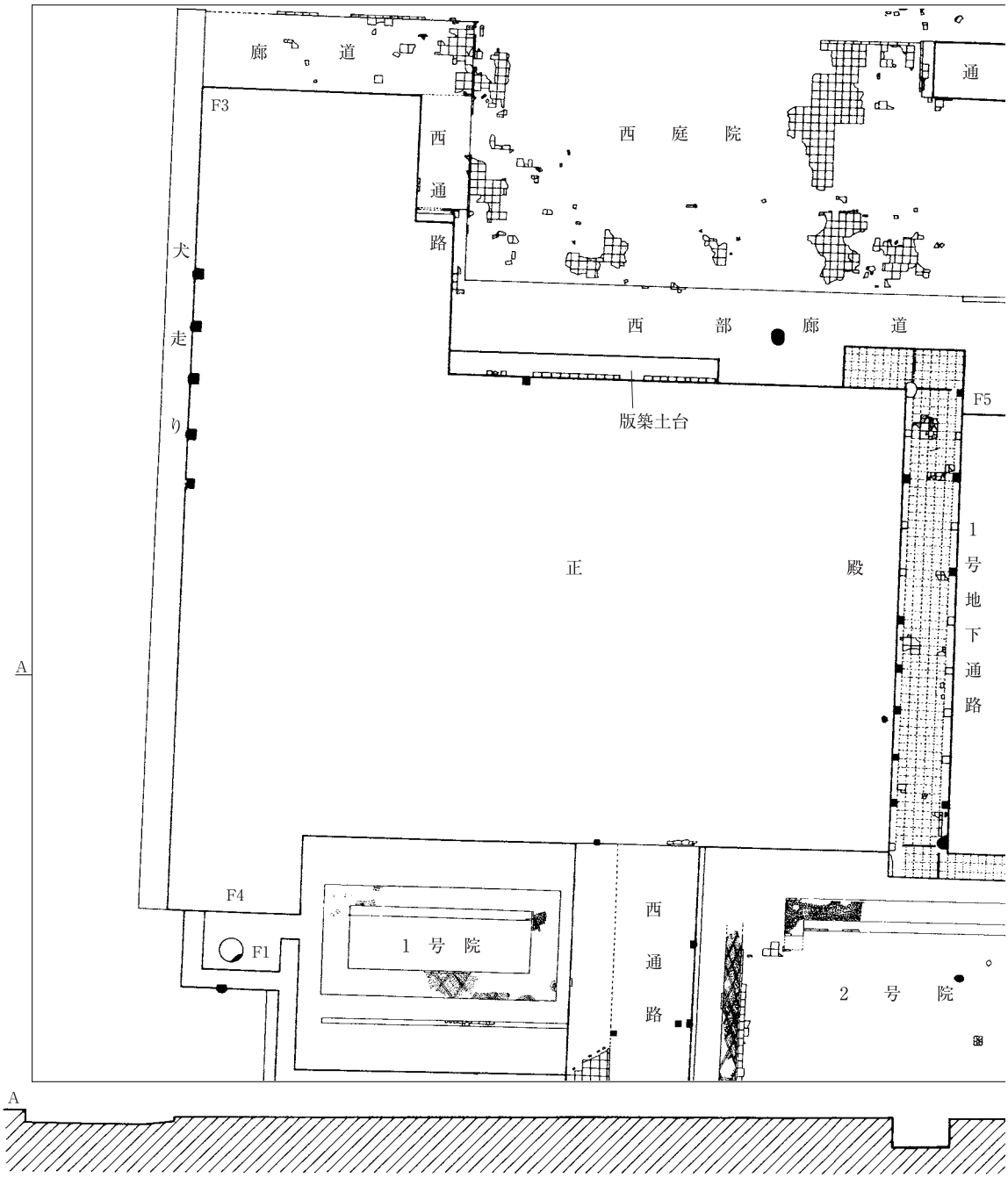
正殿基壇の南壁には、北から南に３度の勾配で敷かれた無文磚が４点残る。このうち西端の磚の西縁は、基壇西壁の東21.3mにある。磚は長さ23～33㎝、幅16～18㎝、厚さ４㎝。

正殿基壇の北壁外面には、南から北に５度の勾配で幾何学文磚が敷かれ、文様を上に向ける。磚敷の東縁は正殿基壇西壁から東22.8mにあり、磚は21点が残存する。磚は長さ13.4～39.6㎝、幅５～16.4㎝、厚さ３㎝。磚敷の東西長（磚敷の痕跡も含む）は11.5m。この北側には長方形の版

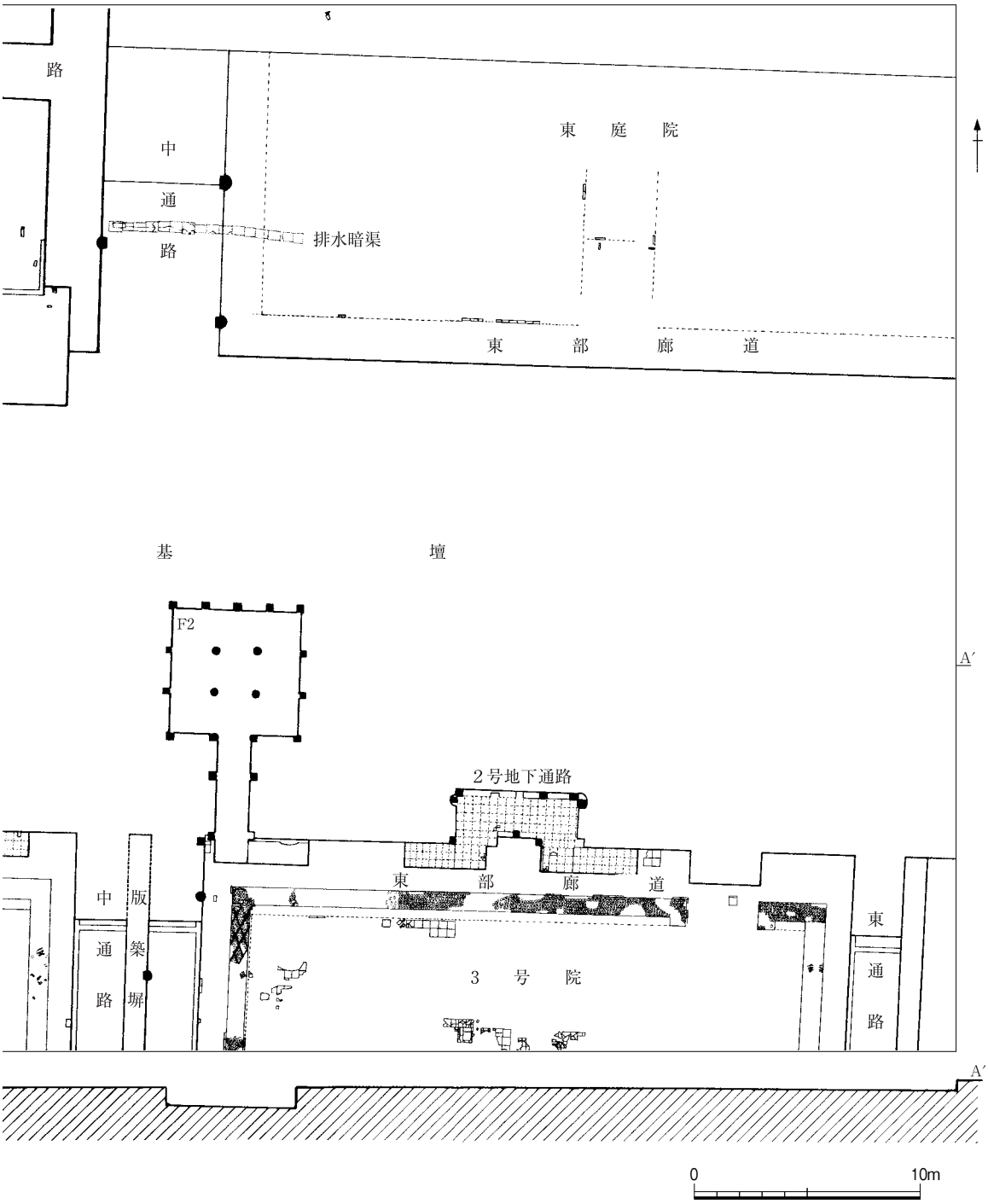


１：耕作土層　２：攪乱層　３：漢代遺物包含層　４：漢代遺構面

第51図　２号建築北院Ｔ７北壁土層図



第52図　２号建築北院平面図・断面図


路
中
通
路
排水暗渠
東　庭　院
東　部　廊　道
基　壇
F2
A′
２号地下通路
東　部　廊　道
中
通
路
版
築
塀
３　号　院
東
通
路
A′
0
10m

版築土台　築土台があり、長さ11.5m、幅0.85m（外縁の日干煉瓦を含む）。土台の外縁には日干煉瓦を東西方向に１列平積みする。日干煉瓦は長さ46cm、幅23cm、厚さ10～13cm（図版39－１）。

基壇の壁柱　正殿基壇の西壁には壁柱の柱穴が５基残り、北から南に１～５号とした（図版39－２）。礎石の大部分は花崗岩製である。１号壁柱は、正殿基壇西北角の南7.9mに位置する。柱穴は長さ0.27m、幅0.3m、深さ0.19m。底部の礎石は不整形で、東西50cm、南北50cm、厚さ20cm。２号壁柱は、１号壁柱の南2.25mに位置する。柱穴は長さ0.28m、幅0.3m、深さ0.16m。底部の礎石は不整形で、東西61cm、南北60cm、厚さ19cm。３号壁柱は、２号壁柱の南2.25mに位置する。柱穴は長さ0.27m、幅0.3m、深さ0.16m。底部の礎石は不整形で、東西40cm、南北41cm、厚さ20cm。４号壁柱は、３号壁柱の南2.37mのところに位置する。柱穴は長さ0.27m、幅0.25m、深さ0.22m。底部の礎石は不整形で、東西61cm、南北65cm、厚さ26cm。５号壁柱は、４号壁柱の南2.1mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.27m、深さ0.23m。底部には不整形の青石の礎石断片があり、東西19cm、南北11cm、厚さ５cm。

正殿基壇の南壁には壁柱の柱穴が１基あり、６号壁柱とした。基壇西壁の東18.15mに位置する。柱穴は長さ0.2m、幅0.24m、深さ0.02m。底部の礎石は不整形の花崗岩製である。東西48cm、南北47cm、厚さ９cm。

正殿基壇の北壁には壁柱の柱穴が１基あり、７号壁柱とした。３号壁柱の東14.3mに位置する。柱穴は長さ0.35m、残存する深さ0.05m。底部の礎石は不整形の花崗岩製で、東西63cm、南北54cm、厚さ20cm。

B　廊道と雨落

正殿基壇の南面と北面には廊道があり、西面には犬走りがある。

南面の廊道　正殿基壇南面の廊道は幅2.0～2.2mで、正殿に上る通路に隔てられているため、廊道は西・中・東の三つの部分に分かれる。西部の廊道は長さ11.7m、幅２mで、磚敷の痕跡がある。その南にある雨落は長さ10.15m、幅0.9m。雨落内には平瓦片を立てて埋め込み、瓦片は長さ４～15cm、厚さ0.8～1.8cm。雨落北縁には見切り磚が１点残り、長さ33cm、厚さ4.1cm。雨落南側には東西方向の磚敷の痕跡が１列あり、長さ7.8m、幅0.4m。その南縁の東部には見切り磚が一つ残り、長さ25.5cm、厚さ4.6cm。中部の廊道は長さ16.3m、幅2.1mで、やはり磚敷の痕跡がある。その南側にある雨落は長さ11.6m、幅0.9mで、雨落の中には河原石が敷き詰められているが、河原石は雨落西部だけに残る。雨落北縁には見切り磚が３点遺存する。磚は長さ14～32cm、幅4.5cm。すべて無文磚である。雨落南側には磚敷の痕跡が東西方向に１列あり、長さ10m、幅0.45m。その南縁には見切り磚が５点残る。磚は長さ33.1～35cm、厚さ4.3～4.7cm。１点の無文磚を除いて、すべて方格文磚である。東部の廊道は長さ28.8m、幅2.2m。敷磚があり、４点が現存する。磚は長さ36cm、幅35.8cm、厚さ4.5cm。その南側の雨落は長さ26.4m、幅0.9m。雨落内には河原石を敷き詰めており、河原石は長さ9.3～13cm、幅５～8.2cm、厚さ３～5.8cm。雨落西縁には見切り磚が１点残り、磚は長さ33.3～34.4cm、厚さ4.3～５cm。雨落南縁には３点の見切り磚が残り、磚は長さ33～34.5cm、厚さ4.5cm。すべて無文磚である。雨落の南側には東西方向の磚敷の痕跡が１列あり、東西長24.7m、幅0.45m。磚敷の南縁には見切り磚が２点残り、西側の磚は長さ35cm、幅4.5cm、東側の磚は長さ33.6cm、幅4.9cm、いずれも無文磚である。また、上述した磚敷

の南側には、東西方向の磚敷が２列あり、１本の東西方向の磚敷通路を構成している。長さ24.7m、幅0.8m。無文の敷磚が９点残存し、磚は一辺34.5cm、厚さ４～4.5cm（原色図版19－２・20、図版40－２）。

正殿基壇北面の廊道は、正殿に上る通路によって東と西の両部分に分かれる。西部の廊道は東西長22.1m、幅４m。廊道には大型の礎石が一つある（８号礎石）。花崗岩製で、廊道の西端から東に13.8m、正殿基壇から北へ2.6mに位置する。不整円形で、東西50cm、南北47cm、厚さ11cm。東部の廊道は長さ33m、幅２mで、磚敷の痕跡がある。　北面の廊道

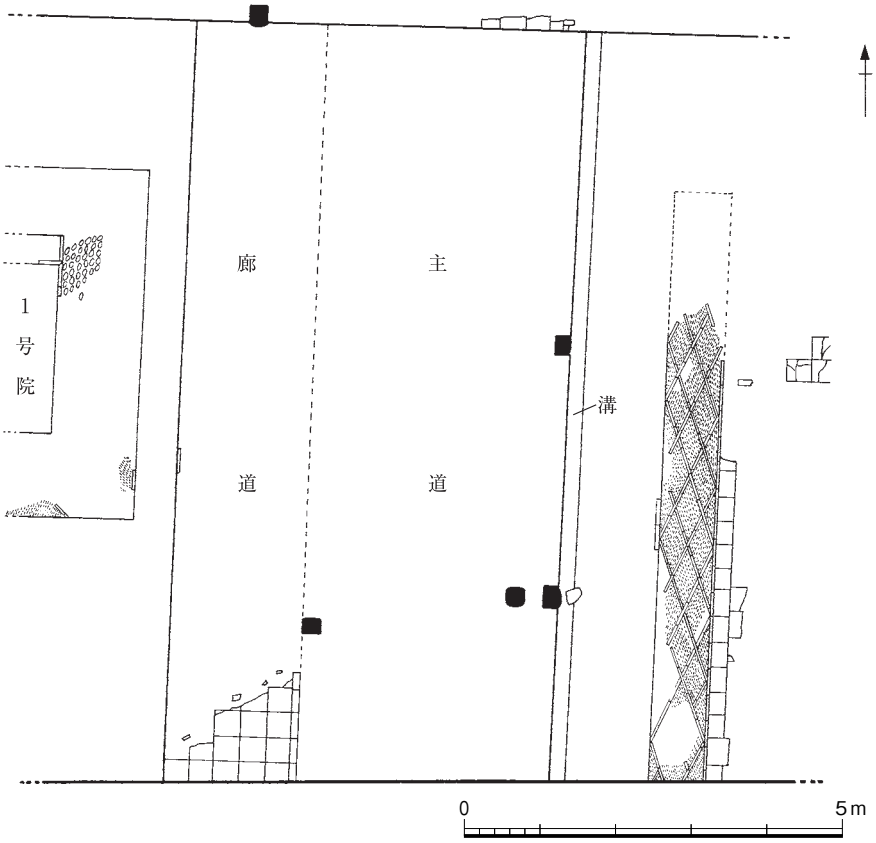
正殿基壇西北部の、北に突出した部分の廊道は東西長11.6mで、南から北に４度の勾配をもつ。斜面の南北長は3.3m。斜面上の敷磚は無文磚と幾何学文磚の２種あり、幾何学文磚はすべて文様を下に向けて敷かれている。磚は一辺34cm、厚さ4.5cm。廊道北縁には東西方向の見切り磚が16点残る。磚は長さ21.7～35cm、厚さ4.5cm。すべて無文磚である（図版40－１）。

正殿基壇の西面には東西に４度の勾配をもつ犬走りがあり、斜面の長さは1.2mである。　犬　走　り

C　通　路

正殿基壇の南面と北面には、それぞれ三つの通路がある。

正殿基壇南面の西通路　西通路は南院と北院をつなぐ重要な通路で、正殿基壇西壁の東17.5mに位置する。南北10.3mにわたって検出し、東西幅は5.25mである。通路は、主道と廊道の二つの部分に分かれる（第53図、原色図版21－１、図版41－１）。主道は東にあり、幅3.45mで、磚敷の痕　西通路主道



第53図　２号建築北院南面西通路平面図

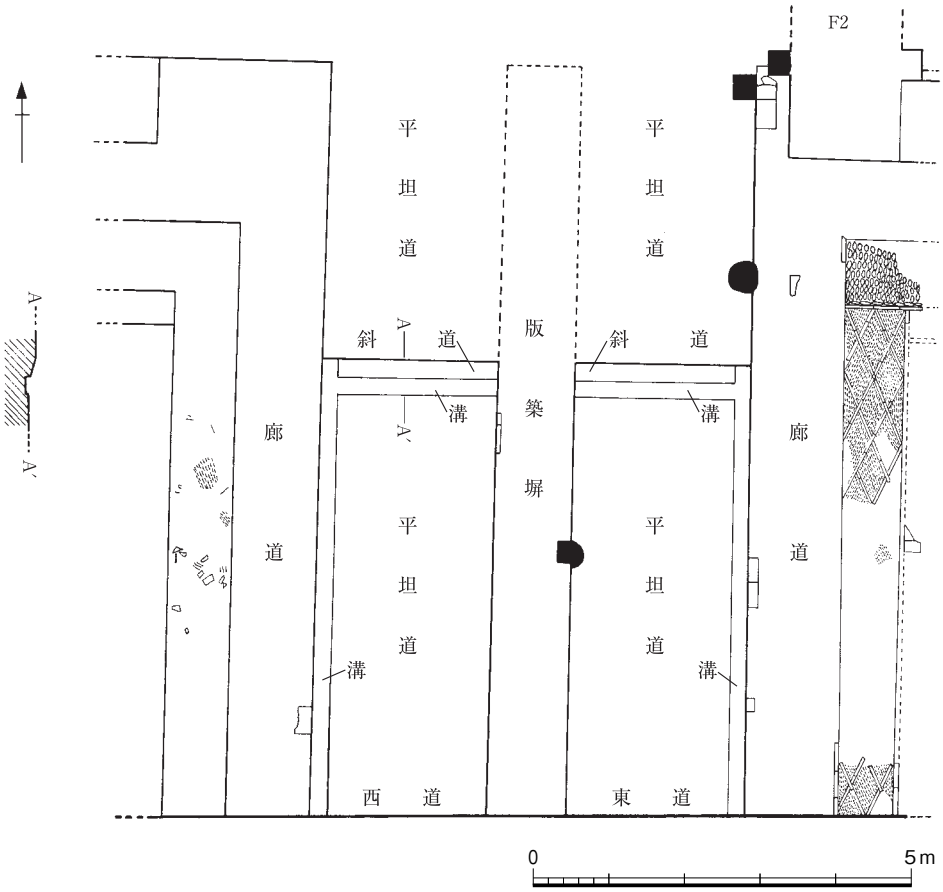
跡がある。主道の東西の壁にはいずれも壁柱があり、礎石は花崗岩製である。東壁には２基の壁柱があり、北から１・２号壁柱とした。１号壁柱は、通路北端の南4.2mに位置する。柱穴は長さ0.23m、幅0.26m、深さ0.02m。底部の礎石は長方形で、東西78cm、南北71cm、厚さ16cm。２号壁柱は、１号壁柱の南3.4mに位置する。柱穴は長さ0.24m、幅0.27m、深さ0.05m。底部の礎石は不整形で、東西30cm、南北44cm、厚さ16cm。この壁柱の西0.24mには支柱穴が一つあり、３号柱とした。柱穴は方形で、一辺0.18m、深さ0.01m。底部の礎石は不整形で、東西24cm、南北38cm、厚さ11cm。主道の西壁には１基だけ壁柱の柱穴が残り、４号壁柱とした。通路北端から南へ8.1mに位置する。柱穴は方形で、一辺0.24m、深さ0.02m。底部の礎石は不整形で、東西29cm、南北36cm、厚さ５cm。

西通路廊道　通路の廊道は主道の西側にあり、幅1.8m。磚敷は南端近くに残っており、すべて無文磚である。磚は一辺33.5cm～33.8cm、厚さ3.5cm～４cm。廊道の西縁には南北方向の見切り磚が１点残り、長さ18cm、幅4.6cm。主道北縁には東西方向に５点、比較的幅の広い見切り磚が残る。磚は長さ22～34cm、幅9.4～11cm、厚さ4.5cm（図版41－２）。

西通路の東側には、南北方向の木灰を含む溝があり、長さ10.8mにわたり検出した。現代の水路と重なる部分が6.5m、ほかに南院で既発掘の部分があるので、溝の南北長は17.6m、幅0.2

木　塀　m、深さ0.08mと考えられる。この溝は木塀の痕跡であろう。

正殿基壇南面の中通路　中通路は、西通路の東14.45mに位置する。通路の中ほどには南北方



第54図　２号建築北院南面中通路平面図・断面図

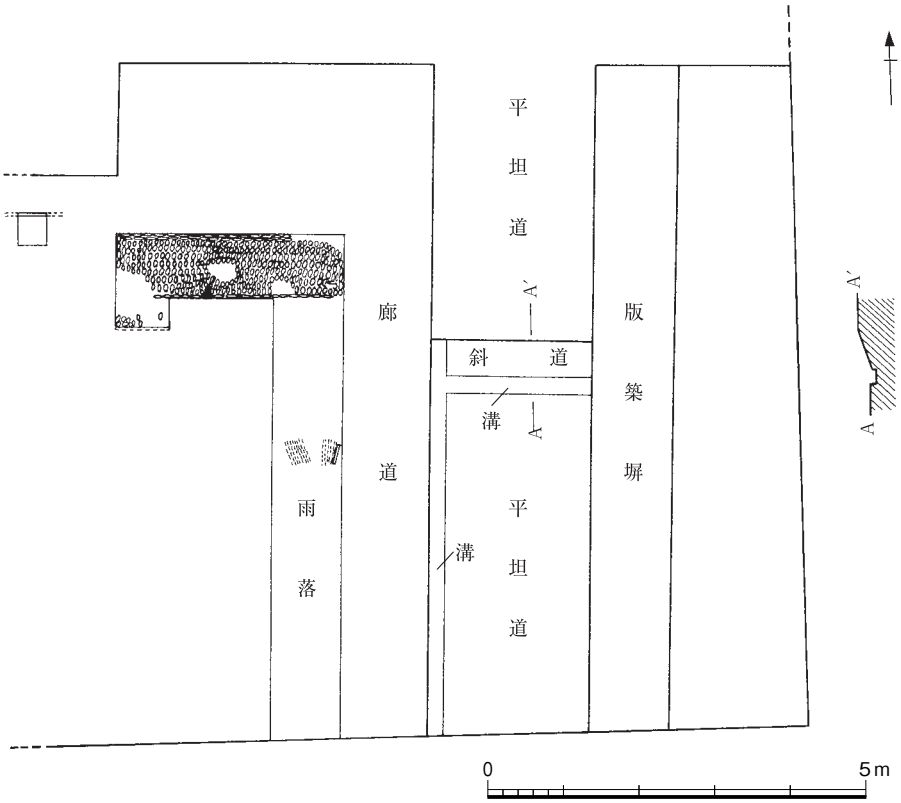
向の版築塀があり、それによって通路は東道と西道に分かれる（第54図、原色図版21－２、図版42－１）。検出した塀の長さは5.8m、その北の痕跡のみ残る部分の長さは3.8m、南は現代の水路と重なり、南院の既発掘部分が1.6mあるので、塀の全長は南北17.8mとなる。幅は1.0m、残存高は0.1～0.18mである。塀の東側壁面には壁柱の柱穴が１基あり、１号壁柱とした。東道の木製敷居の南1.8mに位置する。柱穴は長さ0.22m、幅0.14m、深さ0.33m。底部の礎石は不整形の花崗岩製で、東西41cm、南北42cm、厚さ10cm（図版42－２）。　版築塀

通路の東道は、南から北に、南部平坦道、木製敷居、斜道、北部平坦道の四つの部分に分かれる。南部の平坦道は、検出部分の長さが5.3mあり、現代の水路と重なる部分のほか、南院の既発掘部分が1.7mあるので、全長は13.5mとなる。幅は2.15mで、磚敷の痕跡が残る。平坦道の東側には、南北方向の木灰を含む溝が１条あり、検出部分の長さは5.8m。ほかに現代の水路と重なる部分と南院の既発掘部分が1.7mあるので、溝の全長は14.0mとなる。幅は0.2m、深さは0.08mである。この溝は木塀の痕跡であろう。　中通路東道

南部の平坦道の北は木製敷居であり、溝状の痕跡だけが遺存する。長さ2.15m、幅0.2m、深さ0.05m。

木製敷居の北は斜道となり、北から南に18度の勾配をもつ。斜面の長さ0.28m、幅2.15m。

斜道の北は北部平坦道で、長さ3.8m、幅2.35m。平坦道の東壁には、二つの壁柱の柱穴がある（２・３号壁柱）。２号壁柱は、東道斜面東北隅の北0.95mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.3m、残存する深さ0.1m。底部の礎石は不整形の青石製で、東西35cm、南北34cm、厚さ15cm。３号壁柱は、２号壁柱の北2.45mに位置する。柱穴は長さ0.34m、幅0.3m、残存する深さ0.87m。底



第55図　２号建築北院南面東通路平面図・断面図

部の礎石は不整形の花崗岩製で、東西45㎝、南北42㎝、厚さ21㎝。

中通路西道　通路の西道は、南から北に南部平坦道、木製敷居、斜道、北部平坦道の四つの部分に分かれる。南部平坦道は、検出した長さが5.3mあり、ほかに現代の水路と重なる部分が6.6m、南院の既発掘部分が1.5mあるので、全長は13.4mとなる。幅は2.1mで、磚敷の痕跡が残る。南部平坦道の西側には南北方向の木灰を含む溝が１条ある。検出した長さが5.8mあり、現代の水路と重なる部分、南院の既発掘部分と合わせて、溝の全長は13.8mとなる。幅は0.2m、深さは0.05mである。この溝は木塀の痕跡であろう。

南部平坦道の北は木製敷居で、溝状の痕跡だけが残る。長さ2.1m、幅0.2m、深さ0.05m。

木製敷居の北は斜道となり、北から南に18度の勾配をもつ。斜面の長さ0.28m、幅2.3m。

斜道の北は北部平坦道で、長さ3.8m、幅2.3m。

正殿基壇南面の東通路　東通路は、中通路の東28.5mに位置する。この東側は南北方向の版築塀で、長さ8.6mにわたり検出した。ほかに、現代の水路と重なる部分が6.2m、南院の既発掘部分が5.1mあるので、塀の全長は19.9mとなる。幅は1.0m、残存高0.23m。

東通路は、南から北に、南部平坦道、木製敷居、斜道、北部平坦道の四つの部分に分かれる（第55図、図版43）。

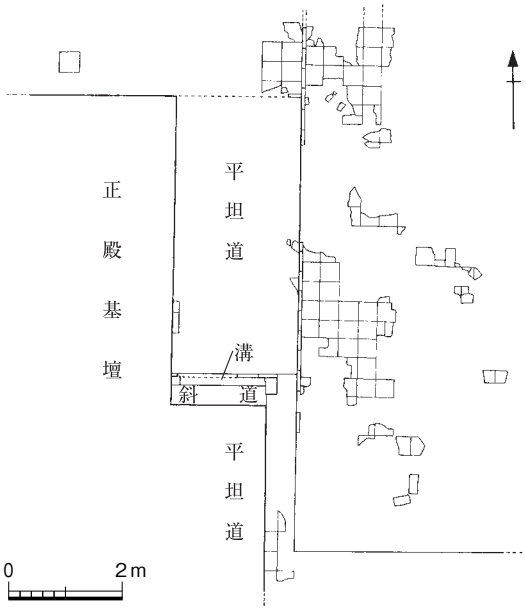
南部平坦道は長さ4.4m分を検出した。ほかに現代の水路と重なる部分が6.3m、南院の既発掘部分が4.9mあるので、全長は15.6mとなる。幅は2.0mで、磚敷の痕跡がある。平坦道の西側には、南北方向の木灰を含む溝がある。検出部分は長さ5.2m、現代の水路と重なる部分と南院の既発掘部分をあわせた全長は14.4mとなる。幅は0.2m、深さは0.08mである。この溝は木塀の痕跡と考えられる。

南部平坦道の北は木製敷居で、溝状の痕跡だけが残る。長さ2.0m、幅0.2m、深さ0.05m。

木製敷居の北は斜道となり、北から南に20度の勾配をもつ。斜面の長さ0.55m、幅２m。

斜道の北は北部平坦道で、長さ3.6m、幅2.2m。

正殿基壇北面の西通路　西通路は、正殿基壇の西北、正殿基壇西壁の東9.5mに位置する。通路の長さは12m、幅は南部で1.7m、北部で2.2m。北から南に、北部平坦道、木製敷居、斜道、南部平坦道の四つの部分からなる（第56図、原色図版22－１、図版44－１）。北部平坦道は長さ5.0m、幅2.2mで、磚敷の痕跡がある。平坦道の北縁には東西方向の見切り磚が１点残る。残存長26㎝、幅4.5㎝。平坦道の西縁には、比較的幅広い南北方向の見切り磚が２点残る。長さ18㎝、幅12㎝、厚さ4.5㎝。平坦道の南縁には３点の見切り磚が残り、南縁東端の見切り磚が幾何学文磚である以外は、いずれも無文磚



第56図　２号建築北院北面西通路平面図

を立て並べたものである。

北部平坦道の南は木製敷居で、溝状の痕跡だけが残る。長さ15.5m、幅0.15m、深さ0.09m（図版44－２）。溝の東側には１点、特殊な形をした磚がある。磚の一つの角が外に向かってそれぞれ１cmと５cm、突出している。無文磚で、長さ27.8cm、幅18.4cm、厚さ4.5cm。門の軸吊孔をもつ磚であろう。

溝の南は斜道で、南から北に19度の勾配をもつ。斜面の長さ0.4m、幅1.65m。

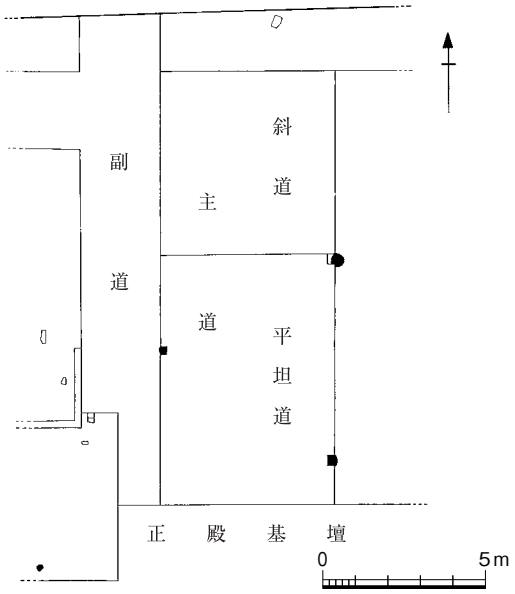
南部平坦道は、長さ6.5m、幅1.7m。この西壁には南北方向に瓦片を貼りつけている。瓦片は長さ６～10cm、幅12cmで、凸面の縄目を東に向ける。南部平坦道の東壁南端から北部平坦道南縁の東部までの長さは7.1mである。平坦道の東には0.5mの幅で南北方向に２列の長方磚が敷かれ、西列に２点の敷磚が残る。

正殿基壇北面の中通路　中通路は、西通路の東25.2mに位置する。東側の主道とその西の副道からなる（第57図、原色図版22－２、図版45）。

主道は南と北の二つの部分に分かれる。南部は平坦道で、長さ7.6m、幅5.35m。平坦道の東壁と西壁には計３基の壁柱の柱穴がある（１～３号壁柱）。底部の礎石はすべて不整形の花崗岩製である。１号壁柱は、平坦道東北隅の隅柱で、柱穴は長さ0.2m、幅0.16m、残存する深さ0.08m。礎石は東西38cm、南北41cm、厚さ８cm。２号壁柱は、１号壁柱の南5.87mに位置する。柱穴の長さ0.3m、幅0.2m、残存する深さ0.22m。礎石は東西41cm、南北55cm、厚さ15cm。３号壁柱は主道の西壁柱で、平坦道西南角の北4.6mに位置する。柱穴は長さ0.23m、幅0.2m、深さ0.03m。礎石は東西51cm、南北48cm、厚さ10cm。主道の北は斜道で、南から北に３度の勾配をもつ。斜面の長さ5.95m、幅5.35m。主道の東は廊道で、長さ13.5m、幅2.0m。　中通路主道

主道の西の副道は、検出した分の長さが5.35m、幅2.5m。副道の西壁には、南北方向の木灰を含む溝が１条あり、その北端は副道南端の北4.9mに位置する。溝は長さ2.5m、幅0.2m、深さ0.07mで、木塀の痕跡と考えられる。溝の南端は、東西方向の木灰を含む溝（正殿基壇北面の西廊道の東部北縁の溝）の東端と接続する。この東西方向の溝は、長さ3.75m、幅0.2m、深さ0.08mで、やはり木塀の痕跡と考えられる。　中通路副道

正殿基壇北面の東通路　東通路は、中通路の東側15.9mに位置する。長さは不明であるが、東西の二辺に残存する見切り磚で測った東西幅は3.1mである。通路の東縁には二つの見切り磚が残る。磚は長さ15cmと25cm、厚さ4.5cm。通路の西縁にも二つの見切り磚が残り、長さは34cmと33cm、厚さ4.5cmである。通路には磚敷の痕跡がある。



第57図　２号建築北院北面中通路平面図

3　付属建物

桂宮２号建築北院では、付属建物と地下通路があわせて七つ発見された。

A　付属建物F５･F４･F３

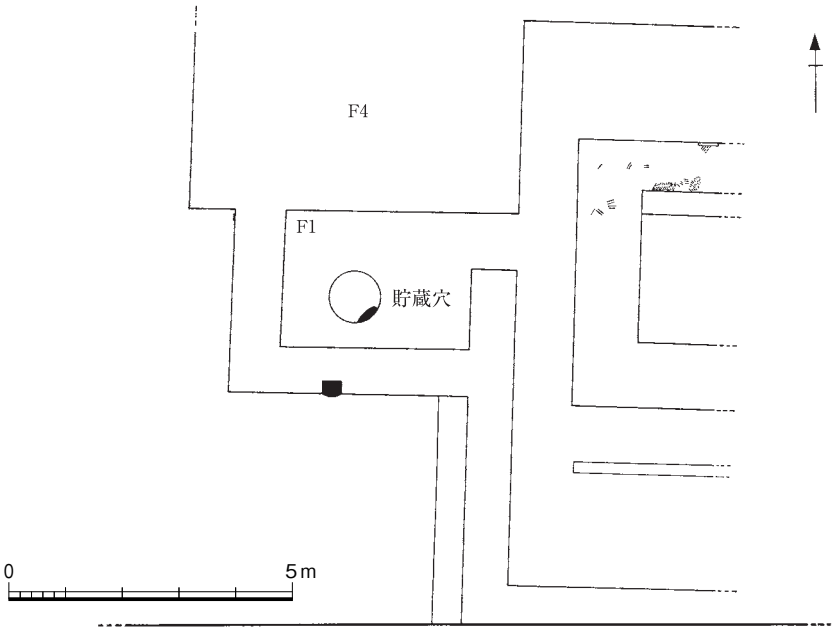
付属建物F５は、正殿基壇北面の西部の廊道の東、１号地下通路北門道の東側に位置する。わずかに基礎が残るのみで、上部構造は明らかでない。平面は正方形で、一辺5.0m。西北に入口があり、幅は2.1m。また、東北にも入口があり、南北方向の通路の副道とつながっている。入口は幅1.1m、奥行0.45m。入口内には、無文磚の磚敷が２点だけ残る。磚は残存長15㎝、残存幅20㎝、厚さ４㎝。この建物は門房と考えられる。

付属建物F４は、正殿基壇の西南部に位置する。基礎だけが残り、上部構造は不明である。長さ5.8m、幅3.4m。この建物もまた門房と考えられる。

付属建物F３は、正殿基壇の西北部に位置し、基壇の北に突き出た部分にあたる。基礎だけが残り、上部構造は不明である。長さ12m、幅9.5m。この建物も門房と考えられる。

B　付属建物F１

正殿基壇西南角の外側、付属建物F４の南にある。東向きで、幅2.4m、奥行3.3m。F１の北壁は正殿基壇の南壁で、長さ4.1m、残存高0.12m。西壁は正殿基壇西南角の東0.8mにあり、長さ3.0m、幅0.9m、残存高0.08m。西壁の北端に貼られた平瓦片が１点残る。長さ11㎝、厚さ1.5㎝。南壁は長さ4.2m、幅0.8m、残存高0.05～0.12m。南壁の西端から東へ1.65mの位置に壁柱の柱穴（１号壁柱）があり、柱穴は長さ0.3m、幅0.18m、残存する深さ0.05m。底部の礎石は不



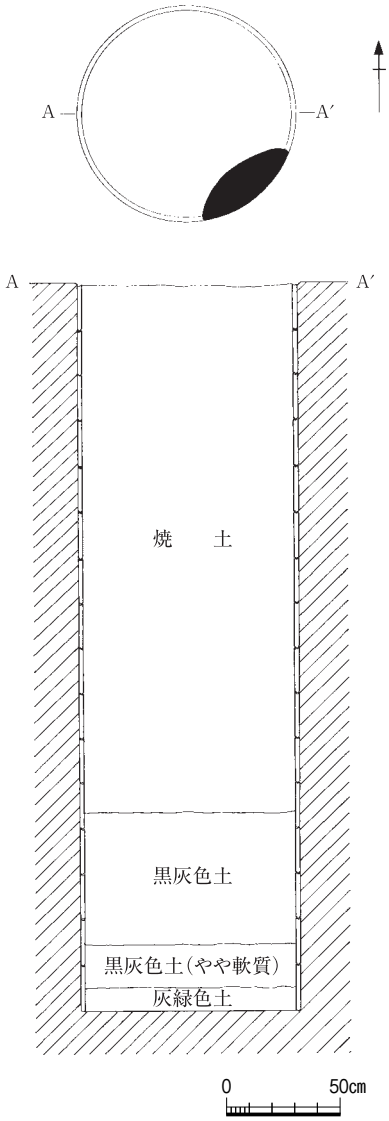
第58図　２号建築北院F１平面図

整形の花崗岩製で、東西43㎝、南北39㎝、厚さ９㎝。東壁は長さ2.2m、幅0.8m、残存高0.05mである。東壁の北端に入口があり、幅1.0m、奥行0.8m（第58図、図版46－１）。

Ｆ１内には、西壁から東に0.8m、南壁から北へ0.4mの位置に、貯蔵穴が１基ある。版築土中に掘られており、内径0.94m、外径0.98m。貯蔵穴の壁には陶製の円形の井戸枠を16段積み上げており、一つの井戸枠は高さ19.5～21㎝、厚さ２㎝。枠の外面には斜めの太い縄目、内面には一つの珠文を加えた菱形文が施される。貯蔵穴の底までの深さは3.3mで、底面には磚敷の痕跡が残る。深さ2.4mまでは赤い焼土層で、漢代の幾何学文磚、平瓦・丸瓦、瓦当などが大量に出土した。その下の深さ3.0mまでは黒灰色土で、漢代の瓦が少量出土した。それ以下の深さ3.2mまでは黒灰色の埋土で締まりがなく、瓦は出土していないが、猪、鶏、羊、魚、ネズミなどの動物骨が多く出土した。最下部の0.1mは灰緑色土のきれいな埋土であり、貯蔵穴の底は淡黄色の粘土である。この穴の貯蔵品はおもに肉類であったと考えられる（第59図、図版46－２）。

貯蔵穴

動物骨



第59図　２号建築北院Ｆ１内貯蔵穴
平面図・断面図

C　付属建物Ｆ２

この建物は地下室で、その門道の西南隅は正殿基壇南面の中通路の東に0.4mに位置する。南向きで、門道、通路、主室からなる（第60図、原色図版23－１、図版47・48）。

門　道　門道は通路の東側にあり、東から西に17.5度の勾配をもつ。斜面の長さ2.74m、幅1.1mで、磚敷の痕跡がある。斜面の南と北の壁は版築土で、外面にはスサ入り粘土の壁土を約１㎝の厚さで塗っている（図版49－１）。

通　路　通路は門道の西側にある。平面は南北に長い長方形で、長さ5.6m、幅1.45m、東西両壁の高さ0.9m。両壁は版築土で、外面を日干煉瓦で覆う。日干煉瓦は南北方向に平積みされ、９段が残る。日干煉瓦は長さ46㎝、幅60㎝、厚さ約10㎝。日干煉瓦の外面はスサ入りの粘土壁で、厚さ６㎝。３層に分かれ、最も内側の層はスサ入り粘土で、厚さ3.5㎝。中間の層は細かい粘土で、厚さ2.2㎝。外側の層は漆喰で、厚さ0.3㎝。表面は比較的平らに整えられている。

通路の壁柱

通路の東西両壁には、東西対称に壁柱の柱穴がある（１～４号壁柱）。礎石はすべて花崗岩製である。１号壁柱は、西壁南端の北1.15mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.26m、深さ0.94m。柱穴の南・西・北壁はすべて日干煉瓦で、南北方向に平積みする。５段が残存し、各段の厚さは

９～14cm。底部の礎石は楕円形で、東西46cm、南北41cm、厚さ15cm（図版49－２）。２号壁柱は、１号壁柱の北2.62mに位置する。柱穴の長さは0.22m、幅0.3m、深さ0.95m。柱穴の南・西壁はいずれも日干煉瓦で、南北方向に平積みする。南壁には６段が残り、各段の厚さは６～13cmである。一方、柱穴の北壁では日干煉瓦の長手を上にして積む。４段が残存し、各段の厚さは20～22cm。底部の礎石は楕円形で、東西39cm、南北55cm、厚さ21cm。３号壁柱は、門道と通路の接続部の隅柱で、柱穴は長さ0.26m、幅0.3m、深さ0.9m。底部の礎石は残っていない。４号壁柱は、３号壁柱の北2.62mに位置する。柱穴は長さ0.28m、幅0.3m、深さ0.9m。柱穴の南壁・北壁はいずれも日干煉瓦で、南北方向に平積みする。南壁には４段が残り、各段の厚さは11～14cm。底部の礎石は楕円形で、東西30cm、南北45cm、厚さ18cm。

通路の隅柱

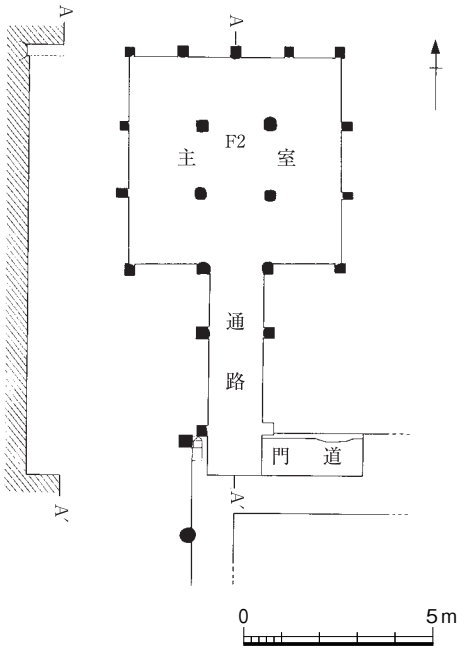
通路の北端と主室の接続部には、東西対称に通路の東北隅柱と西北隅柱（５・６号隅柱）がある。底部の礎石はすべて花崗岩製である。５号隅柱は東北隅柱で、柱穴は長さ0.28m、幅0.2m、深さ0.9m。柱穴の南壁には南北方向に日干煉瓦を平積みし、４段が残る。各段の厚さは15～18cm。柱穴の東壁には日干煉瓦の長手を上にして積み、２段が残存する。各段の厚さは25cm。柱穴底部の礎石は長方形で、東西34cm、南北40cm、厚さ18cm（図版49－４）。６号隅柱は西北隅柱で、柱穴は長さ0.27m、幅0.35m、深さ0.93m。柱穴の南壁と西壁はいずれも日干煉瓦を南北方向に平積みし、４段が残存する。厚さは10～11cm。柱穴の西壁の日干煉瓦の外面には壁土が遺存する。底部の礎石は楕円形で、東西43cm、南北44cm、厚さ22cm（図版49－３）。

通路の壁にはスサ入り粘土が塗られ、厚さ３cm。表面は平滑に整えられている。

主　室　Ｆ２の主室は通路の北にあり、平面は正方形で、一辺5.6m、四方の壁の高さは0.8～0.9mで、すべて版築でできている。壁土の厚さは3.7～6.8cmである（図版50－１）。

主室の隅柱

主室の四隅には隅柱（７～10号隅柱）、東・西・北の壁には壁柱があり、室内には４本の支柱が立つ。礎石はすべて花崗岩製である。７号隅柱は主室東南隅の柱で、柱穴は長さ0.26m、幅0.25m、深さ0.88m。柱穴の東壁と南壁は版築土で、西壁と北壁は主室の南壁および東壁の一部である。底部の礎石は楕円形で、東西37cm、南北44cm、厚さ17cm（図版52－４）。８号隅柱は主室東北隅の柱で、柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、深さ0.86m。柱穴の北壁と東壁の北寄りは版築土で、東壁の南寄りと南壁・西壁はそれぞれ主室の東壁および北壁の一部である。底部の礎石は長方形で、東西23cm、南北39cm、厚さ18cm（原色図版23－２）。９号隅柱は主室西北隅の柱で、柱穴は長さ0.25m、幅0.24m、深さ0.88m。柱穴の西壁と北壁は版築土で、東壁と南壁はそれぞれ主室の北壁および西壁の一部である。底部の礎石は楕円形で、東西33cm、南北



第60図　２号建築北院Ｆ２平面図・断面図

49㎝、厚さ19㎝。10号隅柱は主室西南隅の柱で、柱穴は長さ0.28ｍ、幅0.26ｍ、深さ0.92ｍ。柱穴の南壁は版築土、北壁・東壁と西壁の北寄りは日干煉瓦積みで、それぞれ主室の西壁および南壁の一部をなす。底部の礎石は楕円形で、東西40㎝、南北45㎝、厚さ16㎝。

主室の南壁

主室の南壁は、通路によって東西の両部分に分けられ、長さはそれぞれ2.08ｍ、2.07ｍである。南壁の高さは0.85～0.90ｍ。南壁の版築土の外面には、日干煉瓦を１列、東西方向に平積みしている。日干煉瓦は長さ37～57㎝、幅20㎝、厚さ12㎝。この外側はスサ入り粘土の壁土で、厚さ3.7～5.7㎝。３層に分かれ、内側から順に、スサを含む粘土層、細かい粘土層、漆喰層で、厚さは順に２～５㎝、５㎝、0.2㎝である。通路より西には壁土が残っていないが、通路の東では、細かい粘土層の表面に菱形の筋がつけられている。これは、外側にさらに細かい粘土や漆喰を塗るとき、堅固に付着させるための工夫である（図版50－２）。

主室の東壁

主室の東壁は、長さ5.6ｍ、高さ0.85～0.90ｍ。東壁の版築土の外側に日干煉瓦を１列、南北方向に平積みする。日干煉瓦の外側はスサ入り粘土の壁土で、厚さ3.8～6.8㎝。中間の層は厚さ0.6㎝の細かい粘土で、外面は厚さ0.2㎝の漆喰層となる。細かい粘土層の表面には、やはり規則的に菱形の筋がつけられている（図版52－２）。

東壁には２基の壁柱の柱穴がある（11・12号壁柱）。11号壁柱は東壁南端の北1.7ｍに位置する。柱穴は長さ0.2ｍ、幅0.3ｍ、深さ0.9ｍ。柱穴の東壁は版築土で、南壁と北壁は日干煉瓦を積み上げている。南壁の日干煉瓦は長手を上にして積み、２段が残る。高さは20㎝と30㎝である。北壁の日干煉瓦は南北方向に平積みされ、４段が残る。各段の厚さは11～14㎝。柱穴底部の礎石は不整形で、東西42㎝、南北51㎝、厚さ16㎝。柱穴東北隅の底部近くに炭化した木柱が残る。残存高0.33ｍ、残存最大幅0.13ｍ。12号壁柱は11号壁柱の北1.81ｍに位置する。柱穴は一辺0.24ｍ、深さ0.9ｍ。柱穴の東壁は版築土で、南壁と北壁には日干煉瓦を積む。底部の礎石は方形に近く、東西43㎝、南北44㎝、厚さ21㎝。柱穴東北隅の底部近くに炭化した木柱が残る。残存高0.3ｍ、残存最大幅0.16ｍ。

主室の北壁

主室の北壁は、長さ5.6ｍ、高さ0.80～0.85ｍ。版築土の外側に日干煉瓦を１列、東西方向に平積みする。日干煉瓦は長さ46～48㎝、幅20㎝、厚さ12㎝。日干煉瓦の外側はスサ入り粘土の壁土で、厚さ3.9～5.9㎝。３層に分かれ、最も内側は厚さ３～５㎝のスサを含む粘土層、中間は厚さ0.6㎝の細かい粘土層、外側は厚さ0.3㎝の漆喰層となる。各層の表面はひじょうに平滑である。細かい粘土層の表面には、規則的な斜め十文字の筋がつけられている。

北壁には３基の壁柱の柱穴があり、東から13～15号壁柱とした（図版51－１）。13号壁柱は、北壁東端の西1.36ｍに位置する。柱穴は長さ0.22ｍ、幅0.3ｍ、深さ1.0ｍ。柱穴の北壁は版築土、東壁と西壁は日干煉瓦を南北方向に、長手を上にして積む。東壁の日干煉瓦はかろうじて２段が残るが、厚さは明確でない。西壁には２段の日干煉瓦が残り、高さは22㎝と20㎝である。底部の礎石は紡錘形で、東西24㎝、南北47㎝、厚さ16㎝。柱穴の東北隅には炭化した木柱が残る。残存高0.38ｍ、残存最大幅0.14ｍ。14号壁柱は、13号壁柱の西1.38ｍに位置する。柱穴は長さ0.28ｍ、幅0.35ｍ、深さ1.0ｍ。柱穴の北壁は版築土、東壁と西壁は日干煉瓦を東西方向に平積みする。東壁には６段の日干煉瓦が残り、各段の厚さは９～11㎝である。西壁には３段の日干煉瓦が残り、各段の厚さは９～10㎝。柱穴底部の礎石は楕円形で、東西34㎝、南北46㎝、厚さ20㎝。柱穴の東北隅には炭化した木柱が残り、残存高0.54ｍ、残存最大幅0.14ｍ（図版51－２・３）。15号壁

柱は、14号壁柱の西1.36mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.3m、深さ0.92m。東壁と西壁は、日干煉瓦を南北方向に、長手を上にして積む。東壁には日干し煉瓦が２段残り、高さは15cmと18cmである。西壁の日干煉瓦は段数不明である。底部の礎石は楕円形で、東西22cm、南北30cm、厚さ20cm。柱穴の西北隅には炭化した木柱がわずかに残る。

主室の西壁　主室の西壁は、長さ5.6m、高さ0.84m。西壁の版築の外側は日干煉瓦を南北方向に平積みする。日干煉瓦の外側はスサ入り粘土の壁土で、厚さ６cm。３層に分かれ、内側はスサを含む粘土層で厚さ5.2cm。中間は細かい粘土層で、厚さ0.6cm。外側は漆喰層で厚さ0.2cm。細かい粘土層の外面には、菱形の筋がつけられている（図版52－１・３）。

西壁には２基の壁柱の柱穴があり、南から16・17号壁柱とした。東壁の２基の壁柱と東西対称をなす。16号壁柱は、西壁南端の北1.81mに位置する。柱穴は長さ0.23m、幅0.34m、深さ0.92m。柱穴の西壁は版築土で、南壁と北壁は日干煉瓦を積み上げている。南壁の日干煉瓦は縦積みし、１段が残る。幅約22cm、高さ44cm。柱穴北壁の日干煉瓦は南北方向に平積みする。６段が残り、厚さは10cmと11cmである。底部の礎石は楕円形で、東西28cm、南北39cm、厚さ20cm。17号壁柱は、16号壁柱の北1.81mに位置する。柱穴は長さ0.22m、幅0.25m、深さ0.88m。柱穴の西壁は版築土で、南壁と北壁は日干煉瓦積みである。南壁の日干煉瓦は南北方向に平積みする。４段が残り、厚さはそれぞれ10～13cmである。柱穴北壁の日干煉瓦は、長手を上に向けて東西方向に積み、２段が残る。厚さは21cmと14.5cmである。底部の礎石は楕円形で、東西43cm、南北35cm、厚さ16cm。

主室の底面　主室の底面は粘土で平滑に整えられており、厚さは2.6cmで、２層に分けられる。下層はスサ入り粘土で、厚さ2.3cm、上層は細かい粘土で、厚さ0.3cm。大部分は火を受けて赤褐色を呈する。底面の中央には、南北２列、東西２列の計４本の支柱の痕跡がある（18～21号支柱）。南北２列の支柱は、それぞれ主室東壁と西壁の各２基の壁柱と東西一直線に並ぶ。南と北の支柱間隔は1.85m、東と西の支柱間隔は1.80mある。東南の18号支柱は、主室東壁の西1.85m、南壁の北1.85mに位置する。底部の礎石は楕円形で、東西47cm、南北49cm、厚さ21cm。東北の19号支柱は、主室東壁の西1.85m、北壁の南1.75mに位置する。底部の礎石は不整形で、東西39cm、南北53cm、厚さ20cm。西南の20号支柱は、主室の西壁の東1.85m、南壁の北1.85mに位置する。底部の礎石は円形に近く、直径45cm、厚さ22cm。西北の21号支柱は、主室北壁の南1.85m、西壁の東1.85mに位置する。底部の礎石は楕円形で、東西41cm、南北55cm、厚さ21cmである。

D　１号地下通路

正殿基壇の中央西寄りにある南北方向の地下通路で、その門道の斜道東南隅は正殿基壇南面の中通路の西2.1mに位置する。平面は「Z」字形を呈し、南門道、北門道、主道からなる。全長22.7m。通路の東壁は長さ21.6m、西壁は長さ21.0mである。南門道と北門道の南北両壁はスサ入り粘土の壁土であるが、大部分は剥落している（第61図、原色図版24、図版53－１）。

Z字形平面

南門道　南門道は斜道と平坦道からなり、南壁は長さ6.06m、最大高1.17m。斜道は門道の東部にあり、東から西へ17度の勾配をもつ。長さ4.2m、幅1.1m。東西12列、南北３列の磚敷の痕跡がある。磚は方形で、一辺35cm。斜道の南壁と北壁は長さ3.95m。北壁の壁土は剥落し、版築の壁面に貼りつけられた無文磚と幾何学文磚片が残る（図版53－２・54－１）。

南門道の平坦道は、斜道の西、主道の南にある。平面は長方形で、長さ2.1m、幅1.4m。平坦道には、磚敷の痕跡が東西５列、南北４列残る。磚の痕跡には幾何学文がみられ、平坦道に文様を下に向けて敷いたと考えられる。平坦道の南壁は長さ2.1m、高さ1.15mで、壁土は剥落している。南壁の西端から東に1.1～1.65m、平坦道の底面から0.55～0.66m上の版築土の壁面に６点の縄目平瓦片が貼りつけられており、そのうち５点は凸面の縄目を北に向ける。１点だけが縄目を南に、凹面の菱形文を北に向けている。平坦道の西壁は長さ1.4m、高さ1.8m。版築土の外側には日干煉瓦を南北方向に平積みする。日干煉瓦は残存長20cm、厚さ18cm。平坦道の東縁は、南北方向の見切り磚によって斜道と隔てられるが、現在は磚の痕跡が残るのみである。全長1.12m、幅0.05m、深さ0.1m。

磚敷の痕跡

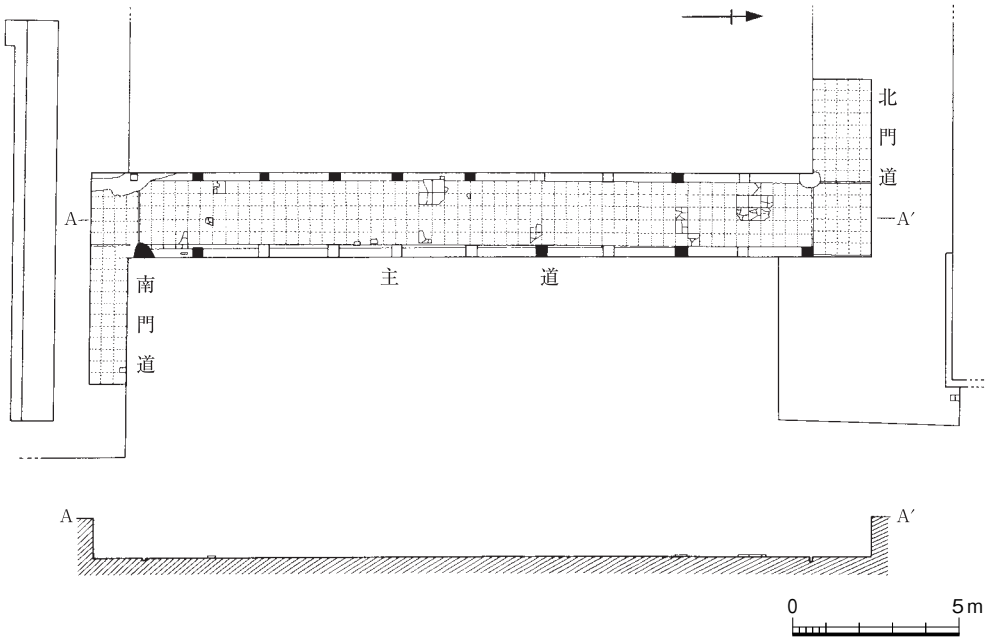
平坦道の北縁は、東西方向の見切り磚によって主道南端と隔てられている。見切り磚は大部分が失われているが、痕跡が残っており、その東西長は1.4m、幅0.05m、深さ0.1mである。西端に見切り磚が１点残る。長さ33cm、幅4.5cm。

北門道　地下通路の北門道は主道の北側にあり、やはり斜道と平坦道の二つの部分に分けられる。北門道の北壁は長さ5.1m、最大高1.17m。斜道は門道の西部にあり、西から東に28度の勾配をもつ。斜道は長さ3.2m、幅1.7m。斜道には東西９列、南北５列の磚敷の痕跡がある。斜道の南壁は長さ3.0mで、壁土がわずかに残る。斜道の北壁は長さ2.95mで、壁土はすべて剥落している。

磚敷の痕跡

北門道の平坦道は斜道の東側にあり、東西2.1m、南北1.75m、壁の高さ1.16m。底面には、文様を下に向けて幾何学文磚を敷いた痕跡が、東西６列、南北５列残る。東壁は長さ1.75m、高さ1.16m。版築土の外側には、南北方向に日干煉瓦を平積みしており、残存高は0.5m。

平坦道の西縁には南北方向の見切り磚があって、斜道との間を隔てている。２点を除き、ほとんどの見切り磚は失われているが、痕跡が残る。南北長1.3m、幅0.04m、深さ0.14m。平坦道の



第61図　２号建築北院１号地下通路平面図・断面図

南縁もまた、東西方向の見切り磚が主道北端との間を隔てる。１点を除き、見切り磚は失われているが、その痕跡が残っている。長さ1.53m、幅0.05m、深さ0.15m。磚は長さ25.3cm、幅５cm（図版54－２）。

主　道　１号地下通路の主道は南・北門道の間にあり、長さ19.5m、幅1.8m。東西の両壁は高さ1.15～1.25mで、11基の壁柱が対称位置に存在する。主道の底面には無文磚が南北55列、東西５列敷かれている。磚敷は一部が残存するが、大部分は痕跡である。磚は一辺34～35.6cm（原色図版24、図版54－３・４）。主道東壁の北から３番目の壁柱から南、磚敷の東側には、南北方向の比較的幅の広い見切り磚があったが、ほとんどが失われ、痕跡を残すのみである。

磚敷の痕跡

主道東壁　主道東壁は長さ19.7mで、版築土の外側に、日干煉瓦を南北方向に１列、平積みしている。日干煉瓦は底部だけが残り、残存高0.05～0.1m、幅0.24～0.28m。日干煉瓦の西側は主道の磚敷面である。

東壁には11基の壁柱があり、南から順に１～11号壁柱とした。壁柱の間隔は1.77～2.19mで、底部に残る礎石はすべて花崗岩製である。１号壁柱は、南門道の平坦道東北隅にあり、柱穴は破壊されている。原位置を保っていない礎石が残り、楕円形で、東西50cm、南北62cm、厚さ24cm。２号壁柱は、東壁南端の北2.05mに位置する。柱穴は長さ0.28m、幅0.24m、深さ0.06m。底部の礎石は楕円形で、東西44cm、南北53cm、厚さ23cm。３号壁柱は、２号壁柱の北1.9mに位置する。柱穴は長さ0.28m、幅0.37m、深さ0.16m。礎石は残っていない。４号壁柱は、３号壁柱の北2.07mに位置する。柱穴は長さ0.33m、幅0.35m、深さ0.18m。礎石は残っていない。５号壁柱は、４号壁柱の北1.85mに位置する。柱穴は長さ0.33m、幅0.34m、深さ0.13m。底部の礎石は残っていない。６号壁柱は、５号壁柱の北2.19mに位置する。柱穴は長さ0.34m、幅0.35m、深さ0.16m。礎石は残っていない。７号壁柱は６号壁柱の北2.08mに位置する。柱穴は長さ0.30m、幅0.33m、深さ0.16m。底部の礎石は楕円形で、東西42cm、南北59cm、厚さ18cm。８号壁柱は７号壁柱の北1.96mに位置する。柱穴は長さ0.32m、幅0.33m、深さ0.23m。礎石は残っていない。９号壁柱は８号壁柱の北2.12mに位置する。柱穴は長さ0.36m、幅0.33m、深さ0.11m。底部の礎石は楕円形で、東西43cm、南北46cm、厚さ22cm。10号壁柱は９号壁柱の北1.77mに位置する。柱穴は長さ0.30m、幅0.27m、深さ0.13m。礎石は残っていない。11号壁柱は10号壁柱の北1.79mに位置する。柱穴は長さ0.29m、幅0.27m、深さ0.11m。底部の礎石は長方形で、長さ32cm、幅19～23cm、厚さ13cm。

主道西壁　主道西壁は長さ19.7m。構築方法は東壁と同じで、版築土の外側に日干煉瓦を南北方向に平積みする。日干煉瓦は底部だけが残る。幅0.2～0.25m、残存高0.05～0.1m。

西壁には11基の壁柱があり、南から順に12～22号壁柱とした。東壁の11基の壁柱と東西対称の位置にある。壁柱の間隔は1.67～2.12mで、礎石はすべて花崗岩製である。12号壁柱は、南門道の平坦道西北隅にあり、柱穴は一辺0.2m、深さ0.08m。礎石は残っていない。13号壁柱は、12号壁柱の北1.67mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.21m、深さ0.11m。底部の礎石は不整楕円形で、東西38cm、南北44cm、厚さ23cm。14号壁柱は、13号壁柱の北1.94mに位置する。柱穴は長さ0.25m、幅0.21m、深さ0.18m。底部の礎石は不整形で、東西54cm、南北50cm、厚さ22cm。15号壁柱は、14号壁柱の北2.06mに位置する。柱穴は長さ0.33m、幅0.19m、深さ0.11m。底部の礎石は楕円形で、東西37cm、南北42cm、厚さ20cm。16号壁柱は、15号壁柱の北1.82mに位置する。

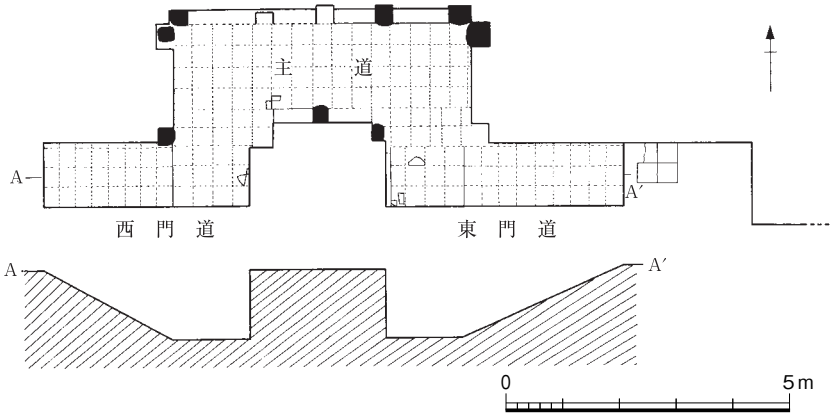
柱穴は長さ0.31m、幅0.24m、深さ0.11m。底部の礎石は楕円形で、東西42cm、南北57cm、厚さ22cm。17号壁柱は、16号壁柱の北2.12mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.26m、深さ0.11m。底部の礎石は円形で、直径49cm、厚さ24cm。18号壁柱は、17号壁柱の北2.03mに位置する。柱穴は長さ0.31m、幅0.26m、深さ0.12m。礎石は残っていない。19号壁柱は、18号壁柱の北1.99mに位置する。柱穴は長さ0.32m、幅0.27m、深さ0.12m。礎石は残っていない。20号壁柱は、19号壁柱の北2.02mに位置する。柱穴は長さ0.34m、幅0.29m、深さ0.08m。底部の礎石は楕円形で、東西46cm、南北56cm、厚さ19cm。21号壁柱は、20号壁柱の北1.9mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.28m、深さ0.08m。礎石は残っていない。22号壁柱は、21号壁柱の北1.9mに位置する。この柱は西壁北端の隅柱でもある。柱穴は破壊され、礎石は残っていない。

E　２号地下通路

付属建物Ｆ２の東4.2mにある東西方向の地下通路で、その南壁は３号院北面の雨落の北1.0mに位置する。平面は「凸」字形を呈し、全長10.3m、南北幅3.5m。四方の壁の残存高は1.12～1.36mである。東門道、西門道、主道からなる（第62図、原色図版25、図版54－５・55）。　凸字形平面

東門道　東門道は通路の東南部を占め、斜道と平坦道からなる。平面は長方形を呈し、長さ4.25m、西部の幅1.71m、東部の幅1.1m。門道の南壁は長さ4.25m、最大高1.23m。版築土の外側にスサ入り粘土の壁土がわずかに残り、厚さは約1.5cmである。西壁は長さ1.71m、高さ1.25m。版築土の外側には日干煉瓦を南北方向に平積みする。日干煉瓦はわずかに底部が残り、高さ0.05m。北壁は長さ2.6m、最大高1.2m。

斜道は門道の東部にあり、西は平坦道とつながる。東から西に24度の勾配をもち、長さ3.13m、幅1.1m。平坦道は斜道の西にあり、長さ1.35m、西部の幅1.71m、東部の幅1.1m、西壁の高さ1.25m、南壁の高さ1.23m。平坦道には東西４列、南北５列の磚敷の痕跡があり、２点の磚片が残る。平坦道東北隅には隅柱穴が１基あり（１号隅柱）、柱穴は長さ0.35m、幅0.32m、深さ1.4m。礎石は残っていない。平坦道西北隅にも隅柱穴が１基あり（２号隅柱）、１号隅柱と東西対称に位置する。柱穴は長さ0.34m、幅0.25m、深さ1.42m。底部の礎石は楕円形の花崗岩製で、東西37cm、南北46cm、厚さ18cm。



第62図　２号建築北院２号地下通路平面図・断面図

西門道　西門道は通路の西南部を占め、斜道と平坦道からなる。門道の南壁は長さ3.67m、最大高1.12m。南端にはスサ入り粘土の層と細かい粘土の層からなる壁土が2.2cmの厚さで残る。門道の北壁は長さ2.3m、最大高1.1m、東壁は長さ1.71m、高さ1.23m。版築土の外側には日干煉瓦を南北方向に平積みする。門道の幅は西部で幅1.1m、東部は1.71m。

斜道は門道の西部にあり、東は平坦道とつながる。西から東に28度の勾配をもち、長さ2.6m、幅1.1m。斜道には、東西８列、南北３列の磚敷の痕跡が残る。磚は長さ34cm、幅31cmである。平坦道は斜道の東に位置し、長さ1.37m、西部の幅1.1m、東部の幅1.71m。南壁の高さ1.12m、東壁の高さ1.23m。平坦道には東西４列、南北５列の磚敷の痕跡が残る。磚は一辺35cmである。平坦道の東北隅と西北隅には各１基の隅柱穴が東西対称に位置する（3・4号隅柱）。３号隅柱は東北隅柱で、平坦道南壁の北1.25mにある。柱穴は長さ0.25m、幅0.3m、深さ1.27m。柱穴の東壁の北寄りには日干煉瓦を東西方向に平積みし、８段が残る。柱穴南壁の日干煉瓦は、南北方向に長手を上にして積み、３段が残る。礎石は残っていない。４号隅柱は西北隅柱で、平坦道南壁の北1.25mに位置する。柱穴は長さ0.3m、幅0.26m、深さ1.15m。柱穴北壁には日干煉瓦を東西方向に平積みし、２段が残る。柱穴底部の礎石は不整楕円形の花崗岩製で、東西35cm、南北43cm、厚さ17cm。

主　道　主道は東門道と西門道の中間の北寄りに位置する。平面は長方形で、長さ5.3m、幅1.48m、壁の高さ1.22～1.36m。底面には、磚敷の痕跡が東西15列、南北４列残る。磚は一辺が35cmである。

主道南壁　主道の南壁は長さ2.4m、高さ1.22m、版築土の外側には日干煉瓦を東西方向に平積みし、10段が残る。日干煉瓦は長さ51cm、幅28cm、厚さ10～12cm。南壁の東西の中ほどに壁柱の柱穴がある（5号壁柱）。柱穴は長さ0.28cm、幅0.24m、深さ1.22m。柱穴西壁には２段の日干煉瓦が見られる。柱穴底部の礎石は楕円形の花崗岩製で、東西43cm、南北38cm、厚さ20cm。

主道東壁　主道の東壁は長さ2.02m、高さ1.36m。版築土の外側には日干煉瓦を南北方向に平積みする。比較的残りがよく、11段が現存する。日干煉瓦は長さ48cm、幅23cm、厚さ11cm（図版56－１）。

主道西壁　主道の西壁は長さ2.05m、高さ1.24m。版築土の外側には日干煉瓦を南北方向に平積みしている。東壁と同様に残りがよく、10段が現存する。日干煉瓦は長さ44～51cm、幅24cm、厚さ8.5～15cmである。

主道北壁　主道の北壁は長さ5.3m、高さ1.32m。版築土の外側に日干煉瓦を東西方向に平積みし、７段が現存する。日干煉瓦は長さ48cm、幅23cm、厚さ11cm。北壁には３基の壁柱の柱穴があり、東から６～８号壁柱とした。壁柱の間隔は1.06～1.08mである。６号壁柱は、北壁東端から1.35m西に位置する。柱穴は長さ0.29m、幅0.3m、深さ1.32m。柱穴の東壁と西壁には日干煉瓦を積み、西壁には６段が残る。各段の厚さはすべて10cmである。柱穴底部の礎石は楕円形の花崗岩製で、東西45cm、南北54cm、厚さ18cm。７号壁柱は、６号壁柱の西1.06mに位置する。柱穴は長さ0.32m、幅0.3m、深さ1.2m。礎石は残っていない。８号壁柱は、７号壁柱の西1.08mに位置する。柱穴は長さ0.31m、幅0.18m、深さ1.27mで、礎石は残っていない。

主道の隅柱　主道の東北隅と西北隅にはそれぞれ隅柱穴が東西対称に１基ずつある（9・10号隅柱）。礎石はいずれも花崗岩製である。東北隅の９号隅柱は東南柱と西北柱からなり、東南柱の柱穴は長さ0.42m、幅0.43m、深さ1.36m。その東壁と北壁は版築土で、南壁は日干煉瓦を南北方向に平積

みし、８段が残る。柱穴底部の礎石は円形で、直径43㎝、厚さ22㎝。西北柱の柱穴は長さ0.4m、幅0.3m、深さ1.3m。その東壁と北壁は版築土で、西壁には日干煉瓦を積むが、段数は不明である。柱穴底部の礎石は不整形で、東西34㎝、南北39㎝、厚さ14㎝（図版56－２）。西北隅の10号隅柱は西南柱と東北柱からなる。西南柱の柱穴は長さ0.45m、幅0.33m、深さ1.25m。柱穴の西壁と北壁は版築土で、南壁には日干煉瓦を南北方向に平積みし、７段が残る。底部の礎石は長方形で、東西35㎝、南北26㎝、厚さ16㎝。東北柱の柱穴は長さ0.36m、幅0.31m、深さ1.28m。柱穴の西・北両壁は版築土で、東壁には日干煉瓦を積むが、その状況は不明瞭である。底部の礎石は楕円形で、東西44㎝、南北29㎝、厚さ17㎝（図版56－３）。

４　１号院～３号院

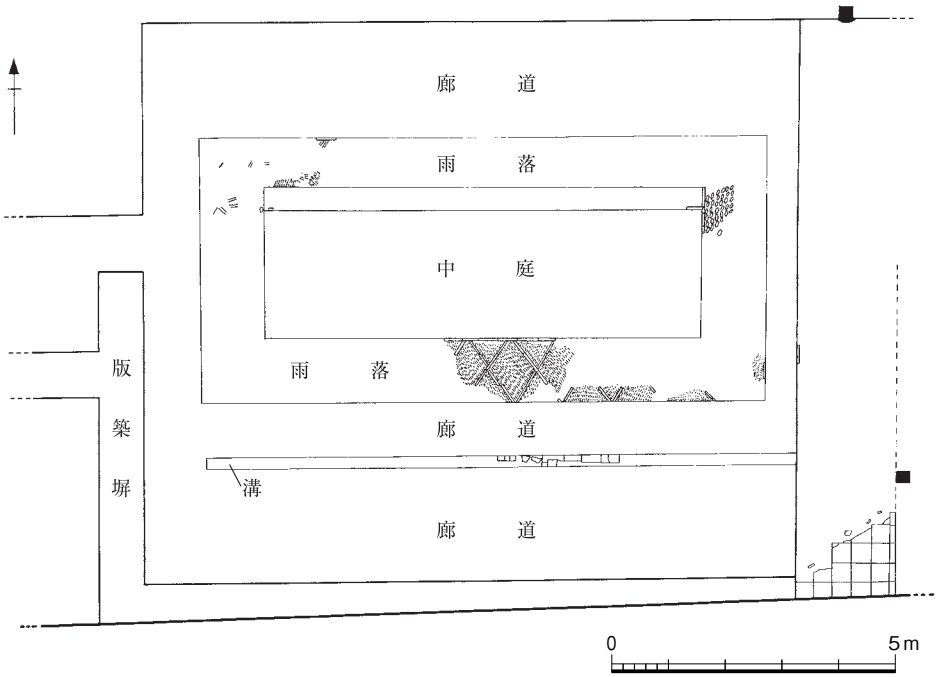
正殿基壇の南面には三つの院が設けられており、西から１～３号院とする（図版56－４・５）。

A　１号院

１号院は正殿基壇の南面西部にあり、中庭とその周囲をめぐる廊道と雨落からなる。東西11.6m、南北7.1m。中庭は東西7.8m、南北2.15mである。

南面の廊道

中庭南面の廊道は長さ11.7m、幅1.0mで、磚敷の痕跡が残る。この北側には雨落があり、長さ10.1m、幅1.1m。雨落内には平瓦片を立てて埋め込み、磚で区画した大きな菱形模様を形成する。平瓦片は長さ６～28.3㎝、厚さ0.8～1.8㎝。磚は長さ14.3～33.7㎝、幅４～4.8㎝。雨落東縁には見切り磚が１点あり、長さ27.1㎝、幅3.7㎝。雨落の北縁には見切り磚が６点残り、長さ30.4～35.2㎝、幅4.2～4.5㎝。見切り磚は無文磚を立て並べている（第63図、原色図版26、図版57）。



第63図　２号建築北院１号院平面図

東面の廊道　中庭東面の廊道は長さ7.7m、幅0.6m。磚敷の痕跡が残る。この西側には雨落があり、長さ2.7m、幅1.1m。雨落内には河原石を敷き詰めている。河原石は雨落の西北部にわずかに残り、雨落西縁には見切り磚が３点遺存する。

西面の廊道　中庭西面の廊道は長さ7.7m、幅1.0mで、磚敷の痕跡が残る。この東側は雨落で、長さ2.7m、幅1.15m。雨落内には立てて埋め込まれた平瓦片がまばらに残る。

中庭北面の廊道とその南面の雨落・磚敷については、すでに正殿基壇南面の廊道雨落と磚敷のところで述べた。

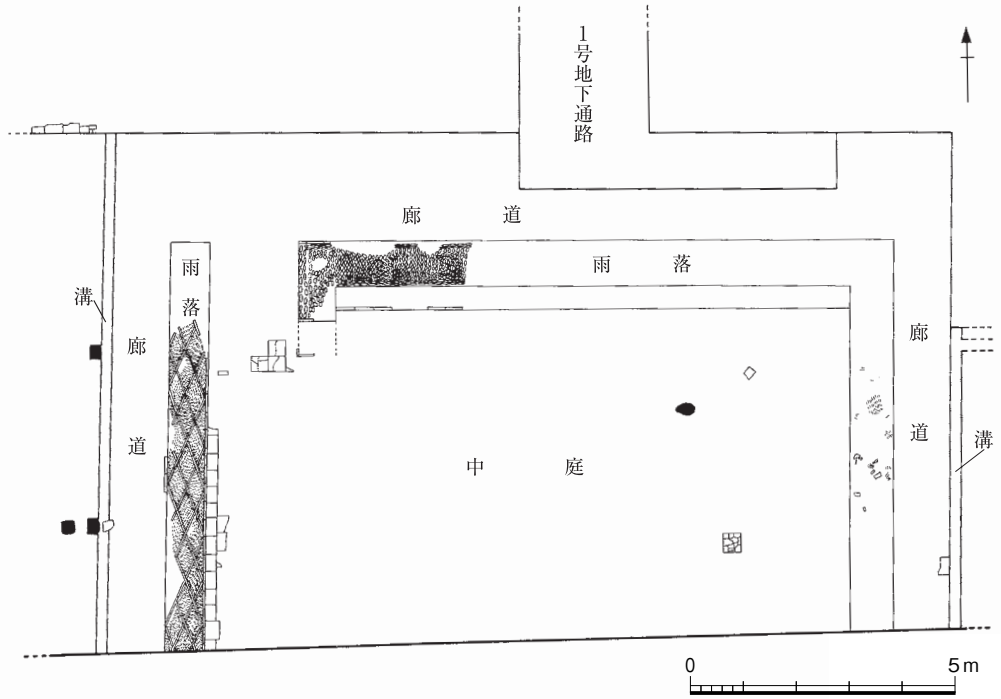
１号院の南の廊道　１号院の南側（中庭南面の廊道の南）には、東西方向の広い廊道がある。長さ11.7m、幅2.0mで、磚敷の痕跡が残る。その北側には東西方向の溝が１条ある。長さ10.5m、幅0.2m、深さ0.08m。溝の中には黒色の木灰が残り、底部には敷磚がある。磚は長さ32.2㎝、幅12㎝、厚さ５㎝。この溝は木塀の遺構と考えられる。この廊道の南側には、東西方向の版築塀がある。長さ12.5m、発掘された幅0.7m、高さ0.1m。

１号院と西面の付属建物Ｆ１との間にも、南北方向の版築塀がある。長さ6.2m、幅0.8m、高さ0.1m。その西側は、東から西に19度の勾配をもつ斜道となる。斜面の長さは0.56m。

B　２号院

２号院は正殿基壇の南面西通路の東側にあり、西通路との間は、南北方向の木灰を含む溝によって隔てられている。中庭とその周囲をめぐる廊道と雨落からなり、東西16.2m、南北17.3m。中庭は東西長12.5m、検出した部分の南北幅は6.5mで、その南は現在の水路と重なる（第64図、原色図版27、図版58・59）。

西面の廊道　中庭西面の廊道は、南北10.1mにわたって検出し、現代の水路と重なる部分6.8mと、南院の既発掘部分0.4mをあわせて、全長17.3mと考えられる。幅は1.1mで、磚敷の痕跡が残る。この



第64図　２号建築北院２号院平面図

東側には雨落があり、検出した長さ8.0mと、現代の水路と重なる部分をあわせた全長は14.2mと推定される。幅は0.8mである（図版58－２）。雨落内には平瓦片を立てて埋め込み、磚で区画した大きな菱形模様を形成する。磚は無文磚を立て並べている。雨落の西縁には２点の見切り磚、雨落の東縁には17点の磚が残る。また、雨落の東側には幅広い見切り磚が南北方向に１列あり、14点が残存する。これには無文磚と幾何学文磚の２種類があり、幾何学文磚は文様を下に向けている。

東面の廊道

中庭東面の廊道は、南北9.7mにわたって検出し、現在の水路と重なる部分6.6mと、南院の既発掘部分1.0mをあわせた全長は17.3mと考えられる。幅は1.1mで、磚敷の痕跡が残る。この西側には雨落があり、検出した長さ6.7mと、現代の水路と重なる部分をあわせた長さは12.9mとなる。幅は0.8mで、立てて埋め込んだ平瓦片が少量残存する。

南面の廊道

中庭南面の廊道は、南院で発掘した。長さ16.8m、幅1.0mで、南から北に４度の勾配をもつ。無文磚が敷かれ、西部にわずかに残存する。磚は一辺35㎝、厚さ4.5㎝。中庭南側と西面の廊道とが接続する部分には、東北から西南方向の見切り磚が１点残る。長さ33㎝、幅55㎝。南廊北側の雨落は現代の水路と重なっており、形状は不明である。

中庭北面の廊道とその南の雨落・磚敷については、すでに正殿基壇南面の廊道・雨落・磚敷のところで述べた（図版59－１）。

小　通　路

２号院の中庭の西北隅には南北方向の小通路があり、正殿基壇南面の廊道にいたる。通路の長さは2.33m、幅は1.8mである。その西側は瓦組の雨落（中庭西廊東側雨落北部）、東側は河原石の雨落で、長さ1.6m、幅0.74m。雨落の南には南北２列、東西２列の磚敷がある。磚敷の西縁には、南北方向の小方格文の見切り磚が１点残り、文様を西面に向ける。磚敷の南縁にも東西方向に小方格文の見切り磚が１点残り、文様を南面に向ける。通路南端の中庭との接点には南北２列の磚敷があり、無文磚が北列に１点、南列に２点残る（図版59－２）。

２号院の中庭には無文方磚がまばらに残る。

C　３号院

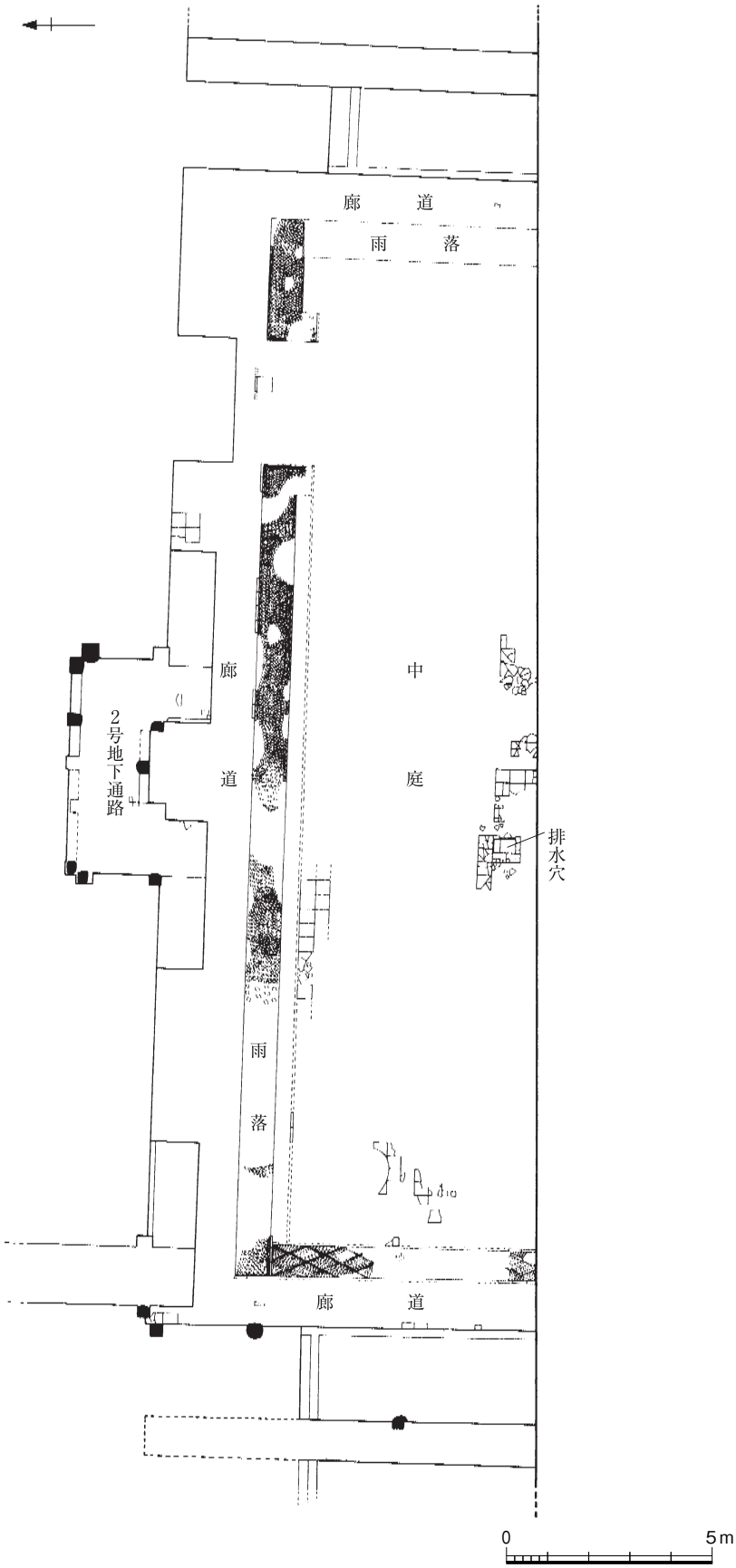
３号院は２号院の東に位置し、両者の間は正殿基壇南面中通路によって隔てられている。中庭とその周囲の廊道・雨落からなり、東西28.5m、南北17.6m。中庭は東西長24.65m、検出した南北幅は5.5mで、現代の水路と重なる部分6.3mと、南院の既発掘部分0.6mをあわせた南北幅は12.4mとなる。中庭には部分的に無文磚の敷磚が残り、大小２種類に分かれる。大きい方は一辺35.2m、厚さ4.5㎝。小さい方は長さ34㎝、幅30㎝、厚さ４㎝（第36・65図、図版60）。

西面の廊道

中庭西面の廊道は長さ9.6mにわたって検出し、現代の水路と重なる部分6.5mと、南院の既発掘部分1.5mをあわせた全長は17.6mとなる。幅は1.1mで、無文磚の敷磚が少量残る。磚は方磚と三角磚（方磚を対角線で切ったもの）に分かれる。方磚は一辺34㎝、厚さ4.5㎝。西面の廊道の西縁には、幅の広い見切り磚が南北方向に残る。磚は長さ25～34㎝、幅12㎝、厚さ4.5㎝。廊道の東側には雨落があり、検出した長さ6.5mに、現代の水路と重なる部分と南院の既発掘部分をあわせた南北長は13.4mとなる。幅は0.85mで、雨落内には平瓦片を立てて埋め込み、磚で区画した大きな菱形模様を形成する。雨落の東縁と西縁には、南北方向の見切り磚が残る（図版61－１）。

東面の廊道

中庭東面の廊道は南北8.7mにわたって検出し、現代の水路と重なる部分6.3mと、南院の既発



第65図　２号建築北院３号院平面図

掘部分2.6mをあわせた全長は17.6mとなる。幅は1.1mで、磚敷の痕跡が残る。この西側には雨落があり、検出した長さ5.7mに、現代の水路と重なる部分と南院の既発掘部分をあわせた長さは13.4mとなる。幅は0.9mで、雨落内には立てて埋め込まれた平瓦片が少量と、模様を形成する磚が１点残る（原色図版30－１）。

中庭南面の廊道は南院ですでに発掘しており、長さ28.3m、幅1.2m。南から北に５度の勾配をもつ。敷かれた無文磚が９点残る。磚は一辺34.5㎝、厚さ４～4.5㎝。廊道の南縁には、比較的幅の広い東西方向の見切り磚が残存する。磚は長さ33.5～36㎝、幅12～13.5m、厚さ3.5㎝。廊道の北側には雨落があり、南院で発掘している。長さ26m、幅0.8mで、南から北に８度の勾配をもつ。雨落内には平瓦片を立てて埋め込んでいる（原色図版30－２）。 南面の廊道

中庭北廊とその南面の雨落・磚敷については、正殿基壇南面の廊道・雨落・磚敷のところで述べた（図版60－１）。

３号院の中庭の東北部、中庭東北隅から西へ3.2mの位置には１条の小通路があり、正殿基壇に通じている。通路は南と北の両部分に分かれ、北部は正殿に上る平坦道で、東西長3.1m、南北幅1.5m、残存高0.1m。通路の南部は斜道で、北から南に4.5度の勾配をもつ。斜面の長さは2.05m、東西幅3.1m。斜道の東西両側には河原石の雨落があり、長さ1.35m、幅0.7m。西側の雨落の東縁には南北方向の見切り磚が３点残る。すべて長手を上にした無文磚である。斜道の北部には東西方向の見切り磚が１点残り、見切り磚より北には空心磚が置かれる。平坦道を通って正殿基壇へ上ったものと考えられる。見切り磚より南は斜道の磚敷で、１点が残存する。幾何学文磚で、文様を下に向けている（図版61－２）。 小　通　路

5　北院南部の遺構

版築塀と門　三つの院の南面の、南院と北院を分ける東西方向の版築塀北面の遺構は、東・西二つの部分からなり、その間には南北方向の版築塀（北院の正殿基壇南面の中通路の中間の版築塀）がある（第36図、図版62－１）。塀の南部には門があり、門道は幅1.75m、奥行1.1m。門道南側の塀は長さ0.25m、幅1.1m、残存高0.27m。門道北側の塀は長さ1.75m、幅1.1m、残存高0.2m。門道の南壁と北壁には南北対称の位置に壁柱の柱穴が２基ずつあり、１～４号壁柱とした。礎石はすべて花崗岩製である。１号壁柱は門道南壁の東側の柱で、柱穴は長さ0.25m、幅0.35m、深さ0.22m。底部の礎石は不整形で、東西32㎝、南北45㎝、厚さ12㎝。２号壁柱は門道南壁の西側の柱で、柱穴は長さ0.3m、幅0.35m、深さ0.25m。礎石は残っていない。３号壁柱は門道北壁の東側の柱で、柱穴は長さ0.35m、幅0.4m、深さ0.2m。底部の礎石は不整形で、東西30㎝、南北35㎝、厚さ８㎝。４号壁柱は門道北壁の西側の柱で、柱穴は長さ0.35㎝、幅0.4㎝、深さ0.18m。底部の礎石は不整形で、東西30㎝、南北28㎝、厚さ７㎝。門道南壁の西側の壁柱と門道北壁の西側の壁柱の間には木製敷居があり、現在はわずかに溝状の痕跡が残る。長さ1.75m、幅0.2m、深さ0.07m（図版62－２）。 門道の壁柱

３号院南面の遺構　３号院南面の廊道と、南院・北院を隔てる東西方向の版築塀の間には、東西方向の廊道がある（第36図）。長さ32.8m、幅2.0mで、西端は上述の門道とつながっている。廊道は南から北に４度の勾配をもち、磚敷は廊道東部だけに残る。散らばった６点の磚を除き、磚 東西廊道

敷が集中して残存する部分では、南北６列、東西９列の磚が敷かれている。磚は２種類に分かれ、一つは方磚で、一辺34㎝、厚さ４㎝。もう一つは長方磚で、長さ34㎝、幅25.5㎝、厚さ3.5㎝。廊道南縁には見切り磚が５点残存する。

木　　塀　廊道の北側では、木灰を含む木塀の溝状痕跡（３号院南面の廊道の南の溝）を検出した。長さ28.3㎝、幅0.25㎝、深さ0.1m。溝の中には、東西に七つの礎石が3.8～7.6mの間隔で並び、東から１～７号礎石とした。礎石はすべて不整形の花崗岩製である。１号礎石は溝の東端にあり、楕円形で、東西35㎝、南北50㎝、厚さ10㎝。２号礎石は１号礎石の西3.9mに位置し、楕円形で、東西35㎝、南北25㎝、厚さ６㎝。３号礎石は２号礎石の西3.8mに位置し、不整形で、東西35㎝、南北50㎝、厚さ12㎝（図版63－１）。４号礎石は３号礎石の西7.6mに位置し、円形に近く、直径35㎝、厚さ12㎝。５号礎石は４号礎石の西4.25mに位置し、楕円形で、東西50㎝、南北40㎝、厚さ11㎝（図版63－２）。６号礎石は５号礎石の西4.5mに位置し、楕円形で、東西37㎝、南北45㎝、厚さ13㎝。７号礎石は溝の西端にあり、円形に近く、直径40㎝、厚さ12㎝（図版63－４）。これらの礎石は、木塀の柱の礎石と考えられる。

２号院南面とその西の遺構　２号院南面の廊道と、南院・北院を分ける東西方向の版築塀との間には、東西方向の廊道がある。長さ25.3m、幅2.25mで、南から北に２度の勾配をもつ。わずかに磚敷が残存し、廊道の南縁には東西方向に並んだ見切り磚が14点残る（図版63－３）。

東西廊道

木　　塀　廊道の北側では、木灰を含む木塀の溝状痕跡（２号院南面の廊道の南の溝）を検出した。長さ16.8m、幅0.25m、深さ0.1m。廊道北縁と溝南縁との間には、東西に二つの大型礎石があり、東から１・２号礎石とした。ともに不整形の花崗岩製である。１号礎石は廊道東端から13.0m西に位置し、東西47㎝、南北50㎝、厚さ20㎝。２号礎石は１号礎石の西3.1mに位置し、東西60㎝、南北57㎝、厚さ27㎝。溝内には、ほかに青石製の礎石がもう一つ残り、３号礎石とした。この礎石は溝西端から東5.35mに位置し、半円形で、東西28㎝、南北18㎝、厚さ７㎝。また、溝の東端には礎石据付穴が１基あり、４号礎石据付穴とした。直径0.35m、深さ0.07m。溝内の礎石は、木塀の柱の礎石と考えられる。

南北廊道　２号院の南部の西側には、南北方向の廊道がある。検出した長さは2.9m、幅6.2mで、磚敷が残存する。この廊道は、南院と北院を分ける東西方向の版築塀の西にある南北方向の門道とつながっている。廊道の西側には、南北方向の木塀の溝状痕跡が１条あり、検出した部分の長さ2.6m、幅0.2m、深さ0.12m。

木　　塀

瓦組雨落　この溝の西0.25m、南端の北0.3mには、東西方向と南北方向の瓦組雨落が接続する部分が残る。東西方向の瓦組雨落は、残存長0.55m、残存幅0.5mで、南から北に10度の勾配をもつ。南北方向の瓦組雨落は、残存長0.85m、残存幅0.5mで、東から西に10度の勾配をもつ。東西方向と南北方向の雨落の接続部には、西北から東南方向に斜行する見切り磚があり、２点が残存する。雨落内はすべて平瓦片を立てて埋め込んでいる。東西方向の雨落の南辺では、見切り磚の代わりに平瓦片を並べ、５点が残存する。これらの瓦は凸面の縄目を北に向ける。また、南北方向の雨落の東縁も、見切り磚の代わりに平瓦片を並べており、４点が残る。南の２点は凸面の縄目を西に、北の２点は東に向ける。

磚組雨落　さらに、この南北方向の瓦組雨落の東縁から西に5.6mの位置で、南北方向の磚組雨落を検出した。残存長1.9m、残存幅0.8mで、南から北に25度の勾配をもつ。雨落内には磚を立て並べて

おり、磚は幾何学文磚と小方格文磚からなる。この雨落は、無文磚を立て並べて区画され、菱形模様を形成している。雨落の東縁には見切り磚が５点残るが、これらも無文磚を立て並べたものである。

上記の南北方向の磚組雨落は、東に折れて、東西方向の磚組雨落となる。残存長1.25m、残存幅0.5mで、南から北に25度の勾配をもつ。やはり、雨落内に立て並べた磚は幾何形文磚と小方格文磚からなり、模様を区画する磚は無文磚を立て並べたものである。

なお、北院の西南隅にはまばらに雨落が残り、中庭の周囲をめぐる雨落と考えられるが、現代の水路に重なって発掘できないため、全体像は明らかでない。

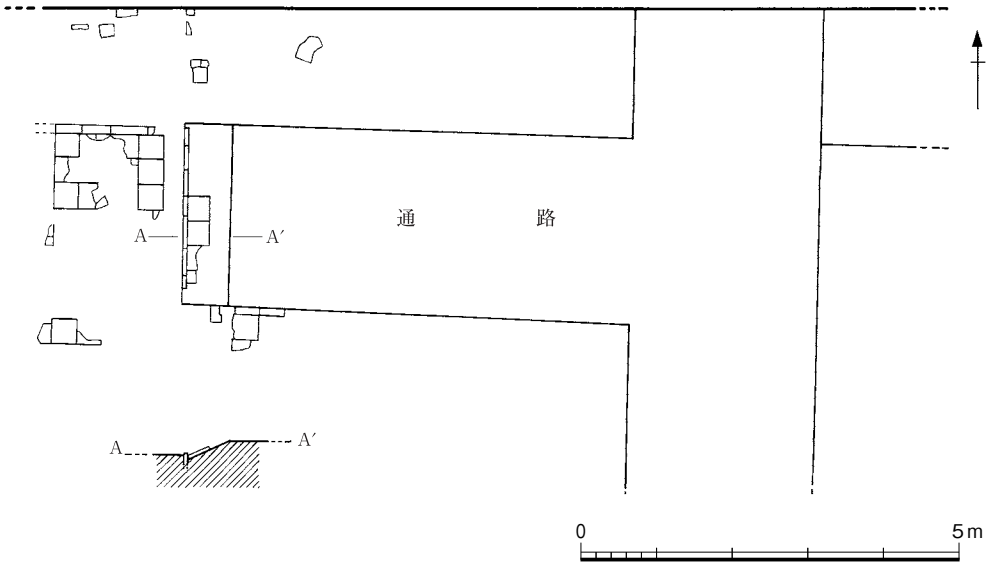
6　庭　　院

正殿基壇の北面には、東西二つの庭院がある。東庭院は、西庭院にくらべてやや高い位置にある（図版63－５）。

西庭院　西庭院は正殿基壇北面の西通路の東側にあり、長さ25m、幅12.8m。南から北に5.5度の勾配をもち、磚敷が大量に残るが、多くは破損が甚だしい。磚は無文磚と幾何学文磚の２種類に分かれ、後者は文様を下に向ける。西庭院の西縁には見切り磚が20点、北縁には10点残る。後者は、方柱形の幅広い磚である（原色図版28、図版64－１）。

西庭院から東庭院に向けては、東西方向の通路が設けられている。西庭院の東北部に発し、東端は正殿基壇北面の中通路とつながる。通路は斜道と平坦道の二つの部分に分かれる。西側の斜道は、東から西に22度の勾配をもつ。長さ0.6m、幅2.4m。幾何学文磚が敷かれ、２点が残存する。磚は長さ33.5cm、幅28.6cm、厚さ4.3cm。斜道の西縁には10点の見切り磚があり、すべて無文磚を立て並べている。東側の平坦道は、長さ5.3m、幅2.4m、残存高0.05～0.17m。平坦道の南縁には東西方向の幅広い見切り磚があり、２点が残る。磚は長さ33.5cm、幅8.5cm、厚さ４cm（第66図、原色図版29、図版65）。

通　　路



第66図　２号建築北院東西庭院間通路平面図・断面図

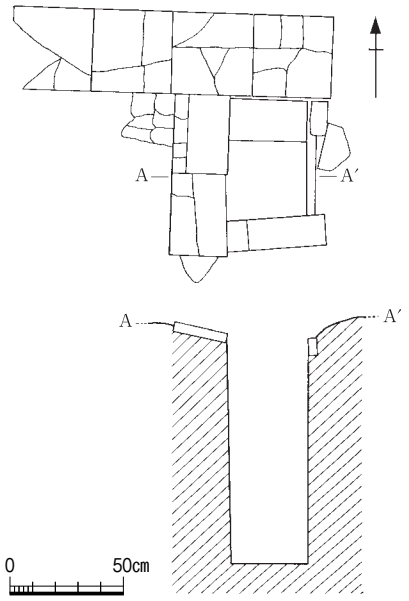
東庭院　東庭院は正殿基壇北面の中通路の東側にあり、長さ31m、幅11.5m。東庭院の北縁には、無文磚を立て並べた見切り磚が１点だけ残る（図版64－２）。

なお、ボーリング調査によって、北院の版築基壇の厚さは0.9～1.6mと判明している。

7　排水施設

排水穴と排水暗渠がそれぞれ１ヵ所ある。

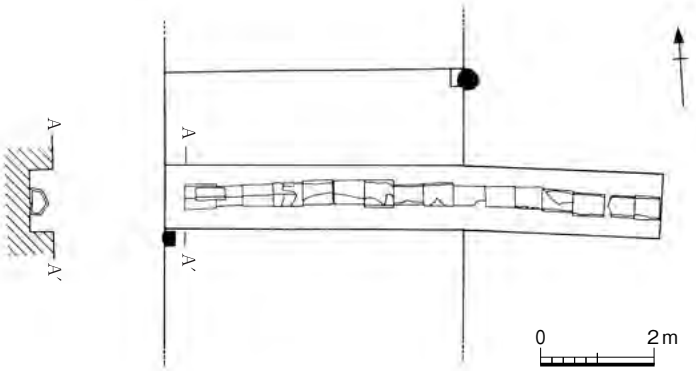
排水穴　３号院の中庭西面の廊道の雨落から東へ9.75m、北面の廊道の雨落から南に5.4mに位置する。穴は方形に近く、南北0.32m、東西0.34m。上面は周囲に磚が積まれ、磚の面は３号院中庭の磚敷と同じ高さである。磚は南・北・西縁には各２点、東縁には１点が残る。排水穴の南縁は外辺長0.67m、内辺長0.34m。北縁は外辺長0.6m、内辺長0.3m。西縁は外辺長0.67m、内辺長0.33m。東縁は外辺長0.59m、内辺長0.3m。排水穴の底面は方形に近く、南北0.29m、東西0.32m。無文磚が１点敷かれ、長さ32cm、幅28cm、厚さ4.5cm。排水穴の深さは1.1m。四方の壁は磚積みで、現在は東壁の上部に１点だけ残る（第65・67図、図版66－２）。



第67図　２号建築北院排水穴平面図・断面図

排水暗渠　正殿基壇北面の中通路の地下とその東側で検出した。残存長8.5m。暗渠の南壁は中通路の東南隅から北へ5.5mに位置する。現在は五角形土管が16個残るが、すべて破損しており、大部分は底部だけが遺存する。土管の長さは51～57cmで、東端の土管を例にとると、外高33cm、内高26cm、外幅45cm、内幅39cm、器壁の厚さ３cmである。土管の外面には斜めの太い縄目が、内面と底部には小方格文が施されている。この排水暗渠は通路の地下に設けられ、通路を横切って東庭院へと通じている（第68図、図版66－１）。

五角形土管



第68図　２号建築北院排水暗渠平面図・断面図

第３節　出土遺物

出土した遺物の多くは瓦磚と土器で、ほかに玉石器・鉄製品・銅製品・銭貨などがある。

１　瓦　　磚

A　磚

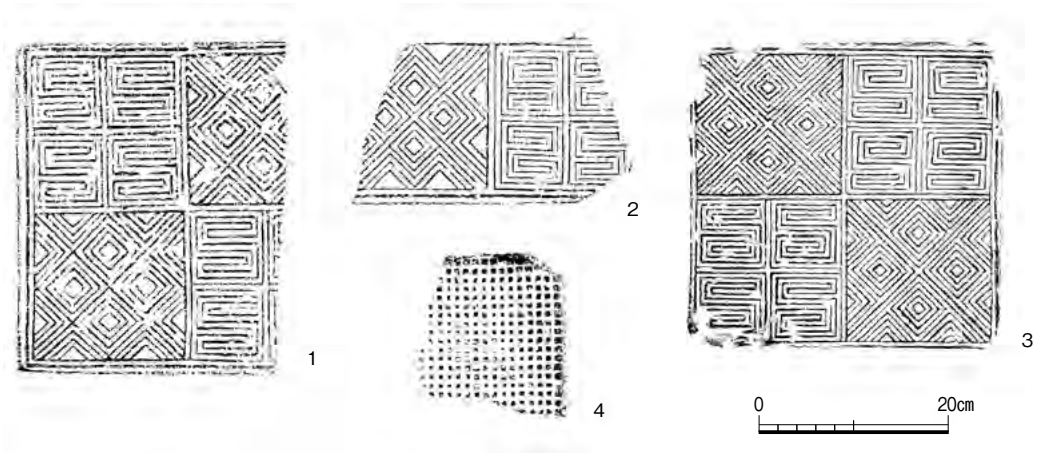
型づくりで、方磚・長方磚・扇形磚・空心磚・異形磚がある。

方磚には無文・幾何学文・小方格文の３種類がある。型の四壁に傾斜があるため、磚の上面と下面の大きさは異なり、大きい方が上面となる。

無文方磚　　４点。上下両面に文様がない。磚敷に用いられたもので、大きい面を上に、小さい面を下に向け、下面にはしばしば粘土状のものが付着している。無文方磚は各種の異形磚に加工される。方磚は一辺（大きいほうの面。以下同じ）33.7～34.7㎝、厚さ４～５㎝。2南:T8③:49は、一辺33.7㎝、厚さ4.0㎝（図版67－１）。

幾何学文方磚　　13点。一面は無文で、一面は幾何学文様が全体に施される。用途は無文方磚と同じである。文様は陽文で、全体の配置は次のとおり。二重線の方格内で直角に交差する二重線により磚面を４区画に分割し、区画内には２種類の文様を配する。一つは曲折文で、もう一つは菱形文と直角文である。対角線方向の両区画に同じ文様が配される。磚面の文様細部の特徴と磚の規格によって、Ⅰ～Ⅲの３型に分類できる。

Ⅰ型は３点。曲折文区画内を二重線で４小区に分割し、各小区に１組の曲折文を配する。二重線は５回折れ曲がる。菱形文と直角文の区画内にある三重の左斜線と三重の右斜線が交差して、１小区を12に分割し、中心の４区画には三重の菱形文、周囲の８小区画には三重の直角文が配さ



１：幾何学文方磚（Ⅰ型、2南:T6③:8）　２：幾何学文方磚（Ⅱ型、2南:T1③:25）
３：幾何学文方磚（Ⅲ型、2北:T1③:21）　４：小方格文方磚（2北:T1③:48）

第69図　２号建築出土磚（１）

れる。2南:T6③:8（第69図１、図版67－２）は、長方形に加工され（異形磚）、文様面は長さ35cm（もとの辺長）、幅28.5cm、無文面の長さ35.3cm、幅28.8cm、厚さ5.1cm。上面は無文で、舗装の際に、無文の面を上に向けていたことがわかる。

Ⅱ型は４点。Ⅰ型と異なり、曲折文区画の各曲折文の外周に一つずつ方形の枠がある。菱形文と直角文の区画内にある対角線は、この区画を４小区に分割する。各小区には１組の二重線の菱形文と２組の二重線の直角文が配され、もっとも外側にある菱形文の両辺は区画線と共有している。2南:T1③:25（第69図２、図版67－３）は破片で、文様は上面にある。長さ33cm、残存幅17cm、厚さ4.4cm。

Ⅲ型は６点。Ⅰ型と異なり、曲折文区は二重線が６回折れ曲がる。菱形文と直角文の区画内の対角線はこの区画を４小区に分割する。各小区には１組の四重菱形文と２組の四重直角文を配する。2北:T1③:21（第69図３、図版67－４）は、文様が上面にある。一辺33cm、厚さ４cm。

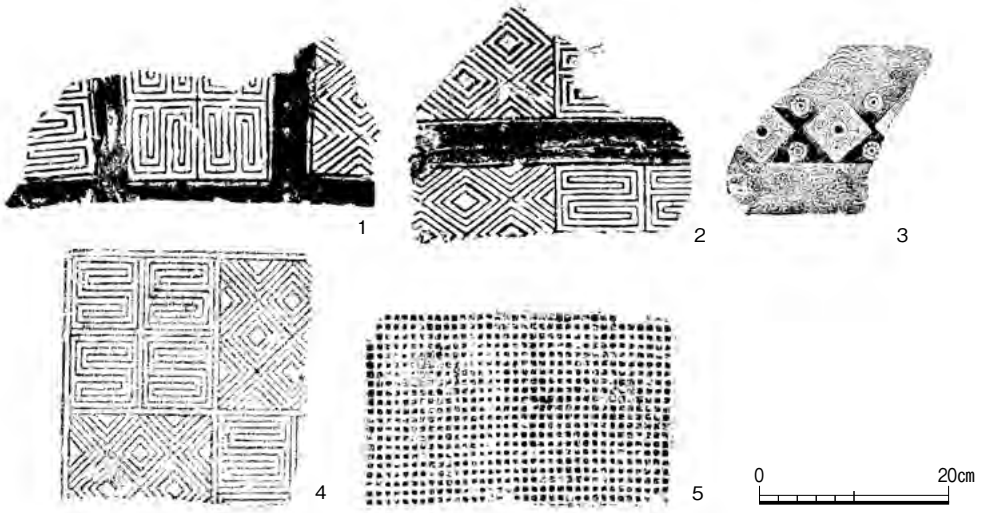
小方格文方磚　２点。いずれも断片。一面は無文で、一面には小方格文が施される。2北:T1③:48（第69図４）は、残存長19cm、残存幅17.5cm、厚さ5.5cm。

長方磚　２点。無文。排水穴の四壁に用いられている。2南:T8③:52は、上面の長さ38cm、幅19cm、厚さ9.7cm（図版67－５）。

扇形磚　４点。扇形で無文。井戸の壁面に積み重ねられる。2南:T5③:70は、上面の長さ30～36.4cm、幅13.8cm、厚さ6.5cm（図版67－６）。

空心磚　15点。おそらく階段に用いられたもので、スタンプ文様から２型に分類できる。

Ⅰ型は９点。幾何学文空心磚である。区画線は単線で周縁は幅広い。2北:T3③:4（第70図１、図版67－７）は角の部分で、４面すべてに文様がある。残存長17.7cm、残存幅12.9cm、残存高18.6cm、器壁の厚さ4.7～５cm。2北:T3③:17（第70図２、図版67－８）も角の部分で、３面中２面に文様が見られ、１面は無文で、１面は口が開いている。残存長30.7cm、残存幅10cm、残存高15cm、器壁の厚さ4.1～4.9cm。



１：空心磚（Ⅰ型、2北:T3③:4）　２：空心磚（Ⅰ型、2北:T3③:17）　３：空心磚（Ⅱ型１式、2南:T3③:9）
４：小方磚（2南:T6③:7）　５：長方形磚（2南:T8③:50）

第70図　２号建築出土磚（２）

Ⅱ型は６点。表面に翼虎文あるいは龍文、柿蔕文、珠文などの文様を施す。文様の組み合わせによって２式に分類できる。

１式は２点。二辺に翼虎文を飾り、その間に柿蔕文と珠文を配する。2南：T3③：9（第70図３、図版68－１）は残存長22cm、残存幅６cm、高さ18cm、器壁の厚さ4.2cm。

２式は４点。三辺に竜文を飾り、その間に柿蔕文と大珠文・小珠文を飾る。2南：T8③：46（図版68－２）は、残存長25.4cm、幅33.5cm、残存高８cm、器壁の厚さ3.7～4.4cm。

異形磚は、方磚や長方磚を加工して作られ、形状・用途がそれぞれ異なる。小方磚、長方形磚、長条形磚、三角形磚、四辺形磚、L字形磚、軸吊孔のある磚がある。磚の側面には刃物で削り取った痕跡が残る。

小方磚　１点（2南：T6③：7、第70図４、図版68－３）。Ⅰ型の幾何学文方磚を加工したもの。文様は下面にあり、上面は無文である。一辺27.3～28.4cm、厚さ5.1cm。

長方形磚　１点（2南：T8③：50、第70図５、図版68－４）。小方格文方磚を加工したもので、上面と下面の大きさはほぼ同じである。長さ34cm（本来の辺長）、幅21cm、厚さ4.6cm。

長条形磚　５点。無文方磚と幾何学文方磚を加工したもの。2南：T8：48（図版68－５）は無文方磚を加工したもので、上面の長さ32.5cm、幅12.2cm、厚さ4.4cm。2南：T1③：33（図版68－６）は無文方磚を加工したもので、上面の長さ33cm、幅11cm、厚さ4.4cm。2北：T1③：37（図版68－７）は幾何学文方磚を加工したもの。上面が文様面で、長さ34cm、幅8.4～9.2cm、厚さ4.0cm。

L字形磚　３点。無文方磚を加工したもの。2南：T5③：78（図版68－８）は、上面の長さ29.5cm、幅20.5cm、厚さ4.4cm。

四辺形磚　１点（2南：T5③：74、図版69－１）。無文方磚を加工したもので、三角形の一つの角を取り去ったような形状である。上面の一辺30.5cm、高さ22cm、厚さ3.7cm。

三角形磚　３点。無文方磚を加工したもの。2南：T5③：85（図版69－２）は、上面の長辺が32.4cm、高さ16.9cm、厚さ4.4cm。

軸吊孔のある磚　１点（2北：T3③：6、図版69－３）。長方磚を加工したものである。残存長21.5cm、幅19cm、厚さ9.7cm。臼状の凹みは磚の平面の縁に偏り、直径6.6cm、深さ3.5cm。

日干煉瓦　１点（2南：T8③：40、図版69－４）。泥質で焼かれ、赤色を呈する。残存長20cm、幅23.5cm、厚さ10.3cm。

B　平瓦・丸瓦

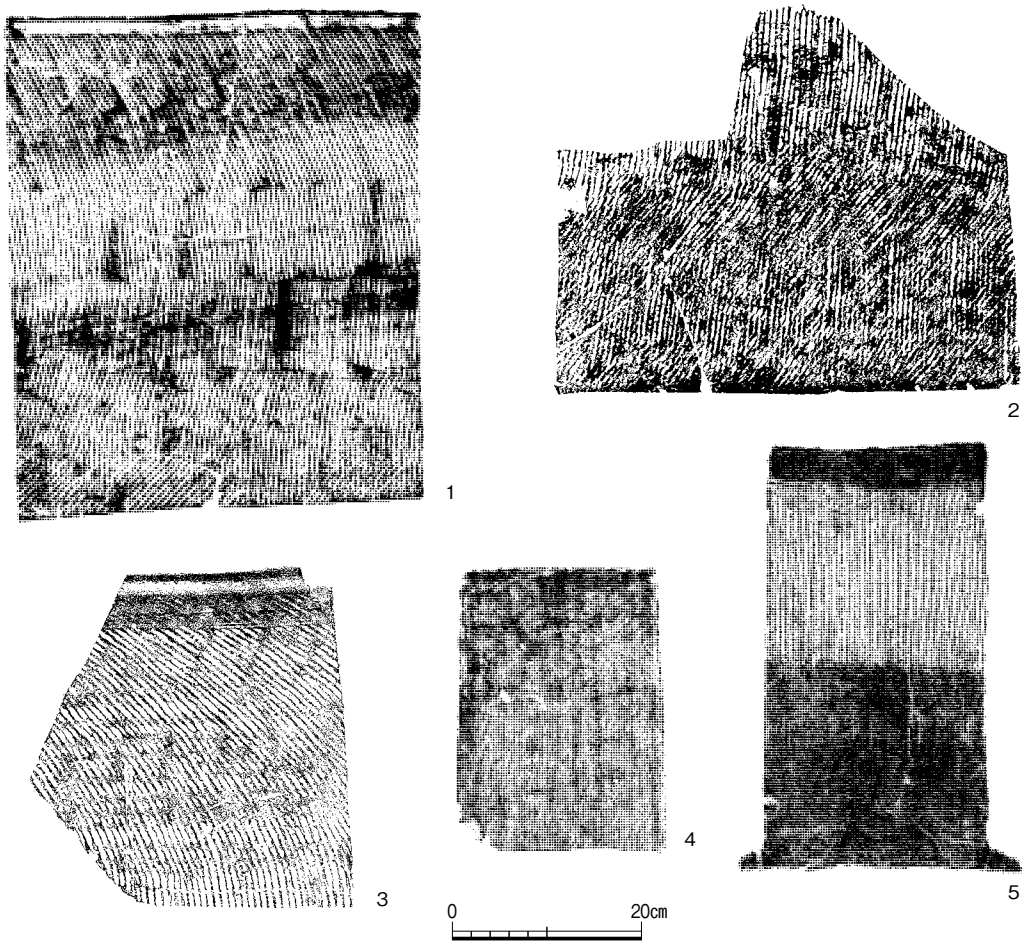
平　瓦　８点。凸面には斜位の太い縄目があり、凹面は無文か布目がみられる。2北：T3③：13（第71図１、図版69－５・６）は完形品で、長さ54.3cm、内径37.6～38.5cm。狭端部は厚さ1.2cmで外反する。広端部の厚さは1.4cm。凸面の縄目の幅は0.6cm、狭端部近くはナデ調整するが、縄目は完全に消えていない。凹面には布目が見られ、下端に近い部分には麦粒文があり、部分的に布目をなで消している。2南：T5③：42（第71図２、図版69－７）は残存長41.3cm、内径40.3cm、広端部の厚さ1.4cm。凸面の縄目の幅は0.6cm、凸面広端縁はナデ調整する。凹面は無文。2南：T7③：7（第71図３、図版69－８）は、残存長35.6cm、残存内径31cm、狭端部の厚さ1.4cm。狭端部は外反する。凸面の縄目の幅は0.7cmで、狭端部近くはナデ調整する。凹面は無文。

丸　瓦　30点。多くは破片であるが、少数の完形品があり、瓦当をともなうものもある。縄目

と布目の密度などの特徴により、３型に分類する。

Ⅰ型は１点（2北:T1③:29、第71図４、図版70－１）。小さめで、玉縁は短く、薄手である。縄目は細く、布目も非常に細かい。残存長32.5cm、内径11.3cm、厚さ1.2cm、玉縁の長さ2.1cm、厚さ0.8cm。凸面の縄目の幅は0.2cm。

Ⅱ型は27点。大きめで、玉縁は比較的長く、厚手である。縄目は比較的太く、上下の両端に近い部分はなで消している。布目には粗いものと細かいものがある。2南:T7③:28（図版70－３）は、瓦当をともなう。全長50.7cm、内径12.8cm、厚さ1.6cm、玉縁の長さ4.2cm、厚さ1.5cm。凸面の縄目の幅は0.3cm、丸瓦部両端の幅約4.2cm（玉縁部を含まない）～22.5cm（瓦当を含む）の部分をなで消すが、部分的に縄目が残る。丸瓦部中央の玉縁から9.8cmの位置に円孔が一つあり、直径1.4cm。凹面の布目はやや粗い。瓦当はⅢ型11C式に属する雲文瓦当である。2北:T4③:10（第71図５、図版70－２）も瓦当をともなう。全長49.4cm、内径13.1cm、厚さ1.3cm、玉縁の長さ4.9cm、厚さ1.6cm。凸面の縄目の幅は0.4cm、丸瓦部両端の幅約4.6cm（玉縁部を含まない）～21.2cm（瓦当を含む）の部分をなで消すが、部分的に縄目が残る。凹面の布目は非常に粗い。瓦当はⅢ型11J式に属する。



１：平瓦（凸面、2北:T3③:13）　２：平瓦（凸面、2南:T5③:42）　３：平瓦（凸面、2南:T7③:7）
４：丸瓦（Ⅰ型、2北:T1③:29）　５：丸瓦（Ⅱ型、2北:T4③:10）

第71図　２号建築出土丸瓦・平瓦

Ⅲ型は２点。大きめで、玉縁は長く、比較的厚い。縄目は太く、上下両端に近い部分は縄目をなで消している。布目は比較的細かい。2南:T7③:24（図版70－４）は全長52.2cm、内径14.9cm、厚さ1.4cm、玉縁の長さ5.4cm、厚さ1.9cm。凸面の縄目の幅は0.6cmで、丸瓦両端の幅約2.2cm（玉縁部を含まない）～25.5cmの部分をなで消し、無文とする。2南:T5③:62（図版70－５）は残存長30.5cm、内径15.5cm、厚さ1.9cm、玉縁の長さ6.7cm、厚さ2.3cm。凸面の縄目の幅は0.6cm、上端近くの幅約4.8cm（玉縁を含まない）の部分をなで消して無文にする。

C　瓦　当

301点。すべて軒丸瓦である。多くは破片だが、完形品が少数あり、丸瓦部をともなうものもある。すべて笵型で成形しており、丸瓦部を接合する方法には少なくとも４種類がある。

丸瓦部接合法は４種類

第１種は、笵型上の瓦当裏面に粘土紐を積み上げて直接円筒を作った後（模骨は用いない）、円筒を半截する。瓦当裏面の丸瓦断面に沿って、糸を通した痕跡が残る。瓦当裏面下半には突帯が残り、突帯上面には糸切り痕がある。瓦当裏面と丸瓦の内側に接合粘土はみられない。

第２種は、笵型にのせた瓦当裏面上で、直接、模骨を用いて円筒を作り、模骨をはずした後に円筒を半截する。瓦当裏面の丸瓦半截面に沿って糸を通した痕跡がある。瓦当裏面には糸切り痕のある突帯が残る。瓦当裏面と丸瓦の内側に接合粘土はみられない。瓦当裏面には長方形・馬蹄形の隆起や、部分的に布目がみられる。

第３種は、笵型上で瓦当と円筒を接合した後に、円筒を半截する。瓦当裏面と丸瓦の内側には、一周する接合粘土がみられる。瓦当裏面には、丸瓦半截面に沿って糸を通した痕跡があり、瓦当裏面には糸切り痕のある突帯が残る。

第４種は、笵型上で瓦当と半截した丸瓦を直接、接合する方法で、瓦当裏面と丸瓦の内側には半周分の接合粘土がある。瓦当裏面に糸を通した痕跡や糸切り痕はない。

以上の４種類の方法のうち、３種類は糸切りを必要とする。糸切りの方法にも２種類があると推測される。一つは、糸の一端を固定し、別の端を引っ張って円筒の半分を切り取る方法である。もう一つは、まず糸の一端を円筒の外側の切り割る部分にまわして貼りつけ、別の端を引いて円筒を半截する方法である。糸切りの方向は、一般に、円筒を手前にして右から左であるが、逆の方向もある。２種類の半截方法は、円筒の切り取り時に残る痕跡が異なる。

瓦当面の装飾は文様と文字に大別され、文様瓦当が最も多い。文様瓦当の中では、雲文瓦当が主体で、このほかに葵（き）文瓦当と渦文瓦当が各１点ある。

雲文瓦当　269点。大部分が灰色を呈する。瓦当面は４区画に分割され、区画中には各種の雲文を飾る。瓦当面の文様の違いにより、Ⅲ型とⅣ型に分類できる。

Ⅲ型は189点。界線が中心文を貫かない。中心文と雲文の形状の違いで16式に分類できる。

雲文瓦当Ⅲ型

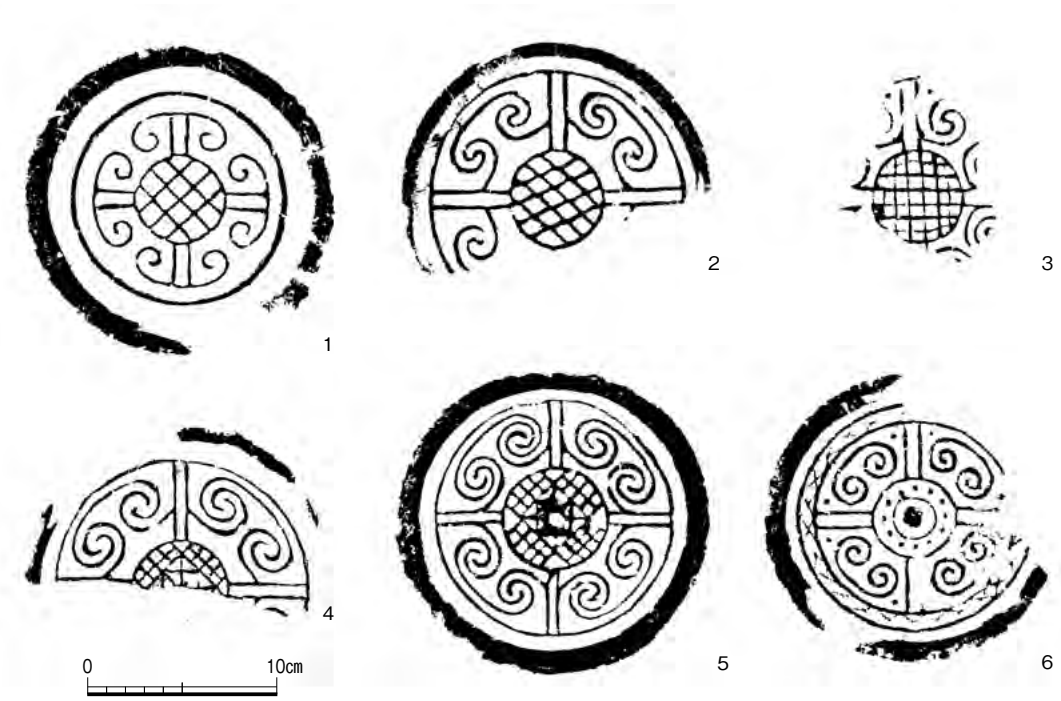
１式は１点（2北:T5③:21、第72図１、図版70－６）。瓦当は完形で、丸瓦部をともなう。瓦当面には二重の圏線がめぐり、中心文は３本の線が交わる斜格子文である。二重の界線はそれぞれ雲文の中央部とつながり、雲文の末端は一巻きする。瓦当裏面下半の突帯は幅2.5cm、高さ0.4cmで、糸切り痕がある。瓦当径は不明。周縁は幅1.4cm、高さ0.9cm、厚さ2.3cm。丸瓦部は粘土紐を積み上げて作られている。残存長12.7cm、内径12.7cm、厚さ1.4cm。凸面には斜位の縄目が残り、瓦当沿いはなで消されている。縄目の幅は0.4cm。凹面には凹点文がみられる。

４式は２点。２種類ある。第１種は１点（2北:T1③:16、第72図２、図版70－７）。瓦当面には二重に圏線がめぐり、中心文は４本の線が斜めに交わる斜格子文である。雲文の末端から線が反対方向に巻き出て、界線とつながる。瓦当裏面下半の突帯は幅2.3cm、高さ1.1cmで、糸切り痕がある。瓦当径15.4cm、周縁の幅0.8cm、高さ0.6cm、厚さ2.8cm。第２種も１点（2北:T1③:30、第72図３、図版71－１）で、瓦当中央部が残る。瓦当面の雲文は第１種と同じだが、中心文は６本の線が交わる格子文である。界線と中心文の格子文がつながり、界線の間に線がもう１本ある。雲文の両側には一つずつ珠文が配される。瓦当裏面には馬蹄形の突出部がある。残存長８cm、幅4.9cm、高さ0.7cm。瓦当の残存長10cm、幅8.9cm、瓦当中央部の厚さ2.1cm。

５式は２点。２種類ある。第１種は１点（2北:T5③:39、第72図４、図版71－２）。丸瓦部をともなう。瓦当面の文様は４式と同じで、中心文には縦横各７本と斜線６本が交差して斜格子文と三角文をつくる。雲文の末端から反対巻きに一周半して界線とつながる。瓦当裏面は糸切りしている。瓦当径15.0cm、周縁の幅0.9cm、高さ0.9cm、瓦当中央部の厚さ1.5cm。丸瓦部は残存長７cm、内径12.7cm、厚さ1.6cm。凸面には縦位の縄目が施され、瓦当に近い部分はなで消されている。縄目の幅は0.3cm。凹面には凹点文がみられる。第２種は１点（2北:T1③:46、第72図５、図版71－３）、瓦当面の雲文は第１種と同じだが、中心文には８本の横線と７本の縦線、６本の斜線が交差して斜格子文と三角文をつくる。中心文の中央には、裏面まで貫通する円孔が一つあり、直径0.7cm。瓦当面から裏面に向けて穿孔している。瓦当裏面には長方形の突出部がみられる。瓦当裏面下半の突帯は幅1.6cm、高さ0.5cmで、糸切り痕がある。瓦当径15.5cm、周縁の幅1.2cm、高さ0.35cm、厚さ2.1cm。

数量が最多

11式は数量が最も多く、128点ある。瓦当面には四重に圏線がめぐる。中心文は半球形文と珠



１：Ⅲ型１式（2北:T5③:21）　２：Ⅲ型４式（2北:T1③:16）　３：Ⅲ型４式（2北:T1③:30）
４：Ⅲ型５式（2北:T5③:39）　５：Ⅲ型５式（2北:T1③:39）　６：Ⅲ型11A式（2北:T5③:3）

第72図　２号建築出土雲文瓦当（１）

文で、雲文と周縁の間には「X」字形文が配される。瓦当裏面に糸切痕や分割痕跡はみられない。格子文の密度によって、A～Dの４亜式に分類できる。

11A式は、圏線文の間にある「X」字形文がとくにまばらである。珠文の数によって３種類に分類できる。

第１種は中心文に９個の珠文をおき、雲文の両側に１個ずつの珠文を配する。2南:T7③:69は、瓦当裏面の中央に楕円形の凹みがある。瓦当半径7.8cm、周縁の幅1.4cm、周縁の高さ0.5cm、瓦当中央部の厚さ2.9cm。

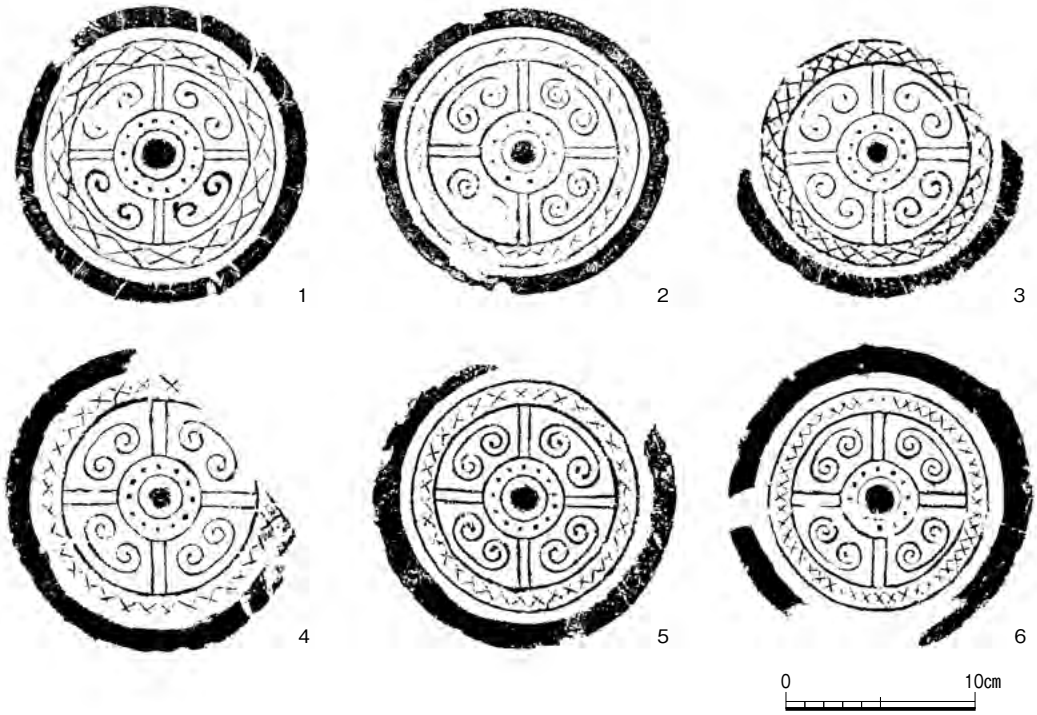
第２種は中心文に12個の珠文をおき、雲文の両側に珠文を１個ずつ配する。2北:T5③:3（第72図６、図版71－４）は、瓦当裏面が平滑に整えられ、中央に楕円形の凹みがある。瓦当径14.5cm、周縁の幅1.1cm、高さ0.4cm、厚さ2.9cm。

第３種は中心文に13個の珠文をおき、雲文の両側に珠文を１個ずつ配する。2南:T7③:33（第73図１、図版71－５）は、瓦当裏面に楕円形の凹みがある。瓦当径14.9cm、周縁の幅1.0cm、高さ0.5cm、厚さ3.5cm。

11B式は雲文と周縁間の「X」字形文がまばらである。珠文の数などで５種類に分類できる。

第１種は中心文に珠文を９個配する。2南:T5③:14（第73図２、図版71－６）は、瓦当裏面が平滑で、楕円形の凹みがある。瓦当径15.2cm、周縁の幅1.1cm、高さ0.3cm、厚さ3.5cm。

第２種は中心文に珠文を10個配する。2南:T7③:36は、瓦当裏面が平滑で、楕円形の凹みがある。瓦当径15.6cm、周縁の幅1.4cm、高さ0.5cm、厚さ2.6cm。2南:T7③:12（図版71－７）は、雲文の両側に珠文が１個ずつ配される。瓦当裏面は平滑で、中央に楕円形の凹みがある。瓦当径15.7



１：Ⅲ型11A式（2南:T7③:33）　２：Ⅲ型11B式（2南:T5③:14）　３：Ⅲ型11B式（2南:T5③:36）
４：Ⅲ型11B式（2北:T1③:4）　５：Ⅲ型11B式（2北:T4③:2）　６：Ⅲ型11C式（2北:T5③:38）

第73図　２号建築出土雲文瓦当（２）

cm、周縁の幅1.3cm、高さ0.6cm、厚さ2.8cm。

第３種は中心文に珠文を11個配する。2南:T5③:36（第73図３、図版71－８）は、瓦当裏面が平滑で、中央に楕円形の凹みがある。瓦当径15.4cm、周縁の幅1.2cm、高さ0.6cm、厚さ2.6cm。

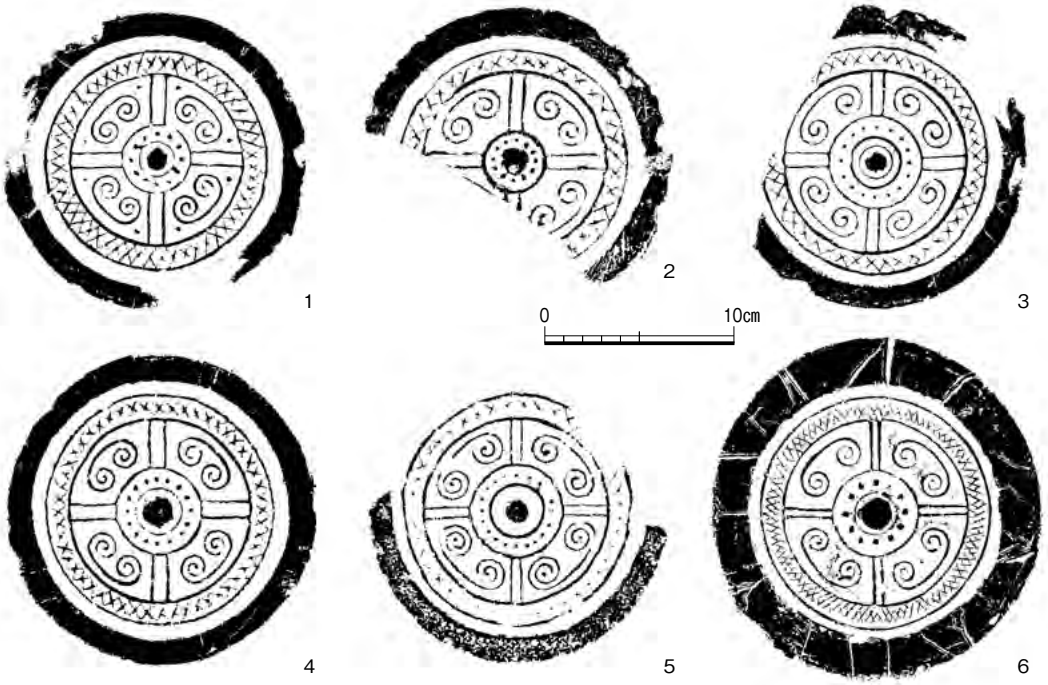
第４種は中心文に珠文を12個配する。2北:T1③:4（第73図４、図版72－１）は、周縁内側の圏線がない。瓦当裏面には縄目が施され、下半外縁に沿って溝がめぐる。瓦当径15.3cm、周縁の幅1.2cm、高さ0.8cm、厚さ2.5cm。

第５種は中心文に珠文を13個配する。2北:T4③:2（第73図５、図版72－２）は、瓦当裏面中央に楕円形の凹みがある。瓦当径15.8cm、周縁の幅1.5cm、高さ0.5cm、厚さ2.6cm。

11C式は、雲文と周縁間の「X」字形文が細密である。珠文数などで３種類に分類できる。

第１種は中心文に珠文を12個配する。2北:T5③:38（第73図６、図版72－３）は、瓦当裏面中央に楕円形の凹みがある。瓦当径15.6cm、周縁の幅1.4cm、高さ0.6cm、厚さ2.2cm。2南:T5③:56（第74図１、図版72－４）は、破損した丸瓦部をともなう。瓦当裏面は平滑だが、縄目がところどころにみられる。瓦当径15.5cm、周縁の幅1.3cm、高さ0.7cm、厚さ2.6cm。丸瓦部残存長7.5cm、内径13.2cm、厚さ1.3cm。凸面には縦位の縄目が施され、縄目の幅は0.2cm。瓦当に近い部分はなで消されており、凹面には布目がみられる。2南:T1③:23（第74図２、図版72－５）は、瓦当裏面が平滑である。瓦当径16.3cm、周縁の幅1.6cm、高さ0.5cm、厚さ2.4cm。

第２種は中心文に珠文を16個配する。2南:T6③:37（第74図３、図版72－６）は、瓦当裏面が平滑である。瓦当径15.5cm、周縁の幅1.3cm、高さ0.6cm、厚さ2.4cm。2北:T5③:7（第74図４、図版72



１：Ⅲ型11C式（2南:T5③:56）　２：Ⅲ型11C式（2南:T1③:23）　３：Ⅲ型11C式（2南:T6③:37）
４：Ⅲ型11C式（2北:T5③:7）　５：Ⅲ型11C式（2南:T4③:7）　６：Ⅲ型11D式（2南:T8③:11）

第74図　２号建築出土雲文瓦当（３）

－７）は、瓦当裏面中央に楕円形の凹みがあり、周縁に沿って溝が半周めぐる。瓦当径16.1cm、周縁の幅1.5cm、高さ0.6cm、厚さ2.7cm。

第３種は中心文に二重に圏線がめぐり、圏線間に珠文を20個配する。2南：T4③：7（第74図５、図版72－８）は、瓦当裏面が平滑で、瓦当径15.9cm、周縁の幅1.5cm、高さ0.6cm、厚さ2.4cm。

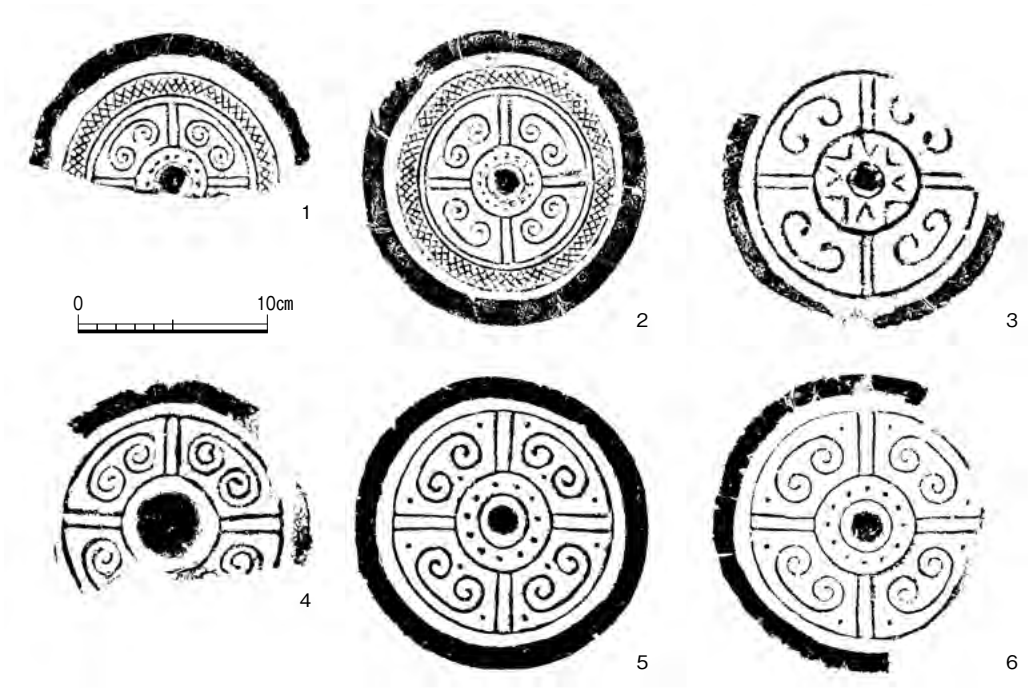
11D式は雲文と周縁間の「X」字形文がとくに細密である。珠文数で３種類に分類できる。

第１種は中心文に珠文を12個配する。2南：T1③：65（図版73－１）は、雲文の外側は二重の圏線で、瓦当裏面中央に楕円形の凹みがある。瓦当径15.5cm、周縁の幅1.4cm、高さ0.4cm、厚さ2.0cm。2南：T8③：11（第74図６、図版73－２）は、瓦当裏面中央に楕円形の凹みがある。瓦当径17.3cm、周縁の幅2.2cm、高さ0.4cm、厚さ2.2cm。

第２種は中心文に珠文を13個配する。雲文外側の圏線は二重線である。2南：T1③：2（第75図１、図版73－３）は、瓦当裏面の周縁に沿って溝が半周めぐる。瓦当径約15.0cm、周縁の幅1.5cm、高さ0.8cm、厚さ1.6cm。

第３種は中心文に珠文を16個配する。雲文外側の圏線は二重線である。2南：T7③：63（第75図２、図版73－４）は、瓦当裏面中央に楕円形の凹みがある。瓦当径約15.1cm、周縁の幅1.3cm、高さ0.5cm、厚さ1.5cm。

12式は２点。瓦当面には三重に圏線がめぐり、中心は半球形文である。中心文には「L」字形文と「V」字形文がそれぞれ四つ配され、八角の星型に似る。瓦当裏面には縄目があり、丸瓦の分割痕跡はない。2南：T6③：30（第75図３、図版73－５）は、瓦当径15.2cm、周縁の幅1.2cm、高さ0.5cm、厚さ2.6cm。



１：Ⅲ型11D式（2南：T1③：2）　２：Ⅲ型11D式（2南：T7③：63）　３：Ⅲ型12式（2南：T6③：30）
４：Ⅲ型16式（2南：T8③：34）　５：Ⅲ型17式（2北：T5③：23）　６：Ⅲ型17式（2南：T6③：40）

第75図　２号建築出土雲文瓦当（４）

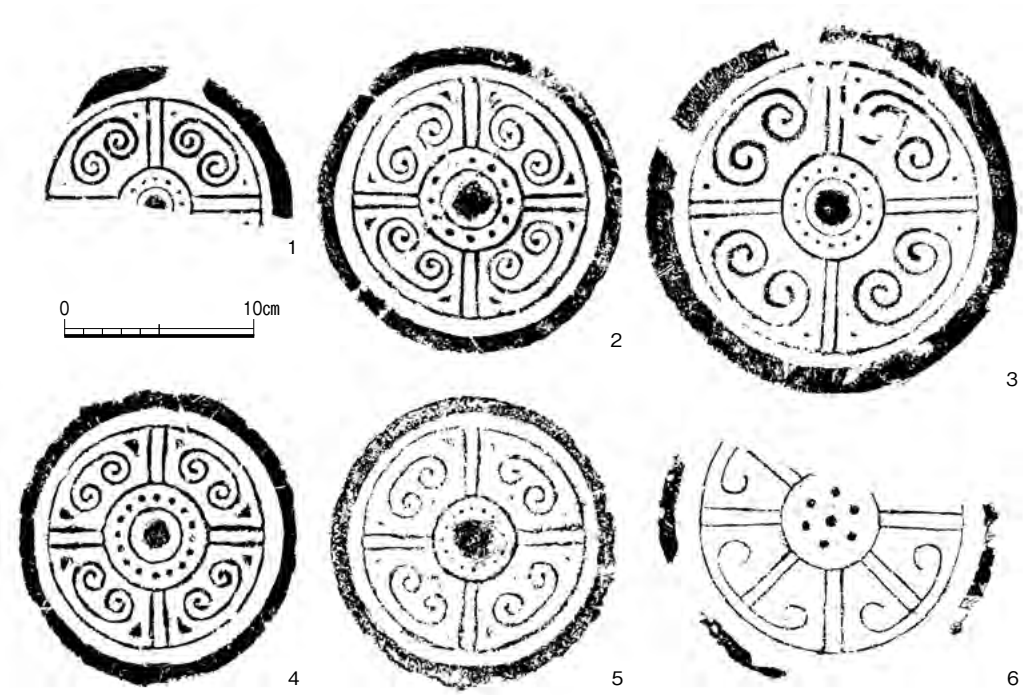
16式は２点。瓦当面には二重に圏線がめぐり、中心は半球形文である。瓦当裏面に丸瓦の分割痕跡はない。2南:T8③:34（第75図４、図版73－６）は、スサ混じりの胎土で、色調は赤色を呈する。瓦当径15.2cm、周縁の幅1.3cm、高さ0.4cm、厚さ2.6cm。

17式は35点。瓦当面には三重に圏線がめぐり、中心は半球形文で、その周囲に珠文が一周めぐる。瓦当裏面に丸瓦の分割痕跡はない。珠文の数などから５種類に分類できる。

第１種は９点。中心文には半球形文と珠文11個をおき、雲文の両側と下に一つずつ珠文を配する。2北:T5③:23（第75図５、図版73－７）は、丸瓦部をともなう。瓦当裏面中央には楕円形の凹みがある。瓦当径15.3cm、周縁の幅1.4cm、高さ0.4cm、厚さ2.3cm。丸瓦部は残存長24cm、内径13.6cm、器壁の厚さ1.6cm。凸面には縦位の縄目が施され、端部に近い部分はなで消されている。縄目の幅は0.3cm。凹面には布目がみられる。

第２種は５点。瓦当面の文様は第１種と同じだが、中心文に半球形文と珠文12個を配する。2南:T6③:40（第75図６、図版73－８）は、瓦当面の雲文の両側に１個ずつの珠文を配する。瓦当裏面には縄目が施される。瓦当径15.5cm、周縁の幅1.1cm、高さ0.6cm、厚さ2.1cm。2南:T5③:61（第76図１、図版74－１）は、瓦当が比較的小さい。雲文の両側には珠文が１個ずつ配される。瓦当径14.5cm、周縁の幅1.2cm、高さ0.4cm、厚さ２cm。2北:T4③:6（第76図２、図版74－２）は、雲文の両側に三角形文が一つずつ配される。瓦当裏面中央に楕円形の凹みがあり、凹みの外側には周縁に沿って溝が半周めぐる。瓦当径15.8cm、周縁の幅1.0cm、高さ0.6cm、厚さ2.6cm。

第３種は８点。瓦当文様は第２種と同じだが、中心文に半球形文と珠文15個を配する。雲文の



１：Ⅲ型17式（2南:T5③:61）　２：Ⅲ型17式（2北:T4③:6）　３：Ⅲ型17式（2南:T1③:27）
４：Ⅲ型17式（2北:T5③:20）　５：Ⅲ型17式（2南:T7③:64）　６：Ⅲ型18式（2南:T1③:51）

第76図　２号建築出土雲文瓦当（５）

両側には珠文が１個ずつ配される。2南:T1③:27（第76図３、図版74－３）は、瓦当が比較的大きい。瓦当裏面には縄目が施され、中央の凹みを充塡した痕がある。周縁に沿って溝が半周めぐる。瓦当径19.8cm、周縁の幅1.5cm、高さ0.6cm、厚さ2.6cm。

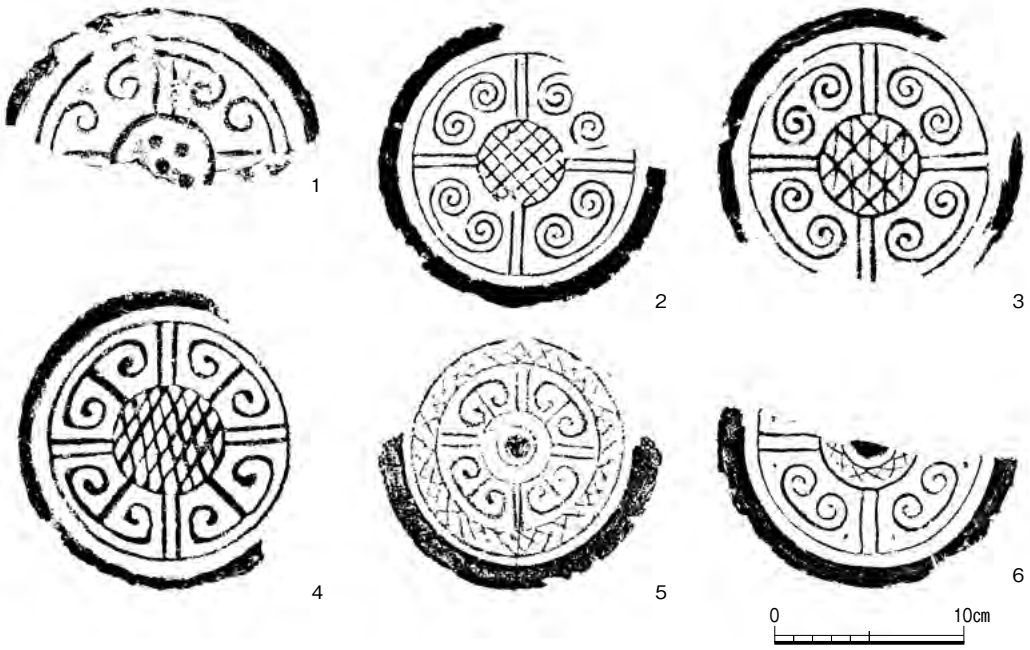
第４種は５点。瓦当文様は第２種と同じだが、中心文に半球形文と珠文16個を配し、瓦当面の雲文両側には三角文が１個ずつ配される。2北:T5③:20（第76図４、図版74－４）は、瓦当裏面中央に楕円形の凹みがあり、凹みの外には周縁に沿って溝が半周めぐる。瓦当径15.0cm、周縁の幅1.0cm、高さ0.4cm、厚さ2.1cm。

第５種は８点。瓦当面に二重の圏線がめぐり、中心文は半球形文と珠文17個を配する。雲文の両側に三角形文、下方には珠文が１個配される。2南:T7③:64（第76図５、図版74－５）は、瓦当裏面に楕円形の凹みがある。瓦当径15.5cm、周縁の幅1.1cm、高さ0.7cm、厚さ2.4cm。

18式は２点。瓦当面には二重に圏線がめぐる。中心文には珠文が７個配され、雲文の中央からは二重線が伸びて中心文の圏線につながる。2南:T2③:8（図版74－６）は丸瓦部をともなう。瓦当裏面には糸切り痕がある。瓦当径17.6cm、周縁の幅1.1cm、高さ0.8cm、瓦当中央部の厚さ1.7cm。丸瓦部は粘土紐を積み上げて成形している。残存長15cm、内径15.0cm、厚さ1.9cm。丸瓦部の凸面には縦方向に縄目が叩かれ、縄目の幅は0.2cm。端部に近い部分はなで消す。「大一」の２字が、瓦当面と反対の方向を向いて刻印されている。凹面には縄目が施される。2南:T1③:51（第76図６、図版74－７）は、瓦当裏面下半の突帯の幅2.5cm、高さ0.5cm。糸切り痕がある。瓦当径17.6cm、周縁の幅1.1cm、高さ0.8cm、厚さ2.9cm。

「大一」刻印

21式は１点（2南:T1③:9、第77図１、図版74－８）。瓦当面には二重に圏線がめぐり、中心文には



１：Ⅲ型21式（2南:T1③:9）　２：Ⅲ型22式（2北:T4③:14）　３：Ⅲ型22式（2北:T1③:42）
４：Ⅲ型28式（2北:T1③:2）　５：Ⅲ型29式（2南:T8③:14）　６：Ⅲ型30式（2北:T1③:15）

第77図　２号建築出土雲文瓦当（６）

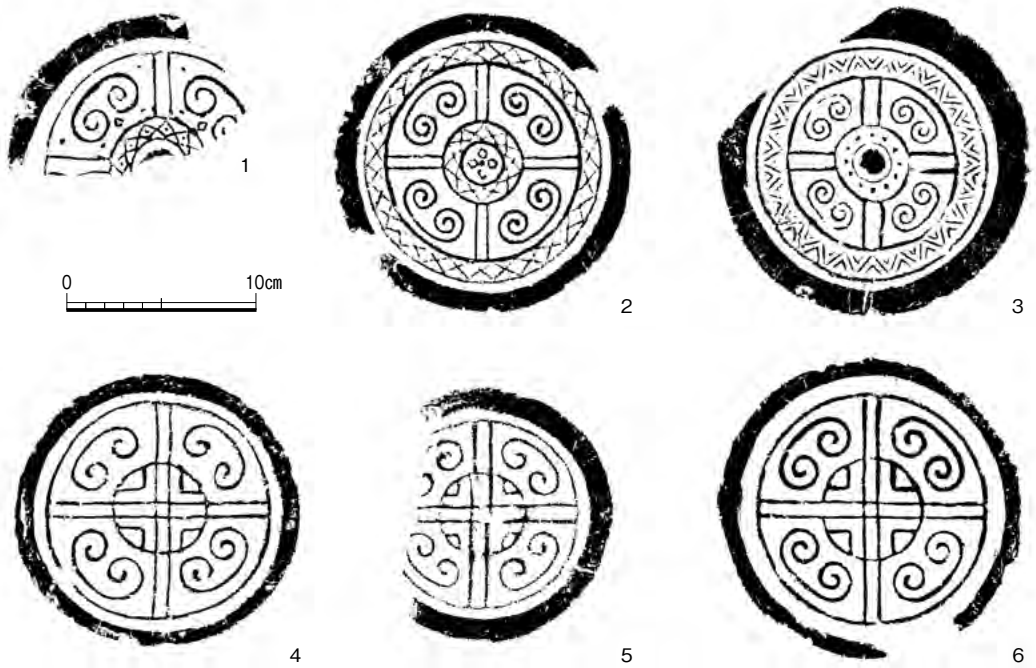
珠文が７個配される。界線は雲文の中央につながる。瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当径16.7㎝、周縁の幅0.9㎝、高さ0.7㎝、瓦当中央部の厚さ1.2㎝。

22式は２点あり、２種類ある。第１種は2北:T4③:14（第77図２、図版75－１）で、瓦当面には二重に圏線がめぐる。中心文では５本の線が交わって斜格子文をつくり、雲文の末端は２回巻く。瓦当裏面下半の突帯は幅2.0㎝、高さ0.7㎝で、糸切り痕がある。瓦当径14.7㎝、周縁の幅1.3㎝、高さ0.4㎝、厚さ2.0㎝。第２種は2北:T1③:42（第77図３、図版75－２）で、瓦当文様は基本的に22A式と同じだが、中心文は３本の横線と３本の縦線、５本の斜線が交わって三角形文をつくる。瓦当裏面下半の突帯は幅2.0㎝、高さ0.2㎝で、糸切り痕がある。瓦当径15.8㎝、周縁の幅1.1㎝、高さ0.6㎝、厚さ2.5㎝。

28式は１点（2北:T1③:2、第77図４、図版75－３）。瓦当文様は19式と似る。瓦当面には二重に圏線がめぐり、中心文は７本の線と６本の線が交わった斜格子文である。雲文の中央から単線が１本伸び、中心文につながる。瓦当裏面下半の突帯は幅2.2㎝、高さ0.6㎝で、糸切り痕がある。瓦当径15.8㎝、周縁の幅0.8㎝、高さ0.5㎝、厚さ2.5㎝。

29式は１点（2南:T8③:14、第77図５、図版75－４）。瓦当面には四重に圏線がめぐる。中心文は半球形文で、雲文の中央から線が１本伸びて中心文につながる。雲文外側の圏線間には「X」字形文が配される。瓦当裏面に丸瓦の分割痕跡はない。瓦当径15.5㎝、周縁の幅1.5㎝、高さ0.3㎝、厚さ2.0㎝。

30式は１点（2北:T1③:15、第77図６、図版75－５）。瓦当面には三重に圏線がめぐる。中心文は半球形文の周囲に「X」字形文が配され、その間には珠文がおかれる。雲文の両側にも珠文が１個



１：Ⅲ型31式（2北:T1③:18）　２：Ⅲ型32式（2北:T1③:14）　３：Ⅲ型33式（2南:T5③:37）
４：Ⅳ型１A式（2北:T8③:1）　５：Ⅳ型１A式（2北:T5③:16）　６：Ⅳ型１A式（2北:T2③:18）

第78図　２号建築出土雲文瓦当（７）

ずつ配される。瓦当裏面に丸瓦の分割痕跡はない。瓦当径16.0㎝、周縁の幅1.2㎝、高さ0.5㎝、瓦当中央部の厚さ2.3㎝。

31式は１点（2北:T1③:18、第78図１、図版75－６）。瓦当文様は基本的に30式と同じだが、雲文の下方に柿蔕文と三角形文が配される。瓦当裏面に丸瓦の分割痕跡はない。瓦当径は不明。周縁の幅1.2㎝、高さ0.5㎝、厚さ2.2㎝。

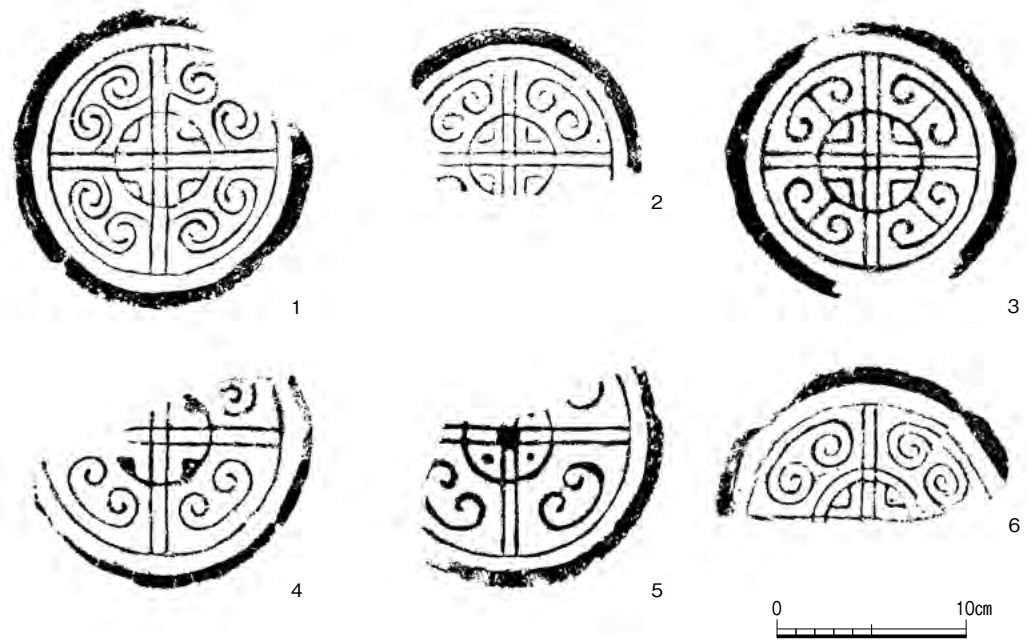
32式は２点。瓦当面には四重に圏線がめぐる。中心には柿蔕文が、その周囲には「X」字形文、雲文と周縁内側の圏線間にも「X」字形文が配される。瓦当裏面に丸瓦の分割痕跡はない。2北:T1③:14（第78図２、図版75－７）は、瓦当径15.3㎝、周縁の幅1.0㎝、高さ0.4㎝、厚さ2.3㎝。

33式は６点。瓦当文様は11式と同じだが、圏線間に「V」字形文が向き合う。瓦当裏面に丸瓦の分割痕跡はない。2南:T5③:37（第78図３、図版75－８）は、瓦当径16.2㎝、周縁の幅1.6㎝、高さ0.4㎝、厚さ2.3㎝。

雲文瓦当Ⅳ型

Ⅳ型は80点。界線が中心文を貫通する。中心文の文様と瓦当面の雲文の変化によって９式に分類できる。

１A式は65点。瓦当面には二重に圏線がめぐる。中心文の各区画には「L」字形文が一つ配される。2北:T5③:16（第78図５、図版76－１）は、瓦当裏面下半の突帯の幅1.7㎝、高さ0.2㎝で、糸切り痕がある。瓦当は比較的小さく、瓦当径13.3㎝、周縁の幅1.1㎝、高さ0.6㎝、厚さ2.3㎝。2北:T8③:1（第78図４、図版76－２）は、瓦当裏面下半の突帯の幅1.7㎝、高さ0.2㎝で、糸切り痕がある。瓦当径15.1㎝、周縁の幅0.9㎝、高さ0.8㎝、厚さ2.4㎝。2北:T2③:18（第78図６、図版76－３）は瓦当裏面に丸瓦の分割痕跡がない。瓦当は比較的大きく、瓦当径16.0㎝、周縁の幅1.0㎝、高さ0.6㎝、厚さ2.1㎝。



１：Ⅳ型１B式（2北:T5③:8）　２：Ⅳ型２式（2南:T8③:4）　３：Ⅳ型４式（2南:T5③:55）
４：Ⅳ型６式（2北:T5③:6）　５：Ⅳ型10式（2南:T8③:42）　６：Ⅳ型11式（2南:T1③:30）

第79図　２号建築出土雲文瓦当（８）

１B式は２点。雲文の末端から反対方向に巻き込む線があり、界線とつながる。2北:T5③:8（第79図１、図版76－４）は、瓦当裏面下半の突帯の幅2.1㎝、高さ0.2㎝で、糸切り痕がある。瓦当径15.6㎝、周縁の幅1.0㎝、高さ0.8㎝、厚さ2.4㎝。

２式は１点（2南:T8③:4、第79図２、図版76－５）。雲文の両側に珠文が一つずつ配される。瓦当裏面下半の突帯の幅2.2㎝、高さ0.4㎝で、糸切り痕がある。瓦当半径7.2㎝、周縁の幅1.0㎝、高さ0.4㎝、厚さ1.7㎝。

４式は１点（2南:T5③:55、第79図３、図版76－６）。雲文の中央から単線が１本出て中心文につながっている。瓦当裏面に丸瓦の分割痕跡はない。瓦当径15.2㎝、周縁の幅1.0㎝、高さ0.5㎝、厚さ2.4㎝。

５式は１点（2南:T2③:7、図版76－7）。中心文の各区に二重線の「L」字形文を配する。瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当半径8.0㎝、周縁の幅1.0㎝、高さ0.7㎝、瓦当中央部の厚さ1.8㎝。

６式は２点。2北:T5③:6（第79図４、図版76－８）は、中心文の各区に三角形文を配する。瓦当裏面に丸瓦の分割痕跡はない。瓦当径15.6㎝、周縁の幅0.8㎝、高さ0.9㎝、厚さ2.6㎝。

９式は１点（2南:T1③:7、図版77－１）。界線が雲文とつながる。瓦当裏面下半の突帯は幅2.1㎝、高さ0.4㎝で、糸切り痕がある。瓦当径15.8㎝、周縁の幅1.2㎝、高さ0.8㎝、厚さ2.7㎝。

10式は１点（2南:T8③:42、第79図５、図版77－２）。中心文内の各区に珠文が一つずつ配される。瓦当裏面には丸瓦の分割痕跡がない。瓦当半径8.0㎝、周縁の幅0.9㎝、高さ0.7㎝、瓦当中央部の厚さ1.8㎝。

11式は１点（2南:T1③:30、第79図６、図版77－３）。丸瓦部をともなう。中心文は二重の圏線で囲む。瓦当裏面には糸切り痕がある。瓦当半径7.8㎝、周縁の幅1.1㎝、高さ1.1㎝、瓦当中央部の厚さ1.5㎝。丸瓦部は残存長14㎝、内径約13.0㎝、厚さ1.3㎝。凸面には縦位の縄目が施され、端部に近い部分はなで消される。縄目の幅は0.2㎝。凹面には凹点文がみられる。

12式は５点。2南:T1③:36（図版77－４）は丸瓦部をともなう。中心文の「L」字形文内にさらに三角文を一つおく。瓦当裏面下半の突帯は幅2.2㎝、高さ0.5㎝で、糸切り痕がある。瓦当径15.5㎝、周縁の幅0.9㎝、高さ0.5㎝、瓦当中央部の厚さ2.4㎝。丸瓦部の残存長3.5㎝、厚さ1.4㎝。凸面の瓦当沿いはなで消しており、凹面には凹点文がみられる。

葵文瓦当　１点（2南:T3③:8、第80図１、図版77－５）。瓦当面には幅0.7㎝の１本の突線がめぐり、この外側に三重線の葵文が右向きに並ぶ。突線内の文様は不明。瓦当裏面下半の突帯は幅3.0㎝、高さ1.2㎝で、糸切り痕がある。周縁の幅1.0㎝、高さ0.3㎝、厚さ2.7㎝。

渦文瓦当　１点（2南:T4③:3、図版77－６）。Ⅲ型７式に分類される。二重に圏線がめぐり、中心文には格子文を配する。瓦当は界線で４区画に分割され、各区には１対の向かい合う渦文が配される。渦文の一端は界線とつながり、もう一端は一周半巻く。瓦当裏面下半の突帯は幅2.2㎝、高さ0.6㎝で、糸切り痕がある。周縁の幅0.9㎝、高さ0.5㎝、厚さ2.6㎝。

文字瓦当　30点。「右空」「與天無極」「千秋萬歳」「長生無極」の４種類があり、「長生無極」瓦当が最も多い。

「右　空」　「右空」瓦当は１点（2北:T8③:５、第80図２、図版77－７）。周縁の内側に圏線が一周し、その内部は２本の縦線で３区画に分割する。中央の区画には縦方向に陽文篆書の「右空」の２字をおき、両側の２区画には縦方向の「X」字形文を２個ずつ配する。瓦当裏面には糸切り痕がある。

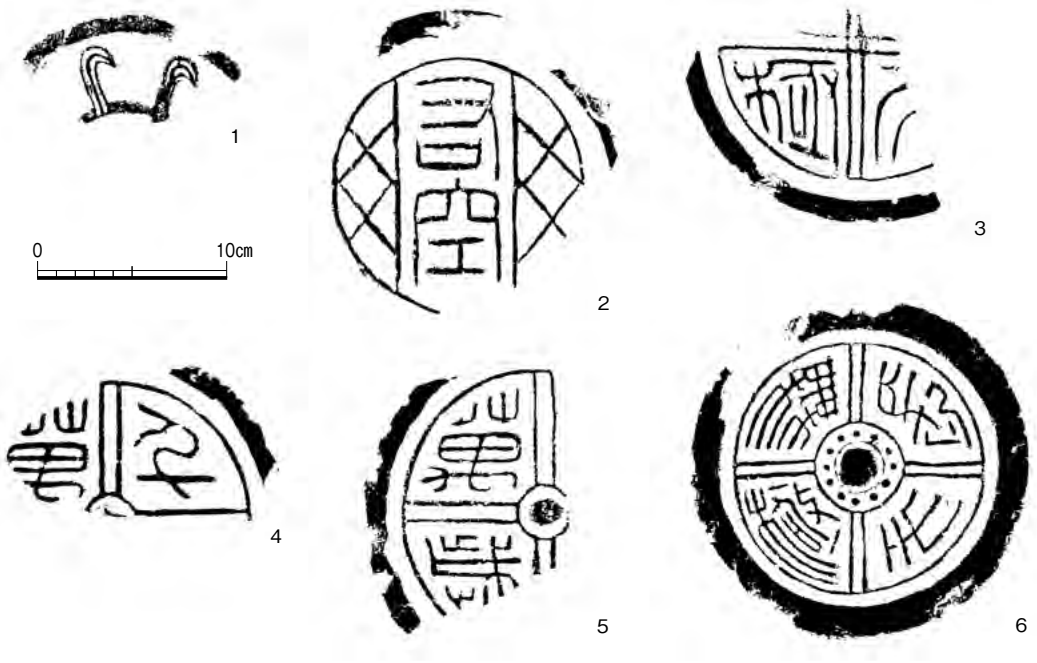
瓦当径約18.2㎝、周縁の幅1.6㎝、高さ0.7㎝、厚さ2.3㎝。

「與天無極」瓦当は３点。2北：T2③：3（第80図３、図版77－８）は、周縁の内側に圏線が一周し、その内部は十字に交差する二重線によって４区画に分割される。文字は各区に１字ずつ配され、陽文篆書の「天」字と「極」字の半分が残存する。瓦当裏面には糸切り痕がある。瓦当半径9.0㎝、周縁の幅1.0㎝、高さ0.9㎝、厚さ2.8㎝。2南：T1③：22（図版78－１）は、陽文の「與」の１字が残る。周縁の幅1.4㎝、高さ0.7㎝。 「與天無極」

「千秋萬歳」瓦当は８点。中心文は半球形文で、その外側は界線で４区画に分割され、各区画に１字ずつが配される。2北：T2③：4（第80図４、図版78－２）は、陽文篆書の「千」と「萬」の２字が残る。瓦当裏面には糸切り痕がある。瓦当半径約９㎝、周縁の幅1.3㎝、高さ0.7㎝。2南：T1③：62（第80図５、図版78－３）は、陽文の「萬歳」２字が残る。瓦当半径9.5㎝、周縁の幅1.3㎝、高さ0.5㎝、厚さ3.4㎝。 「千秋萬歳」

「長生無極」瓦当は16点。多くは笵が異なる。中心文は半球形文で、その外側に珠文12個をおく。瓦当は界線で４区画に分割され、各区画に１字ずつ、陽文の篆書を配する。瓦当裏面は平らに整えられ、丸瓦の分割痕跡はない。2北：T8③：9（第80図６、図版78－４）は、瓦当径17.7㎝、周縁の幅1.8㎝、高さ0.6㎝、厚さ2.8㎝。2南：T8③：26（図版78－５）は、「長」と「無」２文字の半分が欠損する。瓦当裏面には楕円形の凹みがある。2南：T4③：6（図版78－６）は、「生」の１字が残り、周縁内側の圏線は二重線である。周縁の幅1.7㎝、高さ0.8㎝、厚さ2.0㎝。 「長生無極」

このほかにも、２点の文字瓦当がある。１点（2南：T3③：6、第81図１、図版78－７）は瓦当中央に珠文があり、その外側は、二重の界線で４区画に分割される。各区画には文字が１字ずつ配さ



１：葵文瓦当（2南：T3③：8）　２：「右空」瓦当（2北：T8③：5）　３：「與天無極」瓦当（2北：T2③：3）
４：「千秋萬歳」瓦当（2北：T2③：4）　５：「千秋萬歳」瓦当（2南：T1③：62）　６：「長生無極」瓦当（2北：T8③：9）

第80図　２号建築出土葵文瓦当・文字瓦当（１）

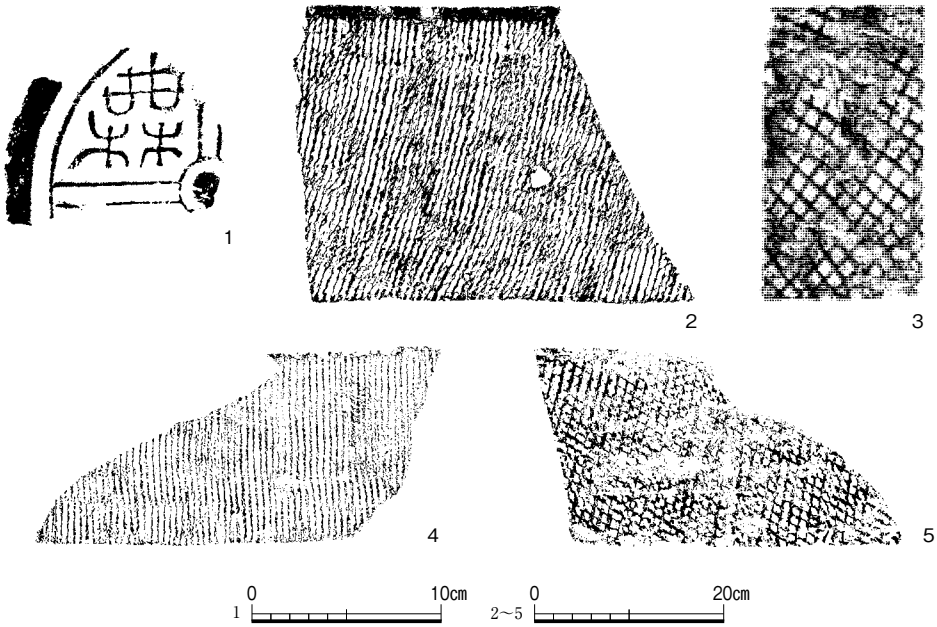
れ、「無」の１字が残る。「長生無極」の「無」であろう。ただし、ほかの「長生無極」瓦当の「無」字とは書き方が異なる。瓦当半径9.3cm、周縁の幅1.5cm、高さ0.6cm。もう１点（2南:T3③:4、図版78－８）は残存長10.5cm、残存幅7.3cm。中心文は半球形文で、その外側の二重圏線との間は４区画に分割される。各区画に１字ずつが配され、「未」字と判読できない１字が残る。

2　土器・土製品

井戸枠と甕・罐・施釉壺・釜・奩・盆・小盆・鉢・器蓋・灯台・紡錘車などの生活食器や生産工具がある。

井戸枠　４点。大小２種類ある。2南:T5③:65（第81図４・５、図版79－１・２）は、比較的小さい。高さ18cm、残存内径30.5cm、器壁の厚さ2.8cm。凸面には縦位の縄目があり、縄目の幅は0.5cm。内面には細かい菱形格子文が施される。端面の中央には、幅0.8cm、深さ0.3cmの溝がある。もう一方の端面は、高さ0.3cmの段をもつ。2南:T5③:77（第81図２・３、図版79－３・４）は、比較的大きい。高さ27.5cm、残存内径34cm、器壁の厚さ2.5cm。凸面には斜位の縄目があり、縄目の幅は0.6cm。凹面には粗い菱形格子文が施される。端面の中央には、幅0.6cm、高さ0.1cmの突線がめぐる。もう一方の端面は平らに調整され、縄目がある。

甕　３点。すべて口縁部のみ残存。2南:T7③:66（図版79－５）の口縁部は、平たく幅広い。頸部は直立して肩部が張り出す。口縁部の残存内径29.7cm、幅5.0cm、厚さ1.5cm、頸部の高さ3.8cm、肩部の器壁の厚さ0.8cm。肩部には爪形文が施され、三周で一組をなす。2南:T6③:24（図版79－６）の口縁部は内湾して頸部が直立し、肩部は弧を描く。口縁部の残存内径21.7cm、幅1.9



１：「長生無極」瓦当（2南:T3③:6）　２：井戸枠（凸面、2南:T5③:77）　３：井戸枠（凹面、2南:T5③:77）
４：井戸枠（凸面、2南:T5③:65）　５：井戸枠（凹面、2南:T5③:65）

第81図　２号建築出土文字瓦当（２）・井戸枠

cm、頸部の高さ2.5cm、肩部の器壁の厚さ1.0cm。肩部には爪形文が二周する。

罐　器形のわかるもの７点、口縁部が完存する１点、破損した口縁部１点、破損した底部１点がある。３型に分類できる。

Ⅰ型は３点。2南:T5③:64（図版79－７）は口縁部が外反する。口縁部は平たく、中央が凹む。頸部はすぼんで肩部が張り、腹部は屈曲する。小さな平底はわずかに凹む。全高21.7cm、口縁部の内径8.0cm、幅1.4cm、厚さ0.6cm。頸部の外径7.7cm、器壁の厚さ1.2cm。腹部外径16.0cm、底部径7.4cm。

Ⅱ型は５点。2南:T5③:83（図版79－８）は下半部が欠損。口縁部は外反し、平たく幅広い。頸部は直立して肩部は弧を描く。腹部は丸く、小さな平底をもつ。残存高21.5cm、口縁部の内径9.1cm、幅1.7cm、厚さ1.0cm。頸部外径9.0cm、腹部の器壁の厚さ0.8cm。

Ⅲ型は２点。口縁部が残る。2南:T5③:84（図版80－１）は口縁部が外反して厚く、頸部は直立する。残存高6.3cm、口縁部の内径9.3cm、幅1.9cm、厚さ2.0cm。頸部の高さ2.5cm、外径7.5cm、厚さ0.6cm。

彩絵罐　１点（2南:T5③:86、第82図１）は口縁部が外反する。頸部は太く短く、腹部は丸い。残存高18.3cm、口縁部の内径10.0cm、器壁の厚さ0.7cm。腹部の器壁の厚さ0.7cm。頸部には紅彩の三角文が一周描かれ、肩部と腹部には沈線、巻雲文などが描かれる。

釉陶壺　１点（2南:T5③:87、第82図２）。口縁部は外反し、頸部が長く、腹部は丸い。全高31cm、口縁部の器壁の厚さ0.5～0.9cm、腹部の器壁の厚さ1.4cm。頸部には沈線が二周し、肩部には鋪首の環、虎、猪、猿、雲気文などが浮彫りされる。全体に黄釉が施される。

釜　１点（2南:T6③:23、図版80－２）。口縁部と肩部が残存する。口縁部はわずかに外反し、厚さ1.0cm。頸部は直立し、高さ1.4cm。肩部には幅0.9cm、高さ1.8cmの突帯がめぐる。肩部の器壁の厚さは0.8cm。

奩　１点（2北:T5③:11、図版80－３）。底部が残存する。腹部は直線的で、底部は凹む。残存高4.3cm、腹部の器壁の厚さ0.9cm、底部の厚さ1.6cm。

盆　３点。１点は底部が残存し、２点は口縁部が残存する。2南:T5③:43（第82図３、図版80－４）は平底の底部。腹部の器壁の厚さ0.5cm、底部径25.5cm、底部の厚さ1.4cm。

小　盆　２点。2南:T6③:2（第82図５、図版80－５）は紅陶。口縁部は外反し、幅広い。腹部は丸く、平底をもつ。残存高10cm、口縁部は幅1.8cm、厚さ0.6cm、腹部の器壁の厚さ0.7cm、底部の厚さ1.0cm。2南:T6③:22（第82図４、図版80－６）は完形品。口縁部は外反し、腹部は弧を描く。平底はやや内側に凹み、口縁部の外面には凹線文を２条めぐらせる。全高7.1cm、口縁部の内径17.5cm、器壁の厚さ0.8cm、底部径10cm。

鉢　３点。３型に分類できる。

Ⅰ型は１点（2南:T6③:39、図版80－７）。口縁部は斜めに直線的に立ち上がる。腹部は弧を描き、小さな平底をもつ。全高6.6cm、口縁部の厚さ0.6cm、底部の厚さ0.9cm。

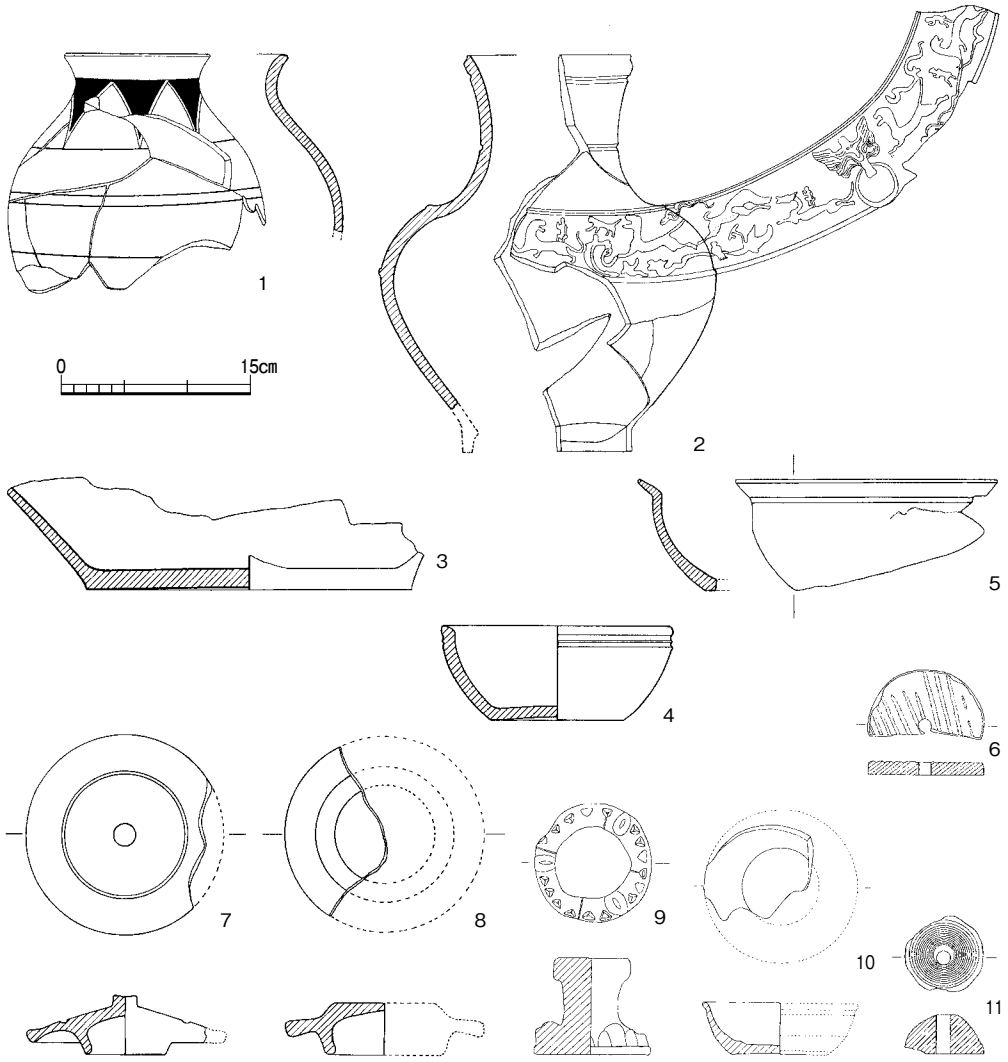
Ⅱ型は１点（2南:T6③:45、図版80－８）。口縁部が外反する。腹部は弧を描き、大きな平底をもつ。全高4.2cm、口縁部の厚さ0.4cm、底部の厚さ0.6cm。

Ⅲ型は１点（2南:T6③:20、第82図10、図版81－１）。口縁部が斜めに直線的に立ち上がる。腹部は丸く、擬高台をもつ。全高4.0cm、口縁部の厚さ0.6cm、底部の厚さ0.9cm。

器　蓋　　２点。2南:T6③:29（第82図７、図版81－２）は傘形で、頂部中央に円いつまみがある。つまみの外には沈線が一周めぐる。内面中央には中空の円柱があり、円柱と縁の間には幅広い溝が一周めぐる。全高4.5cm、蓋径15.5cm、縁の厚さ1.0cm。つまみは径1.9cm、高さ0.7cm。2南:T6③:21（第82図８、図版81－３）は円帽形を呈する。内面中央には中空の円柱があり、円柱と縁の間には浅く狭い溝が一周めぐる。全高4.0cm、縁厚1.2cm。

燭　台　　１点（2北:T1③:6、第82図９、図版81－４）。破片。笵を合わせて作られている。残存高7.7cm、覆盆状の台座は直径9.2cm、高さ2.5cm。外面には楕円形と三角形の珠文が施される。円柱の直径4.3cm、高さ3.8cm。

紡錘車　　３点。2北:T2③:21（第82図６、図版81－５）は円盤状で、中央に円孔が一つある。１面は無文だが、もう１面には縄目があり、平瓦を加工して作られたようである。直径8.8cm、孔径1.2cm、高さ1.2cm。2北:T5③:35（図版81－６）は、底部が平らで縄目がある。上部は傘形で、中



１：彩絵罐（2南:T5③:86）　２：釉陶壺（2南:T5③:87）　３：盆（2南:T5③:43）　４：小盆（2南:T6③:22）
５：小盆（2南:T6③:2）　６：紡錘車（2北:T2③:21）　７：器蓋（2南:T6③:29）　８：器蓋（2南:T6③:21）
９：燭台（2北:T1③:6）　10：鉢（Ⅲ型、2南:T6③:20）　11：紡錘車（2北:T5③:36）

第82図　２号建築出土土器・土製品

央に円孔が一つあく。底部径8.2cm、孔径1.2cm、高さ3.0cm。2北:T3③:36（第82図11、図版81－７）は円錐形で、中央に円孔が一つあく。底部径6.0cm、孔径1.3cm、高さ3.0cm。

土製円盤　３点。すべて瓦を加工して作られたものである。2北:T1③:50（図版81－８）は、直径2.8cm、厚さ0.9cm。2北:T3③:22（図版82－１）は、直径4.0cm、厚さ1.0cm。片面に縄目がある。2北:T5③:34（図版82－２）は、直径6.6cm、厚さ0.9cm。

装飾付き土製小球　１点（2北:T3③:12、図版82－３）。表面には緑釉が施され、６つの沈線による重圏文が配される。直径2.1cm。

土製小球　３点。円球形。2北:T2③:22（図版82－４）は無文で灰色。直径1.6cm。2南:T6③:44は、無文で黒色。直径1.7cm。2北:T2③:23（図版82－５）は無文で赤色、直径2.0cm。

騎馬俑　１点（2南:T3③:7、図版82－６）。腰部と股部が残存する。腰部は楕円柱形で、股部は円弧形を呈する。残存高8.8cm、残存幅17.7cm。

3　玉 石 器

玉璧、漢白玉製円盤、石製円盤、有孔石座、河原石があるが、数量は少ない。

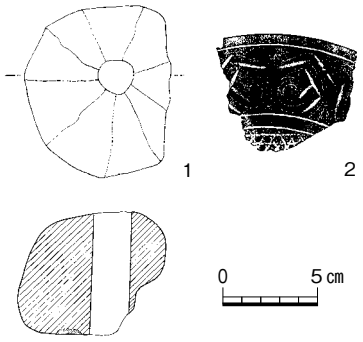
玉　璧　１点（2北:T2③:11、第83図２、図版82－７）。青玉質で、表面は平滑である。残存長7.6cm、残存幅6.6cm、厚さ0.5cm。両面の文様は同じで、外側から順に、夔龍文帯、斜線文帯、穀文帯が配され、各文様帯の間は沈線によって隔てられる。

漢白玉製円盤　１点（2北:T7③:3、図版82－８）。完形品。二辺は平行し、二辺は円弧を描く。表面は平滑である。長さ8.8cm、幅7.8cm、厚さ2.2cm。

石製円盤　１点（2南:T8③:9、図版82－９）。青色の石灰岩製。１面は研磨により平たく整えられるが、もう１面は全面に鑿痕が認められる。残存長13cm、残存幅9.5cm、厚さ2.4cm。

有孔石座　１点（2南:T6③:10、第83図１、図版83－１）。青色の石灰岩製。表面は粗く、凹凸がある。平面形は不整楕円形で平底。高さ6.5cm、底部径9.0cm。中央部近くに上下に貫通する孔が一つある。孔径は2.0cm。

河原石　６点、雨落に敷くのに用いられた。2南:T8③:51（図版83－２）は、比較的大きく、隅丸長方形で、長さ16.5cm、幅6.7cm、厚さ3.8cm。2北:T4③:16（図版83－４）は、比較的小さく、隅丸三角形で、長さ11.7cm、幅6.9cm、厚さ2.9cm。2北:T4③:17（図版83－３）は、比較的小さく、楕円柱形で、長さ11.7cm、幅6.2cm、厚さ5.3cm。



１：有孔石座（2南:T6③:10）
２：玉璧（2北:T2③:11）

第83図　２号建築出土玉石器

4　鉄　　器

建築用の円頭釘・折釘・鎹（かすがい）、生活器具（釜・刀）、工具（環頭刀子・環頭鏨）、農具（鋤・鋤先）、武器（剣・鎧甲・鏃）、車器（六角形器）などがある。

円頭釘　22点。頭部は円形で、身部の形状により３型に分類できる。

Ⅰ型は身部の断面が円形で、上から下に徐々に細くなる。大きさにより３式に分類する。

１式は長釘。2南：T1③：16（第84図１、図版83－５）は、全長約39㎝、頭部径3.9㎝、身部中央部径1.7㎝。

２式は中長釘。2北：T3③：11（第84図２、図版83－６）は、全長18.7㎝、頭部径3.0㎝、身部中央部径1.3㎝。2南：T6③：13（第84図３、図版83－７）は、全長約16.3㎝、頭部径2.7㎝、身部中央部径1.4㎝。

３式は短釘。2南：T1③：48（図版83－８）は、全長12.9㎝、頭部径2.8㎝、身部中央径1.9㎝。2南：T3③：11（図版83－９）は、全長11.9㎝、頭部径2.6㎝、身部中央径1.2㎝。

Ⅱ型は身部の断面がほぼ方形のもの。長さにより３式に分類できる。

１式は長釘。2南：T1③：20（第84図４、図版83－10）は、全長約41.5㎝。頭部径3.2㎝、身部中央部の一辺1.7㎝。

２式は中長釘。2南：T7③：44（第84図５、図版83－11）は頭部が欠損する。残存長23㎝、身部中央部の一辺0.8㎝。よく整っている。2南：T1③：59（第84図６、図版84－１）は全長22㎝、頭部径2.8㎝、身部中央部の一辺0.7㎝。

３式は短釘。２北：T3③：7（第84図７、図版84－２）は、全長11㎝、頭部径1.8㎝、身部中央部の一辺0.8㎝。2北：T2③：27（図版84－３）は、全長10.4㎝、頭部径2.7㎝、身部中央部の一辺1.3㎝。

Ⅲ型（2北：T2③：25、図版84－４）は身部の断面が長方形に近いもの。全長10㎝、頭部径2.3㎝、身部中央部の幅1.3㎝、厚さ0.8㎝。

折　釘　14点。頭部と身部が直角をなし、頭部と身部の断面はいずれも長方形に近い。大きさによって３型に分類できる。

Ⅰ型は長釘。2南：T5③：6（第84図８、図版84－５）は、全長22㎝、頭部の長さ6.9㎝、幅2.7㎝、厚さ1.4㎝。身部中央部の幅2.8㎝、厚さ1.7㎝。

Ⅱ型は中長釘。2南：T1③：1（図版84－６）は、全長9.6㎝、頭部の長さ3.2㎝、幅1.2㎝、厚さ1.1㎝、身部中央部の幅1.2㎝、厚さ0.9㎝。2北：T3③：21（図版84－７）は、全長8.9㎝、頭部の長さ3.1㎝、幅1.0㎝、厚さ1.2㎝、身部中央部の幅0.9㎝、厚さ0.6㎝。

Ⅲ型は短釘。2南：T4③：23（第84図９、図版84－８）は、全長5.0㎝、頭部の長さ3.5㎝、幅1.5㎝、厚さ1.8㎝、身部中央部の幅1.1㎝、厚さ0.9㎝。

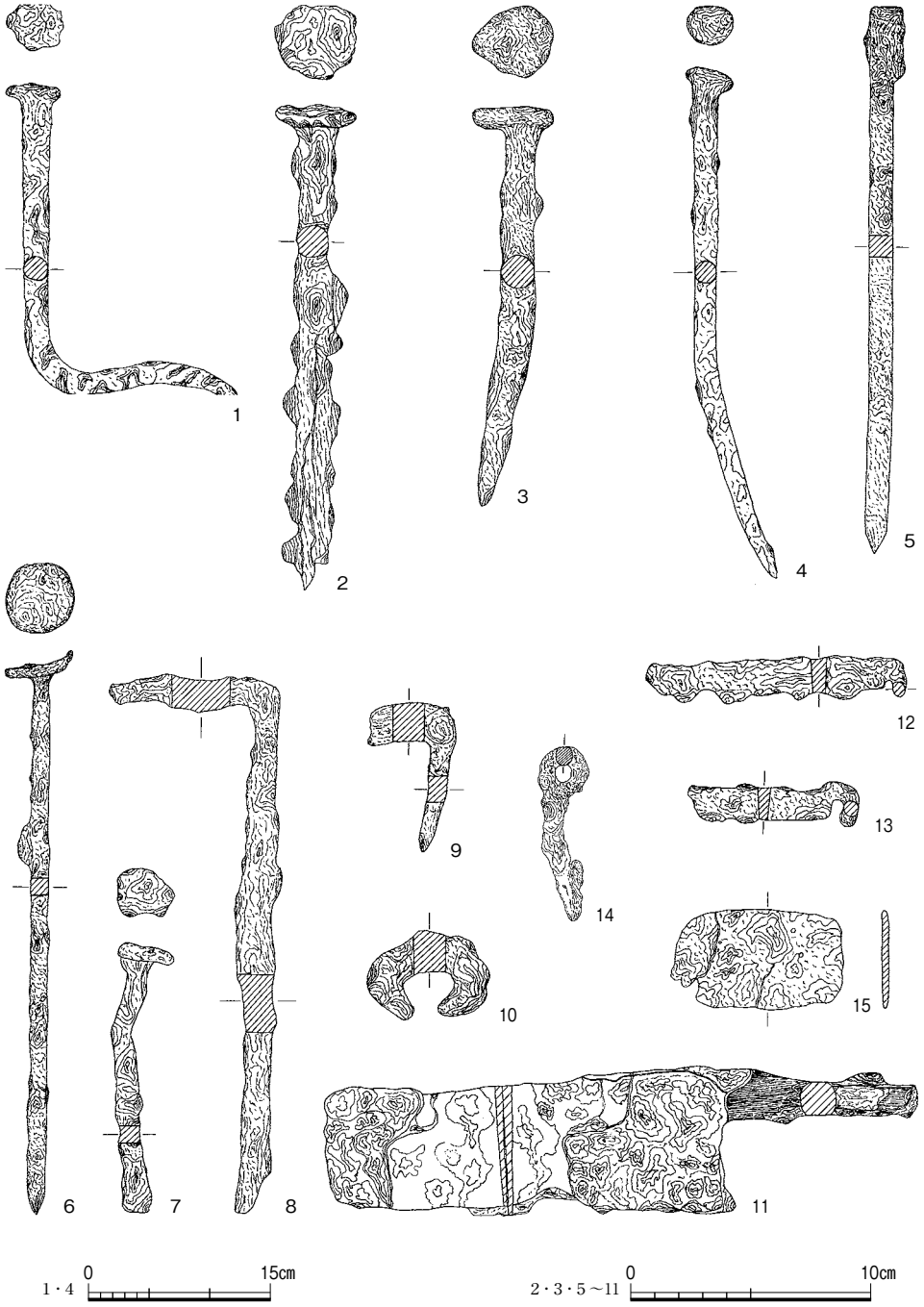
鎹　３点。「 ］」形で、先端がやや内湾する。2南：T1③：52（第84図10、図版84－９）は、長さ4.9㎝、幅1.3㎝、厚さ1.3㎝。

釜　２点。2南：T5③：22（第85図１、図版84－10）は口縁部の破片。口縁部は幅広く外に折れ、腹部は弧を描く。残存長17.2㎝、残存幅16.5㎝、口縁部幅2.5㎝、腹部の器壁の厚さ0.8㎝。

刀　子　１点（2北：T5③：33、第84図11、図版85－１）。刀身は長方形で、茎は細長い方柱形。刀身の長さ16.5㎝、幅5.4㎝、上端の厚さ0.7㎝、茎の長さ7.9㎝、幅1.7㎝、厚さ1.1㎝。

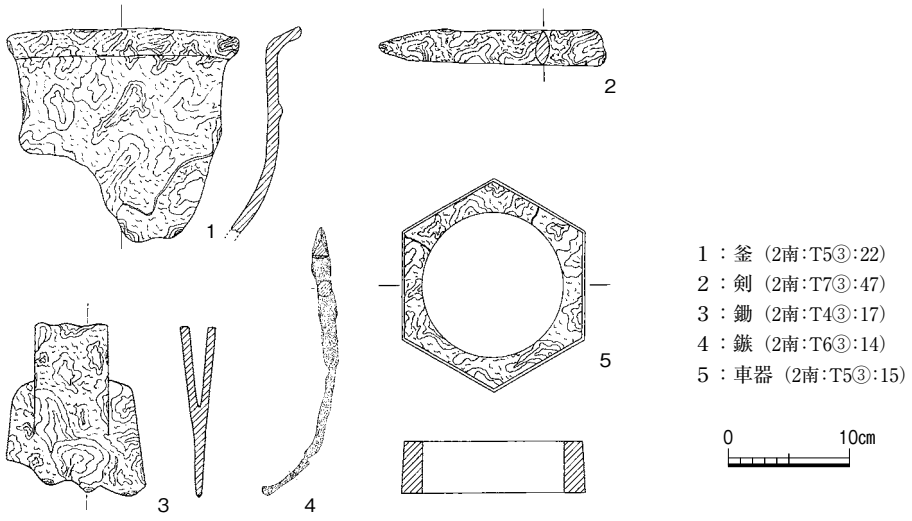
環頭刀子　２点。2南：T3③：14（第84図12、図版85－２）は比較的大きく、環頭は半分欠損する。全長10.7㎝、刀身幅1.4㎝、厚さ0.8㎝。2南：T1③：64（第84図13、図版85－３）は比較的小さく、環頭と刀身の下部が欠損する。残存長7.0㎝、刀身幅1.3㎝、厚さ0.4㎝。

環頭鏨　１点（2北：T3③：20、第84図14、図版85－４）。全長6.9㎝、環頭外径２㎝、断面径0.8㎝、



１：円頭釘（Ⅰ型１式、2南:T1③:16）　２：円頭釘（Ⅰ型２式、2北:T3③:11）　３：円頭釘（Ⅰ型２式、2南:T6③:13）
４：円頭釘（Ⅱ型１式、2南:T1③:20）　５：円頭釘（Ⅱ型２式、2南:T7③:44）　６：円頭釘（Ⅱ型２式、2南:T1③:59）
７：円頭釘（Ⅱ型３式、2北:T3③:7）　８：折釘（Ⅰ型、2南:T5③:6）　９：折釘（Ⅲ型、2南:T4③:23）
10：鎹（2南:T1③:52）　11：刀子（2北:T5③:33）　12：環頭刀子（2南:T3③:14）
13：環頭刀子（2南:T1③:64）　14：環頭鑿（2北:T3③:20）　15：甲冑小札（2南:T7③:48）

第84図　２号建築出土鉄器（１）



第85図　２号建築出土鉄器（２）

鑿身部の断面は方形で、上部が太く下部は細い。中央部は一辺0.9㎝。

鋤　１点（2南:T3③:17、第85図３、図版85－５）、刃部は欠損している。袋部は幅6.3㎝、厚さ2.8㎝、高さ4.5㎝、身の厚さ0.6㎝で、中空。身部は肩をもち、幅8.5（肩部）～10.6㎝（下部）、身の厚さ0.6㎝。

鋤　先　２点。2南:T6③:27（図版85－６）は破片。断面は「V」字形を呈し、残存幅15㎝、高さ3.0㎝、上部幅1.0㎝、身の厚さ0.3㎝、刃部は外側に弧を描き、厚さ0.3㎝。

剣　１点（2南:T7③:47、第85図２、図版85－７）。下部が残存する。残存長16.5㎝、幅3.0㎝。両端に刃部があり、中央の厚さ0.8㎝。

甲冑小札　１点（2南:T7③:48、第84図15、図版85－８）。隅丸長方形を呈する。いくつかの小孔をもつ。長さ6.9㎝、幅3.8㎝、厚さ0.3㎝。

鏃　１点（2南:T6③:14、第85図４、図版86－１）、Ⅱ型１式に属する。茎をともなう。鏃身と頸部の長さ10.7㎝、鏃身部は三稜形で、長さ2.7㎝、幅1.5㎝。頸部は円柱形で、直径1.3㎝。茎部は湾曲し、長さ約12㎝、直径0.5㎝。

車　器　１点（2南:T5③:15、第85図５、図版86－２）。内側は円形、外側は六角形である。鋳型が傾斜をもつため、この車器は一方の面が小さく、もう一方の面が大きい。内径10.8～11.1㎝、高さ4.0㎝、辺長8.0㎝、厚さ1.5～1.7㎝、角部の厚さ2.3～2.6㎝。

5　銅　　器

環、飾り金具、環頭鑿、円形器、鏃が出土している。

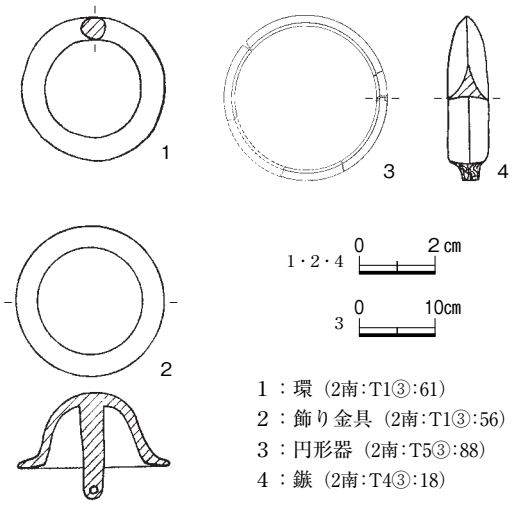
環　２点。2南:T1③:61（第86図１、図版86－３）は、外形3.7㎝、断面径0.6㎝。

飾り金具　１点（2南:T1③:56、第86図２、図版86－４）。兜形で、内側から平たい舌が出る。舌の先端近くには円孔が一つある。外面は鍍金している。舌を含めた高さ2.6㎝、直径3.8㎝。

環頭鏧　　１点（2南：T5③：47、図版86－５）。残存長4.0cm、環首直径2.0cm、柄の断面径0.8cm。

円形器　　１点（2南：T5③：88、第86図３）。内径18.0cm。断面は「凹」字形を呈している。幅1.2cm、厚さ0.6cm、溝の深さ0.4cmである。

鏃　　１点（2南：T4③：18、第86図４、図版86－６）。Ⅱ型４式に属する。三稜形で、刃部はやや翼が突出し、溝をともなう。茎部は鉄製。茎部を含めた長さ4.2cm、茎部残存長0.5cm、両翼の最大幅1.0cm。



１：環（2南：T1③：61）
２：飾り金具（2南：T1③：56）
３：円形器（2南：T5③：88）
４：鏃（2南：T4③：18）

第86図　２号建築出土銅器

6　銭　　貨

半両銭、五銖銭、貨銭、布泉、大泉五十などがある。すべて銅製である。

半両銭　　１点（2北：T3③：23、第87図１、図版86－７）。直径2.4cm、方孔の一辺0.7cm、厚さ0.1cm。

五銖銭　　10点。４型に分類できる。

Ⅰ型は、「五」字の交差する２画がやや湾曲し、上下の横線は直線である。「銖」字の「金」の頭部を三角形につくり、「朱」字の頭部は直線的である。書体は丸みを帯びる。2北：T6③：1（第87図２、図版86－８）は、直径2.5cm、方孔の一辺0.9cm、厚さ0.15cm。

Ⅱ型は、「五」字の交差する２画がⅠ型よりも大きく湾曲し、左右が対称的になる。「銖」字の「金」の頭部を三角形につくり、「朱」字の頭部は直線的。書体は滑らかである。2南：T2③：9（第87図３）は、直径2.6cm、方孔の一辺1.0cm、厚さ0.2cm。2南：T5③：57（第87図４、図版86－９）は、直径2.6cm、方孔の一辺1.0cm、厚さ0.15cm。方孔は内郭をもつ。

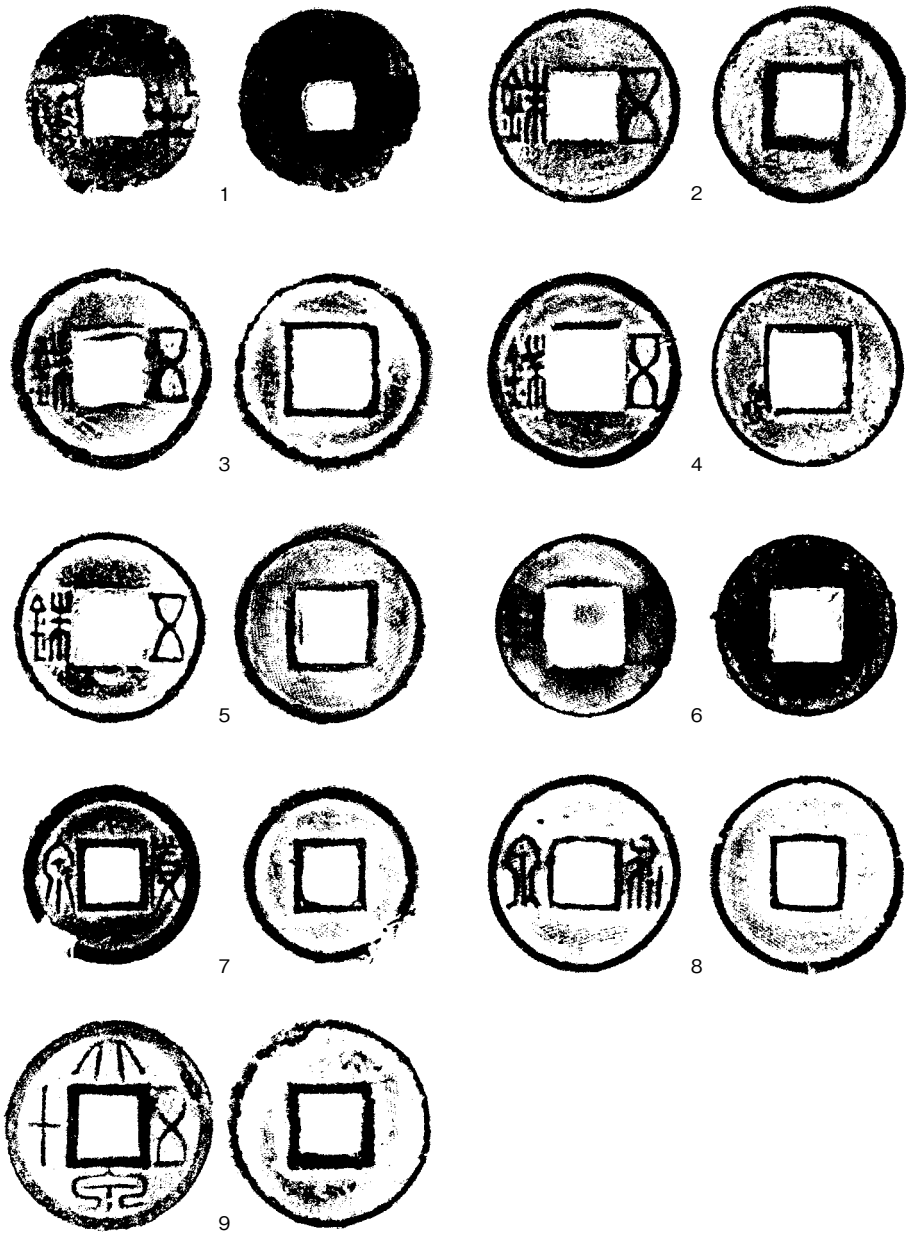
Ⅲ型は、「五」字の交差する２画が斜め方向に直線的である。「銖」字の「金」の頭部を三角形につくり、「朱」字の頭部は垂直に折れて、下部は丸く曲がる。2南：T6③：36（第87図５、図版86－10）は、直径2.5cm、方孔の一辺1.0cm、厚さ0.15cm。

Ⅳ型は、薄くて質が悪く、文字は不明瞭である。「五」字の交差する２画はやや丸みを帯び、「銖」字の「金」の頭部を菱形につくる。２北：T3③：2（第87図６、図版86－11）は、直径2.4cm、方孔の一辺1.0cm、厚さ0.1cm。

貨　泉　　１点（2北：T4③：8、第87図７、図版86－12）。外縁がわずかに破損する。表裏両面の方孔に内郭をもつ。文字は明瞭である。直径2.4cm、方孔の一辺0.7cm、厚さ0.15cm。

布　泉　　１点（2北：T3③：1、第87図８、図版86－13）。表裏両面の方孔に内郭をもつ。文字は明瞭である。直径2.6cm、方孔の一辺0.8cm、厚さ0.2cm。

大泉五十　　２点。2南：T7③：58（第87図９、図版86－14）は、表裏両面の方孔に内郭をもつ。銭文は明瞭である。直径2.8cm、方孔の一辺0.75cm、厚さ0.3cm。



１：半両銭（2北:T3③:23）　２：五銖銭（Ⅰ型、2北:T6③:1）　３：五銖銭（Ⅱ型、2南:T2③:9）
４：五銖銭（Ⅱ型、2南:T5③:57）　５：五銖銭（Ⅲ型、2南:T6③:36）　６：五銖銭（Ⅳ型、2北:T3③:2）
７：貨泉（2北:T4③:8）　８：布泉（2北:T3③:1）　９：大泉五十（2南:T7③:58）

第87図　２号建築出土銭貨

第４節　桂宮２号建築の年代と性格

『三輔黄図』が引く『関輔記』逸文には、「桂宮在未央北、中有明光殿土山、複道従宮中西上城、至建章神明台蓬莱山（桂宮は未央の北に在り。中に明光殿の土山有り、複道は宮中の西より城に上り、建章の神明台・蓬莱山に至る）」とあり、桂宮は未央宮の北と建章宮の東に位置し、すぐ西には漢長安城の西城壁があることがわかる。中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊は1960年代初頭から漢長安城で調査を進め、未央宮の北、雍門大街の南、漢長安城西城壁の東、横門大街の西で桂宮の遺構を発見した[(1)]。桂宮の宮城の平面は長方形を呈し、南北長は約1,840m、東西幅は約900mである[(2)]。桂宮２号建築は桂宮の南部に位置し、北50mに漢代の版築高台があり、南は未央宮西北部の作室門と相対する[(3)]。

桂宮の位置

年　代　桂宮２号建築は、基本層序からみると、建築遺構が一般に漢代遺物包含層（第３層）の下にあり、出土遺物の多くは前漢後期に属する。前漢中期以前の遺物や、前漢後期、新の王莽の時期より新しい遺物は認められない。たとえば、第３層から出土した大量の縄目のある平瓦や、凸面に中太や太い縄目、凹面に布目がある丸瓦、中心文が半球形文と珠文からなり、周囲に「X」字形文をめぐらす雲文瓦当などは、いずれも前漢中・後期の遺物である。これらの遺物は、すべて桂宮２号建築が廃棄されたときに堆積したものである。したがって、桂宮２号建築の年代の上限は前漢中期を遡らないと推測されるが、このことは、桂宮が漢の武帝の時期に建てられたという文献の記載とも一致する[(4)]。桂宮２号建築の堆積状況、とくに南院の付属建物Ｆ２とＦ３、北院の付属建物Ｆ２と１・２号地下通路に大量の赤い焼土が堆積していることからみて、これらの建築はおそらく王莽末年の戦火で破壊されたものと考えられる[(5)]。

造営と廃絶の年代

性　格　発掘された桂宮２号建築の南院と北院の遺構をみると、それらは正殿と居室からなる宮殿建築群であることがわかる。南院の主体となるのは正殿であり、北院の機能は生活居室との関係が密接である。南院と北院の間は３本の南北方向の通路によって連結されており、北院の北部には南北方向の通路があって、北面の漢代版築高台（桂宮１号建築）へとつながっている。版築高台を中心とする桂宮１号建築は、桂宮２号建築の「庭院」に属し、高台から遠望するための施設であろう。

正殿と居室

（１）夏鼐「我国近五年来的考古新収穫」『考古』1964年第10期。
（２）王仲殊『漢代考古学概説』中華書局、1984年、８頁。
（３）中国社会科学院考古研究所『漢長安城未央宮1980～1989年考古発掘報告』中国大百科全書出版社、1996年。
（４）『三輔黄図』：「桂宮、漢武帝造。」
（５）『漢書』王莽伝・下：「赤眉焼長安宮室市里、害更始。民飢餓相食、死者数十万、長安為墟、城中無人行」中華書局、1962年。

第Ⅲ章　桂宮３号建築の発掘調査

桂宮３号建築は現在の西安市未央区六村堡郷鉄鎖村の東約160mにあり、六村堡郷に属する。桂宮の西北部に位置し、桂宮西城壁からは東に340m、北城壁からは南へ345mの場所にある。1999年10月から2000年４月まで発掘調査をおこなった。調査区は南北長84m、東西幅24m、発掘面積は2,016㎡である。桂宮３号建築は、南北二つの大型建物とその間の七つの房室から構成される（第88・90図、原色図版32～37、図版87）。

第１節　遺　　構

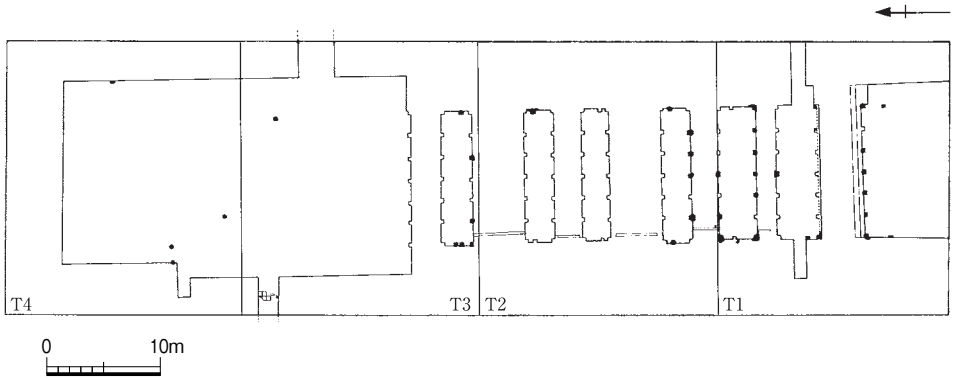
１　土　　層

基本層序は、Ｔ２東壁を例にとると、次のとおりである（第89図）。

第１層：耕作土層。灰色で締まりがない。厚さ0.2～0.29m。

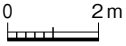
第２層：攪乱層。薄黄色で比較的硬い。地表からの深さ0.2～0.65m、厚さ0.35～0.4m。

第３層：漢代遺物包含層。建物が倒壊した堆積層である。灰黄色で締まりがなく、地表からの深さ0.58～1.2m、厚さ0.34～0.58m。大量の漢代の瓦磚や、土製小球、鏃、弩の部品、鉄釘、銭

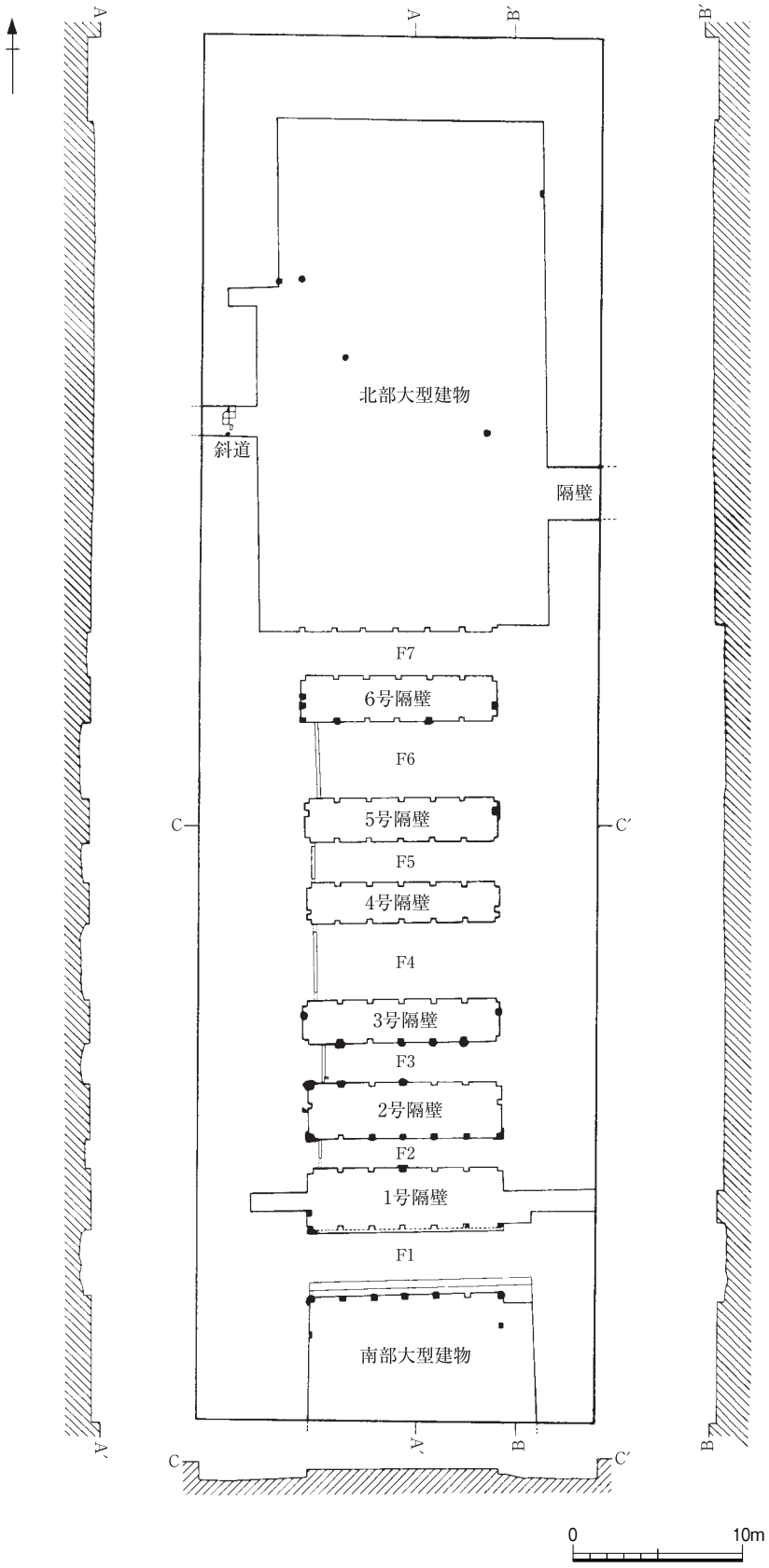


第88図　３号建築の地区割り

１：耕作土層　２：攪乱層　３：漢代遺物包含層



第89図　３号建築Ｔ２東壁土層図



第90図　３号建築遺構平面図・断面図

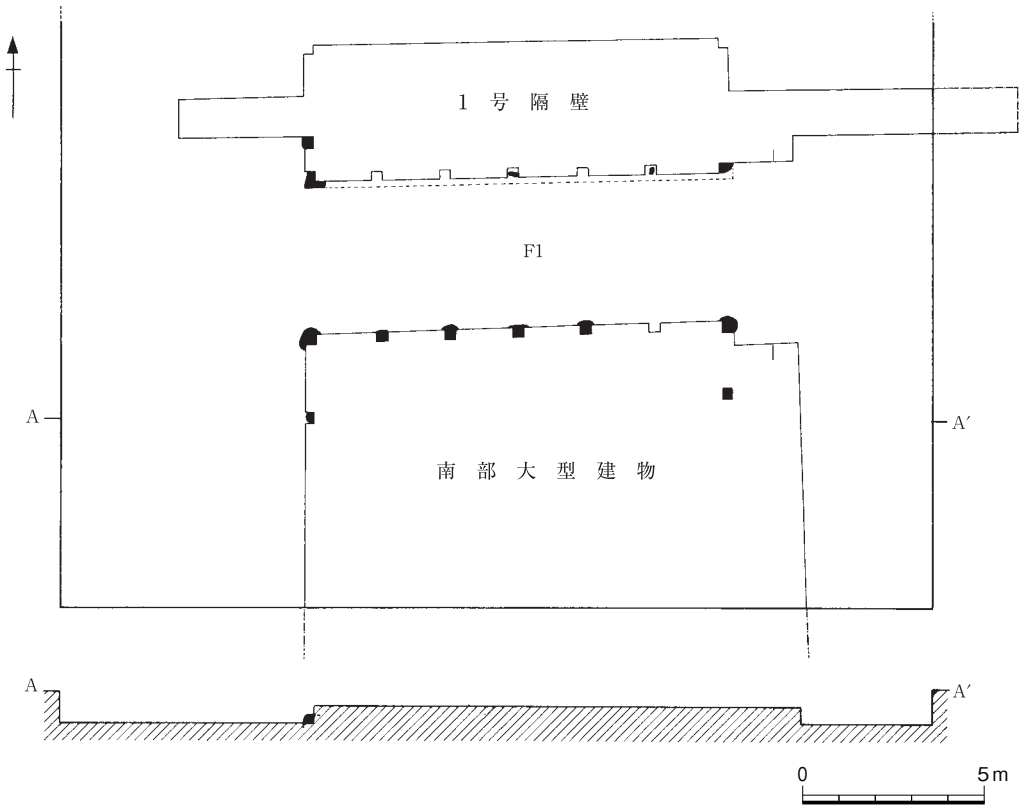
貨などを含む。漢代の建築遺構と漢代の地表面はいずれも第３層の下にあり、隔壁など基礎が高く残存している部分は、耕作土層の直下で検出した。

2　南部大型建物

版築基壇　南部大型建物は、版築基壇のみが残存する。基壇は東西13.6m、南北15.45m（現在の道路の下にあたり、発掘したのは一部だけである）、現存高0.5m（第91図）。基壇東北角には、東西1.75m、南北0.75mにわたり長方形状に欠けた部分がある。基壇の西壁には壁柱が１基あり、１号壁柱とした。基壇西北角から南に2.25mに位置し、壁柱の柱穴は長さ0.31m、幅0.25m、現存する深さ0.25m。柱穴の底には青石製の礎石があり、一辺51㎝、厚さ16㎝。基壇の北壁には７基の壁柱がある（後述の房室Ｆ１南壁を参照）。基壇上には支柱が一つあり、２号支柱とした。基壇東壁の西2.0m、北壁の南2.35mに位置する（図版88－１）。柱穴は長さ0.31m、幅0.26m、深さ0.26m。柱穴の底には花崗岩製の礎石があり、長さ65㎝、幅42～60㎝、厚さ17㎝。礎石の下には不整形の花崗岩製の敷石があり、長さ1.2m、幅1.0m、厚さ0.42m（図版91－１）。

3　北部大型建物

版築基壇　北部大型建物も、版築基壇のみが残存する。東西16.25～17.5m、南北31.03m、現存高0.26～



第91図　３号建築南部大型建物平面図・断面図

0.55m。基壇の西壁には、基壇西北角から南10.5mの位置に東西方向の版築塀が取りつく。版築塀は長さ1.75m、幅1.11m、現存高0.25m。塀の南と北の基壇東西長は、それぞれ17.5mと16.25mである（原色図版38－１、図版88－２）。　版築塀

基壇の東壁には、基壇東南角の北6.4mに東西方向の版築塀が取りつく。版築塀は長さ20.16m（うち発掘した部分は3.16m）、幅3.16m、現存高0.5m。東壁には、基壇東北角の南4.4mに壁柱が１基あり、１号壁柱とした。柱穴は長さ0.27m、幅0.21m、現存する深さ0.36m。柱穴底部には花崗岩製の礎石があり、直径35～50㎝、厚さ16㎝。　版築塀　壁柱

基壇の西壁には、基壇西北角の南9.7mの位置に壁柱が１基あり、２号壁柱とした。柱穴は一辺0.21m、現存する深さ0.05m。柱穴の底部には花崗岩製の礎石があり、直径35～37㎝、厚さ16㎝である。

基壇南壁には７基の壁柱がある（後述のＦ７北壁を参照）。

基壇上には三つの花崗岩製の礎石があり、３～５号礎石とした。３号礎石は、基壇東壁の西3.55m、北壁の南18.95mにある。直径65～76㎝、厚さ16㎝。４号礎石は、基壇西壁の東5.3m、北壁の南14.05mにある。直径30～36㎝、厚さ16㎝。５号礎石は、基壇西壁の東1.45m、北壁の南9.6mにある。直径32～37㎝、厚さ13㎝。　基壇上礎石

基壇の西側には、南北方向と東西方向の斜道がある。東西方向の斜道は、基壇南壁の北11.92mにあり、東から西に３度の勾配をもつ。斜面は長さ3.35m、幅1.8mで、敷磚が４点残る。磚は一辺37～40㎝、厚さ５㎝。南北方向の斜道は、その北端が東西方向の斜道の南壁と接続する。北から南に3.5度の勾配をもち、斜面は長さ12m、幅3.3m。　斜道

４　版築隔壁

南部大型建物と北部大型建物の間には、６基の版築隔壁（１～６号隔壁）によって隔てられた七つの房室（Ｆ１～Ｆ７）が南北にならぶ。隔壁の平面はすべて東西に長い長方形で、各隔壁の南北両壁には、いずれも７対の壁柱が南北対称に向かい合っている。壁柱の礎石は、多くが花崗岩製である（原色図版38－２～41）。　７対の壁柱

１号隔壁　房室Ｆ１の北側にあり、長さは南壁が13.54m、北壁は11.85m、幅は3.85m、現存高0.45～0.55m。東壁を除き、隔壁の南北両壁と西壁にはいずれも壁柱がある。西壁の壁柱は隔壁西南角の北1.07mにあり、１号壁柱とした。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.27m。柱穴の底部には礎石がある。長さ84㎝、幅75㎝、厚さ23㎝（図版89－１）。

１号隔壁の東西両端には、東西方向の版築塀がつながる。東の塀は長さ8.02m（発掘した長さは5.6m）、幅1.25m、現存高0.48m、西の塀は残存長3.45m、幅1.1m、現存高0.4m。　版築塀

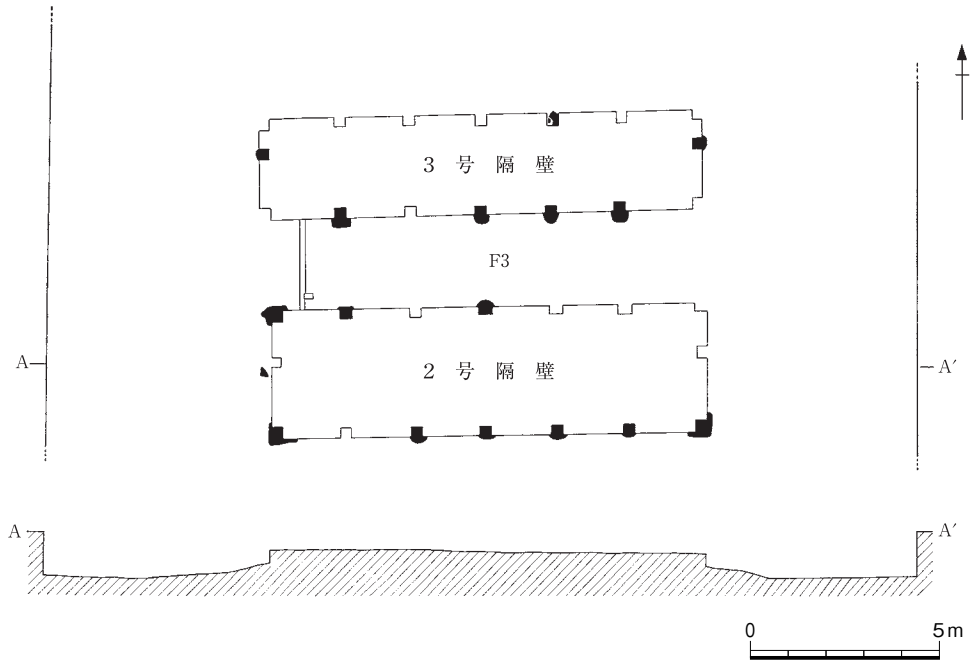
２号隔壁　房室Ｆ２の北側にあり、長さ11.74m、幅3.39m、現存高0.32m（第92図）。隔壁の四方の壁にはすべて壁柱がある。東西の壁には、東西対称に一つずつの壁柱がある。東壁の壁柱は隔壁東北角の南1.3mにあり、柱穴は長さ0.3m、幅0.27m、現存する深さ0.32m。底部の礎石は残っていない。西壁の壁柱は隔壁西北角の南1.32mにあり、柱穴は長さ0.26m、幅0.25m、現存する深さ0.32m。底部の礎石は残っていないが、その南0.2mに、原位置をとどめていない礎石が１個残る（図版89－２）。

３号隔壁　房室Ｆ３の北側にあり、長さ11.95m、幅2.65m、現存高0.45m。隔壁の四方の壁にはすべて壁柱がある。東西の壁には、東西対称に一つずつの壁柱がある。東壁の壁柱は隔壁東南角の北1.7mにあり、柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さは0.24m。柱穴の底部には花崗岩の礎石があり、直径48～78㎝、厚さ30㎝。西壁の壁柱は隔壁西南角の北1.74mにあり、柱穴は長さ0.28m、幅0.26m、現存する深さ0.3m。柱穴の底部には礎石があり、直径70～75㎝、厚さ28㎝（図版89－２）。

４号隔壁　房室Ｆ４の北側にあり、長さ11.6m、幅2.46m、現存する深さ0.43m。隔壁の四方の壁にはすべて壁柱がある。東西の壁には、東西対称に一つずつの壁柱がある。東壁の壁柱は隔壁東南角の北0.7mにあり、柱穴は長さ0.38m、幅0.25m、現存する深さ0.34m。底部の礎石は残っていない。西壁の壁柱は隔壁西南角の北0.72mにあり、柱穴は一辺0.25m、現存する深さ0.38m。礎石は残っていない（図版90）。

５号隔壁　房室Ｆ５の北側にあり、長さ11.62m、幅2.68m、現存高0.46m。隔壁の四方の壁には壁柱がある。東西の壁には、東西対称に壁柱がある。東壁の壁柱は隔壁東北角の南0.85mにあり、柱穴は長さ0.43m、幅0.33m、現存する深さ0.24m。柱穴の底部には礎石があり、長さ125㎝、幅106㎝、厚さ40㎝（原色図版41－１）。西壁の壁柱は隔壁西北角の南0.85mにあり、柱穴は長さ0.35m、幅0.26m、現存する深さ0.43m。柱穴底部の礎石は残っていない（図版90）。

６号隔壁　房室Ｆ６の北側にあり、長さ11.86m、幅2.80m、現存高0.54m。隔壁の四方の壁にはすべて壁柱がある。東壁の壁柱を１号壁柱とした。隔壁の東南角の北1.0mにあり、柱穴は長さ0.4m、幅0.3m、現存する深さ0.34mである。柱穴の底部には礎石があり、長さ88㎝、幅68㎝、厚さ25㎝（図版90－１）。隔壁の西壁には南北二つの壁柱があり、２・３号壁柱とした。２号壁柱は隔壁の西南角の北1.0mにあり、柱穴は一辺0.27m、現存する深さ0.24m。柱穴の底部には



第92図　３号建築２号・３号隔壁平面図・断面図

礎石があり、長さ70㎝、幅65㎝、厚さ32㎝。３号壁柱は２号の北0.55ｍにある。柱穴は長さ0.3ｍ、幅0.25ｍ、現存する深さ0.29ｍ。柱穴の底部には青石製の礎石がある。直径50～56㎝、厚さ18㎝。

１～６号隔壁の西壁の外側にはすべて犬走りの痕跡があり、２号と６号の外側のものは残存状態が比較的よい。２号隔壁の西壁外側の犬走りは、東から西に11度の勾配をもち、斜面の長さは1.2ｍ。６号隔壁の西壁外側の犬走りは、東から西に16度の勾配で、斜面の長さは1.0ｍ。　犬走り

５　房　　室

６基の隔壁に仕切られた七つの房室は、すべて西を向き、平面は東西に長い長方形である。房室の底面は焼けて硬くなっており、焼土の厚さは約１㎝である。各建物の南北の壁にはいずれも７対の壁柱があり、壁柱の礎石は大部分が花崗岩製である（原色図版38－２～41）。　底面に焼土

Ａ　房室Ｆ１

南部大型建物基壇の北側にあり、幅4.0ｍ、長さ11.2ｍ（図版91－２）。南北両壁の現存高0.45～0.5ｍ。底面は粘土が塗られ、滑らかで、焼けて硬くなっている。その下は厚さ0.1ｍの版築土。底面には凹凸があり、中央部南寄りが東西方向に稜をなして、ほかより0.08～0.1ｍ高い。その長さは11.2ｍ、幅0.58ｍである。室内の西端では木製敷居の遺構は発見されなかったが、木製敷居に関係する軸吊孔のある礫が出土した。Ｆ１南壁の北には、幅0.5ｍの平らな台状遺構があり、その北側の面は南から北に16度の勾配をもつ。　軸吊孔

Ｆ１南壁の壁柱は、西から順に１～７号壁柱とした。壁柱の間隔は1.85～2.0ｍである。１号壁柱（Ｆ１西南隅柱）の柱穴は長さ0.27ｍ、幅0.26ｍ、現存する深さ0.24ｍ。柱穴の底部に礎石があり、直径60㎝、厚さ33㎝。２号壁柱は、１号壁柱の東2.0ｍにある。柱穴は長さ0.3ｍ、幅0.24ｍ、現存する深さ0.29ｍ。柱穴の底部には礎石があり、長さ58㎝、幅56㎝、厚さ30㎝。３号壁柱は、２号壁柱の東1.9ｍにある。柱穴は長さ27ｍ、幅0.29ｍ、現存する深さ0.32ｍ。柱穴の底部には礎石があり、長さ68㎝、幅64㎝、厚さ36㎝。４号壁柱は、３号壁柱の東1.85ｍにある。柱穴は長さ0.29ｍ、幅0.28ｍ、現存する深さ0.33ｍ。柱穴の底部には礎石があり、長さ63㎝、幅50㎝、厚さ28㎝。５号壁柱は、４号壁柱の東1.85ｍにある。柱穴は長さ0.3ｍ、幅0.25ｍ、現存する深さ0.35ｍである。柱穴の底部には青石製の礎石があり、長さ61㎝、幅55㎝、厚さ22㎝。６号壁柱は、５号壁柱の東1.9ｍにある。柱穴は長さ0.3ｍ、幅0.25ｍ、現存する深さ0.53ｍ。礎石は残っていない。７号壁柱（Ｆ１東南隅柱）は、６号壁柱の東2.0ｍにある。柱穴は長さ0.29ｍ、幅0.31ｍ、現存する深さ0.25ｍ。柱穴の底部には礎石があり、直径60㎝、厚さ33㎝（原色図版41－２）。　南壁の壁柱

Ｆ１北壁の壁柱は、西から順に８～14号壁柱とした。壁柱の間隔は1.85～2.05ｍである。８号壁柱（Ｆ１西北隅柱）の柱穴は長さ0.25ｍ、幅0.27ｍ、現存する深さ0.25ｍ。柱穴の底部には青石製の礎石があり、一辺58㎝、厚さ23㎝。９号壁柱は、８号壁柱の東1.85ｍにある。柱穴は長さ0.3ｍ、幅0.27ｍ、現存する深さ0.37ｍ。礎石は残っていない。10号壁柱は、９号壁柱の東1.9ｍにある。柱穴は長さ0.28ｍ、幅0.25ｍ、現存する深さ0.4ｍ。礎石は残っていない。11号壁柱は、10号壁柱の東1.91ｍにある。柱穴は長さ0.29ｍ、幅0.27ｍ、現存する深さ0.50ｍ。底部には破損した　北壁の壁柱

礎石の断片がある。12号壁柱は、11号壁柱の東1.95mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.23m、現存する深さ0.50m。礎石は残っていない。柱穴の底部外面はスサ入り粘土の壁土で、厚さは１㎝である。この壁土はＦ１北壁の最外面の壁土と思われる。13号壁柱は、12号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.29m、幅0.25m、現存する深さ0.49m。底部には原位置を保っていない紫砂岩製の礎石の断片がある。14号壁柱は、13号壁柱の東2.05mにある。柱穴は長さ0.36m、幅0.29m、現存する深さ0.24m。柱穴の底部には紫砂岩製の礎石があり、東西38㎝、南北55㎝、深さ22㎝（図版91－２）。

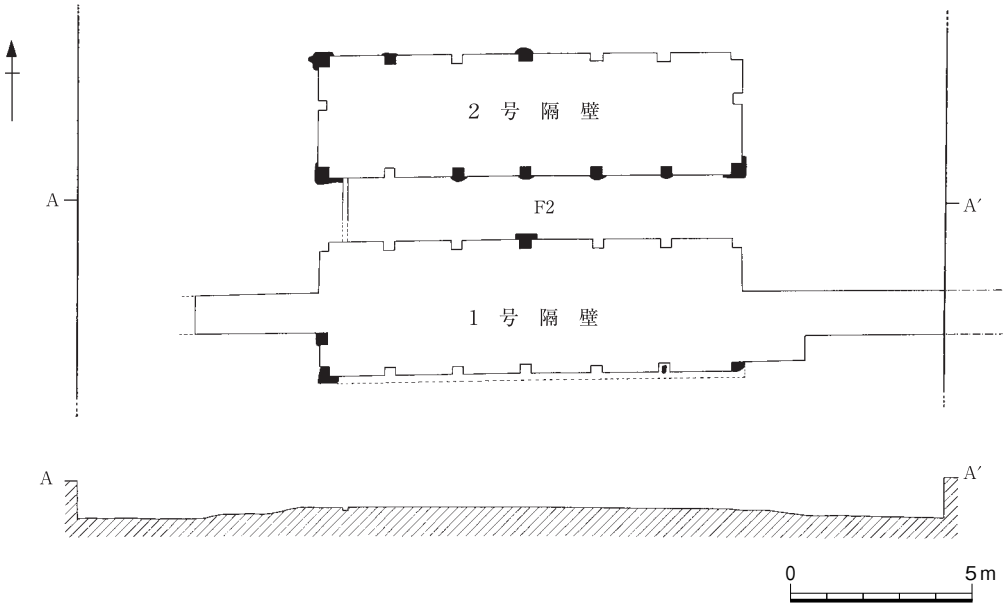
B　房室Ｆ２

１号隔壁の北側、２号隔壁南側にある。幅1.76m、長さ10.76m、南北両壁の現存高0.32～0.45m（第93図、図版91－５）。底面は粘土が塗られ、滑らかで、焼けて硬化している。その下は版築土で、厚さ1.4m。室内の西端には木製敷居の痕跡がある。南北両壁の西端から東へ0.82mの位置にあり、溝状の痕跡だけが残る。南北残存長1.2m、幅0.14m、深さ0.06m。

木製敷居

南壁の壁柱

Ｆ２南壁の壁柱は、西から順に１～７号壁柱とした。壁柱の間隔は1.85～2.0mである。１号壁柱（Ｆ２西南隅柱）の柱穴は、長さ0.25m、幅0.26m、現存する深さ0.35m。礎石は残っていない。２号壁柱は、１号壁柱の東1.85mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.35m。礎石は残っていない。３号壁柱は、２号壁柱の東1.85mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.31m。礎石は残っていない。４号壁柱は、３号壁柱の東1.9mにある（原色図版42－１）。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.32m。柱穴底部の礎石は、長さ60㎝、幅57㎝、厚さ25㎝。５号壁柱は、４号壁柱の東1.97mにある。柱穴は長さ0.28m、幅0.25m、現存する深さ0.33m。礎石は残っていない。６号壁柱は、５号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.29m、幅0.27m、現存する深さ0.33m。礎石は残っていない。７号壁柱（Ｆ２東南隅柱）は、６号壁柱の東



第93図　３号建築Ｆ２平面図・断面図

2.0mにある。柱穴は長さ0.26m、幅0.27m、現存する深さ0.33m。礎石は残っていない。

Ｆ２北壁の壁柱は、西から順に８～14号壁柱とした。壁柱の間隔は1.85～1.95mである。８号壁柱（Ｆ２西北隅柱）の柱穴は、長さ0.32m、幅0.3m、現存する深さ0.34m。柱穴の底部には礎石があり、長さ79㎝、幅60㎝、厚さ11㎝（図版91－３）。９号壁柱は、８号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.29m、幅0.26m、現存する深さ0.39m。礎石は残っていない。10号壁柱は、９号壁柱の東1.95mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.27m、現存する深さ0.3m。柱穴の底部には青石製の礎石があり、長さ55㎝、幅38㎝、厚さ17㎝。11号壁柱は、10号壁柱の東1.85mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.31m。柱穴の底部には青石製の礎石があり、長さ73㎝、幅52㎝、厚さ15㎝。12号壁柱は、11号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.3m。柱穴の底部には礎石があり、長さ65㎝、幅58㎝、厚さ16㎝。13号壁柱は、12号壁柱の東1.95mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.26m、現存する深さ0.26m。柱穴の底部には礎石があり、長さ53㎝、幅48㎝、厚さ15㎝。14号壁柱（Ｆ２東北隅柱）は、13号壁柱の東1.95mにある。柱穴は長さ0.29m、幅0.32m、現存する深さ0.22m。柱穴の底部には礎石があり、長さ66㎝、幅64㎝、厚さ26㎝（図版91－４）。　北壁の壁柱

C　房室Ｆ３

２号隔壁の北側、３号隔壁の南側にある。幅2.44m、長さ10.6m、南北両壁の現存高0.32～0.45m（図版92－１）。底面は粘土が塗られ、滑らかで、焼けて硬化している。その下は版築土で、厚さ1.95m。底面は南と北がやや高く、中央部はやや低い。室内の西端には木製敷居の痕跡がある。南北両壁の西端から東1.1mの位置にあり、溝状の痕跡だけが残る。南北残存長2.4m、幅0.16m、深さ0.07m。溝内には木製敷居の木灰が残っている（図版92－２）。　木製敷居

Ｆ３南壁の壁柱は、西から順に壁柱１～７号壁柱とした。壁柱の間隔は1.88～2.1mである。１号壁柱（Ｆ３西南隅柱）の柱穴は、一辺0.3m、現存する深さ0.32m。柱穴の底部には礎石があり、長さ68㎝、幅55㎝、厚さ16㎝。２号壁柱は、１号壁柱の東1.88mにある。柱穴は長さ0.33m、幅0.24m、現存する深さ0.37m。柱穴の底部には青石製の礎石があり、長さ60㎝、幅37㎝、厚さ18㎝。３号壁柱は、２号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.31m、幅0.24m、現存する深さ0.34mである。礎石は残っていない。４号壁柱は、３号壁柱の東1.88mにある。柱穴は長さ0.39m、幅0.2m、現存する深さ0.3m。柱穴の底部には礎石があり、直径55～62㎝、厚さ18㎝である。礎石上面には木柱の炭化土が残存している（原色図版43－１）。５号壁柱は、４号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.35m、幅0.21m、現存する深さ0.4m。礎石は残っていない。６号壁柱は、５号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.38m、幅0.25m、現存する深さ0.38m。礎石は残っていない。７号壁柱（Ｆ３東南隅柱）は、６号壁柱の東2.1mにある。柱穴は長さ0.33m、幅0.22m、現存する深さ0.38m。礎石は残っていない。なお、６～７号壁柱間の中央近くの版築の外には日干煉瓦が積まれている。日干煉瓦は長さ36～44㎝、厚さ６～８㎝。　南壁の壁柱

Ｆ３北壁の壁柱は、西から順に８～14号壁柱とした。壁柱の間隔は1.85～2.1mである。８号壁柱（Ｆ３西北隅柱）の柱穴は、長さ0.3m、幅0.33m、現存する深さ0.42m。礎石は残っていない。９号壁柱は、８号壁柱の東2.02mにある。柱穴は長さ0.29m、幅0.3m、現存する深さ0.28m。柱穴の底部には礎石があり、長さ48㎝、幅41㎝、厚さ22㎝。10号壁柱は、９号壁柱の東1.9mにあ　北壁の壁柱

る。柱穴は長さ0.3m、幅0.28m、現存する深さ0.3m。礎石は残っていない。11号壁柱は、10号壁柱の東1.87mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.3m。柱穴の底部には青石製の礎石があり、直径45～46㎝、厚さ18㎝である。礎石上面には木柱の炭化土が残る（図版91－６）。12号壁柱は、11号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.2m、現存する深さ0.33m。柱穴の北壁と西壁には日干煉瓦が残存しており、北壁には２個の日干煉瓦が上下に２段重なる。西壁には１個の日干煉瓦が、北壁上段の日干煉瓦と同じ高さに残っている。柱穴の底部には礎石があり、長さ54㎝、幅45㎝、厚さ20㎝（図版91－７）。13号壁柱は、12号壁柱の東1.85mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.3m。柱穴の底部には青石製の礎石があり、長さ44㎝、幅52㎝、厚さ13㎝である。礎石上面には木柱の炭化土が残存する。14号壁柱（Ｆ３東北隅柱）は、13号壁柱の東2.1mにある。柱穴は長さ0.26m、幅0.3m、現存する深さ0.43m。礎石は残っていない。

D　房室Ｆ４

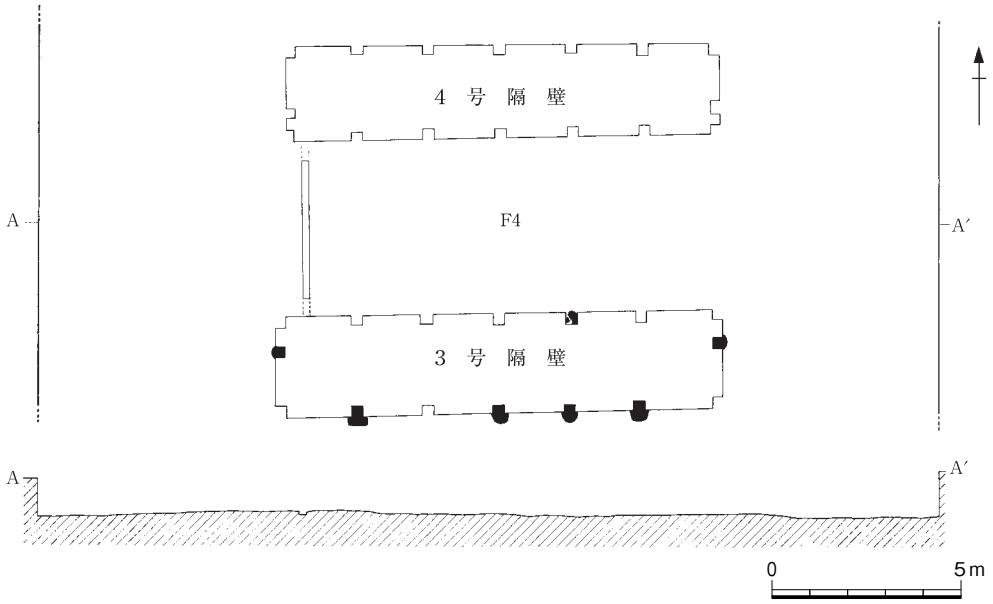
３号隔壁の北側、４号隔壁南側にある。平面は長方形で、幅4.65m、長さ10.93m、南北両壁の現存高0.43～0.45m。底面は粘土が塗られ、滑らかで、焼けて硬化している。その下は版築土で、厚さ1.3m。底面は南と北がやや高く、中央部はやや低い。底面中央部には２ヵ所の高まりがあり、まわりより0.1m高い。室内の西端には木製敷居の痕跡がある。南北両壁の西端から東0.45mの位置にあり、溝状の痕跡だけが残る。南北残存長3.65m、幅0.19m、深さ0.08m。溝内には木製敷居の木灰が遺存している（第94図）。

木製敷居

Ｆ４南壁の版築土の外面にはスサ入り粘土の壁土が残っており、２度塗られた痕跡がある。最初に塗られたスサ入り粘土は厚さ3.2㎝、その外側の漆喰層は厚さ0.05㎝。２度目に塗られたスサ入り粘土は厚さ1.5㎝で、その外側の漆喰層は厚さ0.05㎝（図版92－３）。

南壁の壁柱

Ｆ４南壁の壁柱は、西から順に１～７号壁柱とした。壁柱の礎石はすべて失われており、壁柱



第94図　３号建築Ｆ４平面図・断面図

の間隔は1.83～2.1mである。１号壁柱（Ｆ４西南隅柱）の柱穴は、長さ0.26m、幅0.3m、現存する深さ0.42m。２号壁柱は、１号壁柱の東2.1mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.34m。３号壁柱は、２号壁柱の東1.86mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.4m。４号壁柱は、３号壁柱の東1.94mにある。柱穴は一辺0.3m、現存する深さ0.4m。５号壁柱は、４号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.34m、現存する深さ0.28m。柱穴の底部には石臼の断片が散らばっている。６号壁柱は、５号壁柱の東1.83mにある。柱穴は長さ0.25m、幅0.3m、現存する深さ0.35m。７号壁柱（Ｆ４東南隅柱）の柱穴は、一辺0.25m、現存する深さ0.47m。

北壁の壁柱

Ｆ４北壁の壁柱は、西から順に８～14号壁柱とした。礎石はすべて失われており、壁柱の間隔は1.8～1.93mである。８号壁柱（Ｆ４西北隅柱）の柱穴は、長さ0.25m、幅0.3m、現存する深さ0.38m。９号壁柱は、８号壁柱の東1.8mにある。柱穴は長さ0.29m、幅0.24m、現存する深さ0.32m。10号壁柱は、９号壁柱の東1.9mにある。柱穴は一辺の長さ0.3m、現存する深さ0.34m。11号壁柱は、10号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.3m。12号壁柱は、11号壁柱の東1.92mにある。柱穴は長さ0.24m、幅0.22m、現存する深さ0.31m。13号壁柱は、12号壁柱の東1.9mにある。柱穴は一辺0.22m、現存する深さ0.37m。14号壁柱（Ｆ４東北隅柱）は、13号壁柱の東1.93mにある。柱穴は一辺0.25m、現存する深さ0.38m。

Ｅ　房室Ｆ５

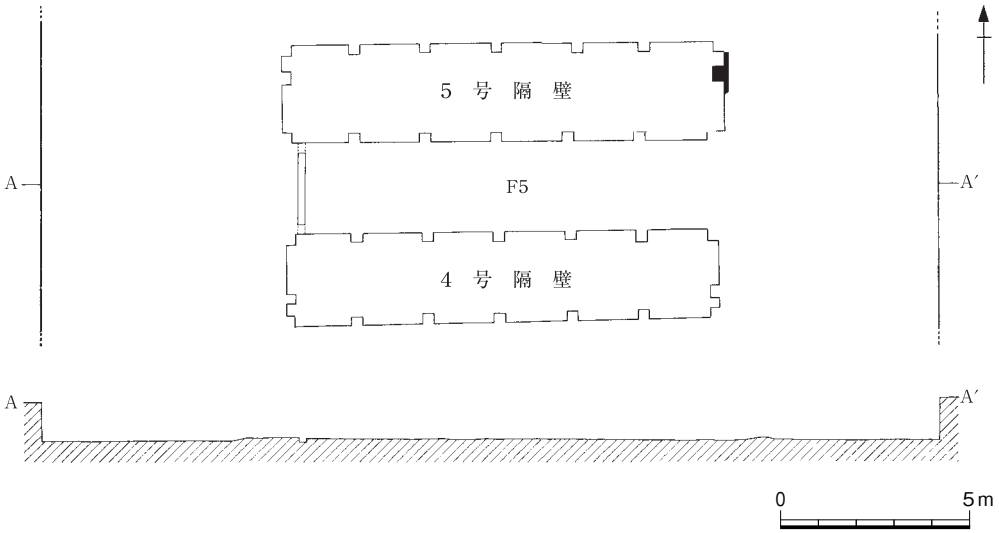
４号隔壁の北側、５号隔壁の南側にある。幅2.6m、長さ10.96m、南北両壁の現存高0.43～0.46m。底面は粘土が塗られ、滑らかで、焼けて硬化している。その下は版築土で、厚さ1.0m。

木製敷居

底面は南と北がやや高く、中央部はやや低い。室内の西端には木製敷居の痕跡がある。南北両壁の西端から東0.31mに位置し、溝状の痕跡だけが残る。南北残存長1.96m、幅0.2m、深さ0.15m。溝内には木製敷居の木灰が残っている（第95図、図版92－４）。

南壁の壁柱

Ｆ５南壁の壁柱は、西から順に１～７号壁柱とした。底部の礎石はすべて失われており、壁柱



第95図　３号建築Ｆ５平面図・断面図

の間隔は1.77～1.9mである。１号壁柱（Ｆ５西南隅柱）の柱穴は、長さ0.25m、幅0.3m、現存する深さ0.32m。２号壁柱は、１号壁柱の東1.77mにある。柱穴は長さ0.32m、幅0.24m、現存する深さ0.31m。３号壁柱は、２号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.32m、幅0.24m、現存する深さ0.34m。４号壁柱は、３号壁柱の東1.87mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.36m。５号壁柱は、４号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.36m。６号壁柱は、５号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.32m、現存する深さ0.37m。７号壁柱（Ｆ５東南隅柱）の柱穴は、長さ0.3m、幅0.32m、現存する深さ0.35m。

北壁の壁柱　Ｆ５北壁の壁柱は、西から順に８～14号壁柱とした。礎石はすべて失われており、壁柱の間隔は1.81～1.92mである。８号壁柱（Ｆ５西北隅柱）の柱穴は、一辺の長さ0.25m、現存する深さ0.41m。９号壁柱は、８号壁柱の東1.81mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.34m。10号壁柱は、９号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.31m、幅0.25m、現存する深さ0.41m。11号壁柱は、10号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.24m、現存する深さ0.4m。12号壁柱は、11号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.31m、幅0.26m、現存する深さ0.41m。13号壁柱は、12号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.36m。14号壁柱（Ｆ５東北隅柱）は、13号壁柱の東1.92mにある。柱穴は長さ0.25m、幅0.27m、現存する深さ0.34m。

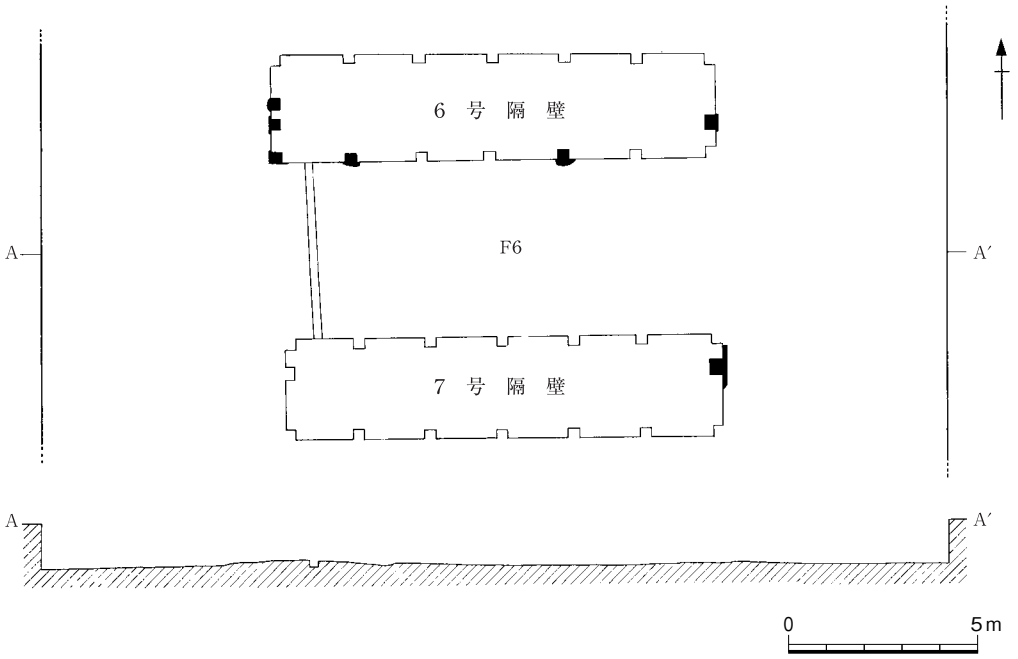
Ｆ　房室Ｆ６

５号隔壁の北側、６号隔壁の南側にある。幅4.66m、長さ10.6m、南北両壁の現存高0.46～0.54m。底面は粘土が塗られ、滑らかで、焼けて硬化している。その下は版築土で、厚さ1.0m。底面には凹凸があって平らではなく、東西の中間部分がほかより0.1m高い。南北両壁の西端から東へ0.42～0.46mの位置に木製敷居があり、溝状の痕跡だけが遺存する。南北長4.66m、幅0.21m、深さ0.2mで、溝内には木製敷居の木灰が残っている（第96図、図版92－５）。北壁東部の12～13号壁柱間の版築土には、厚さ約１㎝のスサ入り粘土の壁土が残る。

木製敷居

南壁の壁柱　Ｆ６南壁の壁柱は、西から順に１～７号壁柱とした。壁柱の礎石はすべて失われており、壁柱の間隔は1.8～2.0mである。１号壁柱（Ｆ６西南隅柱）の柱穴は、長さ0.27m、幅0.3m、現存する深さ0.45m。２号壁柱は、１号壁柱の東1.8mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.26m、現存する深さ0.4m。３号壁柱は、２号壁柱の東1.87mにある。柱穴は長さ0.29m、幅0.25m、現存する深さ0.36m。４号壁柱は、３号壁柱の東1.92mにある。柱穴は長さ0.29m、幅0.25m、現存する深さ0.43m。５号壁柱は、４号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.41m。６号壁柱は、５号壁柱の東1.8mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.32m、現存する深さ0.37m。７号壁柱（Ｆ６東南隅柱）は、６号壁柱の東2.0mにある。柱穴は長さ0.28m、幅0.25m、現存する深さ0.45m。

北壁の壁柱　Ｆ６北壁の壁柱は、西から順に８～14号壁柱とした。大部分の礎石は失われており、壁柱の間隔は1.8～2.0mである。８号壁柱（Ｆ５西北隅柱）の柱穴は、一辺0.3m、現存する深さ0.26m。柱穴の底部には青砂石製の礎石があり、長さ60㎝、幅35㎝、厚さ16㎝。９号壁柱は、８号壁柱の東2.0mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.25m、現存する深さ0.27m。柱穴の底部には花崗岩製の礎石が残り、長さ47㎝、幅45㎝、厚さ25㎝。10号壁柱は、９号壁柱の東1.88mにある。柱穴は長さ



第96図　３号建築Ｆ６平面図・断面図

0.28m、幅0.25m、現存する深さ0.4m。11号壁柱は、10号壁柱の東1.8mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.26m、現存する深さ0.42m。12号壁柱は、11号壁柱の東1.95mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.28m、現存する深さ0.3m。柱穴の底部には紫砂岩製礎石があり、一辺52㎝、厚さ16㎝。13号壁柱は、12号壁柱の東1.92mにある。柱穴は一辺0.28m、現存する深さ0.3m。14号壁柱（Ｆ６東北隅柱）は、13号壁柱の東2.0mにある。柱穴は長さ0.26m、幅0.3m、現存する深さ0.5m。

G　房室Ｆ７

６号隔壁の北側、北部大型建物の南側にある。幅2.7m、長さ11.2m、南北両壁の現存高0.55m。底面は粘土が塗られ、滑らかで、焼けて硬化している。その下は版築土で、厚さ0.8～1.0m。底面の西部と東部はともに破壊されている。室内の西端では木製敷居の遺構が見つかっていない。Ｆ７の底面は、Ｆ６に比べて0.35～0.4m高い（第97図、図版92－６）。

南壁の壁柱

Ｆ７南壁の壁柱は、西から順に１～７号壁柱とした。柱穴の底部の礎石はすべて失われており、壁柱の間隔は1.86～1.97mである。１号壁柱（Ｆ７西南隅柱）の柱穴は、長さ0.26m、幅0.3m、現存する深さ0.29m。２号壁柱は、１号壁柱の東1.97mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.24m、現存する深さ0.29m。３号壁柱は、２号壁柱の東1.86mにある。柱穴は長さ0.34m、幅0.22m、現存する深さ0.24m。４号壁柱は、３号壁柱の東1.97mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.22m、現存する深さ0.11m。５号壁柱は、４号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.22m、現存する深さ0.12m。６号壁柱は、５号壁柱の東1.93mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.26m、現存する深さ0.26m。７号壁柱（Ｆ７東南隅柱）の柱穴は、長さ0.29m、幅0.31m、現存する深さ0.44mである。

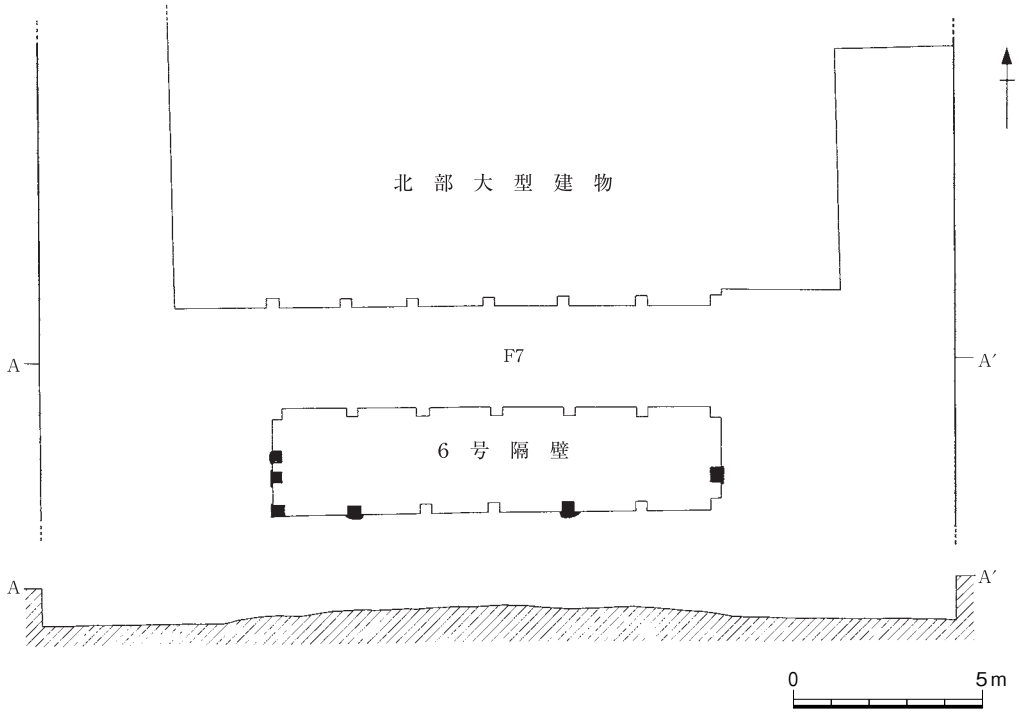
北壁の壁柱

Ｆ７北壁の壁柱は、西から東の順に８～14号壁柱とした。壁柱の間隔は1.76～2.06mである。８号壁柱（Ｆ７西北隅柱）の柱穴は、長さ0.32m、幅0.25m、現存する深さ0.34m。９号壁柱は、

８号壁柱の東1.9mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.23m、現存する深さ0.23m。10号壁柱は、９号壁柱の東1.76mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.24m、現存する深さ0.22m。11号壁柱は、10号壁柱の東2.02mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.24m、現存する深さ0.18mである。12号壁柱は、11号壁柱の東1.95mにある。柱穴は長さ0.3m、幅0.26m、現存する深さ0.21m。13号壁柱は、12号壁柱の東2.06mにある。柱穴は一辺0.3m、現存する深さ0.24m。14号壁柱（Ｆ７東北隅柱）の柱穴は、長さ0.3m、幅0.27m、現存する深さ0.42m。

房室Ｆ１～Ｆ７の東側の壁は、すべて破壊と火災によって失われている。ただし、Ｆ１～Ｆ７の底面東側の壁の東側と１～６号隔壁の東側には、南北方向に犬走りがあり、版築による平坦部分と傾斜部分の二つに分かれている。６号隔壁外側の犬走りを例にとると、平坦部分の東西幅は0.7m、斜面部分は西から東に14度の勾配をもち、長さは0.9mである。

犬走り



第97図　３号建築Ｆ７平面図・断面図

第２節　出土遺物

桂宮３号建築から出土した遺物は、合計179点ある。瓦磚、土器・土製品、銅器、鉄器があり、そのうち瓦磚が最も多い。

１　瓦　　磚

A　磚

方磚、枘付磚、軸吊孔のある磚、空心磚など数種類ある。方磚は、無文磚と文様磚の２種類に分けられる。

無文磚　　１点（3:T1③:15）。長さ35㎝、幅35㎝、厚さ５㎝（図版93－１）。

文様磚　　表面に幾何学文が施されている。

空心磚　　表面には幾何学文あるいは太陽文が施されている。

軸吊孔のある磚　　１点（3:T1③:98）。無文の枘付磚を加工して作られており、枘の近くに半円形の軸吊孔がある。残存長26㎝、幅18.3㎝、厚さ6.1㎝、軸吊孔の直径5.6㎝（図版93－２）。

枘付磚　　２点。長方形。3:T3③:21（図版93－３）は長さ33.8㎝、幅23.6㎝、厚さ5.3㎝、枘穴の直径6.0㎝、枘の直径5.6㎝。

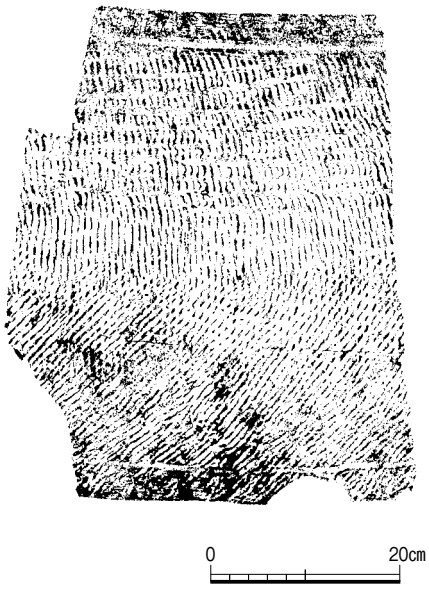
B　平瓦・丸瓦

数量は比較的多く、大多数が破片である。平瓦と丸瓦の２種類がある。

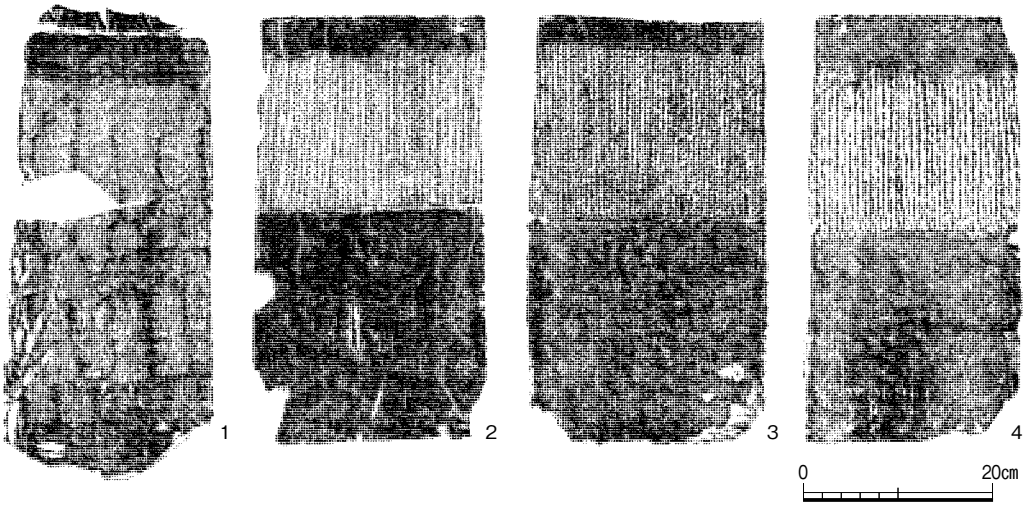
平　瓦　　平瓦の凸面には斜位の太い縄目、凹面には布目がある。朱が塗られているものもある。3:T1③:101（第98図、図版93－４）は凸面に太い縄目があり、縄目は幅0.5㎝。全長54.3㎝、幅35.7㎝、厚さ1.5～2.0㎝。3:T1③:100（図版93－５）は凸面に朱が塗られており、縄目の幅0.5㎝。残存長33㎝、残存幅16㎝、厚さ1.5㎝。

丸　瓦　　丸瓦は完形品が15点ある。凸面には縄目、凹面には布目がある。凸面の縄目の違いにより、３型に分類される。

Ⅰ型は１点（3:T2③:10、第99図１、図版93－６）。凸面に細い斜位の縄目、凹面には凹点文を施している。縄目は幅0.2㎝。全長49.5㎝、直径13.6～14.9㎝、厚さ1.8㎝、玉縁の長さ2.6㎝、厚さ1.0㎝。



第98図　３号建築出土平瓦（3:T1③:101）



１：Ⅰ型（3:T2③:10）　２：Ⅱ型１式（3:T1③:6）　３：Ⅱ型２式（3:T1③:9）　４：Ⅲ型（3:T1③:49）

第99図　３号建築出土丸瓦

Ⅱ型は６点。凸面にはやや太めの縦位の縄目を施す。縄目の長さで２式に分類できる。

１式は４点。縄目が比較的短い。3:T1③:6（第99図２）は、縄目の長さ16㎝、幅0.3㎝。全長49.6㎝、直径15～16㎝、厚さ1.3㎝、玉縁の長さ3.9㎝、厚さ1.7㎝。

２式は２点。縄目がやや長い。3:T1③:9（第99図３、図版93－７）は、縄目の長さ18㎝、幅0.3㎝。全長49.2㎝、直径14.1～14.9㎝、厚さ1.3㎝、玉縁の長さ4.0㎝、厚さ1.6㎝。

Ⅲ型は８点。凸面に縦位の太い縄目を施す。3:T1③:49（第99図４）は、縄目の長さ16.5㎝、幅0.5㎝。全長48.4㎝、直径14.1～14.7㎝、厚さ1.0㎝、玉縁の長さ2.9㎝、厚さ1.6㎝。3:T1③:69（図版93－８）は、Ⅳ型雲文瓦当をともなう。縄目の長さ18.5㎝、幅0.5㎝。全長50.5㎝、直径15.5～16㎝、厚さ1.7㎝、玉縁の長さ4.5㎝、厚さ1.5㎝。

C　瓦　当

76点ある。１点の無文半瓦当を除き、すべて円瓦当で、文様瓦当と文字瓦当に大別できる。文様瓦当では雲文瓦当が最も多く、ほかに変形葵（き）文瓦当と樹木文瓦当が１点ずつある。

雲文瓦当　合計64点。このほかに雲文瓦当の笵型が１点ある。瓦当は灰色で、朱が塗られているものもある。瓦当面は四つに区画され、界線は二重線で、区画内に雲文が施される。Ⅲ型とⅣ型に分類できる。

雲文瓦当Ⅲ型

Ⅲ型は41点。二重線の界線は中心文を貫通しない。文様の変化から７式に分類できる。

１式は１点（3:T4③:6、図版94－１）。中心文に格子文を配し、界線は各雲文の中央に連なる。瓦当の厚さ2.3㎝。

２式は１点（3:T4③:7、第100図１、図版94－２）。中心文に斜格子文を配し、界線は各雲文の中央に連なる。周縁の幅1.2㎝、瓦当の厚さ1.0～1.9㎝。

11式は27点。界線は中心文を貫通せず、中心文は半球形文の外側に二重の圏線をめぐらし、圏線間に11～20個の珠文をおく。周縁の内側にも二重の圏線があり、その間には「X」字形文が配される。朱が塗られているものもある。「X」字形文の密度により、３式に細分できる。

11B式は２点。雲文の外側にまばらな「X」字形文が一周し、中心文の珠文数は20個。3:T1③:

35（第100図２、図版94－３）は、瓦当径15.9㎝、周縁の幅1.9㎝、瓦当の厚さ2.2㎝。

11C式は21点。雲文の外側に緻密な「X」字形文（櫛歯文）が一周する。珠文数により３種に分類できる。

第１種は２点。珠文は11個ある。3:T1③:28（第100図３、図版94－４）は、瓦当径15.5㎝、周縁の幅1.1㎝、瓦当の厚さ2.2㎝。

第２種は17点。珠文は12個ある。3:T1③:38（図版94－５）は、瓦当面に朱が塗られている。瓦当径16.1㎝、周縁の幅1.6㎝、瓦当の厚さ2.4㎝である。3:T3③:11（図版94－６）は、瓦当径15.5㎝、周縁の幅1.3㎝、瓦当の厚さ2.6㎝。3:T3③:59（図版94－７）は、瓦当径16.4㎝、周縁の幅1.3～1.7㎝、瓦当の厚さ1.8㎝。

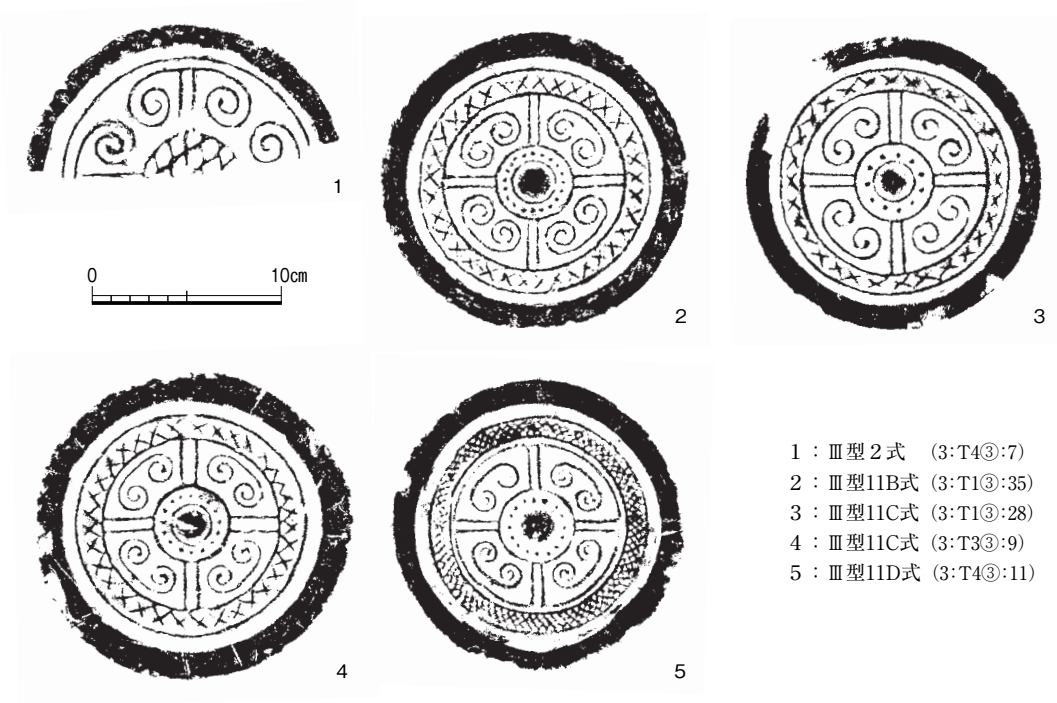
第３種は２点。3:T3③:9（第100図４、図版94－８）は、珠文が16個ある。雲文の外側に一重の圏線がある。瓦当径16.1㎝、周縁の幅1.7㎝、瓦当の厚さ2.5㎝。

11D式は４点。3:T4③:11（第100図５、図版95－１）は、珠文が16個あり、周縁の内側に緻密な「X」字形文（櫛歯文）がめぐる。雲文の外側には二重の圏線がある。瓦当径15.3㎝、周縁の幅1.3㎝、瓦当の厚さ1.9㎝。

17式は７点。界線は中心文を貫通せず、中心文は半球形文の外側に二重の圏線がめぐり、圏線の間に多数の珠文を配する。周縁の内側には圏線が一周する。朱が塗られているものもある。珠文の数により３種に分類できる。

第１種は５点。中心文に８個の珠文をおく。3:T2③:9（第101図１、図版95－２）は、瓦当径16.1㎝、周縁の幅0.8～1.2㎝、瓦当の厚さ2.8㎝。

第２種は１点（3:T1③:95、第101図２、図版95－３）。中心文の珠文は11個で、雲文の両側と下方中央に１個ずつ珠文をおく。瓦当径15.6㎝、周縁の幅1.3㎝、瓦当の厚さ2.2㎝。



第100図　３号建築出土雲文瓦当（１）

第３種は１点（3:T1③:33、図版95－４）。珠文は13個あり、雲文の左右上方に１個ずつの小三角形文をおく。瓦当面には朱が塗られる。瓦当径15.7㎝、周縁の幅1.5㎝、瓦当の厚さ2.1㎝。

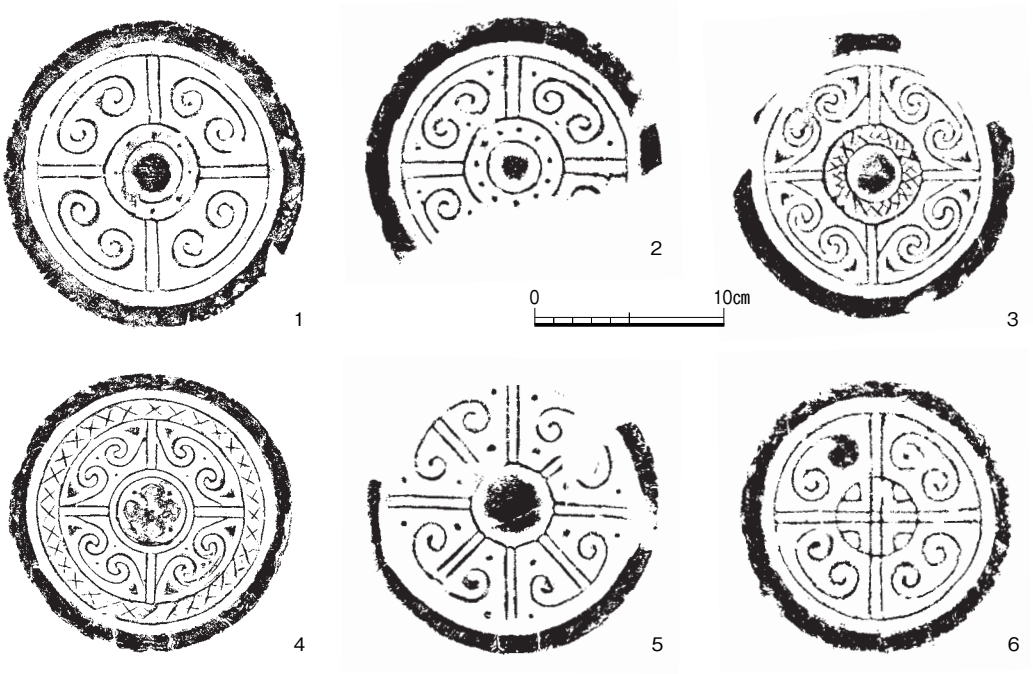
25式は２点。中心文は半球形文の外側に二重の圏線をめぐらし、圏線の間に「X」字形文を配する。界線は中心文を貫通せず、瓦当面を４分割している。各区画内には雲文が一つあり、雲文の末端は逆向きに巻き、雲文の内側から外側に「X」形を作り、界線にまでつながる。雲文の両側には一つずつ三角形文があり、周縁の内側には圏線が一周する。3:T2③:21（第101図３、図版95－５）は、瓦当径15.0㎝、周縁の幅1.2㎝、厚さ2.8㎝。

26式は１点（3:T1③:54、第101図４、図版95－６）。中心文は中央に珠文が一つあり、その外側は四葉文で、葉の間に一つずつ珠文をおく。その外側は圏線が一周する。界線は中心文を貫通せず、瓦当面を４分割する。各区画内には雲文が一つずつある。雲文の末端は逆向きに巻き、雲文の内側から外側に「X」形を作り、界線とつながる。雲文の両側には一つずつ三角形文があり、雲文中軸の上方と下方に一つずつ珠文をおく。雲文の外側は二重の圏線で、その間に格子文を配する。瓦当面は朱が塗られている。直径15.0㎝、周縁の幅1.1㎝、瓦当の厚さ2.4㎝。

27式は２点。中心文は半球形で、各区画には中心文より外側に２本の直線が伸び、雲文の中央につながる。雲文の左右両側の上方と下方に一つずつ珠文がある。3:T2③:36（第101図５、図版95－７）は、瓦当径15.3㎝、周縁の幅1.2㎝、厚さ2.2㎝。

雲文瓦当Ⅳ型

Ⅳ型は23点ある。界線が中心文を貫通し、中心文の各区画内には「L」字形文を一つずつ配する。周縁の内側には一般に圏線がめぐり、いずれも１A式に属する。3:T3③:19（第101図６、図版95－８）は、中心文の直径4.6㎝、瓦当径14.3㎝、周縁の幅1.4㎝、瓦当の厚さ2.0㎝。3:T3③:13（図版96－１）は、中心文の直径4.9㎝、瓦当径14.5㎝、周縁の幅1.2㎝、瓦当の厚さ2.3㎝。3:T



１：Ⅲ型17式（3:T2③:9）　２：Ⅲ型17式（3:T1③:95）　３：Ⅲ型25式（3:T2③:21）　４：Ⅲ型26式（3:T1③:54）
５：Ⅲ型27式（3:T2③:36）　６：Ⅳ型１A式（3:T3③:19）

第101図　３号建築出土雲文瓦当（２）

4③:2（第102図１、図版96－２）は、中心文の直径5.2㎝、瓦当径14.3㎝、周縁の幅1.2㎝、瓦当の厚さ2.0㎝。3:T2③:38（第102図２、図版96－３）は、中心文の直径5.6㎝、瓦当径15.1㎝、周縁の幅1.1㎝、瓦当の厚さ2.3㎝。3:T2③:40（図版96－４）は、中心文の直径5.6㎝、瓦当径14.9㎝、周縁の幅1.2㎝、瓦当の厚さ2.2㎝。3:T1③:89（第102図３、図版96－５）は、中心文の直径6.0㎝、瓦当径17.0㎝、周縁の幅0.8㎝、瓦当の厚さ3.0㎝。3:T1③:5（図版96－６）は、中心文の直径6.0㎝、瓦当径15.5㎝、周縁の幅1.0㎝、瓦当の厚さ2.4㎝。

雲文瓦当笵型　１点（3:T1③:84、第102図４、図版96－７）。破片のため、中心文は不明だが、界線が瓦当面を４分割し、区画内に雲文を配する。周縁の内側には圏線が一周する。復元直径は16.4㎝である。　雲文瓦当笵

無文半瓦当　１点（3:T4③:12、図版96－８）。破片である。無文。

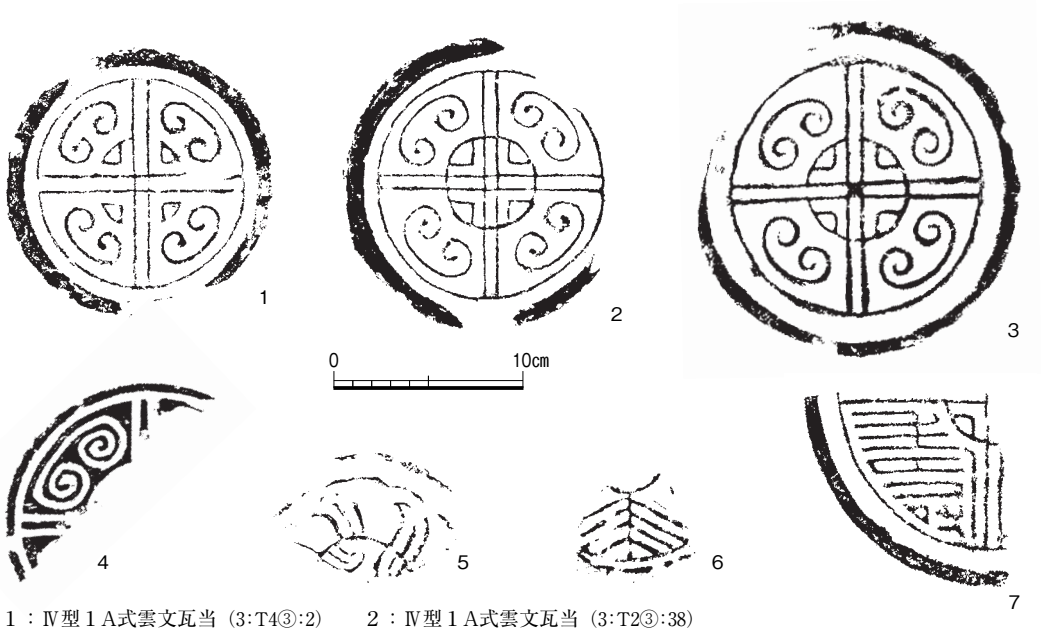
変形葵文瓦当　１点（3:T3③:17、第102図５、図版97－１）。Ⅰ型２式に属する。周縁の内側に圏線が一周し、３本の線で構成される右向きの「S」字形文が五つあり、その端は圏線とつながっている。「S」字形文二つごとに、その間に３本の線で構成された右向きの葵文が一つあり、その端もまた圏線とつながる。

樹木文瓦当　１点（3:T1③:90、第102図６、図版97－２）。瓦当面には樹木文が一つだけ残る。

文字瓦当　10点。「與天無極」「長□無極」「長生未央」「千秋萬歲」と「□□□壽」がある。

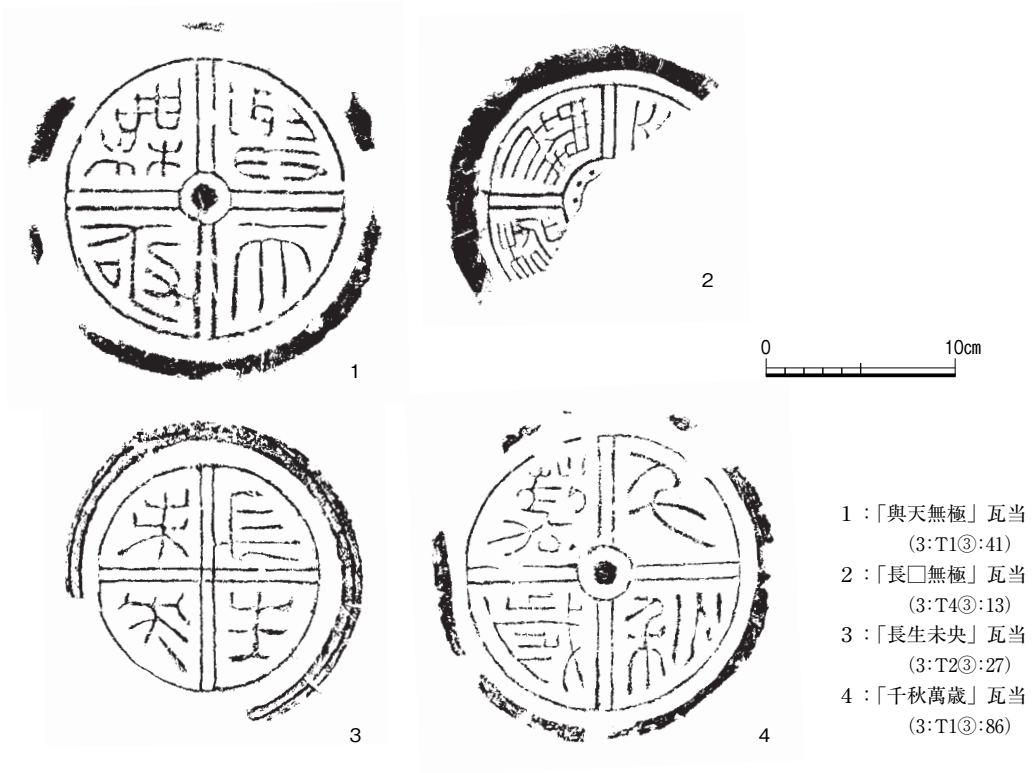
「與天無極」瓦当は５点。中心文は半球形文と圏線からなり、界線は中心文を貫通せず、瓦当面を４分割する。区画内には陽文で「與天無極」とある。周縁の内側には圏線が一周めぐり、瓦当裏面には糸切り痕がある。3:T1③:41（第103図１、図版97－３）は、瓦当径19.0㎝、周縁の幅1.1㎝、瓦当の厚さ2.4㎝。　「與天無極」

「長□無極」瓦当は１点（3:T4③:13、第103図２）。周縁の内側に圏線が一周する。中心文は半球　「長□無極」



１：Ⅳ型１A式雲文瓦当（3:T4③:2）　２：Ⅳ型１A式雲文瓦当（3:T2③:38）
３：Ⅳ型１A式雲文瓦当（3:T1③:89）　４：雲文瓦当笵型（3:T1③:84）
５：変形葵文瓦当（3:T3③:17）　６：樹木文瓦当（3:T1③:90）　７：「□□□壽」瓦当（3:T2③:1）

第102図　３号建築出土雲文瓦当（３）・葵文瓦当・文字瓦当（１）



第103図　３号建築出土文字瓦当（２）

形文の周囲に二重の圏線がめぐり、圏線の間には多数の珠文をおく。界線は中心文を貫通せず、瓦当面を４分割する。各区画には陽文で篆字体の文字が１字ずつ配され、「長」「無」「極」の三字が残る。瓦当復元径18.0㎝、周縁の幅1.4㎝、瓦当の厚さ2.0㎝。

「長生未央」　「長生未央」瓦当は２点。周縁の内側に圏線が一周し、界線が瓦当面を４分割する。各区画には１字ずつ、陽文で「長生未央」とある。瓦当の裏面には糸切り痕がある。3:T2③:27（第103図３、図版97－４）は、瓦当径15.5㎝、周縁の幅1.1～1.5㎝、瓦当の厚さ3.1㎝。

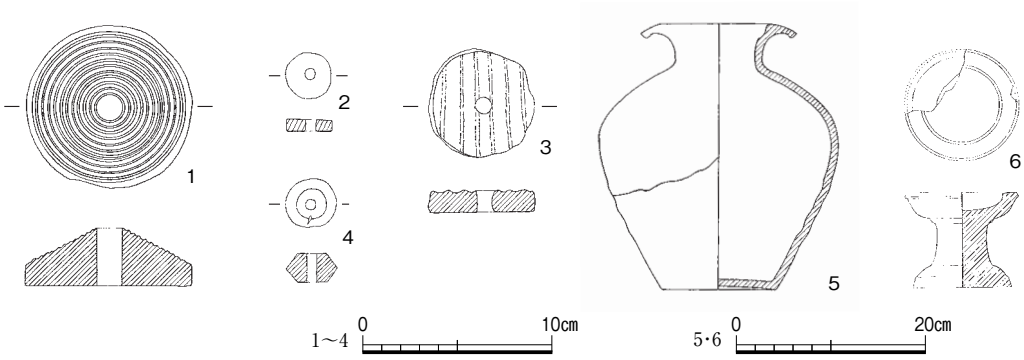
「千秋萬歳」　「千秋萬歳」瓦当は１点（3:T1③:86、第103図４、図版97－５）。中心文は半球形文と圏線からなり、界線は中心文を貫通せず、瓦当面を４分割する。各区画内には陽文で「千秋萬歳」とある。周縁の内側は圏線が一周し、瓦当裏面には糸切り痕がある。瓦当径18.0㎝、周縁の幅1.0㎝、瓦当の厚さ3.5㎝。

「□□□壽」　「□□□壽」瓦当は１点（3:T2③:1、第102図７、図版97－６）。界線は中心文を貫き、中心文には区画ごとに「L」字形文が一つずつ施される。瓦当面は「壽」１字だけが残る。周縁の幅1.2㎝、瓦当の厚さ2.9㎝。

2　土器・土製品

工具、武器と生活用品に大別でき、土製円盤、紡錘車、土製小球、罐、燭台などがある。

土製円盤　５点。平面は円形。3:T2③:1（図版97－７）は平瓦の破片を加工している。無文。直径2.9～3.3㎝、厚さ1.4㎝。3:T2③:3（図版97－８）は土器片を加工している。直径2.8～2.9㎝、厚さ0.9㎝。3:T2③:18（図版97－９）も土器片を加工。直径3.5～3.7㎝、厚さ0.8㎝。3:T2③:13



１：紡錘車（3:T1③:96）　２：紡錘車（3:T2③:14）　３：紡錘車（3:T1③:50）
４：算盤玉形土製小玉（3:T1③:36）　５：罐（3:T3③:12）　６：燭台（Ⅱ型、3:T4③:10）

第104図　３号建築出土土器・土製品

（図版97－10）は平瓦の破片を加工しており、不整形である。直径6.3㎝、厚さ1.4㎝。

紡錘車　４点。平面は円形で、中央に円孔があけられ、断面は三角形に近い。表面には圏線文が施されている。3:T1③:96（第104図１、図版98－１）は直径8.5㎝、厚さ3.2㎝、孔径1.5㎝。3:T2③:6（図版98－２）は直径6.9㎝、厚さ2.8㎝、孔径1.2～1.5㎝。3:T2③:14（第104図２、図版98－３）は土器片を研磨し、中央に円孔をあけている。直径2.3㎝、厚さ0.6㎝、孔径0.6㎝。3:T1③:50（第104図３、図版98－４）は平瓦片を加工しており、中央に円孔をあける。表面には太い縄目がある。直径5.5㎝、厚さ1.4㎝、孔径1.0㎝。

算盤玉形土製小玉　１点（3:T1③:36、第104図４、図版98－５）。算盤玉形で、直径2.5㎝、高さ1.6㎝、孔径0.4㎝。

土製小球　４点。球形で無文。直径1.5～1.9㎝。3:T2③:20（図版98－６）は直径1.9㎝。

罐　１点（3:T3③:12、第104図５、図版98－７）。幅広く平らな口縁部は下に向かってわずかに垂れ下がり、外反する。頸部は短く、肩部は丸い。腹部は下位にむかってすぼまり、平底である。口径15.6㎝、底径11.6㎝、高さ28㎝。

燭　台　２点。Ⅱ型とⅢ型に分けられる。

Ⅱ型は１点（3:T4③:10、第104図６、図版98－８）。泥質灰陶である。口縁で平らでⅢ部は浅い。太く短い脚をもち、裾部は短い。口径11.2㎝、底径9.8㎝、高さ10.2㎝。

Ⅲ型は１点（3:T1③:92）。脚部だけが残り、竹節状を呈する。底径5.2㎝、残存高8.5㎝。

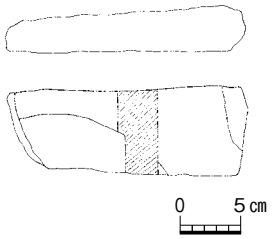
隅丸方形土製品　１点（3:T1③:99、図版98－９）。無文。長さ16.3㎝、幅15.8㎝、厚さ4.6㎝。

３　石　　器

計３点。砥石と石臼がある。

砥　石　１点（3:T2③:17、第105図、図版98－10）。平面はやや台形に近く、上面は比較的滑らかで、研磨された痕跡がある。長さ18.9㎝、幅6.2～7.2㎝。

石　臼　２点。ともに花崗岩製である。3:T2③:45（図版99－１・２）は円形で、直径53㎝、全高24.1㎝。上臼は直径53㎝、縁



第105図　３号建築出土砥石
（3:T2③:17）

の厚さ8.3㎝である。下臼は破片で、直径48㎝、縁の厚さ8.0㎝。上臼は、下面が凹面、上面は凸面をなし、頂部には隆起した円形の漏斗状の孔がある。直径23㎝、深さ14.5㎝で、底部は破損している。下臼は、中央に直径2.0㎝の円柱形の鉄製心棒が備わる。上臼と下臼の磨り面全体に多くの穴があり、使用痕がある。

4　鉄　　器

釘、鍬先、剣、甲冑、矛、八角形鉄製品などがある。釘は30点あり、３点の形状が不明なものを除いて、円頭釘と折釘、鎹（かすがい）の３種に分けることができる。

円頭釘　　５点。Ⅲ型に属する。頭部はキノコ状で、身部断面は長方形である。3:T1③:14（第106図１、図版99－３）は長さ6.6㎝、頭部径1.6㎝、縁の厚さ0.6㎝。

折　釘　　21点。いずれもⅠ型に属する。釘の身部と頭部は一体で、身部と頭部は長方体をなし、身部の先端は尖っている。3:T4③:5（第106図２、図版99－４）は全長9.5㎝、身部の幅1.0㎝、厚さ0.9㎝。頭部は長さ3.3㎝、幅1.3㎝、厚さ1.2㎝。3:T1③:80（第106図３）は全長10.4㎝、身部の幅1.5㎝、厚さ1.2㎝。頭部は長さ2.6㎝、幅1.5㎝、厚さ1.0㎝。

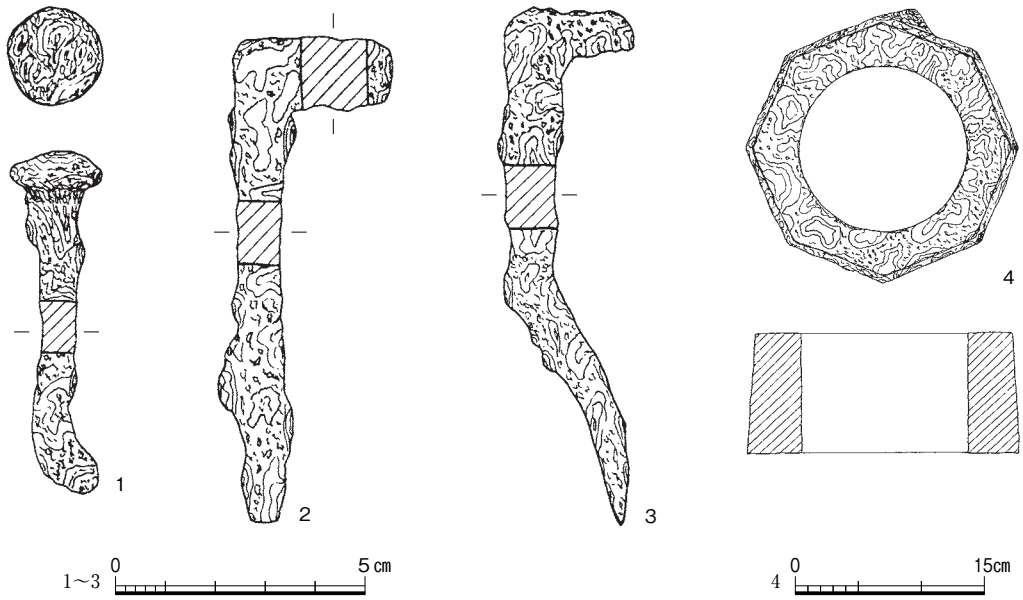
鎹　　１点（3:T1③:63、図版99－５）。断面は長方形を呈する。

鋤　先　　１点（3:T3③:20、図版99－７）。刃部は弧状を呈し、長さ16.6㎝、幅3.7㎝。

矛　　１点（3:T3③:23、図版99－６）。円錐状を呈する。錆が進行している。残存長19㎝。

剣　　２点。錆が進行している。3:T2③:33は四つに折れ、先端と把の後部は失われている。剣身は細長く扁平である。残存長33.7㎝、幅3.5㎝、厚さ0.8㎝。

八角形鉄製品　　１点（3:T1③:23、第106図４、図版99－８）。平面が八角形で、中央に円孔がある。直径19㎝、円孔の直径は13㎝である。



１：円頭釘（Ⅲ型、3:T1③:14）　２：折釘（Ⅰ型、3:T4③:5）　３：折釘（Ⅰ型、3:T1③:80）
４：八角形鉄製品（3:T1③:23）

第106図　３号建築出土鉄器

5　銅　　器

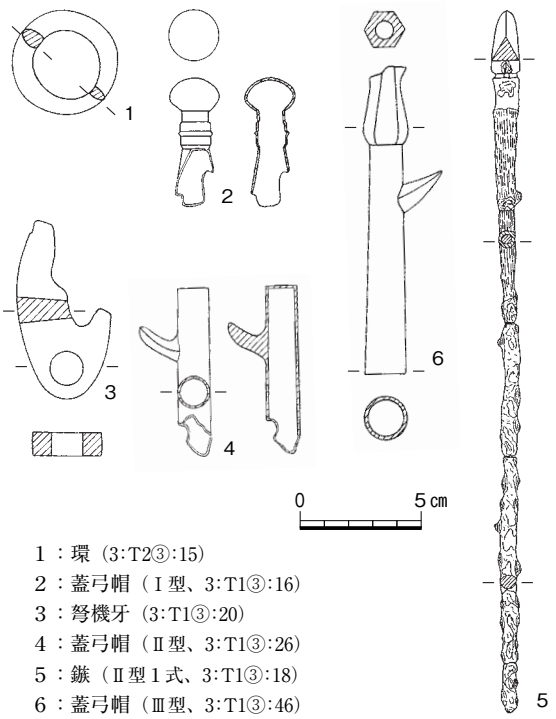
計８点。おもに車馬器と兵器の部品で、ほかにいくつかの生活用品もある。器種としては、蓋弓帽、鏃、環、弩機牙、鏡などがある。

蓋弓帽　　３点。管状を呈する。３型式に分類できる。

Ⅰ型は１点（3:T1③:16、第107図２、図版100－１）。頂部が円形で、残存長5.0㎝。

Ⅱ型は１点（3:T1③:26、第107図４、図版100－２）。先端がわずかにすぼまっており、管の側面に鉤が一つある。残存長6.5㎝である。

Ⅲ型は１点（3:T1③:46、第107図６、図版100－３）。先端が六角柱形を呈し、管の側面に鉤が一つある。残存長12.1㎝。



１：環（3:T2③:15）
２：蓋弓帽（Ⅰ型、3:T1③:16）
３：弩機牙（3:T1③:20）
４：蓋弓帽（Ⅱ型、3:T1③:26）
５：鏃（Ⅱ型１式、3:T1③:18）
６：蓋弓帽（Ⅲ型、3:T1③:46）

第107図　３号建築出土銅器

鏃　　１点出土（3:T1③:18、第107図５、図版100－４）。Ⅱ型１式に属し、断面は三角形を呈する。鏃身はやや幅広く、外縁の刃は前方に集まって先端部となる。先端部はやや丸い。茎部は鉄製で長く、五つに折れている。鏃身の長さ2.5㎝、茎部の残存長10㎝。

環　　２点。3:T2③:15（第107図１、図版100－５）は、外径4.1㎝、厚さ0.6㎝である。

弩機牙　　１点（3:T1③:20（第107図３、図版100－６）。平面は楕円形で、残存長7.2㎝、幅3.7㎝。

このほかに、銅鏡の破片が１点ある（3:T2③:47）。

6　銭　　貨

計20点。半両銭、五銖銭、貨泉、貨布、大泉五十がある。

半両銭　　２点。ともにⅠ型に属し、軽く薄い。外縁と方孔の内郭がない。銭文は「半両」である。3:T1③:75（第108図１、図版100－７）は直径2.4㎝、方孔の一辺0.7㎝、厚さ0.1㎝。

五銖銭　　９点。外縁と方孔の内郭がある。銭文は「五銖」で、２型式に分類できる。

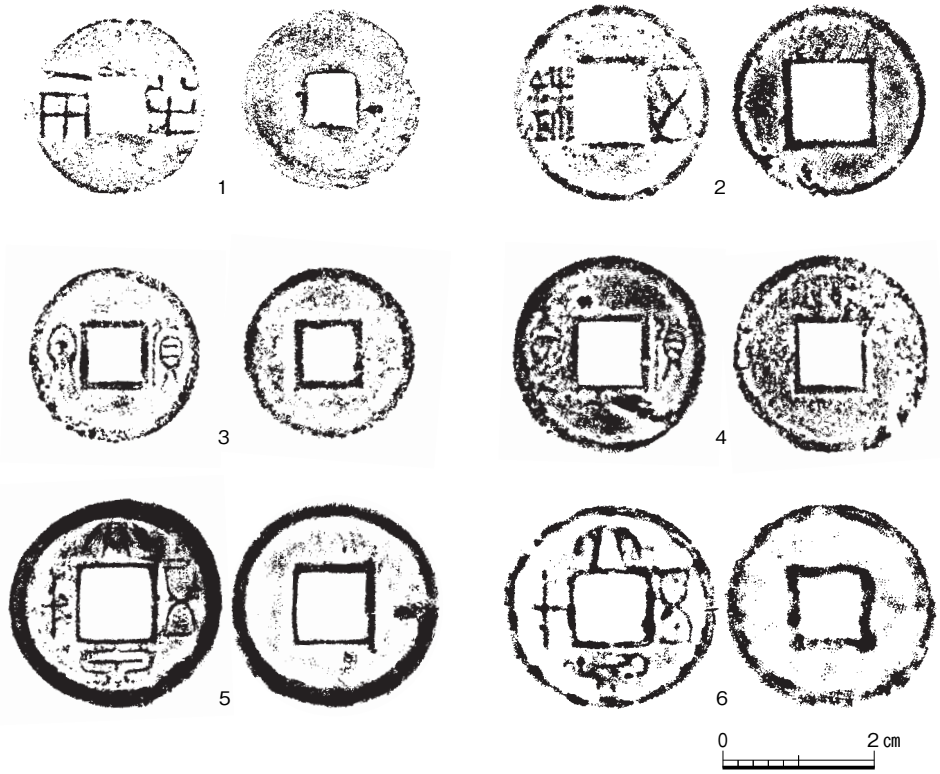
Ⅰ型１式は１点（3:T3③:2、第108図２、図版100－８）。直径2.6㎝、方孔の一辺0.9㎝、厚さ0.2㎝である。

Ⅱ型は８点。3:T1③:10（図版100－９）は、直径2.6㎝、方孔の一辺1.0㎝、厚さ0.2㎝。

貨　泉　　５点。外縁と方孔の内郭がある。銭文は「貨泉」で、２型式に分類できる。

Ⅱ型は３点。軽く薄い。3:T2③:31（第108図３、図版100－10）は、直径2.3㎝、方孔の一辺0.7㎝、厚さ0.2㎝。

Ⅲ型は２点。3:T3③:4（第108図４、図版100－12）は比較的重厚で、銭文はやや小さく、不鮮明



１：半両銭（Ⅰ型、3:T1③:75）　２：五銖銭（Ⅰ型１式、3:T3③:2）　３：貨泉（Ⅱ型、3:T2③:31）
４：貨泉（Ⅲ型、3:T3③:4）　５：大泉五十（Ⅰ型、3:T3③:1）　６：大泉五十（Ⅱ型、3:T3③:5）

第108図　３号建築出土銭貨

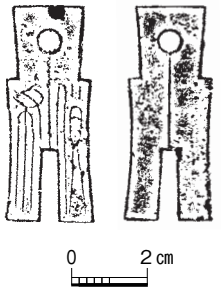
である。直径2.9㎝、方孔の一辺0.8㎝、厚さ0.4㎝。

貨　布　　１点（3:T2③:23、第109図、図版100－11）。全高5.8㎝、幅2.3㎝、厚さ0.2㎝。足の高さは3.8㎝である。

大泉五十　　３点。比較的重厚で、外縁と方孔の内郭がある。銭文は「大泉五十」で、２型式に分類できる。

Ⅰ型は１点（3:T3③:1、第108図５、図版100－13）。文字が比較的細く、薄い。直径2.8㎝、方孔の一辺0.9㎝、厚さ0.3㎝。

Ⅱ型は２点。文字はやや太い。3:T3③:5（第108図６、図版100－14）は、直径2.8㎝、方孔の一辺0.8㎝、厚さ0.3㎝。



第109図　３号建築出土貨布
（3:T2③:23）

第３節　桂宮３号建築の年代と性格

年　代　桂宮３号建築は漢代遺物包含層の下層にあり、漢代遺物包含層は遺跡が倒壊や破壊、廃棄後の堆積層である。この層からは瓦磚などが多く出土した。丸瓦の凸面には、いずれもやや太めか太い縄目が施され、典型的な前漢中・後期の特徴をもっている。出土した瓦当のうち、文字瓦当は「長生無極」が多く、文様瓦当では周縁の内側に「X」字形文（櫛歯文）を配した雲文瓦当が主体である。これらは、ともに前漢中・後期と新の王莽の時期に流行した瓦当である。建物から出土した五銖銭、大泉五十、貨泉などは、すべて前漢中・後期の銭貨である。層位的関係と出土遺物の特徴から、桂宮３号建築の年代は前漢中・後期と考えられ、その上限は前漢中期を遡らない。これは、桂宮が漢の武帝期に造営されたとする文献の記載と一致する[(1)]。桂宮３号建築F１～F７の大量の赤い焼土の堆積からみて、この建築はおそらく王莽時代末期の戦火によって破壊されたものと思われる[(2)]。

造営と廃絶の年代

性　格　桂宮３号建築は南北二つの大型建物と七つの房室で構成されている。房室はすべて西向きで、平面は東西に長い長方形を呈し、間口に比べて奥行が深い。いずれの房室も西側に入口を開き、門道幅は広い。隣り合う房室の間を隔てる隔壁は厚く、その南北両壁には壁柱が密に並ぶ。これらは、漢長安城のほかの宮殿や少府、官署[(3)]などの建物とは大きく様相を異にしている。後者は南を向き、採光も良好である。そして間口は奥行より広く、建物間の隔壁の厚さは0.5～1.1mである。それらに比べると、桂宮３号建築の七つの房室は、人々が居住し、活動するには不向きであり、桂宮の倉庫と推定される。

桂宮の倉庫

（１）陳直『三輔黄図校証』陝西人民出版社、1980年。

（２）『漢書』王莽伝・下に「赤眉焼長安宮市里、害更始。民飢餓相食、死者数十万、長安為虚、城中無人行（赤眉は長安の宮室や市街を焼き、更始帝を殺害した。民は飢えて互いに食いあい、死者数十万。長安は廃墟となって、城内には行き交う人の影が見られなかった）」とある。中華書局、1962年。

（３）中国社会科学院考古研究所『漢長安城未央宮 1980～1989年考古発掘報告』中国大百科全書出版社、1996年。

第４節　下層排水渠

桂宮３号建築Ｆ７の下層から、漢長安城の排水渠を検出した。発掘調査は、2000年３月19日から４月６日まで、東西20.3m、南北1.9～2.6m、深さ2.3mの試掘坑を設定しておこなった。

１　土　　層

排水渠の基本層序を、試掘坑南壁を例にとって説明する。この遺構は桂宮３号建築の下層にあり、調査時に試掘坑の耕作土層や攪乱層、漢代遺物包含層はすべて取り除いたため、排水渠の堆積層は第４層から始まる（第110図）。

第４層：赤い焼土。地表面からの深さ0.82～2.0m、厚さ０～0.89m。締まりがなく、大量の赤い焼土や版築土の断片、漢代の瓦磚などを含む。

第５層：灰色土。地表面からの深さ1.17～2.91m、厚さ０～1.19m。比較的締まりがあって硬く、少量の砂質土を含む。枘付磚、長方磚、雲文瓦当、文字瓦当、土製小球、五銖銭、大泉五十などの遺物を含み、版築層と排水渠を壊して、その上に堆積している。

第６層：版築層。地表面からの深さ0.89～2.98m、厚さ０～1.84m。混成土で、比較的締まりがある。包含物は少ない。版築層の下は排水渠である。

２　遺　　構

排水渠は、桂宮３号建築の房室Ｆ７の底面より0.8m下にあり、東西方向に桂宮３号建築を貫いている。ボーリング調査によれば、排水渠の東は漢長安城の横門大街の西側排水溝まで伸び、西は漢長安城西城壁の外濠にいたっている。発掘区内では、Ｆ７の下になる部分は枘付磚による

暗渠と開渠

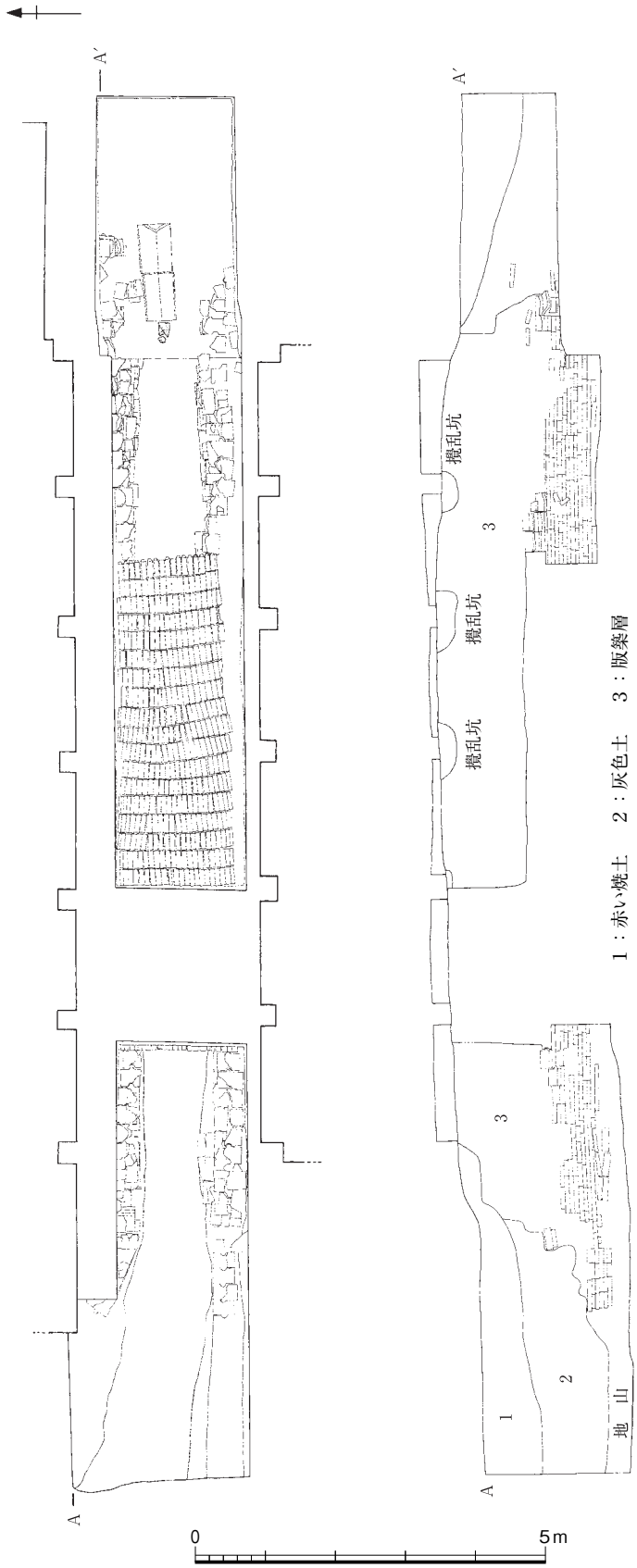
アーチ形天井をもつ暗渠となり、それ以外の部分は開渠である。発掘した全長は20.1m、幅は2.0m前後である（図版101）。

Ａ　暗　渠

排水渠の暗渠部分は、房室Ｆ７の底面下にあり、東西14.6m、南北幅1.5～1.79m、内幅0.9～1.12m、内高0.88～1.12m、全高1.28～1.5mである。東部と西部で残存状況が異なる。

暗渠西部

暗渠の西部では、南北両壁は長方磚を平積みし、天井部は枘付磚を用いてアーチを形成している。排水渠の底部は叩き締められ、かなり硬い。試掘坑西部の状況からみると、南壁と北壁の構築方法には若干の差が認められる。南壁は高さ0.54mで、底部から上に長方磚を東西方向に４段平積みする。各段は南北２列である。その上に長方磚を南北方向に１段平積みし、さらにその上には南北２列、長方磚を東西方向に１段平積みする。北壁は高さ0.56mで、底部から上に長方磚を東西方向に５段平積みする。各段は南北２列である。その上に長方磚を南北方向に１段平積みし、さらにその上に南北２列、長方磚を東西方向に１段平積みする。



第110図　３号建築下層排水渠平面図・断面図

南壁は第７段、北壁は第８段から上がアーチになる。アーチには枘付磚を使用し、枘付磚は、枘が東、枘穴が西にあって、互いに組み合う。ただし、暗渠西端の２列の枘付磚は、枘が西、枘穴が東にあり、かつ西端の１列は、北壁に接する部分に南北方向の長方磚をもう一つ詰めて、アーチを補強している。アーチの各列には、計36個の枘付磚が使われていた。

暗渠の底は流水で浸食され、本来の底面は残っていない。現在の底は地山であり、両壁最下層の磚より0.2～0.38m低くなっている。暗渠内の堆積土は二つの部分に分けられる。上部は黄褐色土で締まりがなく、比較的多くの赤い焼土を含み、厚さ約0.3m。これと天井のアーチの間には約0.1mの隙間がある。下部は自然に堆積した粘土で、暗灰色を呈し、粒子が細かく締まりがない。少量の枘付磚の破片と動物遺存体が混じり、厚さは約0.7mである。アーチの上端は房室F７の底面より0.92m低く、暗渠の底からアーチまでの全高は1.5m、内高は1.13mで、全幅は1.68～1.79m、内幅1.06～1.12mである（図版102－２）。

暗渠東部　暗渠の東部は西部と状況をやや異にする。南壁は、下から長方磚を９段平積みし、高さ0.55m。第１段は南北２列の長方磚を東西方向に平積みし、第２段から第８段の磚は南北方向と東西方向に不規則に平積みする。第９段は南北方向に長方磚を平積みする。北壁は、下から長方磚を８段平積みしており、高さ0.46m。そのうち第８段は南北方向に長方磚を平積みし、その下の７段は南北方向と東西方向に長方磚を不規則に平積みする。

南壁は第10段、北壁は第９段から上がアーチになる。アーチには枘付磚を使用し、枘が東、枘穴が西にあって、互いに組み合う。アーチの各列には、29個前後の枘付磚を積んでいる。

暗渠の底は黄土と細かい砂が混じり、緻密で、硬く叩き締められている。流水の浸食により、底は両壁の磚の底部より0.08m低くなっている。暗渠内の堆積土は二つの部分に分けられる。上部は黄褐色土で締まりがなく、赤い焼土を比較的多く含み、厚さは0.18m前後。下部は自然に堆積した粘土で、暗灰色を呈し、粒子は細かい。細かい砂を含み、締まりがなく、枘付磚の破片が少し混じる。厚さは0.75m前後である。暗渠の全高は1.28m、内高は0.88mで、全幅は1.5～1.74m、内幅0.86～0.96mである。

このほか、暗渠の東部では、房室F７から東へ0.28～1.66mの位置で、灰色の攪乱土の中から

五角形土管　２個の五角形土管を発見した。両者は東西方向に組み合い、土管頂部は房室F７の底面より1.42m低い。土管の南壁から暗渠南壁までは0.38mある。土管頂部から暗渠の底部までは0.94mあり、これは暗渠の内高（0.88m）と近い。土管の底部から暗渠の底までは0.56mで、土管は暗渠の底から0.56m上の灰色攪乱土（少量の自然堆積土を含む）上面にある。土管の西側の小口のところに平瓦片がある。平瓦には凸面に斜位の太い縄目が施され、その面を上にして敷かれている。平瓦の凸面は土管の内底面より0.04m低い。瓦片を敷いた目的は漏水防止であろう。土管内には土が充満しており、土管外の堆積土の上面は土管内底面よりやや低く、土管内の堆積土と連続している。このことから、土管と暗渠は共用されていたことがわかる。西側の土管は、全幅0.41m、内幅0.31m、全高0.43m、内高0.31m、長さ0.68m。東側の土管は、全幅0.46m、内幅0.31m、全高0.46m、内高0.32m、長さ0.70m（図版102－１）。

B　開　渠

桂宮３号建築の房室F７の西にあり、やや北西に傾斜している。開渠は暗渠の西端の枘付磚列

より西にあり、南北の両壁に磚を積む。南壁の磚積みは、東西長0.92m、南北幅0.38m、残高0.35mで、枘付磚を６段、枘を西、枘穴を東にして平積みする。下から第１～４段は４点ずつ、第５・６段は３点ずつ積む（東から２番目の磚は失われている）。北壁の磚積みは、東西長1.05m、南北幅0.36m、残高0.78mで、13段の枘付磚を、枘を西、枘穴を東にして平積みする。下から第１～３段は４点ずつ、第４～９段は５点ずつ、第11段は３点、第12段は２点、第13段は１点がそれぞれ残っている。磚積みより西の部分は地山で、磚は見られない。砂質土で黄色を呈し、やや締まっているが、人工的に手を加えた痕跡は見られない。壁の傾斜は、北壁がやや緩やかで、南壁はやや急である。

開渠の幅は1.24～1.84m、深さ0.29～0.86m。暗渠の東側については調査していないが、暗渠の西側と同様であったと推測する。

排水渠全長は 1,100 m

これらの排水渠は、ボーリング調査により、横門大街の西排水溝から長安城西城壁の外濠まで達し、全長約1,100mあることが明らかになった。排水渠の上端は地表から2.7m下にあり、上面幅は4.0m、底面幅は2.0mで、排水渠の上端から底までは0.7～1.3mである。

3　出土遺物

排水渠から出土したおもな遺物は、瓦磚と銭貨であり、このほかに少量の土製小球や円頭釘などがある。

A　磚

長方磚と枘付磚の２種類がある。

長方磚　平面は長方形で、無文である。3:排水渠:22（図版103－１）は長さ34.4㎝、幅16.0㎝、厚さ5.4㎝。

枘付磚　平面は長方形で、両長辺の中央に、一辺には枘が、一辺には枘穴がある。磚の両端の厚さは異なり、枘側はやや厚く、枘穴側はやや薄い。無文である。3:排水渠:20は、長さ35.5㎝、幅25㎝、厚さ５～７㎝、枘の長さ3.9㎝、幅5.0㎝、枘穴の幅5.0㎝、深さ5.5㎝。3:排水渠:21（図版103－２）は、長さ32.5㎝、幅21㎝、厚さ3.8～5.0㎝、枘の長さ3.9㎝、幅5.0㎝、枘穴の幅5.8㎝、深さ4.5㎝。

B　瓦　当

雲文瓦当と文字瓦当の２種類がある。

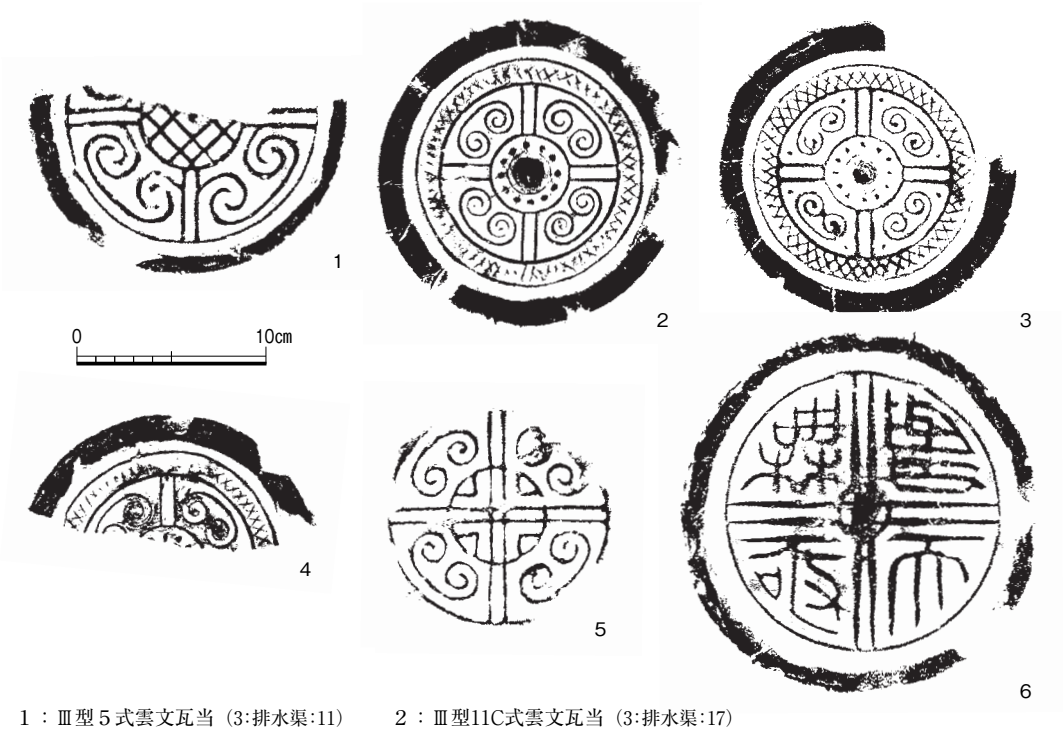
雲文瓦当　６点。Ⅲ型とⅣ型に属する。

雲文瓦当Ⅲ型

Ⅲ型は５点。界線は瓦当面を４分割し、中心文を貫通しない。文様から２式に分ける。

５式は１点（3:排水渠:11、第111図１、図版103－３）。中心文は斜格子文で、雲文の末端から反対向きに一周巻き、雲文内から外向きに「X」形を作って界線とつながる。瓦当裏面に糸切り痕はない。瓦当径17.0㎝、周縁の幅1.1㎝、瓦当の厚さ2.7㎝。

11式は４点、すべて11C式に属する。中心文は半球形文の周囲に12個の珠文をおき、その外側に圏線がめぐる。雲文の末端は２回巻き、雲文の外側に圏線と、その外側に緻密な「X」字形文



１：Ⅲ型５式雲文瓦当（3:排水渠:11）　２：Ⅲ型11C式雲文瓦当（3:排水渠:17）
３：Ⅲ型11C式雲文瓦当（3:排水渠:12）　４：Ⅲ型11C式雲文瓦当（3:排水渠:13）
５：Ⅳ型１A式雲文瓦当（3:排水渠:10）　６：「與天無極」瓦当（3:排水渠:7）

第111図　３号建築下層排水渠出土瓦当

を配する。瓦当裏面に糸切り痕はない。文様の違いにより２種類に分ける。

第１種は３点。中心文は半球形文と12個の珠文からなる。3:排水渠:17（第111図２、図版103－４）は瓦当径15.8㎝、周縁の幅1.4㎝、厚さ2.2㎝。3:排水渠:12（第111図３、図版103－５）は、雲文の両端の上隅に珠文を一つずつおく。瓦当径15.5㎝、周縁の幅1.5㎝、瓦当の厚さ2.6㎝。

第２種は１点（3:排水渠:13、第111図４）。瓦当面に朱が塗られている。珠文の数は不明確である。周縁の幅1.5㎝、瓦当の厚さ1.7㎝。

雲文瓦当Ⅳ型

Ⅳ型は１点。瓦当面の界線は中心文を貫通する。Ⅳ型１A式に属する。3:排水渠:10（第111図５、図版103－６）は周縁の内側に圏線が一周めぐる。界線は中心文を貫き、中心文の各区画内に「L」字形文を一つずつ配する。雲文の末端は２回巻く。中心文の直径は5.7㎝。

文字瓦当　２点。いずれも「與天無極」瓦当である。周縁の内側に圏線が一周めぐり、界線は中心文を貫く。各区画内に「與天無極」と配し、瓦当裏面には糸切り痕がある。3:排水渠:7（第111図６、図版103－７）は瓦当径18.8㎝、周縁の幅1.0㎝、瓦当の厚さ4.1㎝。

「與天無極」

C　土製品

五角形土管　２点。外面に縄目があり、内面は無文である。3:排水渠:19（図版103－８）は全幅41㎝、内幅31㎝、全高43㎝、内高31㎝、長さ68㎝。

土製小球　２点。球形で無文である。3:排水渠:14は直径1.8㎝。

D　鉄　器

円頭釘　　１点（3:排水渠:9)。頭部は失われ、身部は四角柱形で、残存長8.2㎝。

E　銭　貨

７点。すべて銅製で、不鮮明な１点を除き、３種類に分類できる。

五銖銭　　２点。3:排水渠:1（図版103－９）は、直径2.8㎝、方孔の一辺0.9㎝、厚さ0.2㎝。

貨　泉　　４点。大小や重さの違いにより、Ⅱ型とⅢ型に分かれる。

Ⅱ型は１点（3:排水渠:2)。銭文は鮮明で、直径2.3㎝、方孔の一辺0.7㎝、厚さ0.2㎝。

Ⅲ型は３点。直径は2.5㎝前後である。3:排水渠:4（図版103－10）は銭文が比較的鮮明で、直径2.6㎝、方孔の一辺1.0㎝、厚さ0.3㎝。

大泉五十　　１点（3:排水渠:8、図版103－11)。Ⅰ型に属する。銭文はやや細い。外縁と方孔の内郭がある。直径2.8㎝、方孔の一辺0.8㎝、厚さ0.4㎝。

4　排水渠の年代と性格

年　代　　層位からみると、排水渠は桂宮３号建築の版築土の下にあり、渠内の堆積土もまた五角形土管の下にあって、五角形土管の上面も版築土の下にある。排水渠はもともと開渠であったが、桂宮３号建築の造営時に、枘付磚のアーチ天井をもつ暗渠を房室Ｆ７の下に通した。このことから、Ｆ７下の排水渠の開渠が造営された年代は、桂宮３号建築よりも古いことがわかる。その後、排水渠内は、日増しに増える堆積土で使用が困難になったため、改修をおこない、堆積土上に五角形土管を加えることにより、水流を保つようにした。そして、桂宮３号建築の廃絶にともなって、排水渠も同時に廃棄された。以上のことから、排水渠の年代の上限は前漢前期であり、下限は新の王莽末年である。

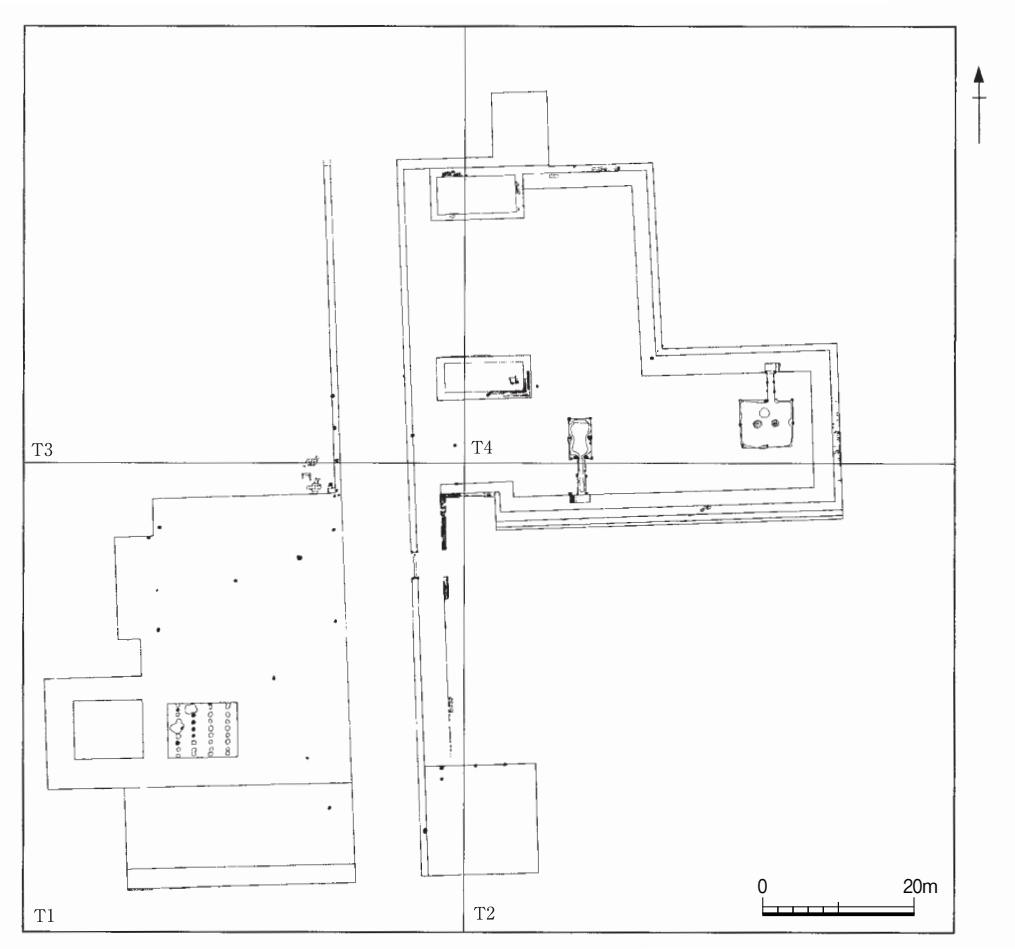
造営と廃絶の年代

性　格　　ボーリング探査により、排水渠は横門大街の西側排水溝からはじまり、桂宮を横断して、長安城の西城壁外の外濠にいたることが判明した。長安城西北部および桂宮における主要排水路としての役割を担っており、漢長安城内の重要な排水施設である。この排水渠の発掘は、漢長安城内の排水体系を研究するうえでひじょうに重要なものとなった。

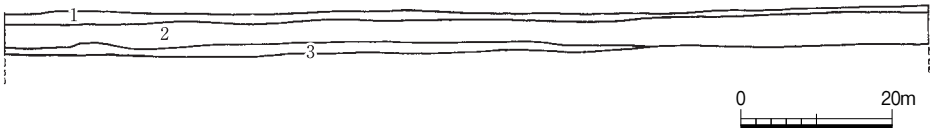
主要排水路

第Ⅳ章　桂宮４号建築の発掘調査

桂宮４号建築は、現在の西安市未央区六村堡郷六村堡村にあり、鉄鎖村の北東約25mにあたる。桂宮の西城壁からは東に340m、北城壁からは南に215mに位置する。漢代の地上部分は削平され、漢代の地表面とその下の遺構だけが残存する。発掘調査は2000年10月から2001年４月までおこなった。調査区は東西124m、南北120m、発掘面積は14,880㎡である。中央を走る道路により、東西二つの部分に分けられる（第112・114図、図版104－１、原色図版45）。



第112図　４号建築の地区割り



１：耕作土層　２：攪乱層　３：漢代遺物包含層

第113図　４号建築Ｔ１南壁土層図（部分）

第１節　遺　　構

１　土　　層

ここでの層序は、Ｔ１南壁を例にとると、次のとおりである（第113図）。

第１層：耕作土層。灰色土で締まりがなく、厚さ0.07～0.22m。

第２層：攪乱層。薄い黄色土でやや締まり、地表からの深さ0.07～0.6m、厚さ0.23～0.5m。漢代の瓦磚や現代の陶磁片などが出土する。

第３層：漢代遺物包含層。建物が倒壊した堆積層である。薄い灰黄色土で締まりがない。地表からの深さ0.38～0.65m、厚さ０～0.2m。漢代の瓦磚や鉄釘、土器片、銭貨などを含む。遺構面の多くは第３層の下にあり、建築遺構の比較的高い部分は、耕作土層のすぐ下にある。

２　通　　路

通路は４号建築の中央部を南北方向に走る。西側は西部大型建物の基壇東縁と南北方向の版築塀、東側は東部大型建物の西塀に隣接する。現存する長さ95m、幅8.9mで、路表土の厚さは0.1～0.2m。その下は版築土となり、厚さ0.6～0.8m、版築土の下は地山である。

ボーリング調査によれば、通路南部の路表土の厚さは0.2m、下部の版築土の厚さは0.8mであり、その下は地山となる。また、通路中央部の路表土の厚さは0.1～0.15m、下部の版築土の厚さは0.8mで、土質は比較的均質である。通路北部の路表土の厚さは0.2m、下部の版築土の厚さは0.6m。路面は東西両端部がやや高く、中央はやや低い。

３　西部大型建物

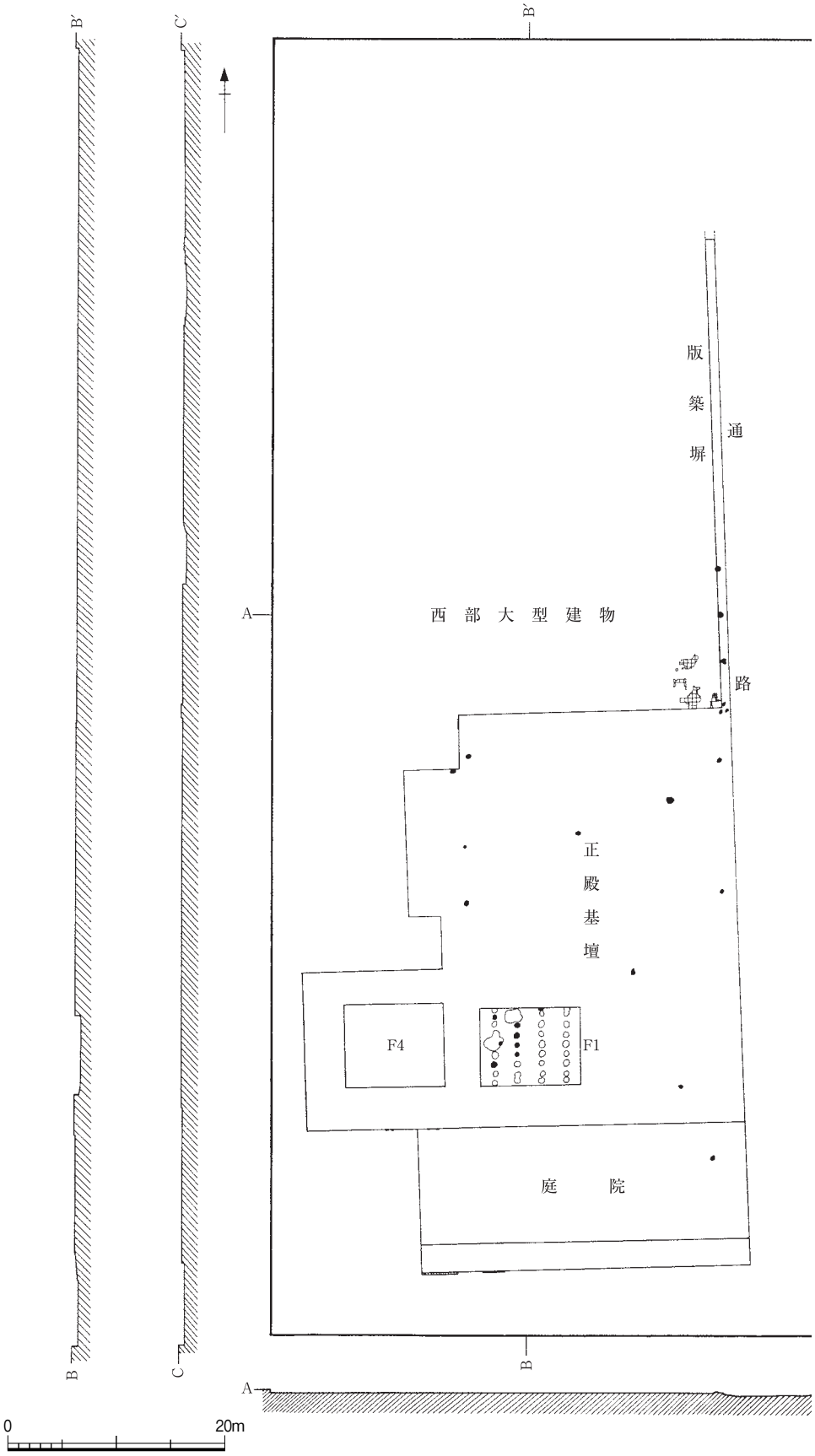
西部大型建物は南北方向の道路の西側にあり、東西40.6m、南北95.2m。建物基壇と付属建物Ｆ１・Ｆ４、建物基壇の南の庭院からなる（図版104－２）。

Ａ　建物基壇

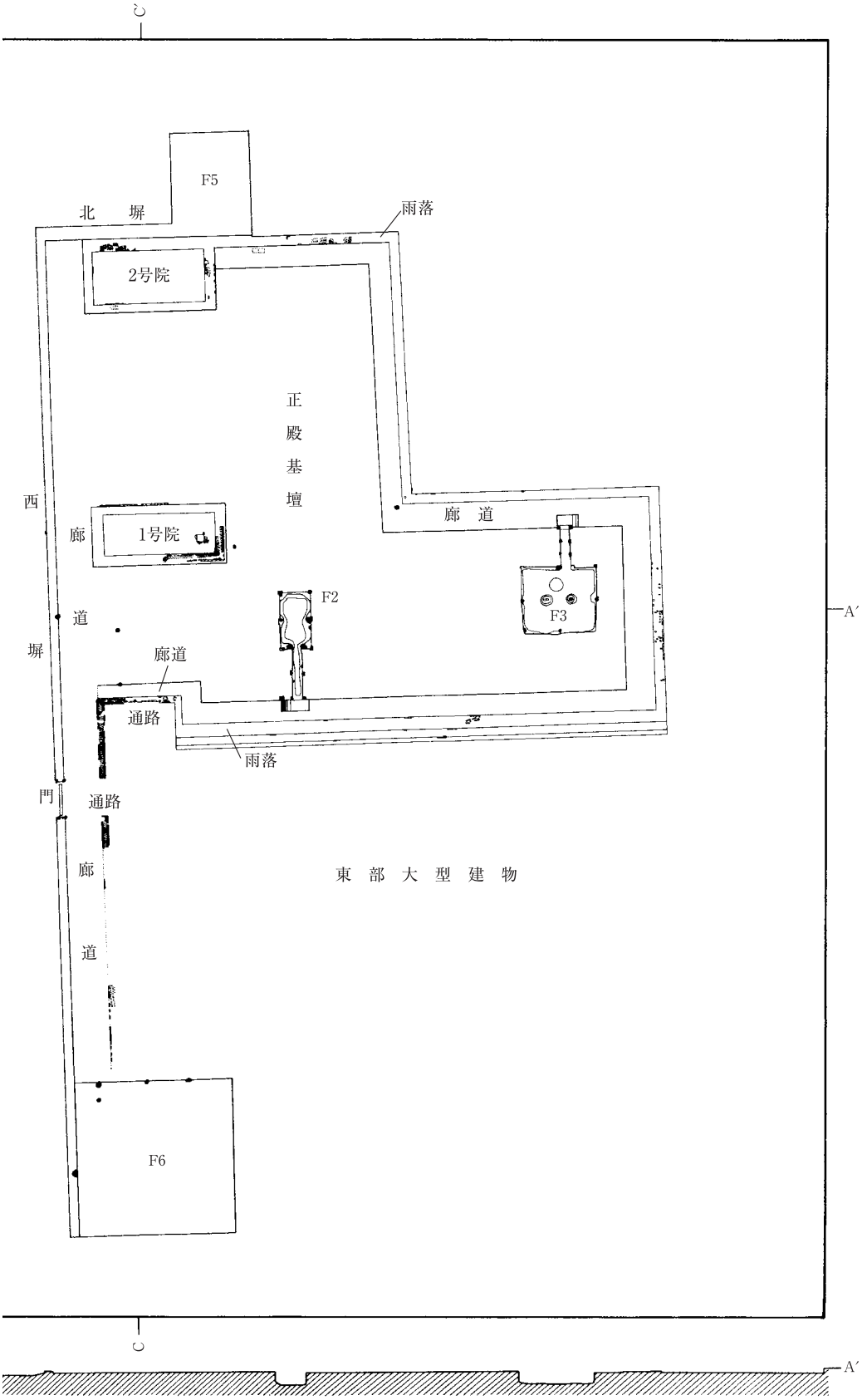
版築基壇と突出部

西部大型建物の基壇は、平面が長方形に近く、東西40.6m、南北38.2mである。その西側には、南北に二つ、西向きに突出した部分がある。南の突出部は長方形で、南北幅14.75m、東西長は北辺が南辺より長く、11.9m、南辺は10.2mである。ボーリング調査によれば、南突出部の北部の版築土は厚さ1.2m、東部の版築土は厚さ1.05m、西部の版築土は厚さ0.95m。南部の版築土は厚さ1.2mで、版築土の下はいずれも地山となる。北の突出部も長方形で、南北幅13.58m、東西長はやはり北辺が南辺より長く、それぞれ5.2mと2.86mである。ボーリング調査によると、版築土の厚さは1.1mである。

建物基壇の西壁と南壁の版築土の外側には平瓦片を貼りつけており、平瓦片はすべて凸面を



第114図　４号建築平面図・断面図


C
F5
北　塀
雨落
2号院
正
殿
基
壇
西
廊
1号院
廊　道
F2
F3
A′
道
塀
廊道
通路
雨落
門
通路
廊
東　部　大　型　建　物
道
F6
C
A′

基壇の外側に向けている。基壇の西壁では、北端部に南北1.25mにわたり残存する（図版105－１）。平瓦片は長さ３～11㎝、厚さ0.6～1.7㎝。基壇の南壁の西部には、庭院西端との接続部から西へ1.9mの位置に残っている。東西長0.48m、平瓦片は長さ7.5～18㎝、厚さ１～1.3㎝（図版105－２）。南壁の東部には、庭院西端から東へ1.3mと2.12mの位置に残存する。平瓦片は長さ４～8.5㎝、厚さ0.8～1.1㎝。

建物基壇の北壁の外側には、基壇北壁の東端から西へ2.43mの位置に、見切りの磚がある。東西長0.71mで、見切り磚は２点が残存する。いずれも幾何学文磚である。東の磚は長さ36㎝、幅18㎝、厚さ4.5㎝。西の磚は長さ35㎝、幅20㎝、厚さ4.5㎝。

版築塀　建物基壇の東壁の北端には、南北方向の版築塀が取りつく。版築塀は、現存する長さ43.5m、幅1.0m、高さ0.01mである。

基壇上礎石　このほか、建物基壇上には柱礎石の一部が露出しており、17個が現存する。

ボーリング調査によれば、基壇北部の版築土の厚さは1.1～1.15m、基壇南部の版築土の厚さは0.95mで、ともにその下は地山となる。

B　付属建物

西部大型建物の基壇の南部には、基壇内に二つの付属建築がある。

付属建物Ｆ１　基壇の西南部にある。その西南隅は西部建物庭院の西南角から東へ6.0m、北へ17.26mに位置する。Ｆ１の西壁はＦ４の東3.37mにある。

半地下室　Ｆ１は半地下室であり、床面より下の部分だけが現存している。平面は長方形で、東西長9.28m、南北幅7.2m、深さ0.48mである（第115図、原色図版46－１、図版105－５）。

Ｆ１の四方の壁はすべて版築土で、その外側には、長手を外に向けた日干煉瓦を平積みする。その外側はスサ入り粘土で平らにされ、表面には漆喰が塗られている。日干煉瓦は一般に長さ44～48㎝、幅24～26㎝、厚さ13㎝である。スサ入り粘土の壁土は厚さが均等ではない。最も内側の層は粗いスサ混じりで、厚さ約13㎝。中間の層は比較的きめが細かいスサ混じりで、表面は滑らかである。厚さは0.6～0.7㎝。最も外側は漆喰層で、厚さ0.05㎝。壁土の外面には部分的に２層以上の漆喰面もあり、壁が何度も塗られたことを示している。

Ｆ１の北壁は長さ9.25m、現存する高さ0.48mで、版築土のみが残存する。南壁は長さ9.28m、現存高0.48mで、壁の中央と西側に積まれた日干煉瓦が残り、スサ入り粘土の壁土も遺存している。東壁は長さ7.14m、現存する高さ0.37m。西壁は長さ7.2m、現存する高さ0.48mで、壁の中央には積まれた日干煉瓦が残る。

Ｆ１の底面は叩き締めて平坦に整えられ、表面に厚さ約１㎝の細かい粘土が塗られている。火災で赤色や濃い灰色を呈し、硬い。東側が西側に比べてやや高く、高低差は約0.1mである。ボーリング調査によると、Ｆ１の下の版築土は厚さ0.4m前後で、その下は地山となる。

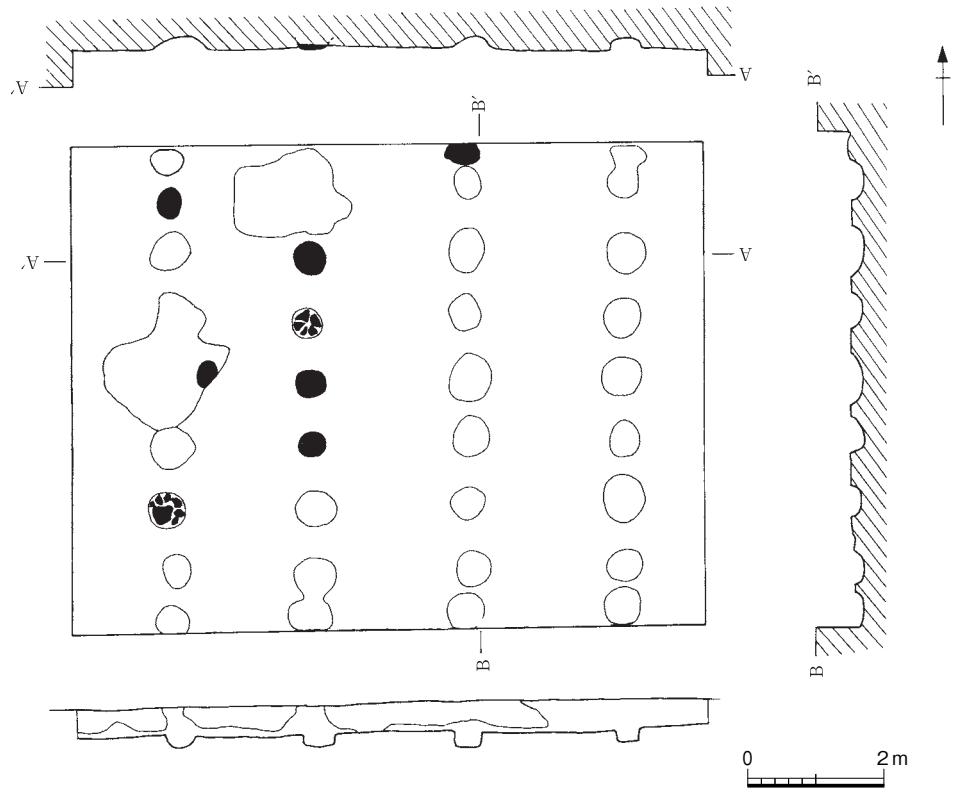
36基の柱穴　地下室の底面には、東西４列、南北９列、計36基の柱穴が並ぶ。柱列の南北間距離（柱心々間、以下同じ）は0.75m、東西間距離は2.3mである。東端の柱列から東壁までの距離は1.15～1.2m、西端の柱列から西壁までの距離は1.35～1.45m。南端の柱列と北端の柱列は、それぞれ南壁と北壁に近接する。柱穴底部に残存する礎石はいずれも花崗岩製である。

東端の柱列　東端の柱列を南から順に１～９号柱とした。底部の礎石はすべて失われており、柱穴は平面が

円形か楕円形を呈する。深さ0.12～0.24m、相互の間隔は0.65～1.0mである。１号柱の柱穴は、南壁が地下室南壁に接し、地下室東壁からの距離は1.2mである。楕円形で、東西0.53m、南北0.5m、深さ0.21m。２号柱の柱穴は１号柱の北0.65mにあり、地下室東壁からの距離は1.15mである。楕円形で、東西0.54m、南北0.47m、深さ0.19m。３号柱の柱穴は、２号柱の北0.95mにあり、地下室東壁からの距離は1.2mである。楕円形で、東西0.61m、南北0.71m、深さ0.24m。４号柱の柱穴は、３号柱の北0.86mにあり、地下室東壁からの距離は1.17mである。楕円形で、東西0.44m、南北0.54m、深さ0.13m。５号柱の柱穴は、４号柱の北0.9mにあり、地下室東壁からの距離は1.2mである。円形に近く、東西0.57m、南北0.55m、深さ0.21m。６号柱の柱穴は、５号柱の北0.85mにあり、地下室東壁からの距離は1.2mである。楕円形で、東西0.53m、南北0.59m、深さ0.18m。７号柱の柱穴は、６号柱の北0.95mにあり、地下室東壁からの距離は1.15mである。楕円形で、東西0.56m、南北0.59m、深さ0.2m。８号柱の柱穴は、７号柱の北1.0mにあり、地下室東壁からの距離は1.17mである。円形に近く、直径0.45m、深さ0.14m。９号柱の柱穴は、８号柱の柱穴上部と南北につながっている。二つの柱穴の心々間距離は0.4mで、地下室東壁からの距離は1.15mである。楕円形で、東西0.52m、南北0.32m、深さ0.12m。

２列目柱列

東から２列目の柱列は、東端の列から西へ2.3～2.45mの位置にあり、南から順に10～18号柱とした。柱穴は平面が円形か楕円形で、深さ0.14～0.2m。18号柱の底部に礎石が残存するのを除き、礎石は残っていない。相互の間隔は0.45～1.0m。10号柱の柱穴は、南壁が地下室の南壁に接する。円形に近く、直径0.5m、深さ0.2m。11号柱の柱穴は、10号柱の北0.65mにある。円形に近く、東西0.55m、南北0.55m、深さ0.15m。12号柱の柱穴は、11号柱の北1.0mにある。楕円



第115図　４号建築Ｆ１平面図・断面図・南壁土層図

形で、東西0.51m、南北0.47m、深さ0.14m。13号柱の柱穴は、12号柱の北1.0mにある。楕円形で、東西0.55m、南北0.62m、深さ0.16m。14号柱の柱穴は、13号柱の北0.87mにある。楕円形で、東西0.62m、南北0.71m、深さ0.18m。15号柱の柱穴は、14号柱の北1.0mにある。楕円形で、東西0.47m、南北0.49m、深さ0.19m。16号柱の柱穴は、15号柱の北0.9mにある。楕円形で、東西0.61m、南北0.66m、深さ0.21m。17号柱の柱穴は、16号柱の北1.0mにある。楕円形で、東西0.38m、南北0.53m、深さ0.16m。18号柱の柱穴は、17号柱の北0.45mにあり、北壁が地下室北壁に接する。楕円形で、礎石が残存し、礎石上面の高さは周囲の地面より0.05m高い。礎石は東西54㎝、南北34㎝、厚さ14㎝である。

３列目柱列

東から３列目の柱は、２列目から西へ2.3mの位置にあり、南から順に19～27号柱とした。柱穴は多くが楕円形で、深さ0.14～0.2m。礎石が残存するものもある。相互の間隔は0.5～1.05m。19号柱の柱穴は、南壁が地下室の南壁に接している。楕円形で、東西0.65m、南北0.46m、深さ0.14m。礎石は残っていない。20号柱の柱穴は、19号柱の北0.5mにあり、19号柱の柱穴と上部が南北につながっている。楕円形で、東西0.63m、南北0.67m、深さ0.14m。礎石は残っていない。21号柱の柱穴は、20号柱の北1.05mにある。楕円形で、東西0.66m、南北0.63m、深さ0.2m。礎石は残っていない。22号柱の柱穴は、21号柱の北0.96mにある。礎石が残存し、その上面は周囲の地面より0.04m高い。礎石は楕円形で、東西40㎝、南北39㎝、厚さ11㎝。23号柱の柱穴は、22号柱の北0.87mにある。礎石が残存し、その上面は周囲の地面より0.06m高い。礎石は不整形で、東西48㎝、南北50㎝、厚さ16㎝。24号柱の柱穴は、23号柱の北0.9mにある。円形で、直径0.44m、深さ0.17m。柱穴底部に礎石の断片が残っている。25号柱の柱穴は、24号柱の北0.95mにある。礎石が残存し、その上面は周囲の地面より0.07m高い。礎石は楕円形で、東西52㎝、南北44㎝、厚さ16㎝。26号柱と27号柱の柱穴は、攪乱をうけて破壊され、残っていない。

４列目柱列

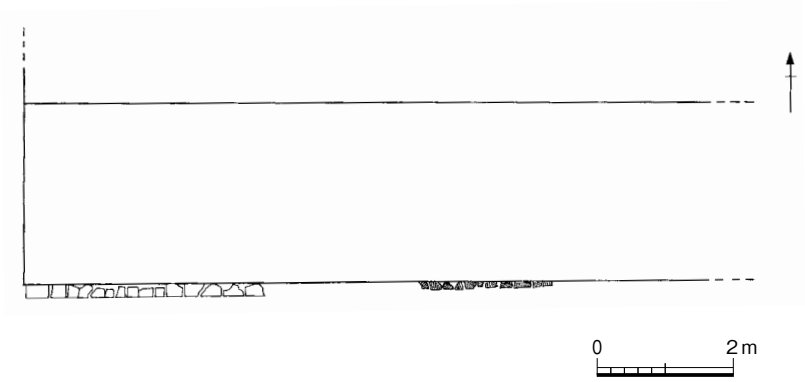
東から４列目の柱穴は、３列目から西へ2.05～2.15m、地下室西壁から1.4～1.45mの位置にあり、南から順に28～36号柱とした。柱穴は円形か楕円形で、深さ0.09～0.14m。礎石が残るものもある。相互の間隔は0.65～2.9mである。28号柱の柱穴は、南壁が地下室の南壁に接している。楕円形で、東西0.48m、南北0.41m、深さ0.14m。礎石は残っていない。29号柱の柱穴は、28号柱の北0.75mにある。楕円形で、東西0.4m、南北0.5m、深さ0.13m。礎石は残っていない。30号柱の柱穴は、29号柱の北0.9mにある。ほぼ円形で、直径0.51m、深さ0.14m。柱穴底部に礎石の断片が残っている。31号柱の柱穴は、30号柱の北0.95mにある。ほぼ円形で、直径0.62m、深さ0.17m。礎石は残っていない。32号柱と33号柱の柱穴は、攪乱をうけて破壊され、残っていない。南から５番目の32号柱に相当する位置の東側に、原位置を保っていない礎石が一つある。東西38㎝、南北39㎝、深さ17㎝。34号柱の柱穴は、31号柱の北2.9mにある。楕円形で、東西0.58m、南北0.56m、深さ0.09m。礎石は残っていない。35号柱の柱穴は、34号柱の北0.7mにある。礎石が残存し、その上面は周囲の地面より0.05m高い。礎石は不整形で、東西45㎝、南北40㎝、厚さ12㎝。36号柱の柱穴は、35号柱の北0.65mにあり、その北壁は地下室の北壁から0.04mの位置にある。楕円形で、東西0.5m、南北0.4m、深さ0.11m。礎石は残っていない。

Ｆ１の内部は火災後の堆積で埋まっていた。多量の赤い焼土や日干煉瓦片、壁土の断片などであり、日干煉瓦や壁の断片はすべて火を受けて赤色の磚状となっている。Ｆ１地下室の底面上の

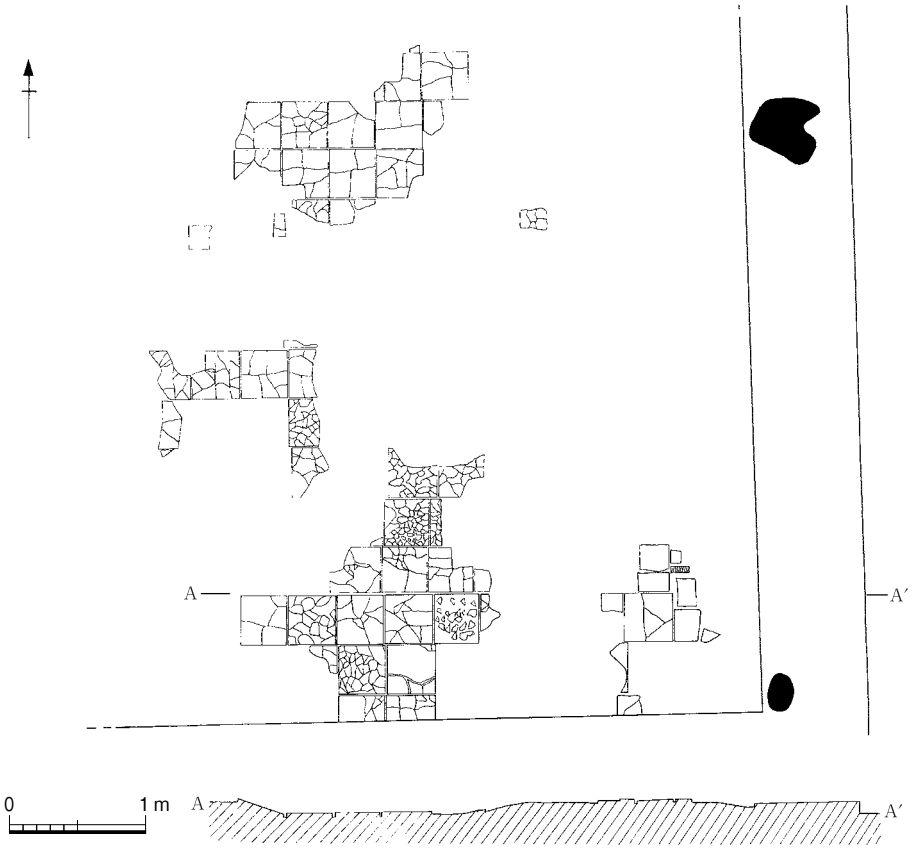
束柱の礎石

礎石は、床板あるいは床面上の建物を支える束柱の礎石であろう。

付属建物Ｆ４　　Ｆ１の西3.37ｍにある。その西南隅は、建物基壇西側から西向きに突出した部分の西端から東へ3.75ｍ、南端から北へ3.85ｍの位置にある。平面は長方形で、東西9.2ｍ、南北7.7ｍである。当時の床面の痕跡は失われている。東壁・北壁・西壁・南壁の現存する高さは、それぞれ0.15ｍ、0.12ｍ、0.1ｍ、0.09ｍである。ボーリング調査によれば、Ｆ１の下の版築土の厚さは0.85ｍで、その下は地山となる。



第116図　４号建築西部大型建物庭院敷磚・敷瓦平面図



第117図　４号建築西部大型建物北側敷磚平面図・断面図

C　庭　院

庭院は、西部大型建物の基壇の南側にある。庭院の北部は長方形で、東西長30.4m、南北幅11.0m。庭院の南部は斜道で、東西長30.4m、南北幅2.65m。北から南に５度の勾配をもつ。斜道の南側には、東西方向の見切りの磚と、その代わりに敷かれた瓦片がある。見切りの磚は15点が残存し、磚は長さ13.5～34㎝、幅11.5～25㎝、厚さ４㎝。磚の東2.0mには、磚の代わりに東西1.98mにわたって瓦片を敷いた遺構がある。瓦はすべて平瓦であり、凸面の縄目を上に向けている。瓦片は長さ９～25㎝、厚さ１～1.2㎝（第116図、図版105－３）。

D　基壇北側の遺構

磚　敷　建物基壇の北側には磚敷があり、基壇の北壁東端から南北に伸びる版築塀の西側にある。すべて幾何学文磚で、文様面を下に向けて敷く。磚敷の範囲は東西4.12m、南北4.95mで、磚は南北13列、東西12列ある。磚は一辺36㎝、厚さ4.5㎝（第117図、図版105－４）。

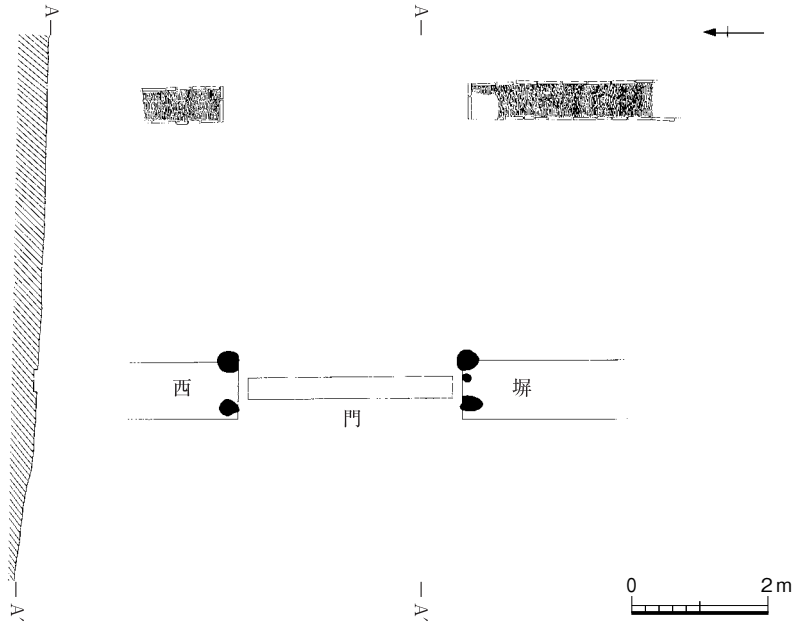
4　東部大型建物

東部大型建物は、南北方向の通路の東側にあり、屈折の多い複雑な平面をもつ。その範囲は南北103.6m、東西57.9mで、建物基壇、付属建物、二つの中庭と西塀、北塀で構成される。

A　西　塀

版築塀　東部大型建物の西塀は、長さ94.9m、幅0.83m、現存高0.05～0.1m。版築で築かれている。塀の西側には、幅1.0mの犬走りがあり、東より西に８度の勾配をもつ（図版106－１）。

門　塀の南部には、塀の南端から37.6m北の位置に門が開く。門道は幅3.2m、奥行0.8m。門道の



第118図　４号建築西部大型建物西塀・門平面図・断面図

南北両壁には、南北対称に２対の壁柱がある。柱穴は遺存しないが、礎石が残存する（別表４－２参照）。南壁の二つの礎石の間には小型の石が一つある。門道の中央には南北方向の敷居の痕跡が溝状に残り、溝は長さ3.0m、幅0.31m、深さ0.05mである。この溝の両端は、門道の南北両壁からそれぞれ0.14mの距離に位置する（第118図、図版106－３）。　壁　　柱

西塀の南端から北へ5.95m、東縁から0.1m西には、壁柱の礎石が一つ残存し、18号壁柱とした。礎石は楕円形の花崗岩製で、東西49㎝、南北58㎝、厚さ14㎝。礎石上面にはほぼ円形の柱当たりがある。直径0.21m（図版106－２）。

ボーリング調査によれば、版築塀の版築基礎の厚さは、南部で1.1m、中央部で1.2m、北部は1.85mで、その下は地山となる。

B　北　塀

東部大型建物の北塀は版築で築かれており、長さ12.1m、幅1.22m、現存高0.05～0.1m。ボーリング調査によれば、版築基礎の厚さは1.65mであり、その下は地山となる。　版　築　塀

C　建物基壇

東部大型建物の基壇はL字形を呈し、東西50.1m、南北40.8mである。ボーリング調査によれば、基壇の東部・中央部・西部・西北部の版築土の厚さはそれぞれ1.6m、1.2～1.3m、1.0m、2.15mであり、その下はいずれも地山となる。　L字形平面の版築基壇

建物基壇の四方には、廊道と雨落がめぐる。

基壇西面の廊道と雨落　建物基壇西面の廊道は、長さ79.5m、幅3.4mで、その北端は東部大型建物の北塀と接する。廊道の西は東部大型建物の西塀、廊道の南は付属建物F６である。

廊道の南部は、東側に南北方向の雨落がある。雨落の長さは本来36mだが、現存する長さは34.3m、幅0.53～0.66mである。雨落の東縁と西縁にはいずれも見切りの磚が残存する。雨落の西縁の見切りの磚は45点残存し、磚は長さ10～36㎝、厚さ３～4.2㎝。雨落の東縁の見切りの磚は26点残存し、磚は長さ20～36㎝、厚さ４～4.2㎝。雨落内には東西方向に平瓦片を立てて埋め込んでおり、凸面の縄目は多くが北を向く。平瓦片は長さ３～23㎝、厚さ0.6～1.5㎝。雨落内の瓦は、平瓦片のほかに磚片や瓦当片も少量混じっている。

雨落の北部には通路がある。通路は幅3.61m、奥行0.53～0.66mで、通路の北縁と南縁にはいずれも見切りの磚が残る。この通路は、西塀南部の門道と東西に対応する位置にある。

基壇南面の廊道と雨落　建物基壇の南側には、東西方向の廊道がある。廊道は西端近くで折れて北へ4.0m伸び、さらに西に折れる。屈折部から西の東西方向の廊道の長さは9.8m、屈折部から東の東西方向の廊道の長さは44.7m、建物基壇南面の廊道の全長（上記の三つの部分の合計）は58.5mである。廊道の幅は、北へ折れる部分が1.8m、その東は2.0m、西は1.2mである。東西方向の廊道の西端は、建物基壇の西側にある南北方向の廊道と接している。

ボーリング調査によれば、建物基壇南面の廊道の版築基礎の厚さは1.5mであり、その下は地山となる。

廊道の南側には、東西方向の雨落がある。雨落は西端近くで北へ折れるが、その部分の南北長は4.0m、幅は0.58mである。屈折部から東は、東西方向の河原石の雨落で、長さ46.15m、幅

1.15m。屈折部から西は東西方向の瓦組の雨落で、長さ8.0m、幅0.54～0.58mである。建物基壇南面の廊道外側の雨落の全長は58.15mとなる。

屈折部から東の雨落は、南縁に見切りの磚が７点残存する。磚は長さ28～36㎝、幅4.5～５㎝。雨落の北縁には見切りの磚が４点残り、長さ14～34㎝、幅５㎝。雨落内には少量の河原石が残存し、河原石は一般に長さ６～14㎝、幅４～９㎝、厚さ3.5㎝である。

河原石の雨落の南側には、２列の東西方向の磚敷があったが、痕跡をとどめるのみである。磚敷の南縁には見切りの磚が７点残存する。長さ９～35㎝、幅４～4.5㎝。磚敷の南側にはもう１列の磚敷があったが、わずかにその痕跡を残すにすぎない。磚敷は北から南に５度の勾配をもつ。斜面の長さは0.36mである。

北へ折れる部分の雨落の西縁には見切りの磚が１点残存し、長さ13㎝、幅３㎝である。ここの雨落は瓦組と推測される。雨落の幅は、次に述べる西側の瓦組雨落の幅と同じである。

屈折部から西の瓦組雨落の中央部には、通路がある。通路は雨落の西端から東に2.64mにあり、幅3.35m、奥行0.54～0.58m。通路の西縁には、南北方向に見切りの磚が２点残り、南側の磚は長さ9.5㎝、厚さ幅4.5㎝。北側の磚は長さ15㎝、厚さ４～4.5㎝。通路の東縁には見切りの磚が残っていない。通路には、敷磚の断片１点（長さ15.4㎝、幅13㎝、厚さ４㎝）と磚敷の痕跡が少し残る。通路の南縁には東西方向の見切りの磚９点が残存し、磚は長さ８～36㎝、厚さ４～4.5㎝である（図版106－４）。

通路の東の東西方向の雨落は、長さ1.92m、幅0.58m。雨落の南縁には見切りの磚が２点残存し、東側の磚は長さ16㎝、厚さ4.3㎝、西側の磚は長さ11㎝、厚さ4.7㎝。雨落の北縁にも見切りの磚が２点残存し、東側の磚は長さ８㎝、厚さ４㎝、西側の磚は長さ17㎝、厚さ4.7㎝である。雨落内には南北方向に平瓦片を立てて埋め込み、凸面を東に向ける。瓦片は長さ２～17㎝、厚さ１～1.2㎝である。

通路の西の東西方向の雨落は、長さ2.64m、幅0.54m。南縁には見切りの磚が６点残存し、磚は長さ19.5～34㎝、厚さ４㎝である。雨落の北縁に見切りの磚が７点残存し、磚は長さ35～36㎝、厚さ４～4.5㎝。雨落内には南北方向に平瓦片を立てて埋め込む。平瓦の凸面は東向き、西向きの両者がある。平瓦片は長さ２～19.5㎝、厚さ0.8～1.7㎝。雨落の東縁には見切りの磚が１点残存し、磚は長さ25㎝、厚さ4.5㎝。雨落西端の南に折れる部分の平瓦片は、すべて凸面を内側の角（南東）に向けている。

基壇東面の廊道と雨落　建物基壇東面の廊道は、長さ20.08m、幅2.64m。その外側には河原石の雨落があり、長さ22.０m、幅0.9mである。雨落の東縁には見切りの磚が13点残存し、磚は長さ17～36㎝、幅４～4.5㎝。雨落内には、南北方向に立てて埋め込まれた河原石が少し残っている。楕円形で、長さ７～15㎝、厚さ５～10㎝。

基壇北面の廊道と雨落　建物基壇北面の廊道と雨落は平面がL字形を呈し、東部の東西廊道は長さ25.1m、幅2.65m。その北側の雨落は長さ24.14m、幅0.9mで、雨落の内外には少量の河原石が散乱している。雨落の北縁には見切りの磚が５点残存し、磚は長さ５～27㎝、厚さ４～4.5㎝。廊道と雨落の西端はともに北へ折れる。

この屈折部から北の中央の南北方向の廊道は、長さ27.19m、幅2.0m。その東側の河原石雨落は長さ25.5m、幅0.9mで、雨落の外側には河原石が散乱している。雨落東縁の南端には見切り

の磚が１点残存し、長さ15㎝、厚さ４㎝である。この磚の東側には敷磚片が１点残存する。西高東低で南北８㎝、東西９㎝。廊道と雨落の北端はともに西へ屈折する。

この屈折部から西の東西方向の廊道は、長さ16.5m、幅2.0m。その北側の雨落は長さ17.47mである。雨落の西部は、西端から東へ長さ3.7mの範囲で、幅1.2m。雨落の東部は長さ13.7m、幅0.83mである。雨落には平瓦片が立てて埋め込まれ、多くは凸面を東に向けるが、西を向くものもある。平瓦片は長さ2.5～15㎝、厚さ0.6～1.5㎝。雨落の南縁には見切りの磚が５点残存し、磚は長さ23～37㎝、厚さ４～4.5㎝である。雨落の東縁には見切りの磚が１点残存し、長さ36㎝、厚さ４㎝。

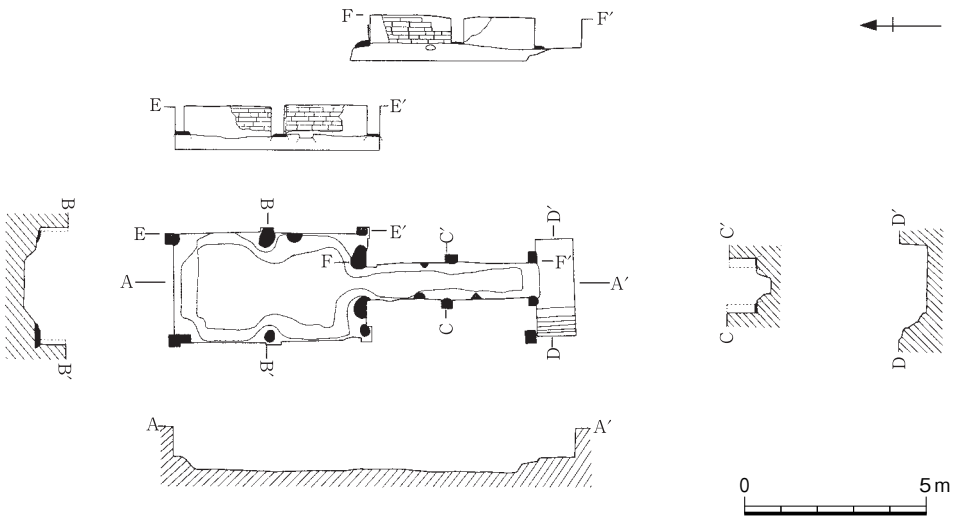
上述した雨落の東端より西へ10.5mの位置に、雨落の北縁から南に出ている南北方向の見切りの磚が１点ある。磚は長さ17㎝、厚さ４㎝である。この磚の西側には瓦片がなく、通路にあたると思われる。通路の東西幅は不明瞭だが、南北方向の奥行は0.83mである。

建物基壇上には、12個の柱礎石が残存している。詳細については別表を参照されたい。

D　基壇上の付属建物

付属建物F２　東部大型建物の中央にある地下室で、その門道の西南隅は、建物基壇南面の廊道の南縁から北へ0.8m、建物基壇の西縁から東へ7.4m、１号院中庭の南縁から南へ18.2mの位置にある。建物は南向きで、門道、通路、主室によって構成される。南北長は11.1m、東西最大幅は主室の北壁部分で、3.2mである（第119図、原色図版46－２、図版107）。　地下室

門道は平面が長方形で、東西長2.64m、南北幅1.06m。四方の壁の現存高0.76m。門道の西部は階段状をなし、上面は南北1.06m、東西0.76mである。計３段の版築による段があり、各段の東西幅は0.2m、第一段（最上段）は、踏面が現存する建物基壇面より0.1m低く、南北長1.06m、高さ（蹴上）0.2mである。第二段と第三段はわずかに痕跡だけが認められる。門道上面の西縁から第三段の底部までは、西から東に45度の勾配がある。階段上には木灰が残留しており、本来はここに木製の階段があったと推定される。門道の東部は平坦道で、東西1.87～1.94m、南北1.06　門道　木製の階段



第119図　４号建築F２平面図・断面図

ｍである。底面は平坦で、細かい粘土が１㎝の厚さで塗られている。発掘時には、表面に灰色を呈する木灰が１層残っていた。厚さは５㎝である（図版108－１・２）。

門道の南壁と東壁は遺存状態がやや悪い。北壁は、東部は比較的よく残っているが、西部は残りが悪い。東部では、壁面上に日干煉瓦が４段残り、各段の厚さは約12㎝で、東端にはスサ入り粘土の壁土が一部遺存している。

通　　路　通路は、南が門道に接し、北は主室に接続する。長さ4.74ｍ、幅1.0ｍ、東西両壁の現存高は0.77ｍ。通路と門道の接続部に東西方向の段差がある。段の東西長は通路の東西幅と同じで、段の南北幅は0.48ｍ、高さは0.25ｍ。これは門道から通路に至る階段である。

通路の底面　通路の底面は比較的平坦に整えられ、表面には細かい粘土が１層塗られる。粘土の厚さは１㎝である。通路の東西両壁の内側には台状遺構があり、その外側は傾斜して通路面に至る。台状遺構は幅0.05～0.34ｍで、東西両壁の礎石をうける部分はやや幅が広い。台状遺構の最大高は0.37ｍである。通路の底面には黒色の木灰が１層ある。厚さは５㎝である。木灰は通路東西の台の斜面上にまで伸びているが、台の上面にはいたっていない。この木灰は、通路内に敷かれた床板の痕跡と考えられる。

通路の隅柱　通路の東西両壁には壁柱があり、南辺には東西二つの隅柱がある。通路の礎石はいずれも花崗岩製である。東の隅柱を１号隅柱とした。柱穴は長さ0.2ｍ、幅0.19ｍ、現存する深さ0.77ｍ。柱穴の北壁と東壁には日干煉瓦が積まれている。北壁の日干煉瓦はやや遺存状態が悪いが、東壁の日干煉瓦の各段の厚さは0.13ｍである。柱穴の底部には礎石が残り、その上面は周囲の地面より0.07ｍ高い。礎石は東西34㎝、南北24㎝、厚さ９㎝。西の隅柱を２号隅柱とした。柱穴は長さ0.2ｍ、幅0.19ｍ、現存する深さは0.75ｍ。北壁と西壁には日干煉瓦が積まれるが、西壁のものは上部に２段が残るにすぎない。柱穴の北壁は計６段の日干煉瓦が積まれ、各段の厚さは0.13ｍである。柱穴底部には礎石が残り、その上面は周囲の地面より0.07ｍ高い。礎石は平面が楕円形で、東西29㎝、南北32㎝、厚さ11㎝。

通路の東壁　通路の東壁は、長さ4.74ｍ、現存高0.77ｍ。版築土の外側には日干煉瓦が積まれ、東壁中央部の日干煉瓦は遺存状態が比較的よい。日干煉瓦は長さ48㎝、幅26㎝、厚さ13㎝（図版108－３）。６段が現存する。東壁の北端と南側の日干煉瓦の外側には壁土が残る。壁土の内側の層は粗いスサ入り粘土で、厚さ６㎝。外側の層は比較的細かいスサ入り粘土で、厚さ1.5㎝。その外側の漆喰層は剥落している（図版109－１）。通路東壁の中間には壁柱が１基あり、３号壁柱とした。柱穴は長さ0.33ｍ、幅0.23ｍ、現存する深さ0.65ｍ。柱穴の北・東・南の三方の壁には日干煉瓦が積まれ、日干煉瓦の各段の厚さは12～13㎝である。柱穴底部には礎石が残り、その上面は台状遺構の上面と同じ高さである。礎石は平面が不整形で、東西22㎝、南北34㎝、厚さ５㎝。壁柱の北0.75ｍの台状遺構の上面に礎石が一つあり、４号礎石とした。礎石の上面は台状遺構の上面と同じ高さである。礎石は平面が楕円形で、東西29㎝、南北33㎝、厚さ11㎝。

通路の西壁　通路の西壁は、長さ4.71ｍ、現存高0.76ｍである。版築土の外側には日干煉瓦が積まれ、６段が現存する。日干煉瓦は長さ48㎝、幅26㎝、厚さ13㎝。日干煉瓦の外側の壁土が部分的に残っていたが、漆喰面は剥落している。通路西壁の中間には壁柱が１基あり、５号壁柱とした。東壁の３号壁柱と東西対称の位置にある。柱穴は長さ0.31ｍ、幅0.23ｍ、現存する深さ0.82ｍ。柱穴の北壁は大きく破壊されているが、西壁・南壁には日干煉瓦が積まれ、日干煉瓦の厚さは13㎝であ

る。柱穴の底部には礎石が残っており、その上面は段より0.05m高い。礎石は平面が楕円形で、東西29㎝、南北33㎝、厚さ11㎝。壁柱の南0.85mの台状遺構上に礎石があり、６号礎石とした。礎石の上面は周囲の地面より0.01m高い。不整形で、東西30㎝、南北29㎝、厚さ10㎝。壁柱の北0.8mの台状遺構上にも礎石があり、７号礎石とした。礎石の上面は段と同じ高さである。平面は円形で、直径32㎝、厚さ12㎝（図版108－４）。

主　　室

主室は、南が通路と接し、平面は長方形で、幅3.2m、奥行5.3m。四方の壁の現存高は0.7～0.9mである。主室の四隅には隅柱があり、東西の壁には対称位置に壁柱が１対ある。主室の礎石もすべて花崗岩製である。

主室の底面

主室の底面は比較的平坦に整えられ、表面には細かい粘土が１層塗られている。厚さは１㎝である。ボーリング調査によれば、主室の底面下の版築土の厚さは0.15mで、その下は地山となる。主室の四方には台状遺構がある。台状遺構は、幅0.2m、高さ0.26～0.43m。その外縁は室内の底面に向かって傾斜し、幅は0.35～0.85mである。北壁の台状遺構は、幅0.62～0.85m、段の幅0.18～0.22m、斜面の長さ0.05～0.5m。東北隅柱の外側の台状遺構は、幅0.62m（そのうち段の幅が0.57m、斜面の長さ0.05m）。西北隅柱の外側の台状遺構は、幅0.85m（段の幅0.6m、斜面の長さ0.25m）。東壁の外側の台状遺構は、幅0.29～0.81mである（段はやや狭く、幅0.05mで、東壁壁柱の西側の段はやや幅広く、0.5m。斜面の長さ0.05～0.76m）。西壁外側の台状遺構は、幅0.34～0.75m（そのうち段の幅0.05～0.47m、斜面の長さ0.2～0.54m）で、西壁壁柱の東側の段幅は0.5mである。壁柱の北側の段幅は0.05m、斜面の長さ0.34m。壁柱の南側の台状遺構は、段幅0.48m、斜面の長さ0.32mである。南壁の台状遺構は、幅0.75～0.85m（段幅は0.4～0.51m、斜面の長さ0.2～0.5m）である。

主室の台状遺構の外縁の底面には黒色の木灰が１層あり、厚さは約５㎝である。この木灰の痕跡は四方の台状遺構の外縁にまで及んでいるが、台状遺構の上面まではいたっていない。主室の台状遺構の下にはおそらく床板が敷かれ、防湿の役割を果たしていたと推測される。

主室の隅柱

主室の四隅には隅柱があり、８～11号隅柱とした。東南隅柱（８号隅柱）は、柱穴の長さ0.35m、幅0.31m、現存する深さ0.75m。柱穴の北、東、南の三壁には日干煉瓦が積まれている。柱穴の底部には礎石が残り、その上面は段より0.03m高い。礎石の平面は円形で、直径34㎝、厚さ８㎝。西南隅柱（９号隅柱）は、柱穴の長さ0.28m、幅0.43m、現存する深さ0.67m。柱穴の北壁は日干煉瓦が積まれている。柱穴の底部には礎石が残っており、礎石の上面は周囲より0.04m高い。礎石の平面は楕円形で、東西33㎝、南北31㎝、厚さ11㎝。東北隅柱（10号隅柱）は、柱穴の長さ0.3m、幅0.24m、現存する深さ0.7m。柱穴底部には礎石が残り、その上面は段より0.05m高い。礎石の平面は楕円形で、東西36㎝、南北44㎝、厚さ12㎝。礎石の上面には、木柱の痕跡が灰色の木灰として残っている。木灰の厚さは約0.2mである（図版109－２）。西北隅柱（11号隅柱）は、柱穴の長さ0.32m、幅0.31m、現存する深さ0.8m。柱穴の底部には礎石が残り、その上面の高さは段より0.08m高い。礎石は平面が細長く、東西23㎝、南北59㎝、厚さ15㎝。

主室の東壁

主室の東壁は、長さ5.65m、現存高0.9mである。遺存状態は比較的良好で、版築土の外側には日干煉瓦が積まれ、５段が現存する。日干煉瓦は長さ48㎝、幅26㎝、厚さ13㎝。日干煉瓦の外側にはスサ入り粘土の壁土が残り、厚さは1.5㎝である（図版109－３）。東壁の中間、主室の北壁の南2.6mの位置に壁柱がある（12号壁柱）。柱穴は長さ0.37m、幅0.16m、現存する深さ0.76m。柱

穴の北壁には日干煉瓦が５段積まれ、各段の厚さは13㎝である。柱穴南壁の日干煉瓦の外側には、さらに磚片が３点積まれている。磚は幅16.1㎝、高さ14.5㎝、厚さ4.5㎝。中段の磚は幅14㎝、高さ15.5㎝、厚さ4.5㎝。下段の磚は幅13.7㎝、高さ31.4㎝、厚さ4.2㎝。磚と日干煉瓦の間には瓦片を１段はさんでいる。柱穴の底部には礎石が残り、その上面は段より0.12m高い。礎石の平面は不整形で、東西40㎝、南北36㎝、厚さ11㎝（図版108－５）。東壁の壁柱の南0.75mに礎石がある（13号礎石）。礎石の上面は台状遺構の上面と同じ高さである。平面は楕円形で、東西26㎝、南北40㎝、厚さ９㎝。

主室の西壁　主室の西壁は、長さ5.64m、現存高0.8m。西壁中央部は遺存状態が比較的よく、日干煉瓦積みが明瞭で、４段が残っている。完形の日干煉瓦は長さ48㎝、厚さ13㎝。西壁中央部の外面には壁土が残る。内側の層は粗いスサ入り粘土で、厚さ４㎝。外側の層は比較的細かいスサ入り粘土で、厚さ６㎝。壁土の表面は滑らかで、草や茎の圧痕が明瞭に見られる。その外側の漆喰層は剥落している（図版109－４）。西壁の中間、主室の北壁の南2.82mには、東壁の12号壁柱と東西対称をなす壁柱（14号壁柱）がある。柱穴の長さ0.45m、幅0.1m、現存する深さ0.8m。南、北、西壁には日干煉瓦を積んだ痕跡がある。柱穴の底部には礎石が残り、その上面は段より0.03m高い。礎石平面は楕円形で、東西32㎝、南北30㎝、厚さ12㎝（図版109－５）。

主室の南壁　主室の南壁は、長さ3.1m、現存高0.75mであり、中央の通路によって東西の両部分に分かれる。東部は遺存状態が比較的よく、日干煉瓦の外側の壁土も残っている。日干煉瓦は長さ48㎝、厚さ13㎝である。壁土は２層に分かれ、内側の層は粗いスサ入り粘土で、厚さ６㎝。外側の層は比較的細かいスサ入り粘土で、厚さ1.5㎝。漆喰層は剥落している。南壁に開く通路の東側には大型の礎石がある（15号礎石）。主室の東壁から西0.65mにあり、礎石の上面は、東側の台状遺構の上面より0.16m高い。平面は楕円形で、東西53㎝、南北48㎝、厚さ22㎝。同様に、通路の西側にも大型の礎石がある（16号礎石）。主室の西壁から東0.82mにあり、礎石の上面は、西側の台状遺構の上面より0.13m高い。平面は半円形で、東西66㎝、南北39㎝、厚さ18㎝（図版109－７）。

主室の北壁　主室の北壁は、長さ3.15m、現存高0.75mである。北壁の日干煉瓦や壁土はすべて破壊されており、版築土の壁面が残るだけである（図版109－６）。

付属建物Ｆ３　東部大型建物の東部、付属建物Ｆ２の東側にあり、その門道の東北隅は建物基壇東面の廊道東縁の西6.8m、建物基壇北面の廊道北縁の南1.6mに位置する。Ｆ３は北向きの地下室で、門道、通路、主室の三つの部分からなる（第120図、原色図版47－２、図版110）。

門　道　門道はＦ３の北部にあり、南は通路とつながる。門道の平面は東西に長い長方形で、東西長2.01m、南北幅1.0m、現存する壁の高さ0.55m。東部の階段と西部の平坦部に分かれる（図版111－１～３）。階段は２段あり、版築で築かれている。長さ0.53m、幅は門道と同じく1.0m、全高0.51mで、東から西に40度の勾配をもつ。上の段は、踏面が現存する建物基壇の上面より0.14m低く、長さ1.02m、幅0.21～0.25m、高さ（蹴上）0.12m。下の段は、長さ1.02～1.05m、幅0.29m、高さ0.2mである。門道の平坦部は、長さ1.46m、幅0.95m。北壁と西壁の現存高0.52mである。底面は版築で平坦に整えられている（図版111－２）。

通　路　通路は、北が門道、南は主室に接続する。南北長4.04m、東西幅0.9m、東西両壁の現存高は1.02mである。底面は比較的平坦に整えられ、表面に細かい粘土が１層塗られている。厚さは１㎝である。通路の北端には、版築の台状遺構がある。台状遺構は東西長0.93m、南北幅0.46m

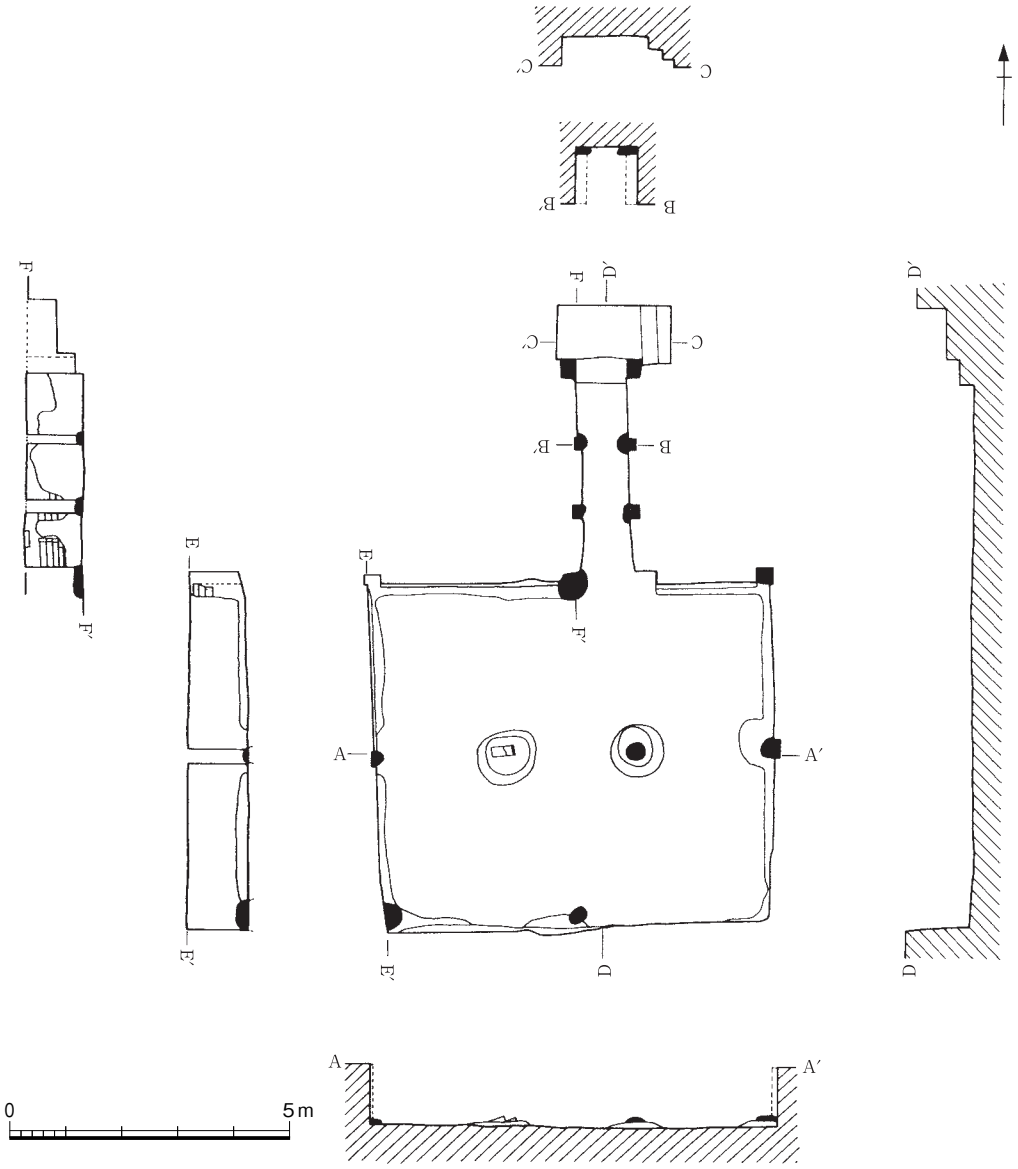
で、通路の底面よりも0.25m高く、門道の底面より0.23m低い（図版111－１・３）。

通路の底面

通路の底面には黒色の木灰が１層あり、厚さは５㎝である。通路の東西両壁には、底面から0.1～0.25mの高さまで木灰の痕跡が残り、通路内に敷いた床板の痕跡と推測される。

通路の隅柱

通路の四隅には隅柱がある（１～４号隅柱）。底部の礎石は、すべて花崗岩製である。東北隅柱（１号隅柱）は、通路の東北隅と門道の接続部にある。柱穴は長さ0.31m、幅0.26m、現存する深さ0.86m。柱穴の東壁と南壁には日干煉瓦が積まれ、わずかに痕跡が残っている。柱穴底部には礎石が残り、その上面は通路の底面より0.15m高い。礎石は平面が不整形で、東西23㎝、南北28㎝、厚さ12㎝。西北隅柱（２号隅柱）は、通路の西北隅と門道の接続部にある。柱穴は長さ0.34m、幅0.25m、現存する深さ0.86m。柱穴底部には礎石が残り、その上面は通路の底面より0.15m高い。礎石は平面が不整形で、東西25㎝、南北25㎝、厚さ６㎝。西南隅柱（３号隅柱）は、通路の西南隅と主室の接続部にある。柱穴は長さ0.25m、幅0.42m、現存する深さ0.87m。柱穴の西



第120図　４号建築Ｆ３平面図・断面図

壁と北壁には日干煉瓦が積まれている。北壁には４段が残り、各段の厚さは11㎝である。南壁には５段が残っており、各段の厚さは11～13㎝。柱穴底部には礎石が残り、その上面は通路の底面より0.15m高い。礎石は平面が楕円形で、東西47㎝、南北46㎝、厚さ14㎝（図版111－４）。東南隅柱（４号隅柱）は、通路の東南角と主室の接続部にある。柱穴は長さ0.22m、幅0.37m、現存する深さ1.02m。柱穴の北壁と東壁には日干煉瓦が積まれ、いずれも３段が残っている。各段の厚さはともに12㎝である。柱穴底部の礎石は残っていない。

通路の東壁　通路の東壁は、長さ4.04m、現存高1.02mである。遺存状態は比較的よく、日干煉瓦の外側の壁土は大部分が残っている。壁土全体の厚さは５㎝あり、内側の層はスサ入り粘土で、厚さ４㎝。外側の層は細かい粘土で、厚さ１㎝。その外側の漆喰層は剥落している。東壁上部の壁土は剥落し、積まれた日干煉瓦を見ることができる。日干煉瓦は長さ47～48㎝、厚さ13㎝（図版111－５）。東壁には南と北に二つの壁柱がある（５・６号壁柱）。礎石はいずれも花崗岩製である。北の５号壁柱は、通路の北端から南1.5mにある。柱穴は長さ0.21m、幅0.14m、現存する深さ0.88m。柱穴の南壁と北壁には、日干煉瓦が立てて積まれている。日干煉瓦は高さ48㎝、東西幅28㎝、厚さ11㎝。南壁には３点、北壁には２点の日干煉瓦が残る。柱穴の東壁は版築土である。柱穴底部には礎石が残っており、その上面は通路の底面より0.14m高い。礎石は平面が楕円形で、東西40㎝、南北37㎝、厚さ８㎝（図版111－６）。南の６号壁柱は、５号壁柱の南1.23mにある（礎石心々間距離）。柱穴は長方形で、長さ0.25m、幅0.17m、現存する深さ0.91m。柱穴の東壁は版築土で、南壁と北壁には日干煉瓦が積まれ、ともに２段が残っている。柱穴底部には礎石が残り、その上面は通路の底面より0.17m高い。礎石は平面が楕円形で、東西31㎝、南北38㎝、厚さ８㎝である。

通路の西壁　通路の西壁は、長さ4.04m、現存高1.03mである。遺存状態は比較的よく、日干煉瓦の外側には壁土が大部分残っている。壁土の厚さは５㎝あり、内側の層は粗いスサ入り粘土で、厚さ４㎝。外側の層は細かい粘土で、厚さ１㎝。その外側の漆喰層は剥落している。西壁は南部と北部で積み方が異なっている。西壁の南の壁柱以南では、日干煉瓦を南北方向に平積みし、２段の日干煉瓦の間に磚の破片をはさんで隙間を埋めている部分もある。一方、南の壁柱以北では、日干煉瓦の長手を上にして南北方向に積んでいる（図版111－７）。西壁には、東壁の２基の壁柱と東西対称をなす南北２基の壁柱がある（７・８号壁柱）。柱穴底部の礎石はともに花崗岩製である。北の７号壁柱は、通路北端から南1.5mにある。柱穴は長さ0.21m、幅0.12m、現存する深さ0.91m。柱穴の北・西・南の三壁には日干煉瓦が積まれている。北壁と南壁の底部は、１点ずつ日干煉瓦を立てて積む。西壁の上部には、南北方向に平積みされた日干煉瓦が１点あり、残存する厚さは８㎝である。南壁の上部には、方磚の破片が１点貼りついており、残存する高さ11㎝、幅８㎝、厚さ４㎝。柱穴底部の礎石の上面には、木柱の痕跡が炭化して黒く残り、高さ31㎝、最大幅20㎝、厚さ4.5㎝である。柱穴底部には礎石が残り、その上面は通路面より0.11m高い。礎石は平面が楕円形で、東西34㎝、南北32㎝、厚さ10㎝（図版111－８）。南の８号壁柱は、７号壁柱の南1.21mにある。柱穴は長さ0.24m、幅0.16m、現存する深さ0.82m。柱穴の南壁と北壁には日干煉瓦が積まれている。南壁には５段の日干煉瓦が東西方向に平積みされ、各段の厚さは10㎝である。北壁は、中央に日干煉瓦が１点立てて積まれ、厚さは11㎝である。西壁には日干煉瓦は見られない。柱穴底部には礎石が残り、その上面は通路の底面より0.18m高い。平面は不整形で、東西32

cm、南北33cm、厚さ９cm（図版112－１）。

主室は地下室の南部にあり、北は通路に接続する。平面は長方形で、幅6.8～7.15m、奥行6.02～6.2m、四方の壁の現存高0.97～1.15m。主室の四隅には隅柱があり、東壁と西壁、南壁と北壁には、それぞれ１対の壁柱が対称に配される。主室の底面には東西２本の支柱がある。礎石の大部分は花崗岩製である。主室の周囲には台状遺構の痕跡がある（図版112－２）。 主　　室

主室の東北隅柱（９号隅柱）は、柱穴の長さ0.28m、幅0.26m、現存する深さ0.9m。柱穴の東壁には日干煉瓦が積まれるが、痕跡は不明瞭である。北壁と西壁は版築土である。柱穴底部には礎石が残り、その上面は台状遺構の上面より0.05m低い。礎石は平面が楕円形で、東西33cm、南北34cm、厚さ12cm（図版112－３）。西北隅柱（10号隅柱）は、柱穴の長さ0.27m、幅0.22m、現存する深さ0.91m。柱穴の西壁には日干煉瓦が３段積まれ、各段の厚さは13cmである。東壁には日干煉瓦が７段積まれ、各段の厚さは13cm。柱穴底部の礎石は残っていない。東南隅柱は破壊されて残存しない。西南隅柱（11号隅柱）の柱穴も破壊されているが、底部には礎石が残り、その上面は台状遺構の上面と同じ高さである。礎石は平面が楕円形で、東西42cm、南北46cm、厚さ14cm（図版112－４）。 主室の隅柱

主室の東壁は、南北長6.02m、現存高0.98mである。東壁の南部は遺存状態がよくないが、北部はスサ入り粘土の壁土が部分的に残っている。東壁の南北中間に壁柱が１基ある（12号壁柱）。柱穴は主室の北壁の南3.2mにあり、長さ0.38m、幅0.1m、現存する深さ0.9m。柱穴底部には礎石が残っている。礎石の上面は台状遺構の上面より0.08m高い。礎石は平面が楕円形で、東西28cm、南北33cm、厚さ11cm（図版112－７）。 主室の東壁

主室の西壁は、南北長6.2m、現存高1.05mである。西壁の北部は保存状態が比較的よく、版築の壁には日干煉瓦が積まれている。日干煉瓦は３段が現存し、各段の厚さは11cm。日干煉瓦の外側はスサ入り粘土で、厚さは３cmである（図版112－５）。西壁の中間、北壁から南3.12mの位置には、東壁の12号壁柱と東西対称をなす壁柱が１基ある（13号壁柱）。柱穴は長さ0.25m、幅0.07m、現存する深さ0.97m。柱穴の北壁には日干煉瓦を積んだ痕跡がある。柱穴底部には礎石が残り、その上面は台状遺構の上面より0.08m高い。礎石は平面が楕円形で、東西34cm、南北41cm、厚さ10cm（図版112－６）。 主室の西壁

主室の南壁は、東西長6.8m、現存高1.15mで、かなり破壊をうけている。南壁の西部、西壁の東0.55mの位置には、積まれた日干煉瓦が７層残っている。日干煉瓦は長さ46cm、幅23cm、厚さ10～13cm。南壁中央にスサ入り粘土の壁土が一部残り、厚さ1.5cmである。南壁の東部には日干煉瓦が２段残存し、各段の厚さは11cmである。日干煉瓦の外側にはスサ入り粘土の壁土が残っている。内側の層は粗いスサ入り粘土で、厚さ２cm。外側の層は比較的細かいスサ入り粘土で、厚さ約1.5cmである。南壁中央の壁柱は破壊されている。攪乱坑の東側に、原位置を保っていない礎石が残る（14号礎石）。南壁中央の壁柱下の柱礎石であろう。礎石は平面が楕円形で、東西25cm、南北25cm、厚さ８cm。 主室の南壁

主室の北壁は、東西長7.15m、現存高0.75～0.93mで、中央やや東寄りに通路が開く。北壁の遺存状態は比較的よく、積まれた日干煉瓦は６段が現存する。各段の厚さは12cmである。日干煉瓦の外側には粗いスサ入り粘土の壁土があり、厚さは１cmである。北壁の中央に通路の西南隅柱があり、それは南壁の中央にある壁柱と南北対称の位置にあたる。 主室の北壁

主室の底面　主室の底面は、版築土の上面に細かい粘土が１層塗られている。厚さは約１㎝で、火を受けて硬くなっている。この下には厚さ0.3m前後の版築の基礎があり、その下は地山となる。主室の四周には台状遺構がある。台状遺構は幅0.05～0.25m、高さ0.25m。台状遺構の外縁は、多くが傾斜しており、東壁の台状遺構の外縁だけが垂直である。台状遺構は、壁柱や隅柱の外側では幅が広くなっている。東壁の台状遺構は幅0.07～0.15mで、高さ0.16～0.25m。壁柱外側の台状遺構の幅は0.6mである。南壁の台状遺構は中央と西部だけが残り、幅0.05～0.25m、高さ0.18～0.2m。西壁の台状遺構は幅0.1～0.24m、高さ0.12～0.2mで、壁柱外側の台状遺構はほとんど破壊されている。北側の台状遺構は幅0.2～0.3m、高さ0.1～0.2mである。主室の底面の上には黒色の木灰が１層あり、厚さは約５㎝である。この木灰は、台状遺構の上面までは及ばず、主室の底面と台状遺構の外縁だけにある。主室の台状遺構に敷かれた床板の痕跡と推測され、防湿の役割を担っていたとみられる。

礎石据付台　主室の中央部には、版築でつくられた二つの礎石据付台が東西に並ぶ。これらは、主室の東西両壁の壁柱と一直線上にある。東の15号礎石据付台は、主室の東壁の西2.45m、南壁の北3.1mに位置する。平面はほぼ円形で、底径0.88m、上部径0.7m、高さ0.1m。周囲は傾斜している。上部に据えられた礎石は、上面が主室の底面より0.19m高く、礎石据付台の上端から0.09m出ている。礎石は平面が円形で、直径32㎝、厚さ10㎝。西の16号礎石据付台は、15号礎石据付台の西2.3m、主室の南壁の北3.1mに位置する。平面は楕円形で、底径は東西1.0m、南北0.94mである。上部径は東西0.76m、南北0.66m、高さ0.1m。周囲は傾斜し、上部に据えられた青石製礎石は二つに割れている。礎石の上面は主室の底面より0.19m高く、礎石据付台の上端から0.09m出ている（図版112－８）。これらの礎石は、室内に立てた２本の柱を支えるためのものであろう。

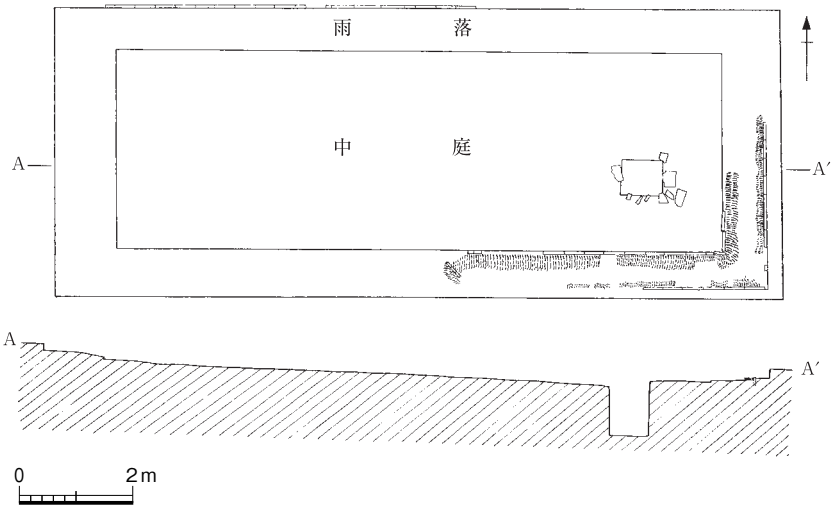
付属建物Ｆ３の発掘では、大量の赤い焼土片や日干煉瓦片、壁土片、鉱滓片が出土している。日干煉瓦や壁土などは、すべて火を受けて赤色を呈する。

１号院　１号院は東部大型建物の西部にあり、その西側の雨落の西北角は東部大型建物の西塀の東3.45m、２号院南側の雨落の南18.08mに位置する。１号院の平面は長方形を呈し、東西12.65m、南北5.55m。中庭と雨落から構成される（第121図、原色図版47－１、図版113－１）。

中庭と雨落　中庭は、平面が長方形で、東西長10.6m、南北幅3.9m。周囲を雨落がめぐっている。

中庭東面の雨落は、東側の建物基壇の西縁から西0.25mに位置し、建物基壇より0.17m低い。雨落は長さ5.50m、幅0.78mで、東縁と西縁に見切りの磚がある。雨落内は瓦片で舗装され、現存する瓦組雨落は長さ3.45m、幅0.65mである。雨落内には東西方向に平瓦片を立てて埋め込み、凸面を北に向ける。瓦片は長さ4.5～18㎝、厚さ0.9～1.7㎝。雨落の東西両側には、南北方向に見切りの磚が並べられている。東側の磚は８点が残り、磚は長さ11～35㎝、厚さ４～５㎝である。残存する見切りの磚の南北長は2.9m。西側の磚は３点が残り、磚は長さ９～34㎝、残存する厚さ1.5～４㎝。東面の雨落は、東から西に11度の勾配をもつ（図版113－２）。

中庭南面の雨落は、南側の建物基壇の北縁から北へ0.17mに位置し、建物基壇より0.15m低い。南縁と北縁に見切りの磚がある。雨落は、南から北へ６度の勾配をもつ。雨落内には平瓦片を南北方向に立てて埋め込み、凸面を東に向けている。平瓦片は長さ５～20㎝、厚さ0.８～1.8㎝。雨落の南北両側には見切りの磚が立て並べられている。南側の磚は６点が残り、磚は長さ3.5～35.5㎝、厚さ３～4.5㎝。残存する見切りの磚の東西長は2.15mである。北側の磚は12点が



第121図　４号建築１号院平面図・断面図

残り、磚は長さ７～35㎝、幅２～4.5㎝。残存する見切りの磚の東西長は4.5mである。雨落の西部には、南東から北西方向に３点の見切りの磚が残り、両側にはいずれも平瓦片を立て並べている。磚の長さと厚さは、南東から順に、13.5㎝と４㎝、６㎝と４㎝、13.5㎝と４㎝である。この３点の磚は、雨落内の菱形模様が遺存したものであろう。

中庭西面の雨落は、長さ5.60m、幅1.05mである。両側の見切りの磚や雨落内に立てて埋め込んだ瓦片は残っていない。

中庭北面の雨落は、長さ12.65m、幅0.8m。北から南に15度の勾配をもち、傾斜の長さは0.85mである。雨落内に埋め込んだ瓦片は残存しない。南側の見切りの磚も残っていないが、北側には21点が残る。磚は長さ６～36㎝、厚さ４～4.5㎝。見切りの磚の残存長は6.3mである。

中庭中央の地面は比較的平坦に整えられ、四方はやや高く、中央部はやや低い。東部には排水穴が一つある。ボーリング調査の結果によれば、中庭の版築基礎の厚さは1.5m前後で、その下は地山となる。

２号院　２号院は東部大型建物の西北部にあり、その中庭の西南角は東部大型建物の西塀の東4.3m、１号院中庭の北縁の北19.0mに位置する。２号院の平面は長方形で、東西12.3m、南北6.9m。中庭とその外側の雨落によって構成される（図版113－４）。

中庭は、東西に長い長方形を呈し、東西長10.6m、南北幅4.96mである。中庭の四方には雨落がめぐるが、遺存状態は悪く、立てて埋め込んだ瓦片と見切りの磚が少し残るだけである。　中庭と雨落

中庭東面の雨落は、南北長6.92m、東西幅0.9mである。雨落東側の見切りの磚は６点が残存し、残存長は2.35m。磚は長さ10～27.2㎝、厚さ４～4.5㎝。雨落内には、凸面を南に向けて東西方向に立てて埋め込んだ平瓦片が部分的に残る。瓦は長さ５～14㎝、厚さ0.8～２㎝。

中庭西面の雨落は、長さ6.9m、幅0.92mである。東縁北部には見切りの磚が２点残存する。南の磚は長さ35㎝、厚さ4.4㎝。北の磚は残存長22㎝、厚さ4.5㎝。雨落内に立てて埋め込んだ平瓦片は残っていない。

中庭南面の雨落は、東西長12.26m、南北幅0.82mである。西部の雨落の北縁に見切りの磚が

４点だけ残存する。磚は長さ35～36㎝、厚さ４～4.8㎝。磚はすべて割れており、南側には立てて埋め込んだ平瓦片が３点残存する。

中庭北面の雨落は、長さ12.3m、幅1.2mである。南部の雨落の西縁に見切りの磚が４点残存する。東端と東から二つめの磚は倒れている。東から三つめの磚は長さ36㎝、厚さ４㎝。四つめの磚は残存長29㎝、厚さ4.5㎝。雨落内には、南北方向に立てて埋め込んだ平瓦片が３点残存している。凸面を西に向けており、長さ４～13㎝、厚さ0.6～２㎝。

ボーリング調査によれば、中庭の版築基礎の厚さは2.1m前後で、その下は地山となる。

E　その他の付属建物

付属建物F５　東部大型建物の西北部にあり、その西南角は東部大型建物の北塀の東端と接し、南面は２号院北面の雨落である。この西南角は東部大型建物の西塀の北端から東へ13.0m、２号院中庭の北縁から北へ1.2mに位置する。F５はわずかに基礎部分だけが残存しており、平面は長方形で、東西幅7.4m、南北奥行9.8mである。ボーリング調査によれば、F５の版築基礎の厚さは1.1mで、その下は地山となる。

付属建物F６　東部大型建物の西塀南端部の東側にある。F６の南壁は西塀南端と東西にそろい、西壁は西塀の東壁である。F６の平面は方形で、一辺14.6m。北壁には東西方向に並ぶ三つの礎石があり、西北部にも礎石が一つ残る。ボーリング調査によれば、F６の版築基礎の厚さは0.7mで、その下は地山である。

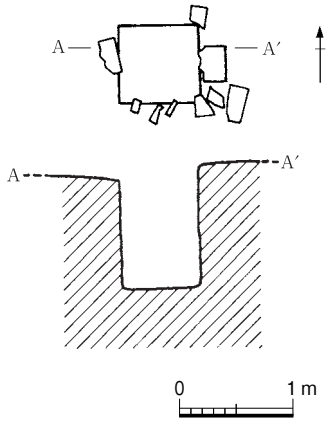
F　排水施設

排水穴と排水管がある。

排水穴　１号院の東面雨落の西縁から西へ1.1m、１号院北雨落の南縁から南へ2.1mに位置する。上面と底面は方形で、南北0.69m、東西0.72m、深さ1.0m。四方の壁は垂直で、いずれも磚積みの痕跡がある（第122図、図版113－３）。底面の地山上には、磚敷の痕跡だけが残る。排水穴上面の周囲には敷磚が散乱しており、その東縁の外側には原位置を保つ敷磚が１点のみ残っている。長さ35㎝、幅20㎝、厚さ４㎝。

排水暗渠　２号院中庭の東縁から東へ3.7m、建物基壇北面雨落の南縁から南（廊道内）へ0.27mの位置に、東西方向に据えられた五角形の土管が２点現存する。それぞれの管の長さは0.55m、全長は1.1mである。排水管の外面には斜位の太い縄目が施され、縄目の太さは４～５㎜。内側には小菱形文が施される。排水管は高さ35.0㎝、幅36.0㎝、内法の高さ28.1㎝、幅29.5㎝、厚さ3.0㎝。下部の垂直部分の壁の高さは22.5㎝である（図版113－４～６）。

五角形土管



第122図　４号建築排水穴平面図・断面図

第２節　出土遺物

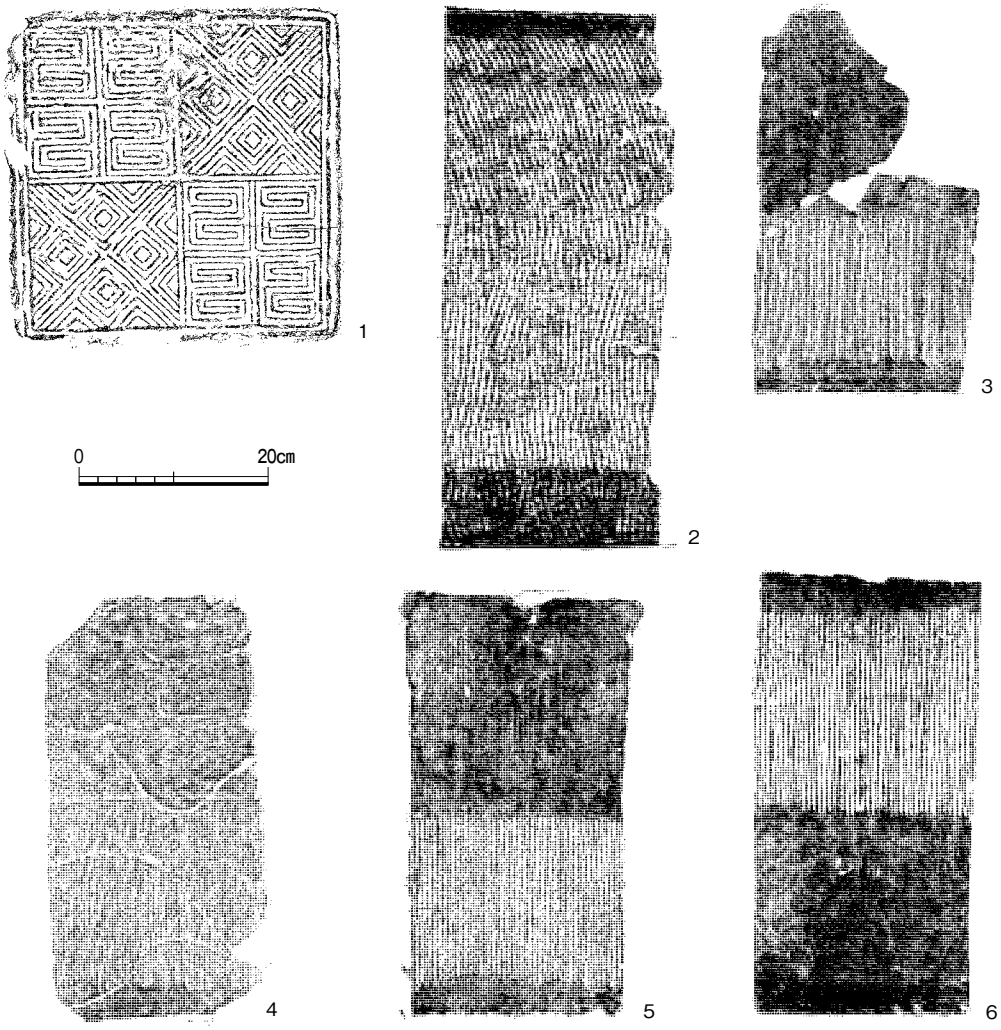
桂宮４号建築のおもな遺物は瓦磚で、そのほかに少量の生活用具や器皿、玉石器、銅製品、鉄製品、銭貨がある。

１　瓦　　磚

A　磚

方磚、長方磚、空心磚などがある。方磚は無文磚と幾何学文方磚の２種類がある。

無文方磚　　２点。4:T1③:122は一辺33.4㎝、厚さ4.3㎝である（図版114－１）。



１：Ⅳ型幾何学文方磚（4:T1③:123）　２：Ⅲ型平瓦（凸面、4:T4③:26）　３：Ⅱ型Ⅰ式丸瓦（凸面、4:T1③:27）
４：Ⅱ型２式丸瓦（凸面、4:T1③:71）　５：Ⅲ型丸瓦（凸面、4:T4③:31）　６：Ⅲ型丸瓦（凸面、4:T3③:48）

第123図　４号建築出土瓦磚

幾何学文方磚　１点（4:T1③:123）。新たに出現した形式であり、Ⅳ型とする。曲折文区内は二重の十字線で４小区に分割される。各小区には曲折文を一組飾り、二重線が５回折れ曲がる。菱形・直角文区内は二重線で十字に４小区に分割され、各小区には三重菱形文を一組、三重直角文を二組飾る。一辺35.5㎝、厚さ5.3㎝（第123図１、図版114－２）。

長方磚　１点（4:T1③:68）、無文である。長さ37.0㎝、幅18.5㎝、厚さ4.5㎝（図版114－３）。

空心磚　すべて破片で、表面には太陽文や幾何学文を配する。

B　平瓦・丸瓦

平　瓦　凸面に斜位の太い縄目を施し、凹面は無文である。Ⅲ型に属する。4:T4③:26（第123図２、図版114－４）は長さ57.8㎝、残存幅23㎝、厚さ1.2㎝、縄目は幅0.4㎝、間隔0.3㎝。

丸　瓦　11点。凸面に縦位の縄目を施し、凹面は布目である。縄目の太さの違いにより、Ⅱ型とⅢ型に分類される。

Ⅱ型は３点。瓦の凸面には中間の太さの縄目が施され、凹面は布目である。凸面の文様で２式に分けられる。

１式は１点（4:T1③:27、第123図３、図版114－５）。縄目は比較的短く、長さ16㎝、幅0.3㎝。残存長45.3㎝、直径13.2㎝、厚さ1.0～１.5㎝で、玉縁は長さ4.2㎝、厚さ1.8㎝。

２式は２点。縄目が比較的長い。4:T1③:71（第123図４、図版114－６）は、縄目の長さ20.3㎝、幅0.3㎝。残存長47.2㎝、直径14.8㎝、厚さ1.5㎝で、玉縁は残存長2.8㎝、厚さ1.7㎝。

Ⅲ型は８点。凸面には太い縦位の縄目が施され、凹面は布目である。縄目は長さ15～21.5㎝、幅0.5㎝。4:T4③:31（第123図５、図版114－７）は、縄目の長さ21㎝、幅0.5㎝。長さ49.6㎝、直径15.1㎝、厚さ1.3㎝で、玉縁は長さ3.1㎝、厚さ1.8㎝。4:T3③:48（第123図６、図版114－８）は、Ⅲ型の雲文瓦当をともなう。縄目は長さ18.5㎝、幅0.4㎝。長さ48.6㎝、直径15.1㎝、厚さ1.4㎝で、玉縁は長さ4.1㎝、厚さ1.9㎝である。

C　瓦　当

122点あり、すべて円瓦当である。文様瓦当と文字瓦当の二つに大別される。文様瓦当は雲文瓦当が主体で、そのほかに少量の葵文瓦当や動物文瓦当がある。

雲文瓦当　計116点。瓦当面は４分割され、それぞれに雲文が配される。周縁内側には圏線が一周めぐる。瓦当面の文様により、Ⅲ型とⅣ型に分けられる。

雲文瓦当Ⅲ型

Ⅲ型は47点。瓦当面の界線は二重線で、中心文を貫かない。10式に分かれる。

１式は１点（4:T1③:43、第124図１、図版115－１）。界線は中心文を貫通せず、中心文には格子文が配される。界線は各雲文の中央とつながり、周縁の内側には圏線が一周する。瓦当裏面には糸切り痕がある。瓦当径16.0㎝、周縁の幅1.1㎝、瓦当の厚さ2.8㎝。

２式は１点（4:T1③:11、第124図２、図版115－２）。界線は中心文を貫通せず、中心文に斜格子文を配する。界線は各雲文の中央とつながり、周縁の内側に圏線が一周する。瓦当裏面には糸切り痕がある。瓦当径16.0㎝、周縁の幅0.8～1.2㎝、瓦当の厚さ2.4㎝。

５式は１点（4:T3③:26、第124図３、図版115－３）。中心文には斜格子文が配され、その中央は「米」字形格子文である。界線は中心文を貫通せず、雲文の末端は両側に向かって「X」形とな

り、界線とつながる。周縁の内側には圏線が一周めぐる。瓦当径14.5㎝、周縁の幅0.8㎝、瓦当の厚さ2.3㎝。

７式は１点（4:T1③:8、第124図４、図版115－４）。界線は二重線で、中心文を貫通しない。中心文は珠文とその周囲に四葉文を飾り、その外側に二重の圏線をめぐらす。周縁の内側には圏線が一周する。四葉文は桃形で、中心の珠文と四葉文は中央が凹んでいる。瓦当径16.3㎝、周縁の幅0.7㎝、瓦当の厚さ2.9㎝。

11式は27点。界線は二重線で、中心文を貫かない。中心文は半球形文の周囲に12個か16個、または18個の珠文を飾り、その外側に圏線を一周させる。雲文の末端は２回巻き、外側に一重か二重の圏線をめぐらし、その外側は「X」字形文が一周する。４亜式に分けられる。

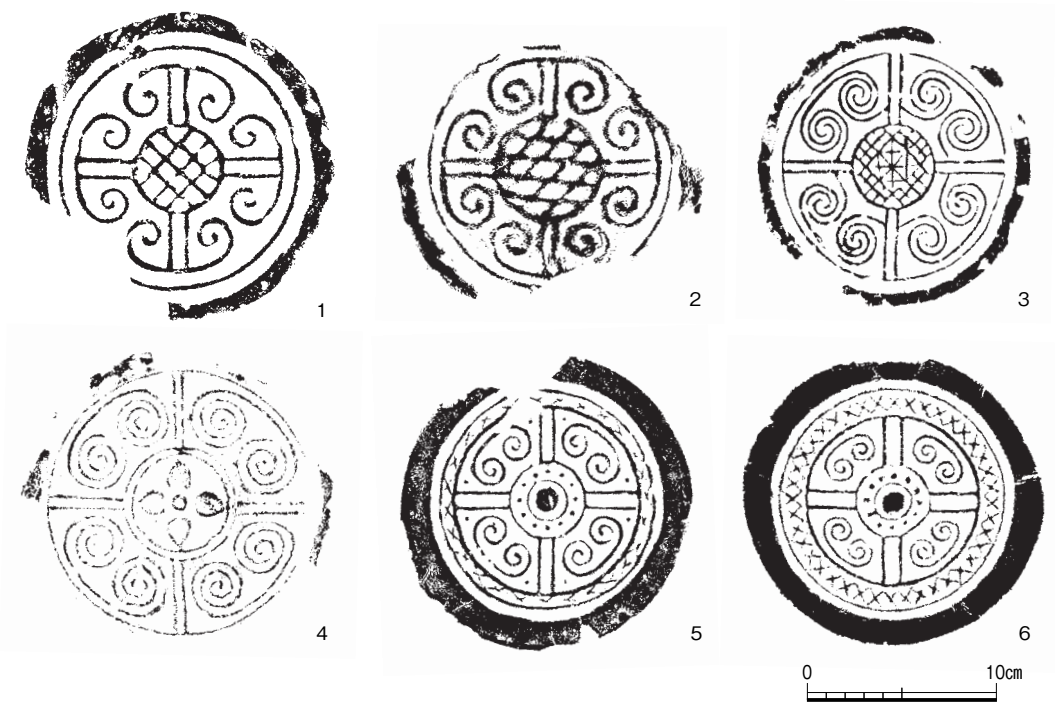
11A式は１点（4:T3③:12、第124図５、図版115－５）。中心の半球形文の周囲に12個の珠文をおく。雲文の外側には圏線をめぐらす。その外側の「X」字形文はとくにまばらである。雲文両側の上方には一つずつ珠文をおく。瓦当径15.7㎝、周縁の幅1.6㎝、瓦当の厚さ2.0㎝。

11B式は10点。中心の半球形文の周囲に12個の珠文を配し、雲文の外側には圏線をめぐらす。その外側にはまばらな「X」字形文が配される。4:T1③:62（第124図６、図版115－６）は、瓦当径16.0㎝、周縁の幅1.5㎝、瓦当の厚さ2.5㎝。

11C式は６点。中心の半球形文の周囲に16個か18個の珠文をおき、周縁の内側に緻密な「X」字形文（櫛歯文）を配する。4:T1③:3（第125図１、図版115－７）は、中心の半球形文の周囲に16個の珠文を配し、雲文の外側に圏線がめぐる。瓦当径16.0㎝、周縁の幅1.5㎝、瓦当の厚さ2.2㎝。

11D式は10点。雲文の外側の「X」字形文がとくに緻密である。珠文数で２種に分ける。

第１種は９点。中心の半球形文の周囲に16個の珠文をおき、雲文の外側に二重の圏線がめぐ



１：Ⅲ型Ⅰ式（4:T1③:43）　２：Ⅲ型２式（4:T1③:11）　３：Ⅲ型５式（4:T3③:26）
４：Ⅲ型７式（4:T1③:8）　５：Ⅲ型11A式（4:T3③:12）　６：Ⅲ型11B式（4:T1③:62）

第124図　４号建築出土雲文瓦当（１）

る。4:T1③:35（第125図２、図版115－８）は瓦当径15.6㎝、周縁の幅1.5㎝、瓦当の厚さ1.9㎝。

第２種は１点（4:T1③:80、第125図３、図版116－１）は、中心の半球形文の周囲に18個の珠文を配する。瓦当径15.5㎝、周縁の幅1.3～1.7㎝、瓦当の厚さ2.2㎝。

17式は12点。界線は二重線で中心文を貫かない。中心の半球形文の周囲に多数の珠文を配し、その外側に圏線がめぐる。雲文の末端は２回巻く。大きさと文様から３種に分類できる。

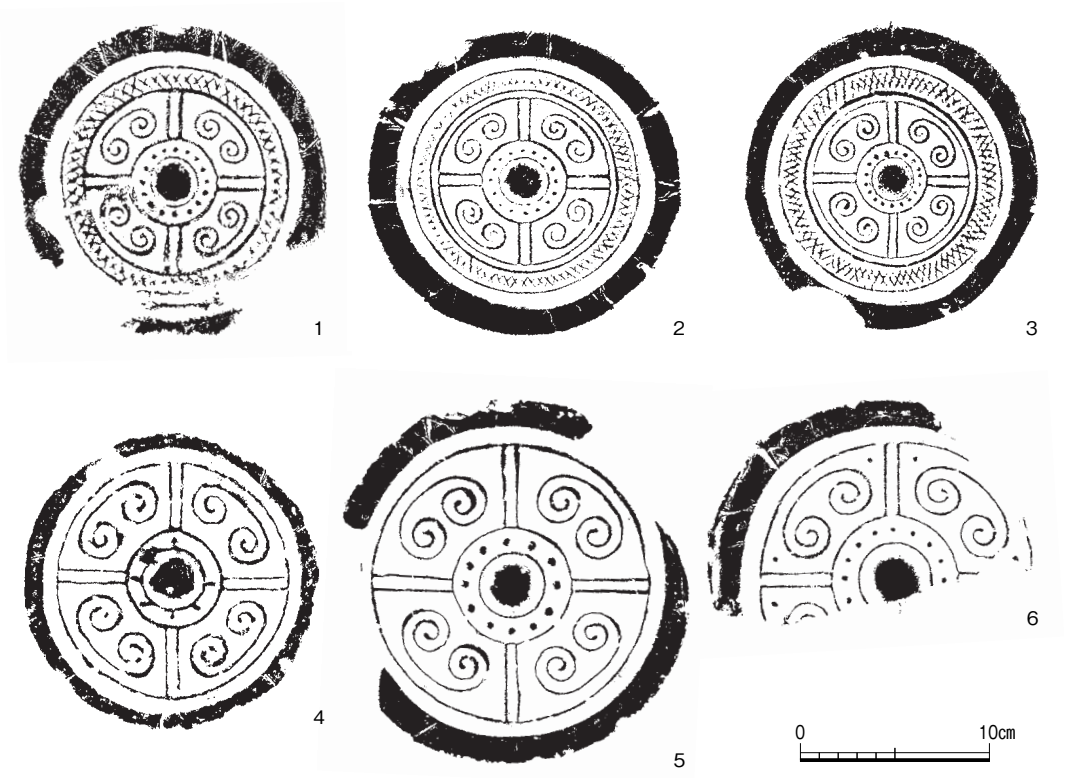
第１種は７点。比較的小さく、中心の半球形文の周囲に８個の珠文を配する。4:T1③:87（第125図４、図版116－２）は、瓦当径15.5㎝、周縁の幅0.9～1.2㎝、瓦当の厚さ2.8㎝。

第２種は４点。比較的大きく、中心の半球形文の周囲に12個の珠文を配する。うち１点は、雲文の左右に一つずつ珠文をおく。4:T4③:8（第125図５、図版116－３）は、瓦当径19.5㎝、周縁の幅1.8㎝、瓦当の厚さ2.3㎝。

第３種は１点（4:T3③:1、第125図６、図版116－４）。中心の半球形文の周囲に16個の珠文を配し、雲文の両側上方には一つずつ珠文をおく。瓦当復元径19.3㎝、周縁の幅1.5㎝、残存する瓦当の厚さ2.4㎝。

20式は１点（4:T1③:23、第126図１、図版116－５）。比較的小さく、界線は中心文を貫かない。中心の半球形文の周囲に二重の圏線がめぐり、各区画の中央に中心文から伸びる２本の平行線が雲文とつながる。瓦当復元径13.2㎝、周縁の幅1.4㎝、瓦当の厚さ2.1㎝。

23式は１点（4:T3③:13、第126図２、図版116－６）。界線は中心文を貫かず、中心の半球形文の外側に二重の圏線をめぐらし、圏線の間に19個の珠文を配する。各区画の中央に中心文から１本の



１：Ⅲ型11C式（4:T1③:3）　２：Ⅲ型11D式（4:T1③:35）　３：Ⅲ型11D式（4:T1③:80）
４：Ⅲ型17式（4:T1③:87）　５：Ⅲ型17式（4:T4③:8）　６：Ⅲ型17式（4:T3③:1）

第125図　４号建築出土雲文瓦当（２）

直線が伸び、雲文とつながる。雲文の外側には圏線がめぐり、その外側に「X」字形文が配される。瓦当径15.3㎝、周縁の幅1.6㎝、瓦当の厚さ2.2㎝。

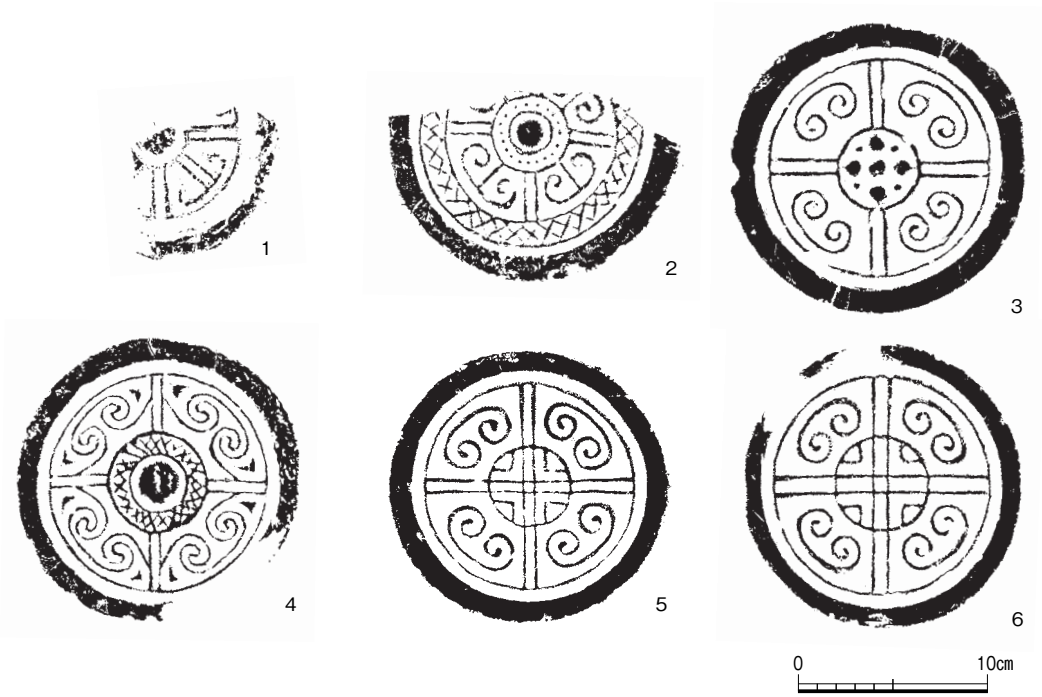
24式は１点（4:T3③:45、第126図３、図版116－７）。界線は二重線で中心文を貫かない。中心は珠文で、その周囲に小さめの四葉文を配し、四葉文の間には珠文を一つずつおく。その外側と周縁の内側には圏線がめぐる。瓦当径15.6㎝、周縁の幅1.2㎝、瓦当の厚さ2.2㎝。

25式は１点（4:T1③:84、第126図４、図版116－８）。中心の半球形文の外側に二重に圏線がめぐり、圏線の間に「X」字形文を配する。界線は中心文を貫通しない。雲文の末端は両側に向かって「X」形を作り、界線とつながる。雲文の左右両側上方には一つずつ三角文をおき、周縁の内側には圏線が一周する。瓦当径15.2㎝、周縁の幅1.1～1.8㎝、瓦当の厚さ2.5㎝。

Ⅳ型は69点。界線は二重線で中心文を貫く。中心文と文様の違いから４式に分類される。　雲文瓦当Ⅳ型

１式は66点。中心文の各区画内に「L」字形文を一つずつ配する。中心文の直径により、２亜式に分類できる。

１A式は54点。中心文の直径が4.6～6.3㎝のもの。雲文が１回巻くのは11点で、瓦当裏面にはいずれも糸切り痕がある。２回巻くのは43点で、うち19点には瓦当裏面に糸切り痕があり、24点には糸切り痕がない。4:T1③:95（第126図５、図版117－１）は、中心文の直径4.6㎝で、雲文の末端は２回巻き、瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当径14.5㎝、周縁の幅1.0㎝、瓦当の厚さ2.2㎝。4:T2③:3は、中心文の直径5.1㎝で、雲文の末端は２回巻き、瓦当裏面には糸切り痕がない。瓦当径14.8㎝、周縁の幅1.0㎝、瓦当の厚さ2.4㎝。4:T1③:108（第126図６、図版117－２）は、中心文の直径5.6㎝で、雲文の末端は２回巻き、瓦当裏面に糸切り痕がない。瓦当径14.8㎝、周縁の幅0.9㎝、瓦当の厚さ2.1㎝。4:T4③:32（第127図１、図版117－３）は、中心文の直径5.7㎝で、雲文



１：Ⅲ型20式（4:T1③:23）　２：Ⅲ型23式（4:T3③:13）　３：Ⅲ型24式（4:T3③:45）
４：Ⅲ型25式（4:T1③:84）　５：Ⅳ型１A式（4:T1③:95）　６：Ⅳ型１A式（4:T1③:108）

第126図　４号建築出土雲文瓦当（３）

の末端は２回巻き、瓦当裏面に糸切り痕がない。瓦当径14.7㎝、周縁の幅0.9㎝、瓦当の厚さ2.0㎝。4:T1③:5（図版117－４）は、中心文の直径5.6㎝で、雲文の末端は１回巻き、瓦当裏面に糸切り痕がない。瓦当径14.5㎝、周縁の幅1.5㎝、瓦当の厚さ2.1㎝。4:T4③:16（第127図２、図版117－５）は、中心文の直径6.3㎝で、雲文の末端が２回巻く。瓦当裏面には縄叩きが残るが、糸切り痕はない。瓦当径15.5㎝、周縁の幅1.0㎝、瓦当の厚さ2.1㎝。

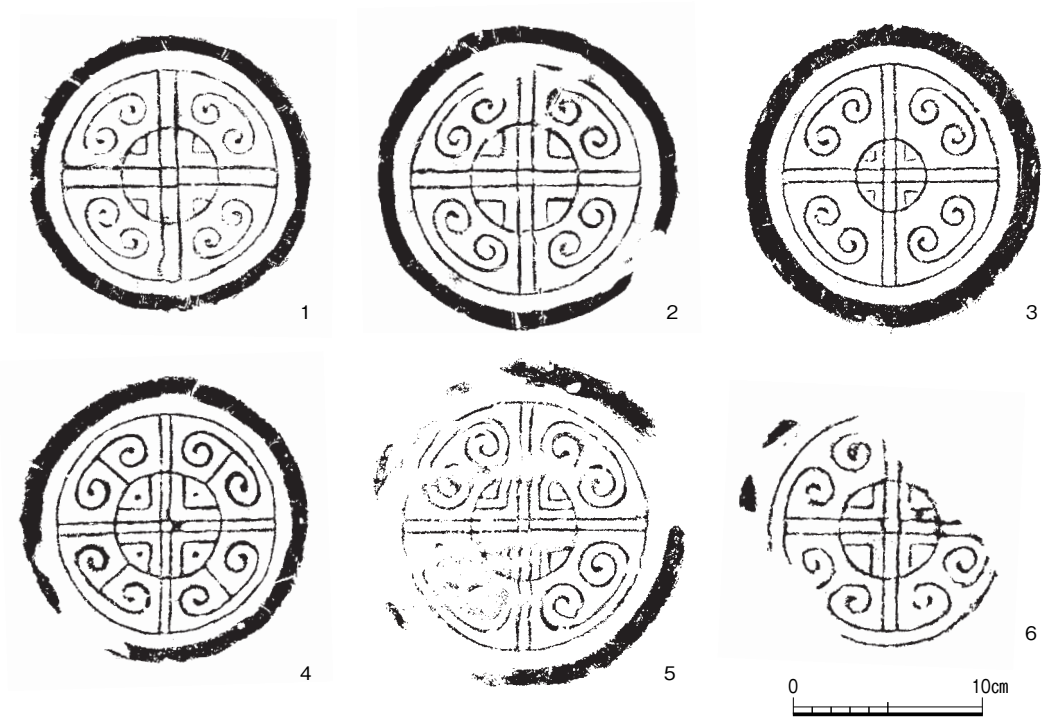
１C式は12点。雲文の末端が２回巻き、中心文の直径は比較的小さく、4.3㎝。中心文の「L」字形文の面はほかより低い。瓦当裏面に糸切り痕はない。4:T3③:33（第127図３、図版117－６）は、瓦当径15.4㎝、周縁の幅1.3㎝、瓦当の厚さ2.6㎝。

４式は１点（4:T1③:96、第127図４、図版117－７）。界線が中心文を貫かず、中心文の各区画に「L」字形文を一つずつおき、「L」字形文内には珠文が一つずつ配される。中心文から１本の直線が伸びて、雲文の中心につながる。瓦当径14.8㎝、周縁の幅0.9㎝、瓦当の厚さ2.1㎝。

５式は１点（4:T1③:22、第127図５、図版117－８）。中心文は直径6.0㎝で、各区画内に二重線の「L」字形文が一つずつ配される。雲文の末端は２回巻き、瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当径16.5㎝、周縁の幅1.0㎝、瓦当の厚さ3.0㎝。

９式は１点（4:T3③:10、第127図６、図版118－１）。界線は中心文を貫き、雲文の中央とつながる。中心文の各区画には、「L」字形文が一つずつ配される。瓦当復元径16.0㎝、周縁の幅1.0㎝、瓦当の厚さ2.9㎝。

葵文瓦当　　１点（4:T1③:64、第128図１、図版118－２）。内側に４個の左向きの葵（き）文、外側に12個の右向きの葵文を配する。葵文は３本の線で構成されている。瓦当径13.0㎝、周縁の幅0.9㎝、瓦



１：Ⅳ型１A式（4:T4③:32）　２：Ⅳ型１A式（4:T4③:16）　３：Ⅳ型１C式（4:T3③:33）
４：Ⅳ型４式（4:T1③:96）　５：Ⅳ型５式（4:T1③:22）　６：Ⅳ型９式（4:T3③:10）

第127図　４号建築出土雲文瓦当（４）

当の厚さ2.8㎝。

動物文瓦当　１点（4:T1③:21、第128図２、図版118－３）。界線は単線で、中心文を貫かない。中心文は半球形文で、その外側に圏線が一周する。瓦当面は四つに区画され、各区画内には、頭を中央に向け、翼を広げて飛ぶ燕文を描いている。瓦当径14.4㎝、周縁の幅0.8～1.2㎝、瓦当の厚さ1.5㎝。

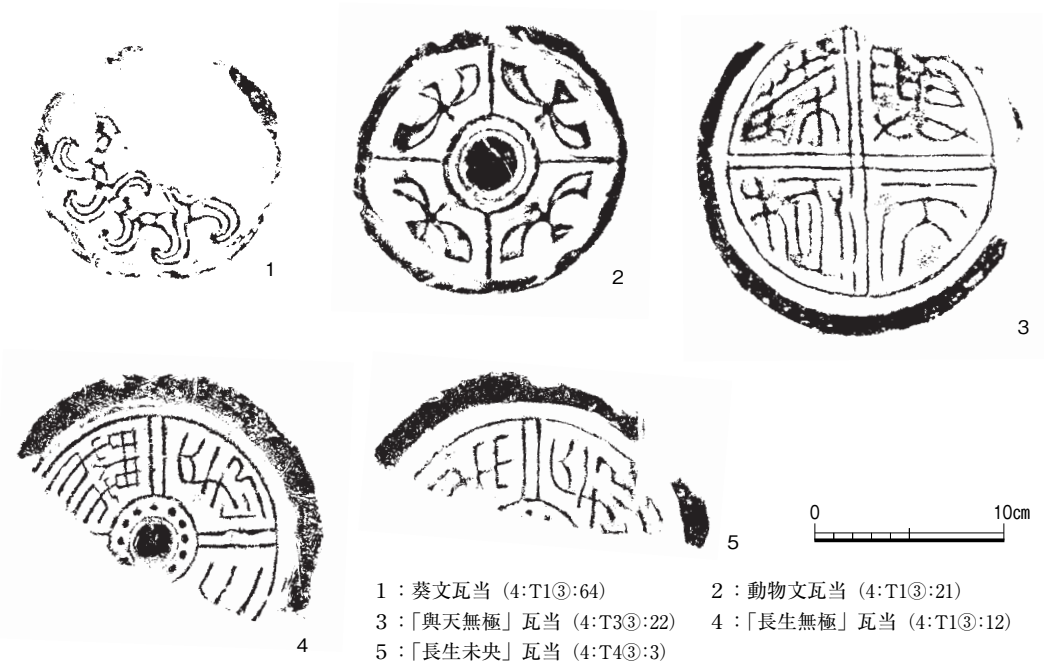
文字瓦当　４点。「與天無極」「長生無□」「長□未□」の３種類がある。

「與天無極」は２点。二重線の界線が「十」字形に交差して、瓦当面を四つに区画する。文字は篆書体で、周縁の内側に圏線が一周する。4:T3③:22（第128図３、図版118－４）は、瓦当径17.6㎝、周縁の幅0.9～1.1㎝、瓦当の厚さ2.4㎝。　「與天無極」

「長生無□」は１点（4:T1③:12、第128図４、図版118－５）。界線は二重線で、中心文を貫かない。中心文は半球形文で、その外側に多数の珠文をおく。瓦当面は四つに区画され、各区画に１字ずつ篆書体で文字が配され、「長」「生」「無」の３字が残る。「長生無極」であろう。周縁の内側には圏線が一周する。瓦当復元径18.2㎝、周縁の幅1.7㎝、瓦当の厚さ2.0㎝。　「長生無極」

「長□未□」瓦当は１点（4:T4③:3、第128図５、図版118－６）。界線は二重線で、中心文を貫かない。中心は半球形文で、その外側に多数の珠文をおく。瓦当面は四つに区画され、各区画に１字ずつ篆書体で文字が配され、「長」「未」の２字が残る。「長生未央」であろう。周縁の幅1.8㎝、瓦当の厚さ2.5㎝。　「長生未央」

小　結　以上のように、桂宮４号建築では、二重線の界線が中心文を貫く雲文瓦当が過半数を占め、桂宮２号・３号建築のいずれとも異なった様相を示す。桂宮２号・３号建築では、二重線の界線が中心文を貫通せず、周囲に緻密な「X」字形文を配した雲文瓦当が多数を占めていた。それに対して、桂宮４号建築では、出土した雲文瓦当113点のうち、二重線の界線が中心文を貫く雲文瓦当が66点あり、雲文瓦当全体の58％を占める。とくに注目されるのは、中心文が直径



１：葵文瓦当（4:T1③:64）　２：動物文瓦当（4:T1③:21）
３：「與天無極」瓦当（4:T3③:22）　４：「長生無極」瓦当（4:T1③:12）
５：「長生未央」瓦当（4:T4③:3）

第128図　４号建築出土葵文瓦当・動物文瓦当・文字瓦当

新種の瓦当　4.3㎝前後で、二重線の界線が中心文を貫く雲文瓦当が桂宮で初めて発見され、未央宮の発掘でも出土していないことである。これらは、いずれも瓦当裏面に糸切り痕がなく、前漢中期に出現した新種であろう。

2　土製品

装飾付き土製小球、土製小球、土製円盤などが出土している。

装飾付き土製小球　１点（4:T1③:57、図版118－７）。球形で、全体に緑釉が施される。表面には六つの重圏文が均等に分布する。直径2.2㎝。

土製小球　10点。球形を呈し、無文である。4:T1③:112（図版118－８）は直径2.5㎝。4:T1③:9（図版119－１）は直径1.8㎝である。

土製円盤　10点。円盤状を呈し、大きさはさまざまで、直径2.0～6.8㎝、厚さ0.8～2.7㎝。4:T2③:1（図版119－２）は直径2.3㎝、厚さ0.8㎝。4:T1③:119（図版119－３）は平瓦片から作られ、片面に太い縄目がある。直径4.1㎝、厚さ1.4㎝。4:T1③:109（図版119－４）は直径6.8㎝、厚さ2.5㎝である。

「空」字陶片　１点（4:T3③:3、図版119－５）。わずかに「空」の１字が残る。残存幅5.5㎝、残存高7.6㎝、厚さ1.8㎝。

円柱形土製品　１点（4:T1③:59、図版119－６）。円柱形で無文。長さ14.4㎝、直径6.2㎝。

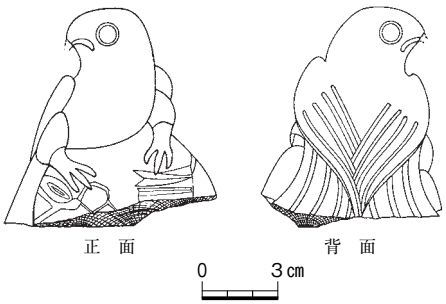
3　玉石器

３点。石鳥、瑪瑙珠、玉蝶がある。

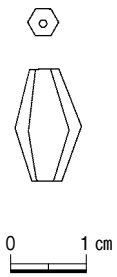
石　鳥　１点（4:T4③:14、第129図、図版119－７）。装飾品の一部である。鷹の形で、２本足で静かに立ち、両目を大きく見開く。嘴は短く、先端が欠けている。羽の表現は生き生きとしている。全高9.0㎝。

瑪瑙珠　１点（4:T1③:110、第130図、図版119－８）。断面六角形で、中央が太く、両端は細い。中心に円孔がある。長さ1.5㎝、最大径1.0㎝。

玉　牒　１点（4:T1③:50、原色図版48）。青石製で、黒色を呈し、全体が磨かれている。上下両端部を欠失する。残存長13.8㎝、幅9.4㎝、厚さ2.7㎝。表面には朱塗りの陰刻文字があり、縦書



第129図　４号建築出土石鳥（4:T4③:14）



第130図　４号建築出土瑪瑙珠（4:T1③:110）

きの篆書体で５行29字からなる。牒文は以下のとおりである。

萬歳壹紀……作民父母、清深……退佞人奸軌、誅……延壽長壯不老、累……封亶泰山、新室昌……

牒文の「封亶泰山」は、この遺物が、王莽が泰山で封禅の儀式をしたときの儀式具であることを証明している。王莽の泰山での封禅に関しては、『漢書』王莽伝に多くの記載が見られる。また、『続漢書』祭祀志・上には、後漢の光武帝が泰山で封禅をおこなったときの玉牒について、「青石、無必五色。時以印工不能刻玉牒、欲用丹漆書之、会求得能刻玉者、遂書（青石、五色を必ずること無し。時に印工、玉牒を刻むこと能わざるを以て、丹漆を用いて之を書せんと欲す。能く玉を刻む者を求め得て会い、遂に書す）」と記載されている。　「封亶泰山」

桂宮４号建築から出土した玉牒は黒色の青石であり、文字が刻まれて朱が塗られ、上に引用した文献の記載と一致する。牒文の「新室」は、『漢書』王莽伝・中に「新室既定、神祇歓喜（新室既に定まり、神祇歓喜す）」とあり、上記の文献の記載は、桂宮出土の玉牒が王莽の新朝の遺物であることを示している。　王莽の玉牒

4　鉄　　器

鏃、斧、円頭釘、折釘、刀子、弩機郭、矛などがある。

鏃　１点（4:T1③:51、図版120－１）。Ⅲ型２式に属する。銹がかなり進行している。三角形で、葉はやや幅広く、外縁は刃部である。長さ3.8㎝。

斧　３点。Ⅰ・Ⅱの２型に分類する。

Ⅰ型は１点（4:T4③:19、第131図１、図版120－２）。長方形で、両刃である。銹が進行しているが、袋部がある。長さ15.0㎝、刃幅6.9㎝、袋部は残存長6.4㎝、厚さ3.6㎝。

Ⅱ型は２点。刃部がやや幅広く、両刃で袋部があり、側面は弧を描いて外側に湾曲する。4:T1③:100（第131図２、図版120－３）は長さ11.9㎝、刃幅8.6㎝、袋部は長さ7.2㎝、幅3.7㎝。

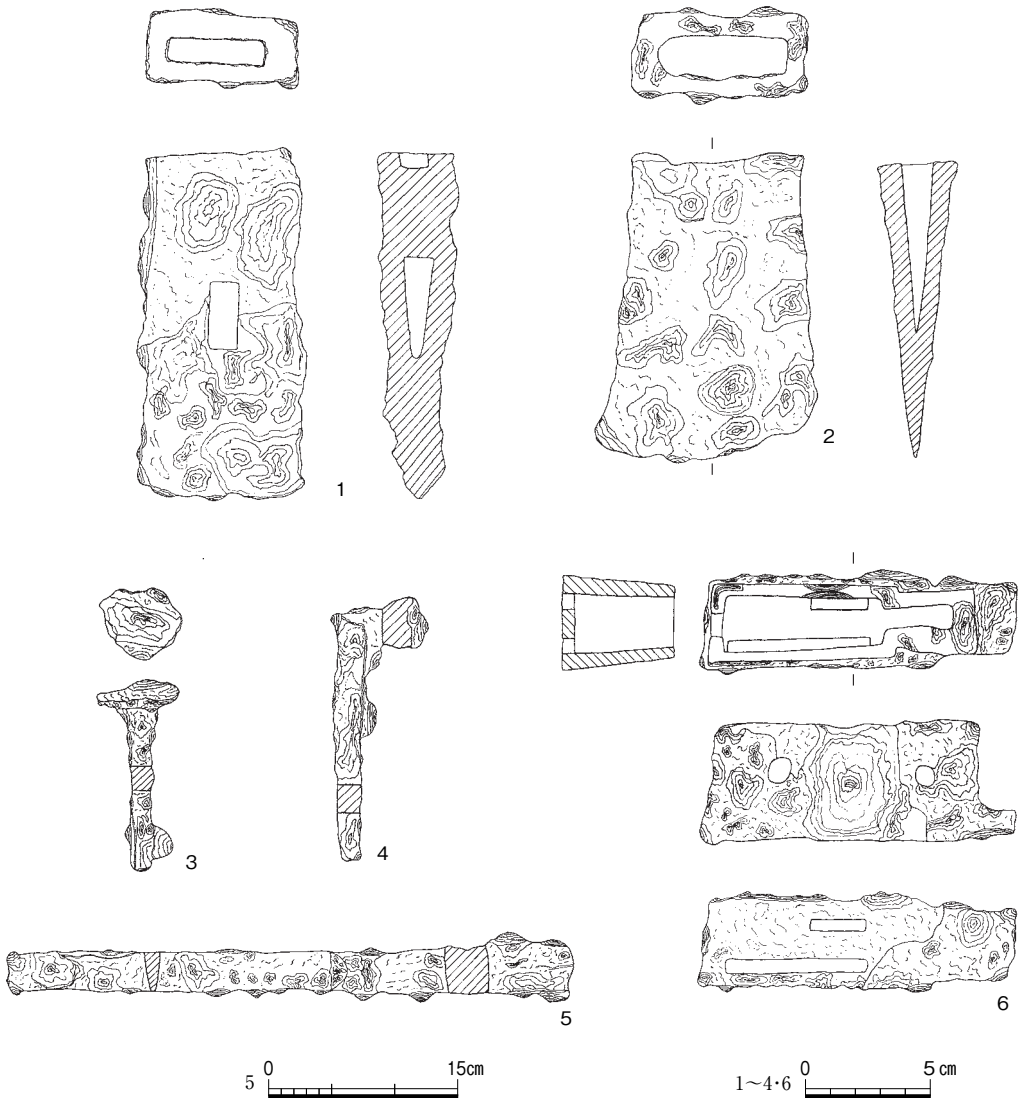
円頭釘　１点（4:T4③:18、第131図３、図版120－４）。Ⅰ型に属する。頭部はキノコ形で、身部は方柱形を呈し、先端部は欠失する。残存長7.7㎝、頭部径2.9㎝、縁の厚さ0.6㎝。

折　釘　３点。すべてⅠ型に属する。釘の身部は頭部と一体で、身部の後部外側が直角に折れ曲がり、頭部となる。身部と頭部はいずれも長方体で、先端部は尖る。4:T1③:105（第131図４、図版120－５）は、長さ10.0㎝、幅1.6㎝、厚さ1.5㎝。釘頭部は、長さ3.5㎝、幅1.7㎝、厚さ1.7㎝である。

刀　子　１点（4:T3③:6、第131図５、図版120－６）。破片である。刀身は扁平で片刃。後部に袋部がある。長さ44.2㎝、刃部の幅3.3㎝。袋部は長さ19.0㎝、幅3.6㎝、厚さ2.9㎝。

弩機郭　１点（4:T4③:24、第131図６、図版120－７）。銹が激しく、郭身の後部は前部よりやや幅広い。後部幅3.6㎝、前部幅2.9㎝、長さ12.6㎝。

矛　１点（4:T3③:43、図版120－８）。矛の身部は扁平で、先端は鋭く尖り、木柄をはめ込む方形の袋部をもつ。残存長22.5㎝。



１：斧（Ⅰ型、4:T4③:19）　２：斧（Ⅱ型、4:T1③:100）　３：円頭釘（Ⅰ型、4:T4③:18）
４：折釘（Ⅰ型、4:T1③:105）　５：刀子（4:T4③:6）　６：弩機郭（4:T4③:24）

第131図　４号建築出土鉄器

5　銅　　器

14点。蓋弓帽片、鏃、環、鉄茎銅鏃、銅管、銅鏡片、杯形器、銅器破片などがある。

鏃　　４点。Ⅰ～Ⅲの３型に分類できる。

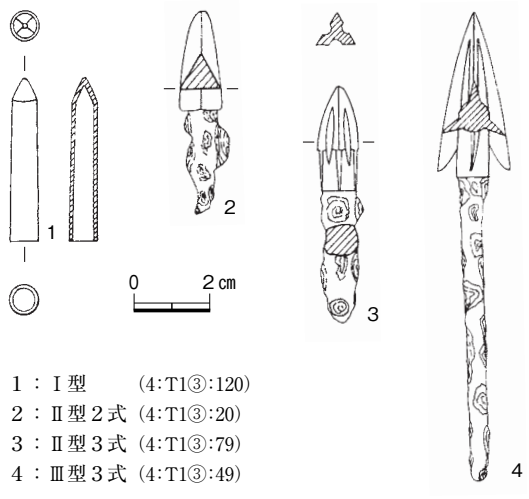
Ⅰ型は１点（4:T1③:120、第132図１、図版120－９）。鏃身部は円柱形で、先端の刃部は四角錐形を呈し、下端部には茎をはめ込む円形の袋部がある。長さ4.1㎝、直径0.6～0.8㎝。

Ⅱ型は２点。２式に分類できる。

２式は１点（4:T1③:20、第132図２、図版120－10）。鏃身部が三角形で、先が鈍い。関部の断面は六角形、茎の断面は円形である。全長5.1㎝、関部の長さ0.5㎝、茎の残存長2.1㎝。

３式は１点（4:T1③:79、第132図３、図版120－11）。三角形で、各面に溝がある。下部にはやや狭い翼があり、関部は円柱形で、下部は鉄製の茎とつながる。全長5.9㎝、関部の長さ0.6㎝、直径0.8㎝、茎の残存長2.6㎝。

Ⅲ型は１点（4:T1③:49、第132図４、図版121－１）。３式に属する。三角形で、刃部は先端で一つに収斂する。関部の断面は円形で、基部は円錐形を呈し、その下は鉄製の茎とつながる。全長11.7㎝、茎の残存長7.6㎝。



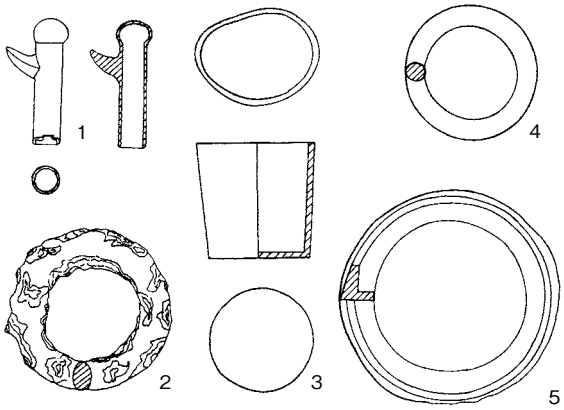
１：Ⅰ型　（4:T1③:120）
２：Ⅱ型２式（4:T1③:20）
３：Ⅱ型３式（4:T1③:79）
４：Ⅲ型３式（4:T1③:49）

第132図　４号建築出土銅鏃

蓋弓帽　１点（4:T1③:18、第133図１、図版121－２）。Ⅰ型に属する。円筒形で、中空の袋状をなす。上端部は球形で、その下に鉤が一つある。長さ3.2㎝。

杯形器　１点（4:T4③:6、第133図３、図版121－３）。コップ状で、長さ3.1㎝、直径2.7㎝。

環　３点。4:T1③:55（第133図４）は、断面が円形で、直径3.4㎝、断面の直径0.5㎝。4:T4③:15（第133図２、図版121－４）も断面が円形で、直径4.3㎝。4:T4③:17（第133図５、図版121－５）は、断面が「L」字形で、直径5.5㎝である。



１：蓋弓帽（4:T1③:18）　２：環（4:T4③:15）
３：杯形器（4:T4③:6）　４：環（4:T1③:55）
５：環（4:T4③:17）
0　2㎝

第133図　４号建築出土銅器

このほかに、銅鏡片３点、銅器の破片２点がある。

6　銭　　貨

22点が出土した。五銖銭、貨泉、大泉五十などがある。

五銖銭　13点。Ⅰ～Ⅳの４型に分類できる。

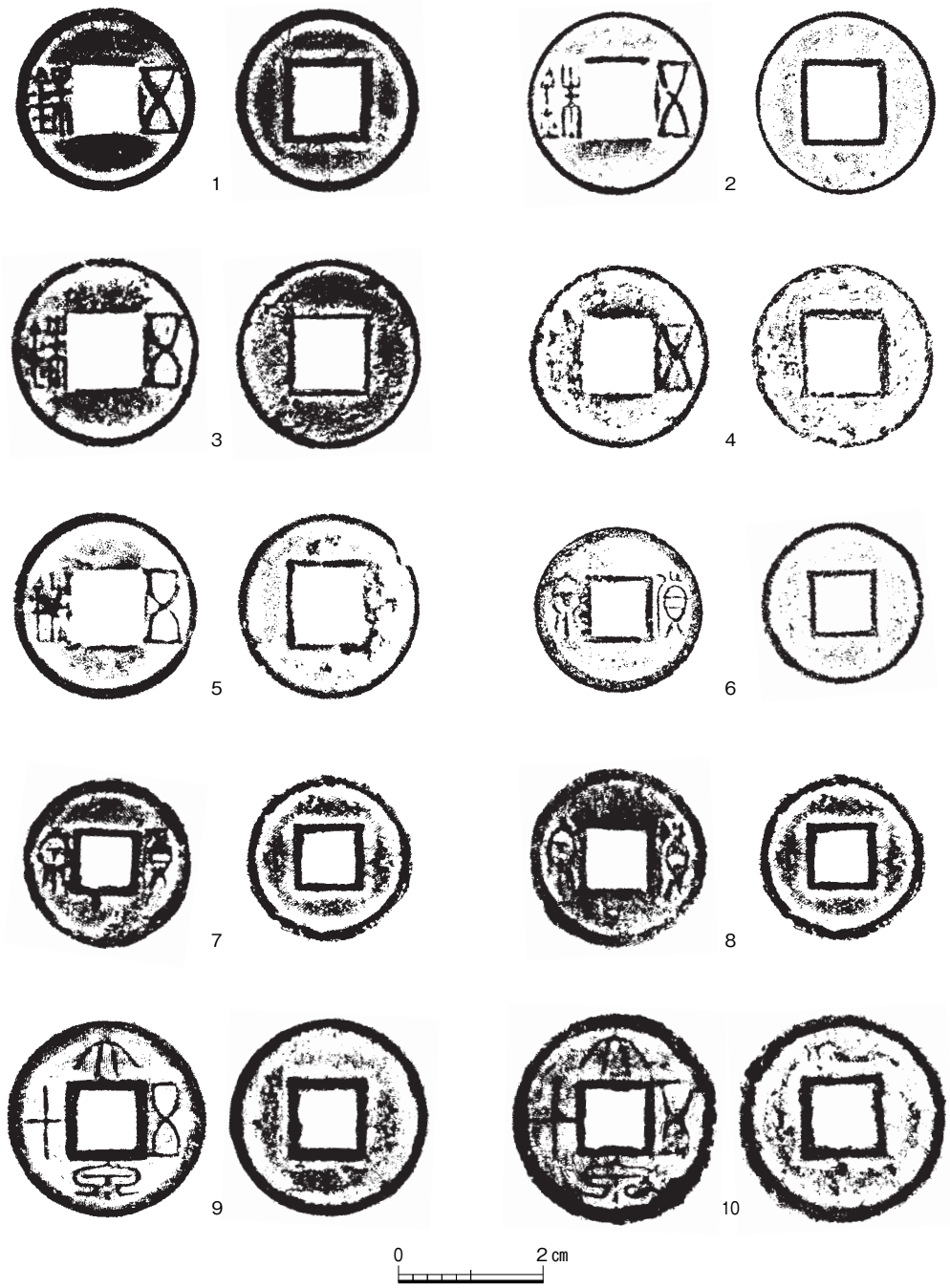
Ⅰ型は６点。「五」字の交差する２画が比較的直線に近く、上下の横線がやや長い。「銖」字の「金」の頭を三角形につくり、「朱」字の頭は直角に折れ、下部は丸く曲がる。方孔に内郭がある。銭文の字体の違いにより、２式に分類できる。

１式は４点。銭文は線がやや細く、字体はやや幅広い。4:T1③:7（第134図１、図版121－６）は、直径2.5㎝、方孔の一辺0.9㎝、厚さ0.2㎝。

２式は２点。銭文は線がやや太く、字体は細長い。4:T1③:31（第134図２、図版121－７）は、直

径2.6㎝、方孔の一辺1.0㎝、厚さ0.2㎝。

Ⅱ型は５点。「五」字の交差する２画はⅠ型より湾曲し、左右が対称的となる。「銖」字の「金」の頭を三角形につくり、「朱」字の頭は直角に折れ、下部は丸く曲がる。外縁がある。4:T1③:6（第134図３、図版121－８）は、直径2.7㎝、方孔の一辺1.0㎝、厚さ0.2㎝。



１：五銖銭（Ⅰ型１式、4:T1③:7）　２：五銖銭（Ⅰ型２式、4:T1③:31）　３：五銖銭（Ⅱ型、4:T1③:6）
４：五銖銭（Ⅲ型、4:T3③:38）　５：五銖銭（Ⅳ型、4:T1③:113）　６：貨泉（Ⅰ型、4:T1③:115）
７：貨泉（Ⅱ型、標本4:T3③:40）　８：貨泉（Ⅲ型、4:T1③:117）　９：大泉五十（Ⅰ型、4:T3③:21）
10：大泉五十（Ⅱ型、4:T4③:7）

第134図　４号建築出土銭貨

Ⅲ型は１点（4:T3③:38、第134図４、図版121－９）。「五」字の交差する２画が斜め方向に直線的である。「銖」字の「金」の頭は三角形につくり、「朱」字の頭は直角に折れ、下は丸く曲がる。外縁がある。直径2.6㎝、方孔の一辺1.0㎝、厚さ0.2㎝。

Ⅳ型は１点（4:T1③:113、第134図５、図版121－10）。「五」字の交差する２画は湾曲し、左右がほとんど対称となる。「銖」字の「金」の頭を三角形につくり、「朱」字の頭は直角に折れ、下部は丸く曲がる。外縁がある。直径2.7㎝、方孔の一辺1.0㎝、厚さ0.2㎝。

貨　泉　　４点。外縁と内郭がある。Ⅰ～Ⅲの３型に分類できる。

Ⅰ型は１点（4:T1③:115、第134図６、図版121－11）。銭文が明瞭である。直径2.3㎝、方孔の一辺0.7㎝、厚さ0.2㎝。

Ⅱ型は２点（4:T3③:40、第134図７、図版121－12）。銭文が明瞭である。直径2.3㎝、方孔の一辺0.7㎝、厚さ0.2㎝。

Ⅲ型は１点（4:T1③:117、第134図８、図版121－13）。銭文が不明瞭である。中央がやや厚く、周囲はやや薄い。直径2.5㎝、方孔の一辺0.7㎝、厚さ0.3㎝。

大泉五十　　３点。外縁と内郭があり、Ⅰ・Ⅱの２型に分類できる。

Ⅰ型は１点（4:T3③:21、第134図９、図版121－14）。銭文がやや細い。直径2.8㎝、方孔の一辺0.8㎝、厚さ0.3㎝。

Ⅱ型は２点。銭文がやや細い。4:T4③:7（第134図10、図版121－15）は、直径3.0㎝、方孔の一辺0.7㎝、厚さ0.4㎝。4:T1③:69は、直径2.8㎝、方孔の一辺0.8㎝、厚さ0.3㎝。

第３節　桂宮４号建築の年代と性格

年　代　桂宮４号建築の遺構は、耕作土層の下で発見された基壇を除き、その他の部分は第３層の下にある。第３層から出土した遺物は、すべて前漢中・後期と新の王莽の時期に属し、前漢前期に遡るものは見つかっていない。たとえば、銭貨には「五銖銭」「大泉五十」「貨泉」があり、多量の太い縄目の平瓦や、中間の太さの縄目と太い縄目の丸瓦、周囲に緻密な「X」字形文を配した雲文瓦当などは、すべて前漢中・後期と新の王莽の時期の特徴をそなえている。したがって、第３層は前漢中・後期の遺物包含層と判断される。

造営と廃絶の年代

桂宮４号建築の版築基壇は地山の上に築かれ、これにともなう瓦磚などの遺物は、いずれも前漢中・後期に属する。よって、桂宮４号建築の年代は前漢中・後期となる。第３層から出土した遺物の年代の上限が前漢中期を遡らないことは、桂宮が武帝期に造営されたとする文献史料の記載とも一致する[(1)]。桂宮４号建築の廃棄と堆積、とくにＦ１～Ｆ３の大量の赤い焼土の堆積からみて、この建築は王莽末年の戦火により破壊されたのであろう[(2)]。

性　格　桂宮４号建築は、南北方向の道路により、東部大型建物と西部大型建物に分けられる。西部大型建物の基壇の形状は複雑で、西に２ヵ所の突出部をもつ。基壇内には二つの付属建物があり、うち一つは半地下室である。東部大型建物の基壇の形状も複雑で、北部は「L」字形を呈し、基壇内に二つの半地下式の付属建物と二つの中庭がある。桂宮４号建築は、全体に建物配置が不規則で、構造的にも散漫である。現存する建築施設の機能からみると、日常生活と密接な関係が想定され、おそらくは桂宮の后妃の生活区であろう。

后妃生活区

（１）『三輔黄図』に「桂宮、漢武帝造る」とある。

（２）『漢書』王莽伝・下に「赤眉焼長安宮市里、害更始。民飢餓相食、死者数十万、長安為虚、城中無人行（赤眉は長安の宮室や市街を焼き、更始帝を殺害した。民は飢えて互いに食いあい、死者数十万。長安は廃墟となって、城内には行き交う人の影が見られなかった）」とある。中華書局、1962年。